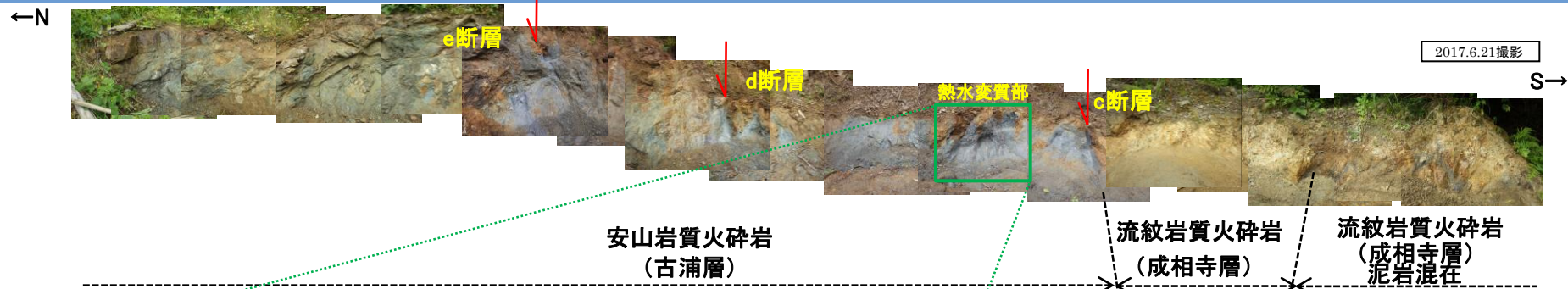


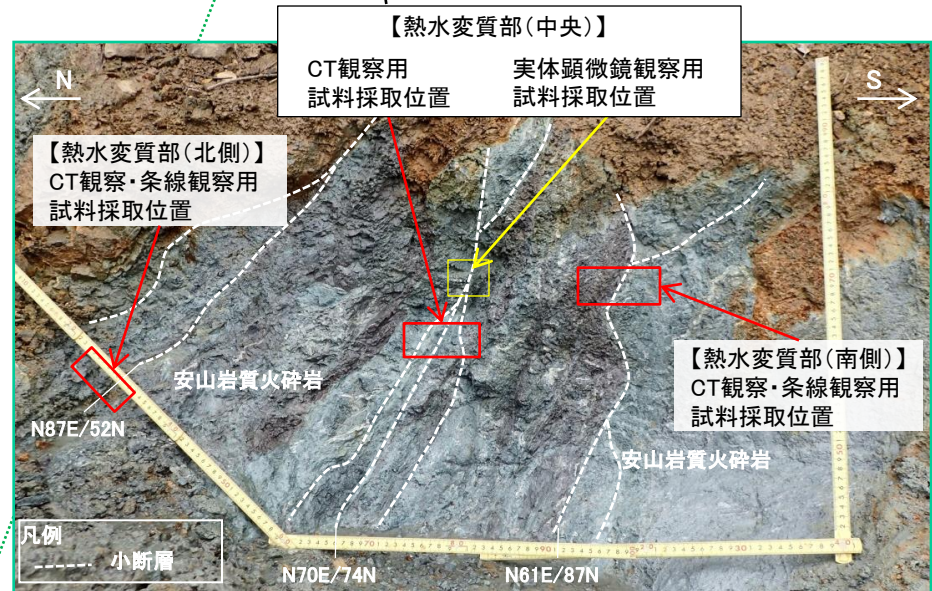
断層露頭⑥-2(熱水変質部)



2017.6.21撮影



熱水変質部拡大(解釈線なし)



熱水変質部拡大(解釈線あり)

・古浦層の安山岩質火砕岩中において、暗紫灰色の岩石と緑灰色の岩石が斑状に分布する。これら岩石は同じ組織を有し、周囲に青灰色粘土や白色脈を伴うことから、熱水変質の影響を受けていると考えられる。

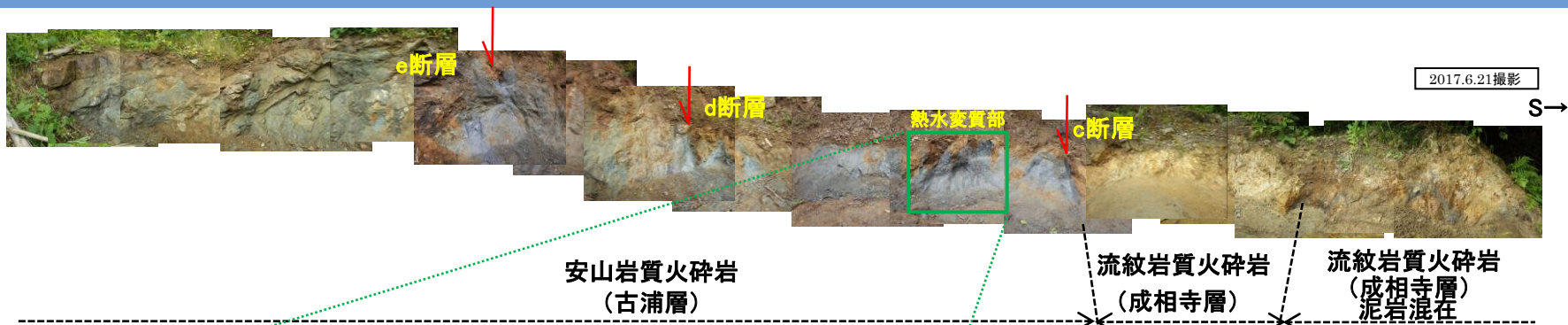
・その中で、ゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層が見られる箇所(熱水変質部(中央))で試料採取を行い、CT画像撮影、実体顕微鏡観察及びX線回折分析等を実施した。

・また、熱水変質部(中央)と比較してさらにゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層ではあるが、その他の2箇所(熱水変質部(北側)、(南側))についても試料採取を行い、CT画像撮影、実体顕微鏡観察を実施した。

1. 中央断層の評価 (2) 地質調査(中央断層の東側)

断層露頭⑥-2(熱水変質部)(スケッチ図)

←N



2017.6.21撮影

S→

安山岩質火砕岩
(古浦層)

流紋岩質火砕岩
(成相寺層)

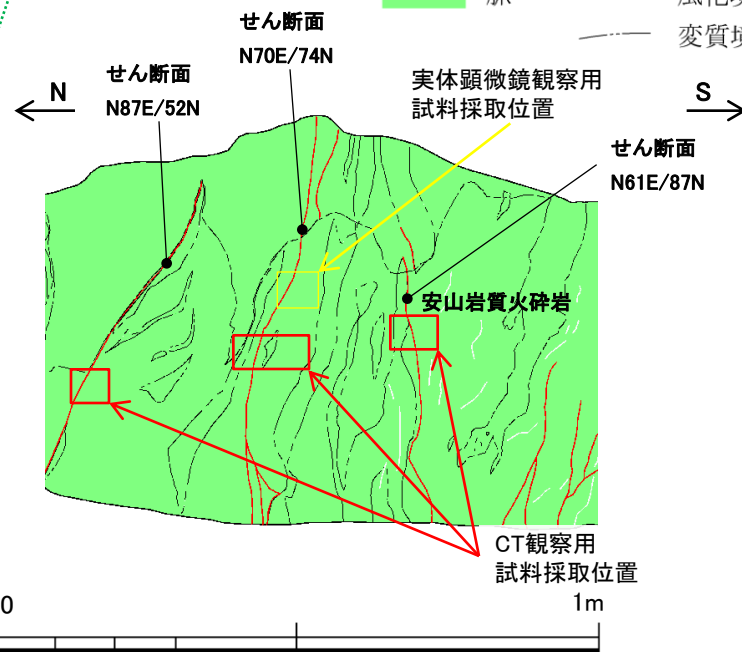
流紋岩質火砕岩
(成相寺層)
泥岩混在

凡例

- 安山岩質火砕岩
- 古浦層
- 粘土
- 割れ目
- 脈
- 風化境界
- 変質境界



2017.6.21撮影



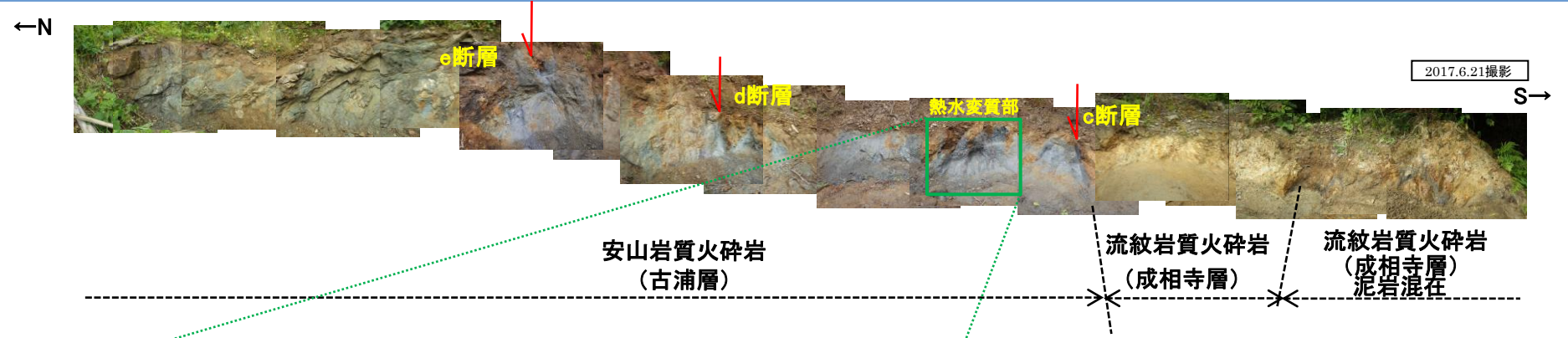
←N

S→

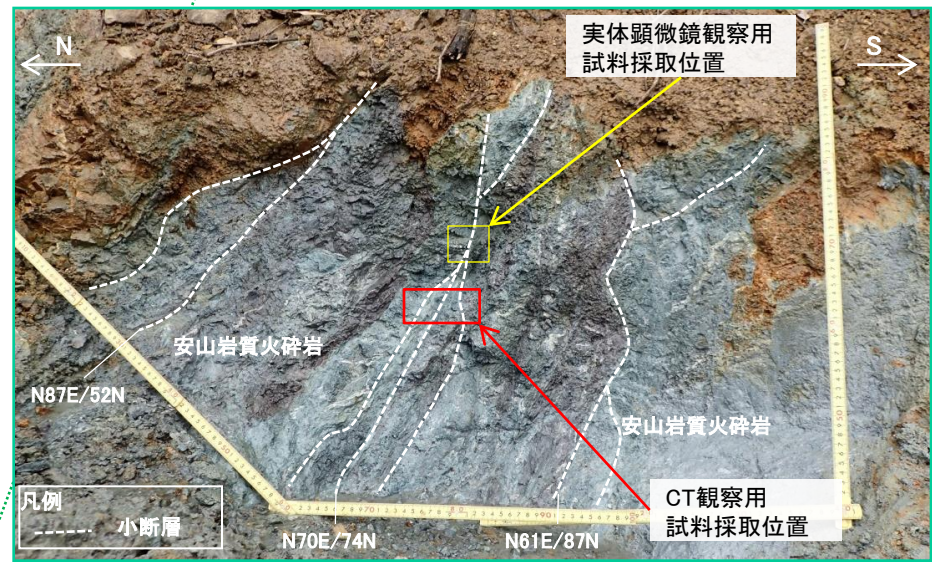


- ・第474回審査会合以降、熱水変質部の観察を再度行い、スケッチにまとめた。
- ・ブロック試料採取後の掘り込まれた観察面では、粘土を伴う小断層の連続性に乏しい。
- ・粘土を伴う小断層はいずれもゆるく湾曲しており、直線的でない。

断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(試料採取位置)



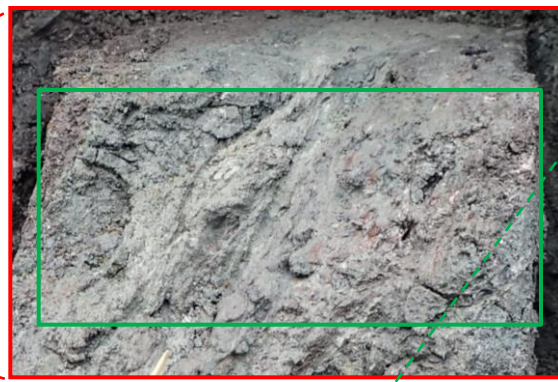
熱水変質部拡大(解釈線なし)



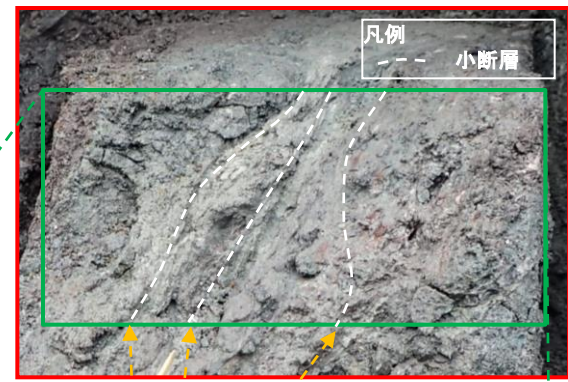
熱水変質部拡大(解釈線あり)

・粘土を伴い、ゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層が見られる箇所(熱水変質部(中央))で試料採取を行い、CT画像撮影、実体顕微鏡観察及びX線回折分析等を実施した。

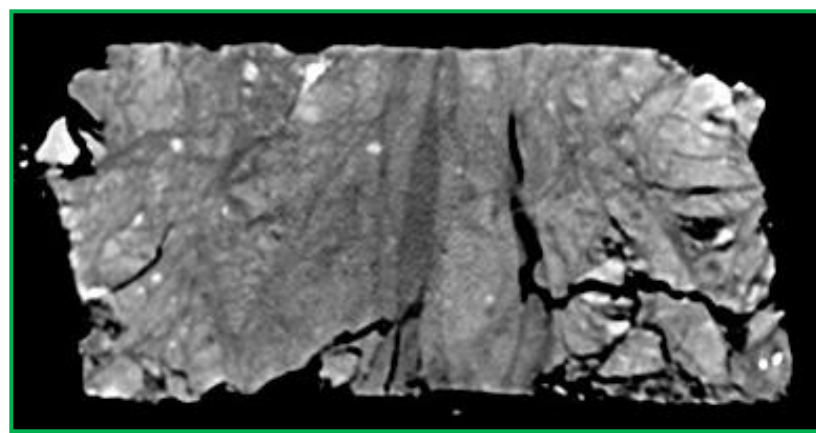
断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(CT画像解析)



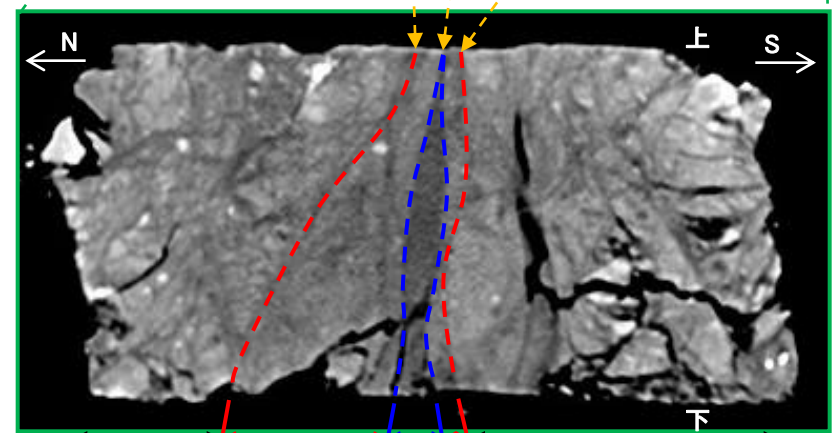
ブロック試料(CT画像撮影)
解釈線なし



ブロック試料(CT画像撮影)
解釈線あり



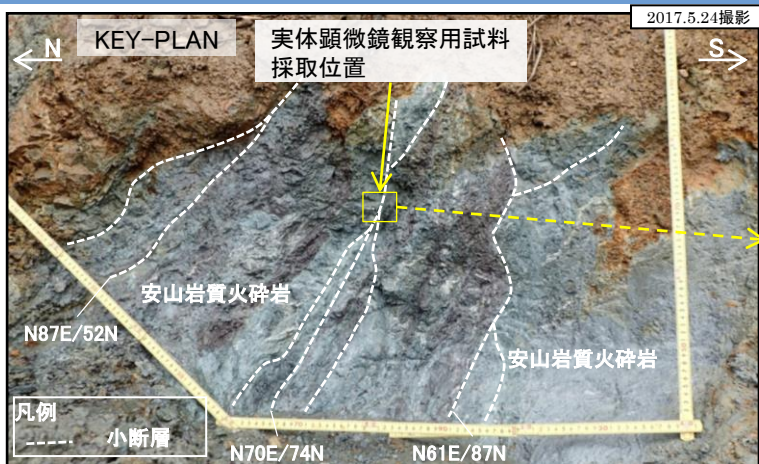
CT画像(解釈線なし)



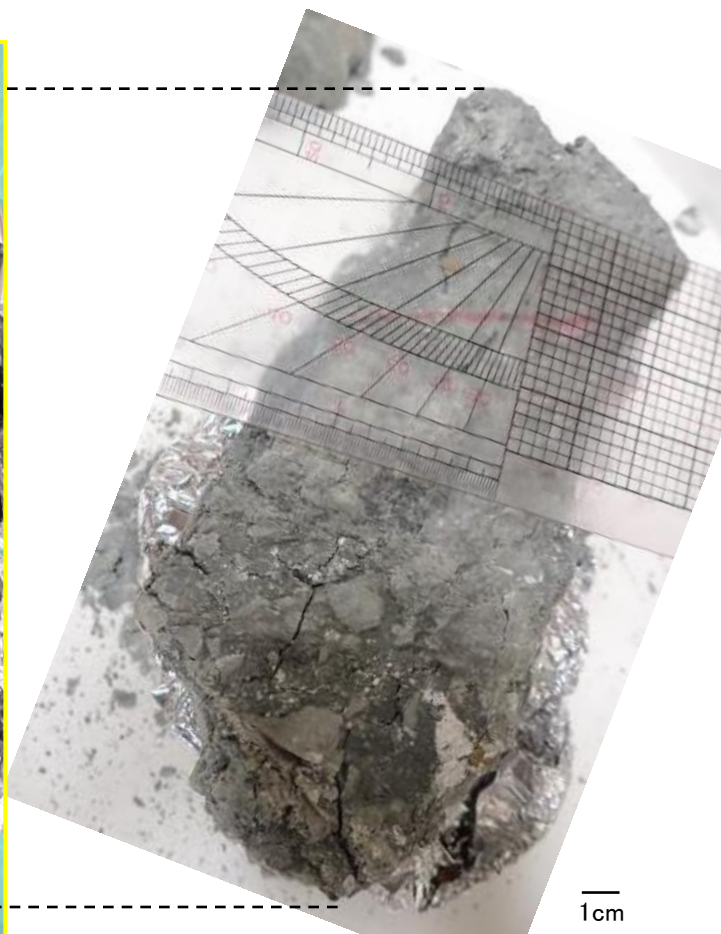
CT画像(解釈線あり)

- ・CT画像解析の結果、幅5mm程度のやや低密度部が認められ、その両側に厚さ2cm程度の膨縮する弱い変形帯が認められる。さらにその外側に、原岩構造を残す変質部が認められる。
- ・ただし、この低密度部には、CT画像解析の結果、明瞭なせん断面及び複合面構造は認められないことから、熱水に伴う粘土脈と考えられる。

1. 中央断層の評価 (2) 地質調査(中央断層の東側) 断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(実体顕微鏡観察)



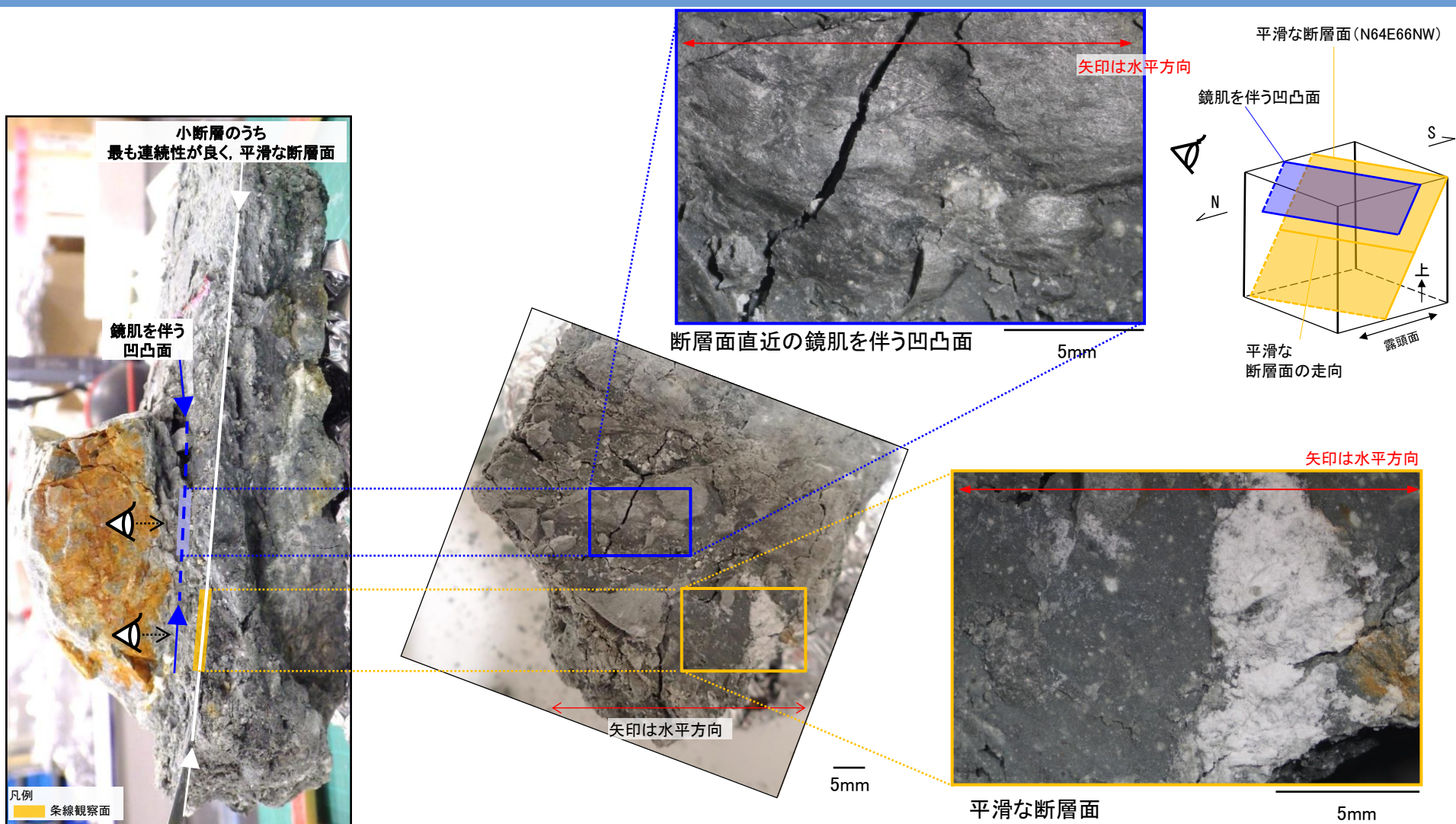
条線観察用ブロック(側面)



条線観察用ブロック(観察面)

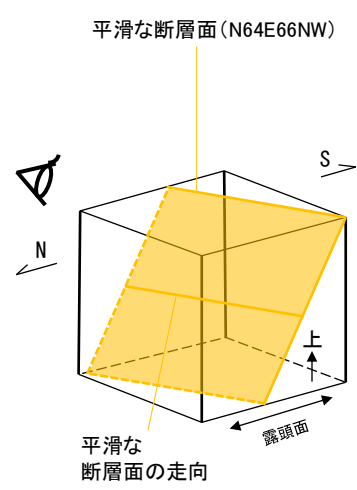
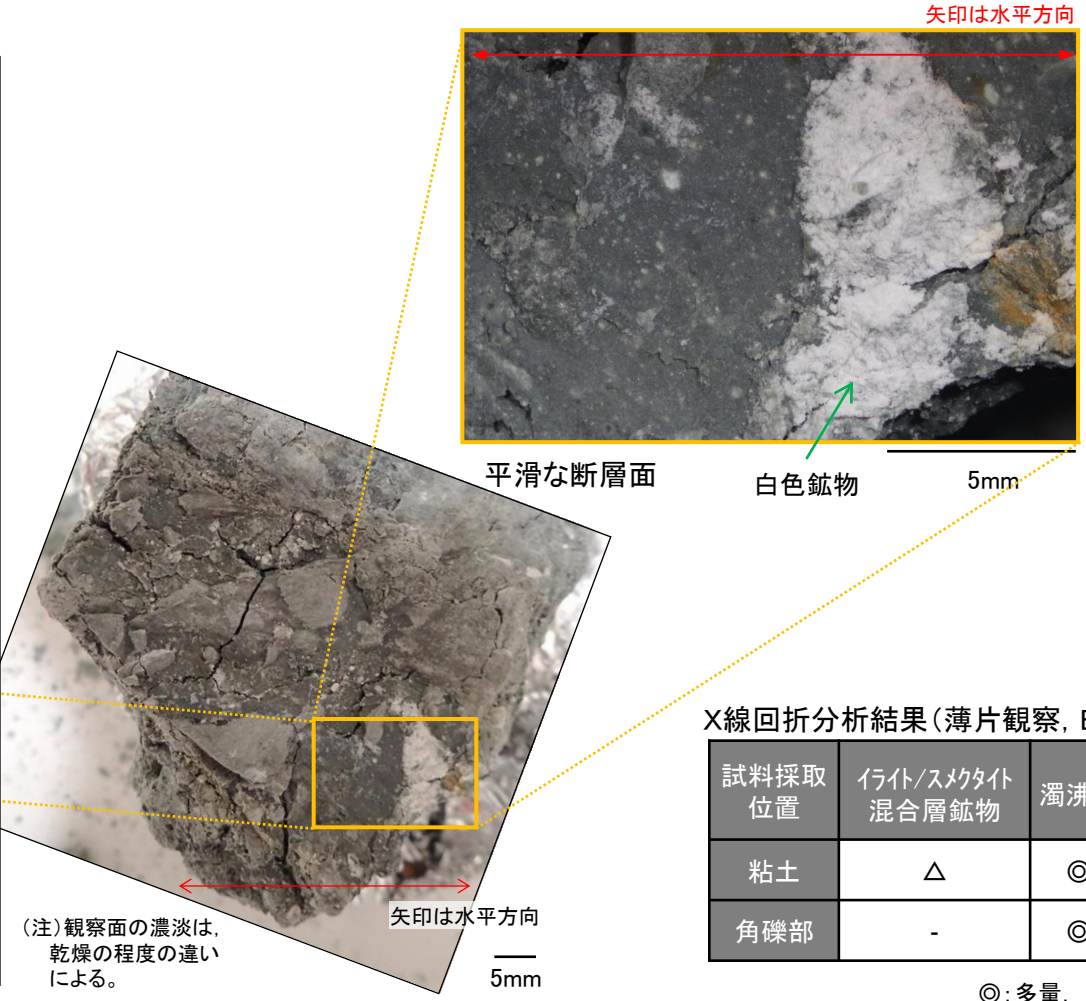
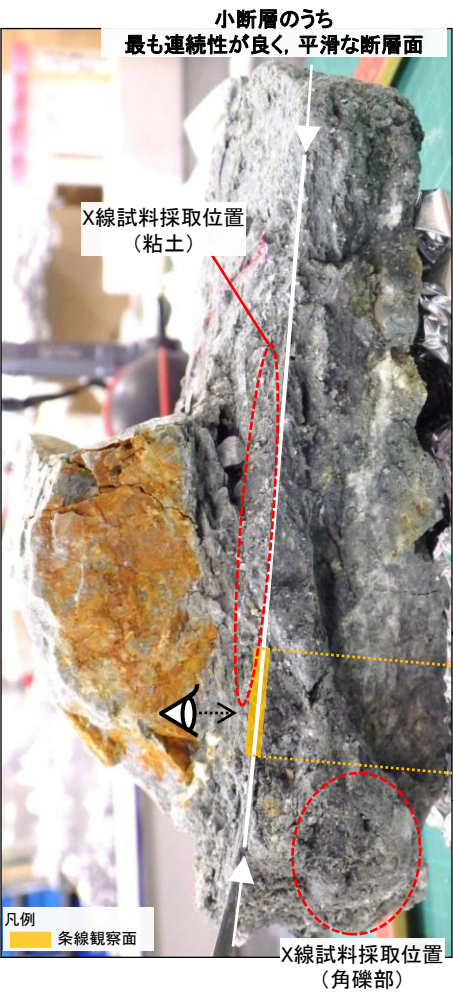
・露頭で確認された粘土を伴う断層面のうち、最も連続性が良く、平滑な断層面から試料を採取し、実体顕微鏡による条線観察を実施した。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側) 断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(実体顕微鏡観察)



・観察面には、露頭で確認された平滑な断層面に加え、露頭あるいはブロックサンプル(CT画像)レベルでは認識できない鏡肌を伴う凹凸面が断层面直近に認められたことから、両者において実体顕微鏡による条線観察を実施した。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(実体顕微鏡観察(平滑な断層面))



X線回折分析結果(薄片観察, EPMA分析等を反映した結果)

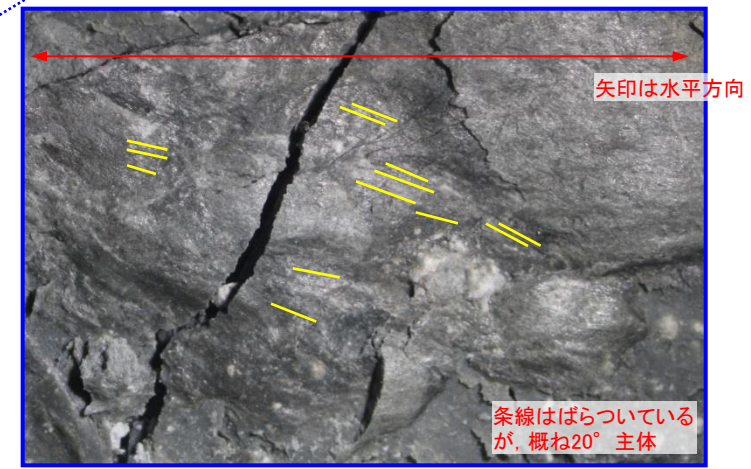
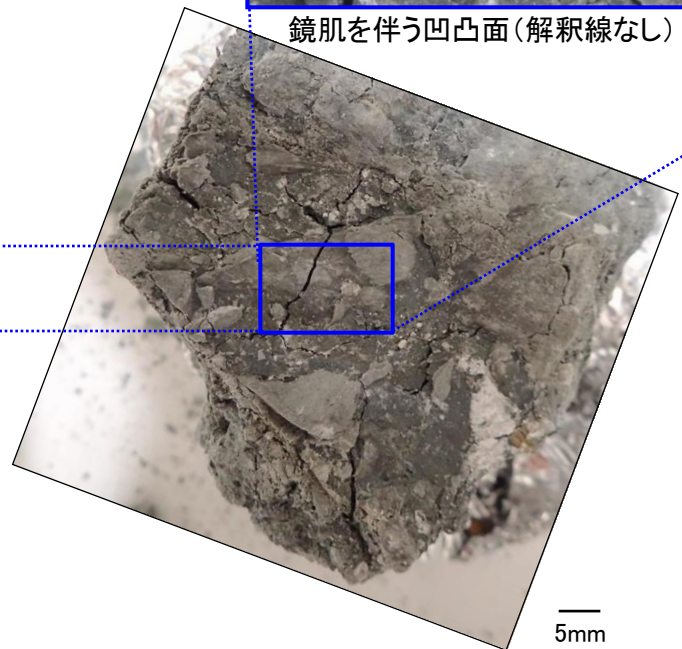
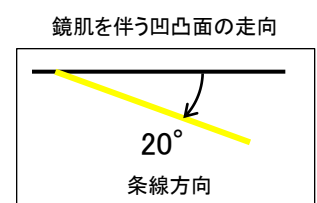
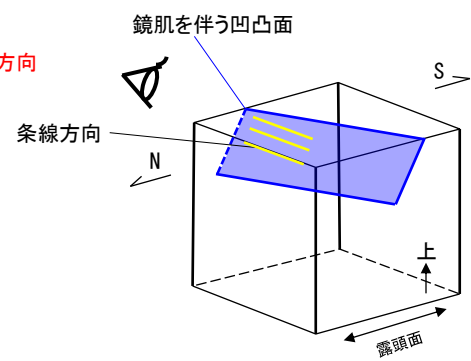
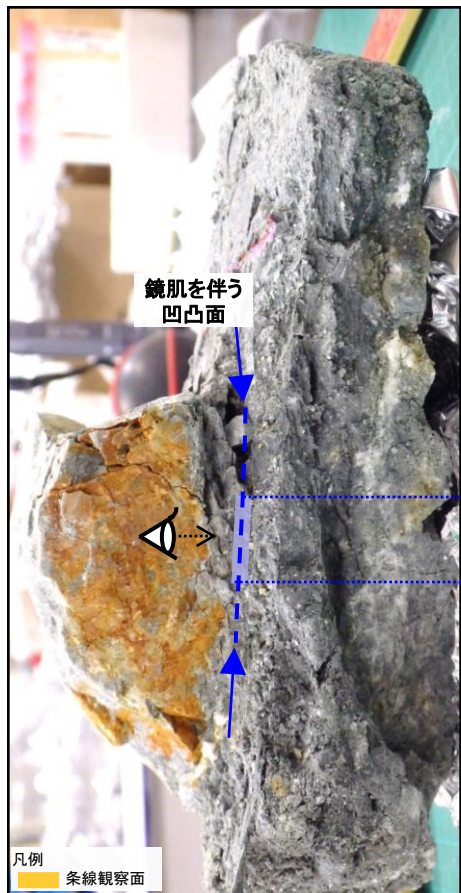
試料採取位置	イライト/スメクタイト混合層鈇物	濁沸石	緑泥石	石英	斜長石(曹長石)
粘土	△	◎	○	△	-
角礫部	-	◎	○	○	-

◎:多量, ○:中量, △:少量, -:微量

・平滑な断層面の条線観察の結果、条線は認められない。また、白色鈇物が晶出しており、せん断による変位・変形も認められない。
 ・X線回折分析、薄片観察及びEPMA分析結果から、CT画像解析により低密度部として認められた粘土は、イライト/スメクタイト混合層鈇物、濁沸石、緑泥石、石英及び斜長石が分布することが確認された。
 ・EPMA分析の結果、斜長石は、Ab成分に富むことから曹長石化していると考えられる。

・以上のことから、露頭やCT画像解析で見られた連続性の良い平滑な断層面は、熱水に伴う粘土脈であることが明らかになった。

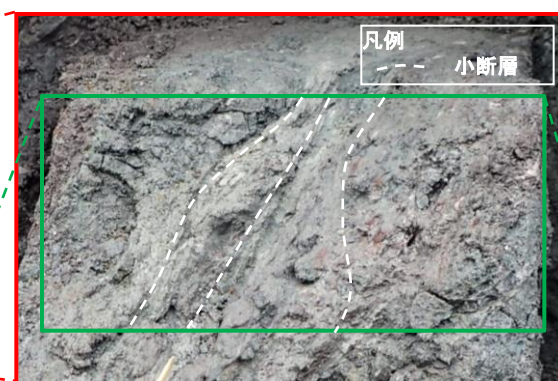
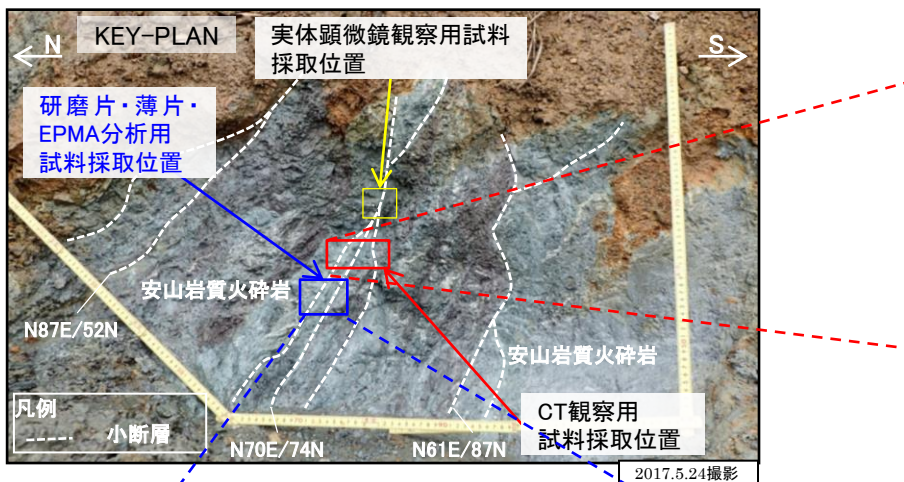
1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)
熱水変質部(中央)の実体顕微鏡観察(断層面直近の鏡肌を伴う凹凸面)



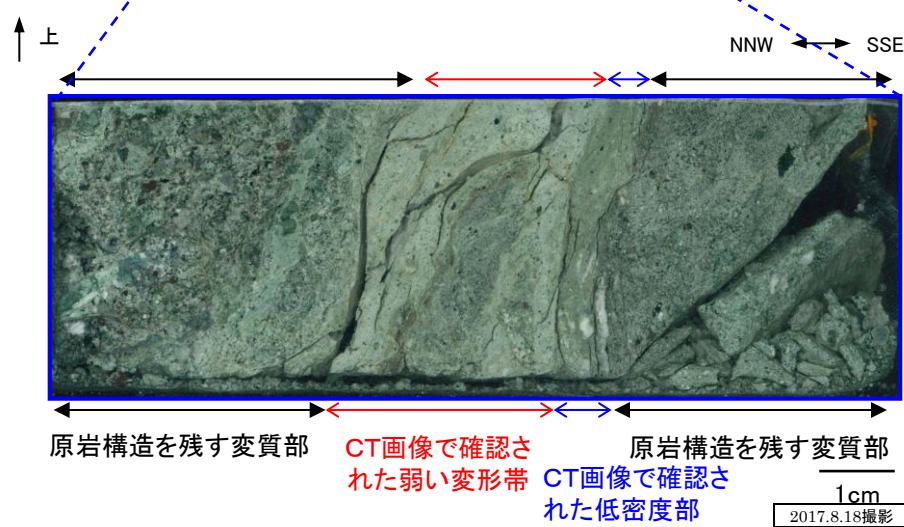
- ・平滑な断層面直近の鏡肌を伴う凹凸面では、横ずれ優勢(走向方向から20° 右回転)の条線が認められる。
- ・ただし、この鏡肌を伴う凹凸面は、連続性に乏しく、露頭あるいはブロックサンプル(CT画像)レベルでは、認識できないことから、平滑な断層面の方が活動時期が新しいと考えられる。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)

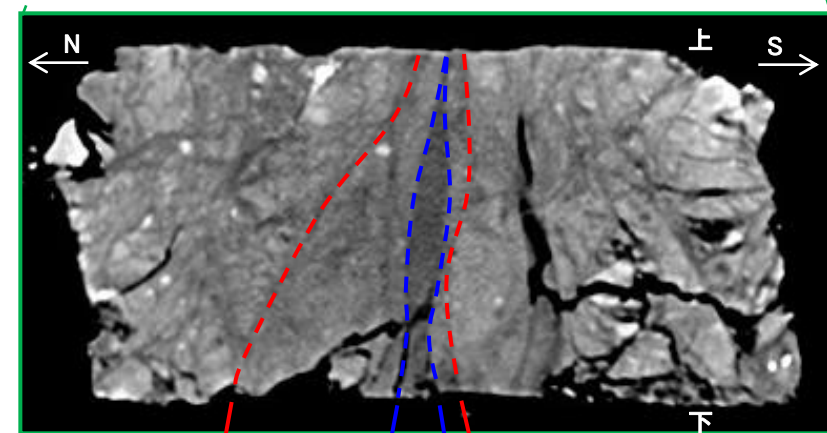
断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(研磨片観察結果)



ブロック試料(CT画像撮影) 1cm
解釈線あり



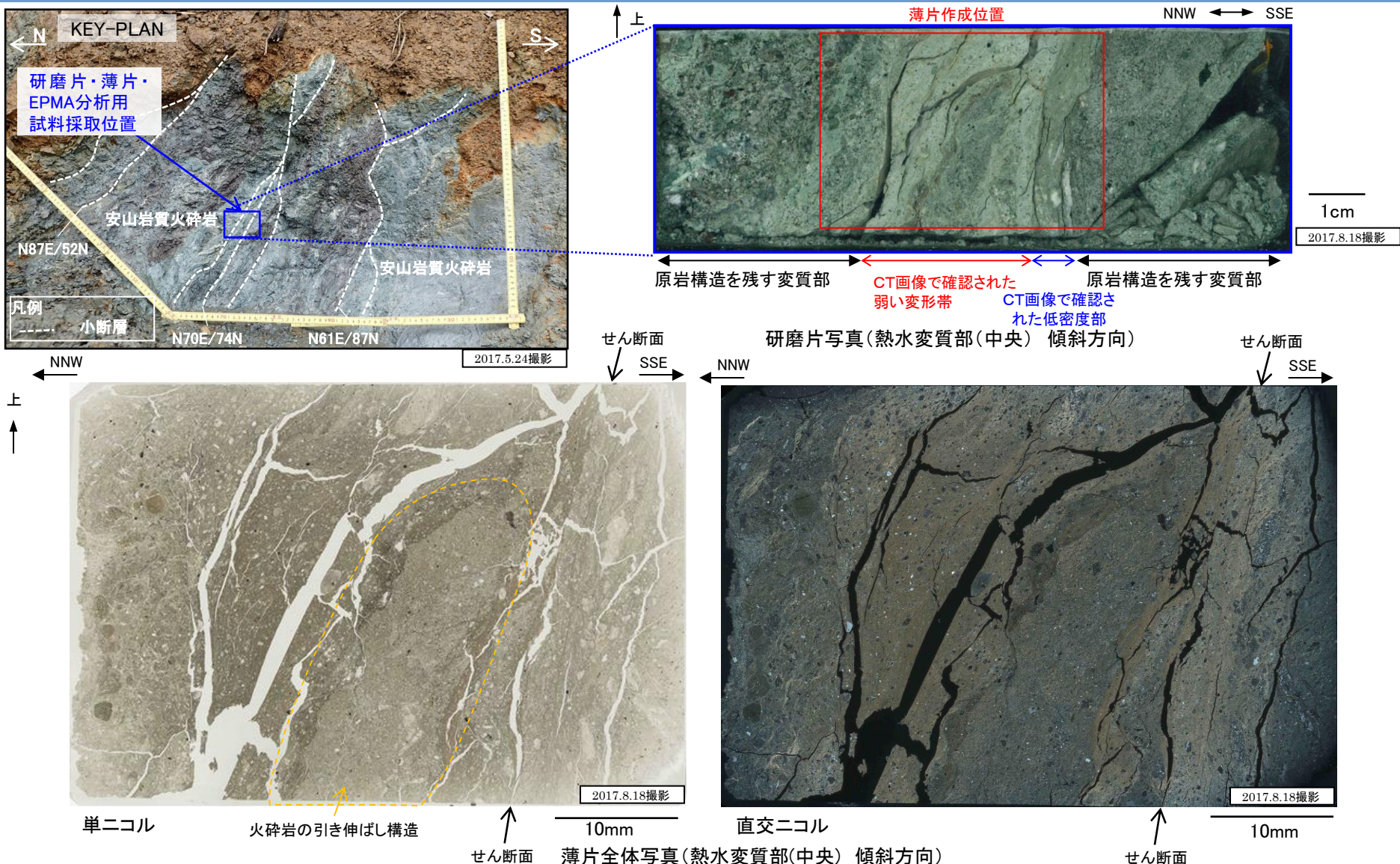
研磨片写真 熱水変質部(中央) 傾斜方向



CT画像(解釈線あり) 1cm

・研磨片観察の結果, CT画像で確認された低密度部及び弱い変形帯に対応する箇所が認められる。

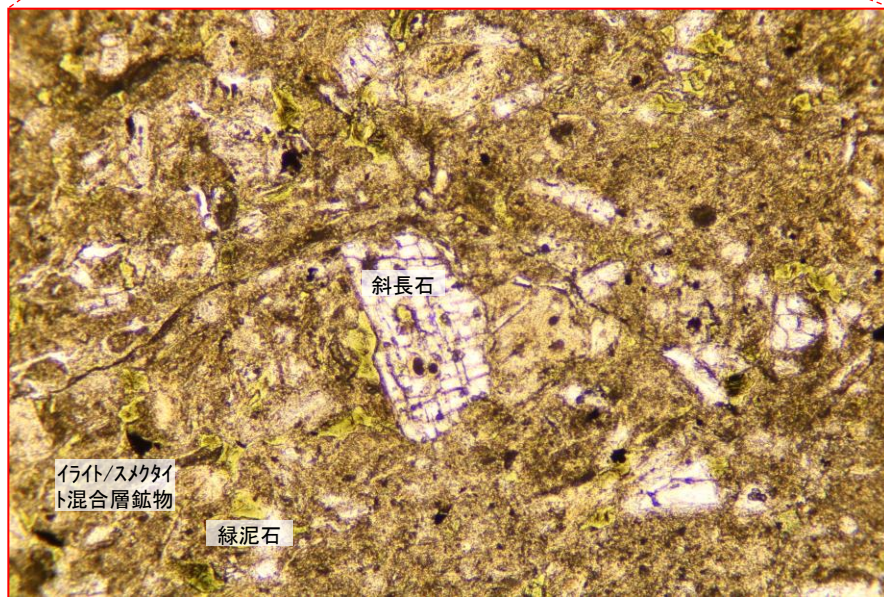
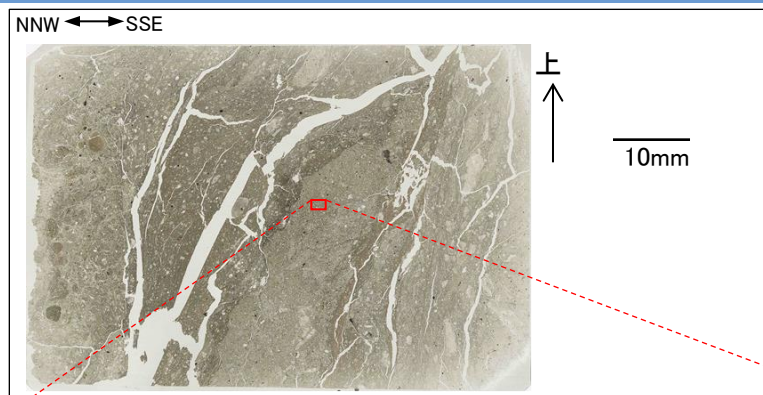
断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(薄片観察結果)



・薄片観察の結果、直交ニコルで黄褐色～褐色の干渉色を示す粘土鉱物が分布する。粘土鉱物は弱い変形帯及びその周辺で多く認められ、せん断面は不明瞭である。せん断面沿いの変位センスは不明であるが、脈状に分布する火砕岩の引き伸ばし構造から、正断層センスが推定される。

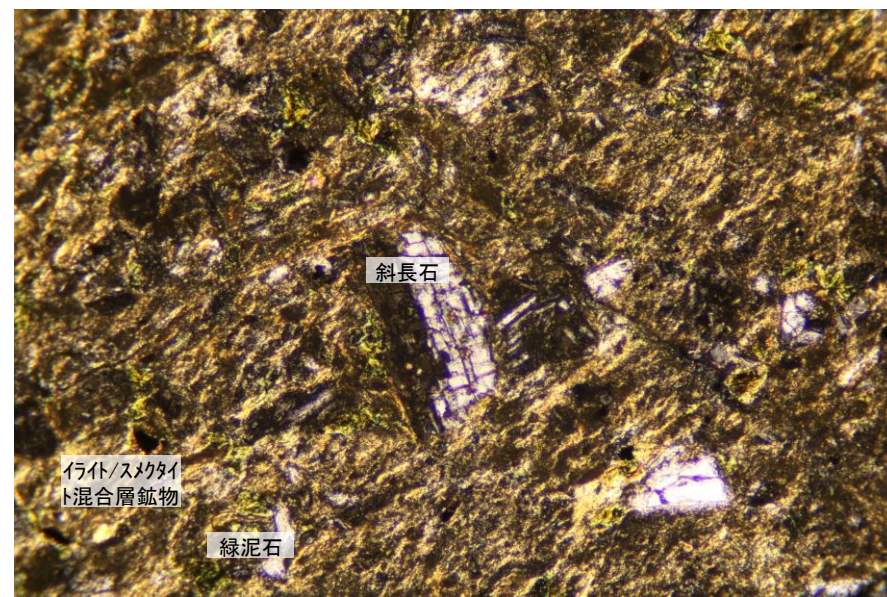
1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)

断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(薄片観察結果(詳細))



単ニコル 2017.8.18撮影

0.5mm

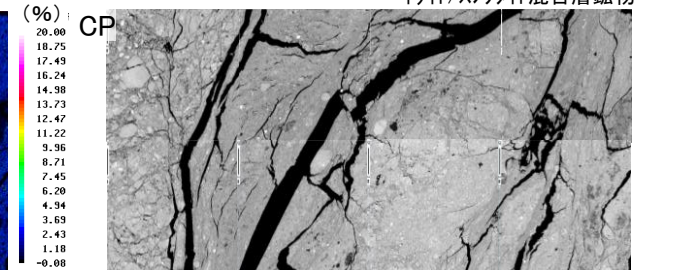
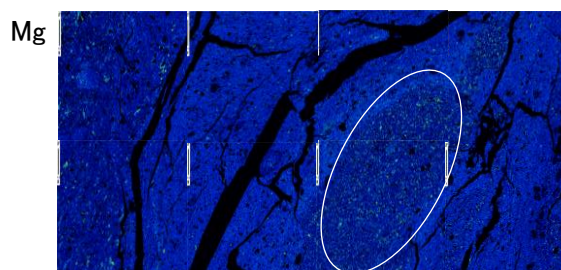
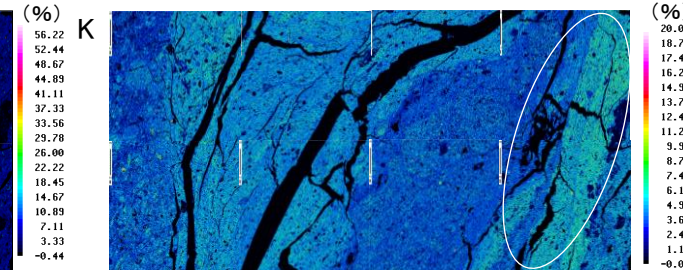
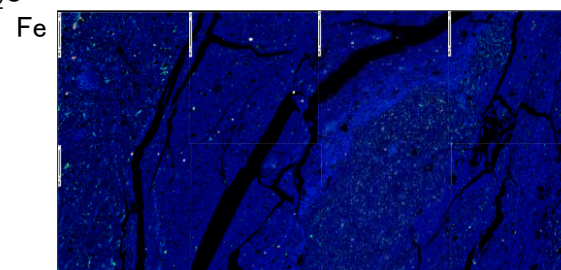
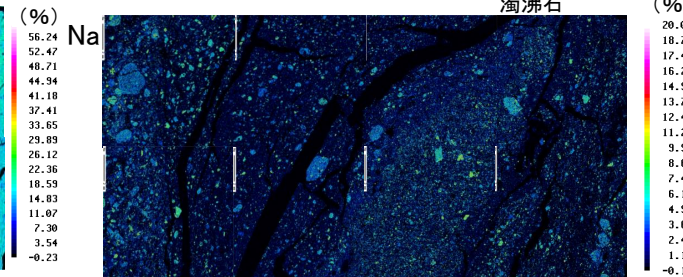
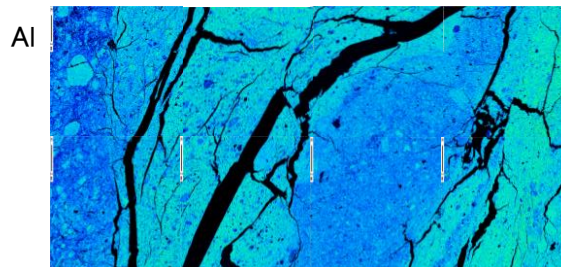
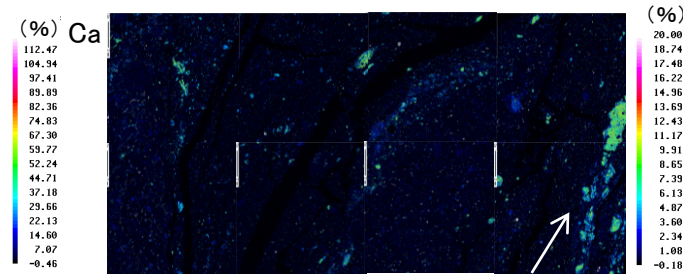
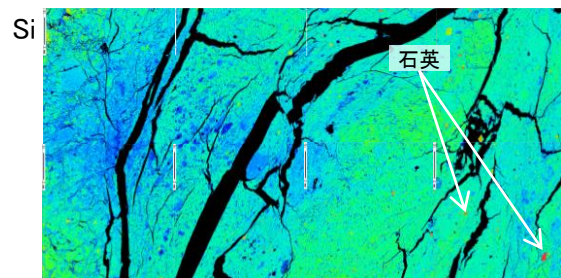
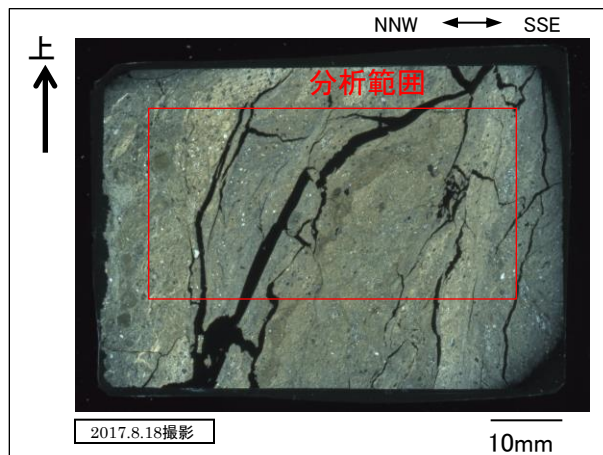


直交ニコル 2017.8.18撮影

0.5mm

- ・短冊状の形態を持ち、単ニコルで無色、直交ニコルで双晶を示す斜長石が複数認められる。斜長石の一部はざらついた様態(斜長石の一部が微細な緑泥石などに置き換わっている状態)を示すことから、熱水変質作用を受けていると考えられる。
- ・なお、普通輝石は認められない。
- ・その他に直交ニコルで黄褐色～褐色を示すイライト/スメクタイト混合層鉱物、緑色～黄色を示す緑泥石が認められる。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(EPMA分析結果 元素マッピング)

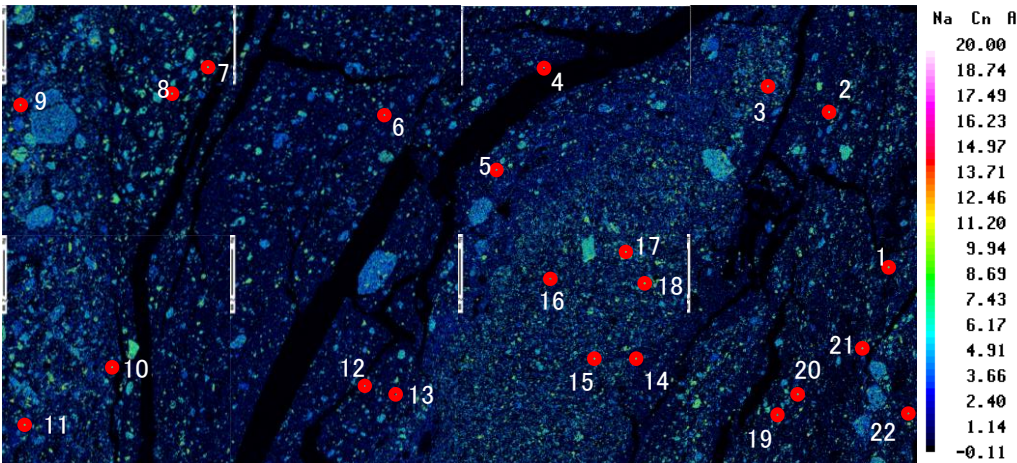


- ※斜長石(曹長石) : $\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$
- イライト : $\text{K}_{1-1.5}\text{Al}_4(\text{Si}_{7-6.5}\text{Al}_{1-1.5}\text{O}_{20})(\text{OH})_4$
- スメクタイト : $\text{Na}_{0.7}(\text{Al}_{3.3}\text{Mg}_{0.7})\text{Si}_8\text{O}_{20}(\text{OH})_4 \cdot n\text{H}_2\text{O}$
- 緑泥石 : $(\text{Mg,Fe,Al})_6(\text{Al,Si})_4\text{O}_{10}(\text{OH})_8$
- 濁沸石 : $\text{CaAl}_2\text{Si}_4\text{O}_{12} \cdot 4\text{H}_2\text{O}$
- 石英 : SiO_2

- ・Naにおいて黄色～黄緑色で示される範囲には、斜長石が分布すると考えられる。
- ・Kにおいて水色～黄緑色で示される範囲には、イライト/スメクタイト混合層鉱物が分布すると考えられる。
- ・Mgにおいて黄色、Siにおいて緑色で示される範囲には、緑泥石が分布すると考えられる。
- ・Caにおいて黄色で示される範囲には、濁沸石が分布すると考えられる。
- ・Siにおいて赤色で示される範囲には、石英が分布すると考えられる。

注: 元素マッピングは色合い調整により含有比の高低を明瞭にしたため、目盛に100%以上や負の値が表示されることがある。

2017.8.18撮影



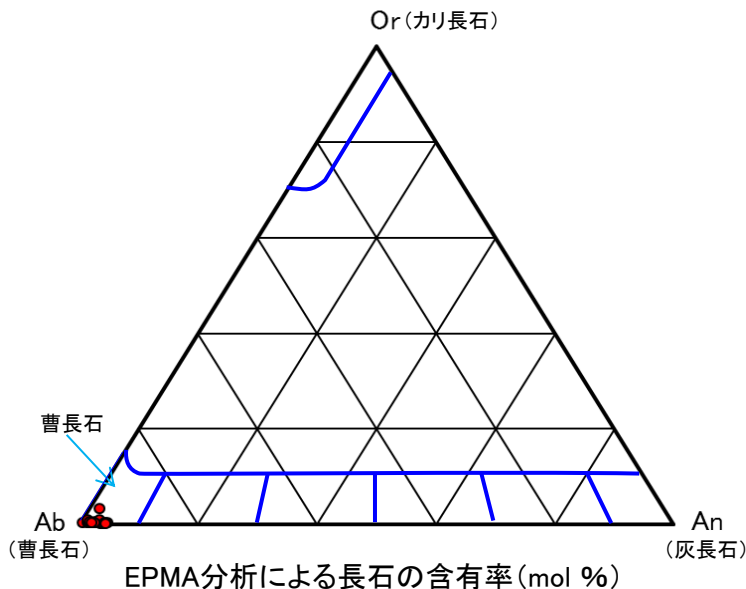
EPMA分析 元素マッピング結果(Na) 2017.8.18撮影

注: 元素マッピングは色合い調整により含有比の高低を明瞭にしたため、目盛に負の値が表示される。

EPMA分析による長石の含有率(mol %)

測定点	An	Ab	Or	測定点	An	Ab	Or
1	2.38	96.99	0.62	12	3.53	96.15	0.32
2	4.01	95.76	0.23	13	2.49	97.08	0.43
3	0.44	99.19	0.37	14	3.54	96.19	0.26
4	1.54	98.08	0.38	15	3.32	96.40	0.28
5	1.40	98.28	0.33	16	2.91	96.06	1.03
6	1.67	97.96	0.38	17	1.04	98.06	0.90
7	1.92	94.86	3.22	18	4.20	95.41	0.38
8	2.15	97.53	0.33	19	2.53	97.16	0.31
9	4.66	95.04	0.30	20	4.44	95.29	0.26
10	2.76	96.82	0.43	21	1.62	97.86	0.52
11	4.26	95.42	0.32	22	2.01	97.59	0.40

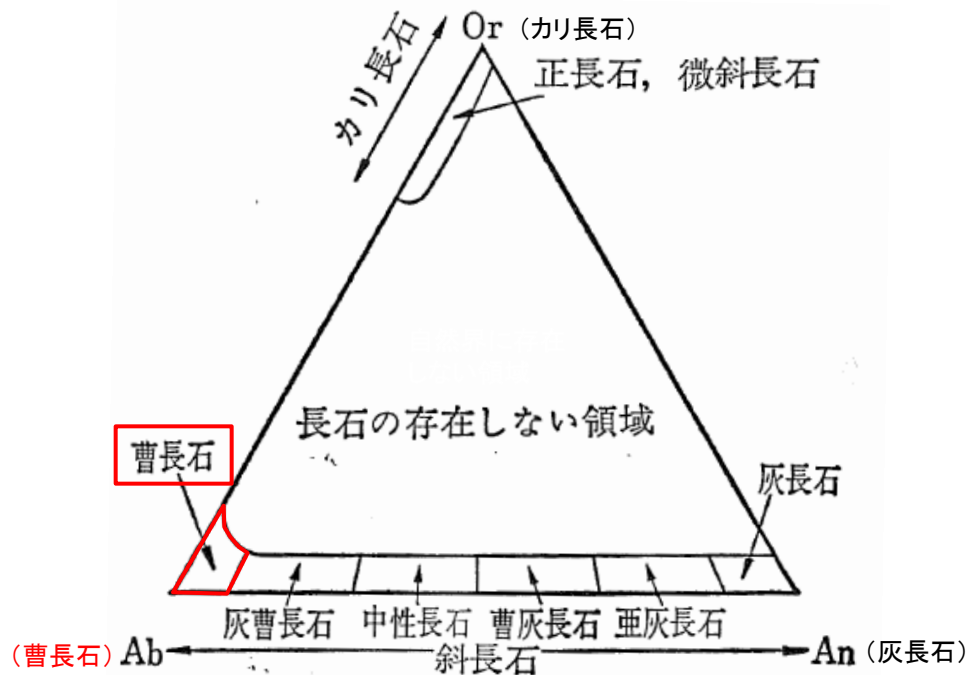
※ Ab: 曹長石($\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$), Or: カリ長石(KAlSi_3O_8), An: 灰長石($\text{CaAl}_2\text{Si}_2\text{O}_8$)
 ※ 3成分の合計は四捨五入の関係により100%とならない場合がある。



EPMA分析による長石の含有率(mol %)

・薄片観察結果及びEPMA分析結果を踏まえ、斜長石の化学組成に基づく三角ダイヤグラムを作成した。
 ・Ab成分に富むことから、斜長石は曹長石化していると考えられる。

(参考)断層露頭⑥-2(熱水変質部)(文献調査結果)



長石の化学組成と分類

黒田・諏訪(1983)より引用・加筆

- ・黒田・諏訪(1983)⁽³⁸⁾によると、長石はカリ長石(Or)、曹長石(アルバイト, Ab)、灰長石(An)の3成分が適当に混り合うもので、3成分の含有比率で上図のように細区分されるとされている。
- ・また、Ab-Anの領域は斜長石、Ab-Orの領域はアルカリ長石であり、曹長石は、斜長石の中でも特にアルバイト成分に富むものであるとされている。

1. 央道断層の評価 (2) 地質調査(央道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(濁沸石の生成温度に係る文献調査)

沸石の生成温度一覧表

	沸石類							
	方沸石 $\text{NaAlSi}_2\text{O}_6 \cdot \text{H}_2\text{O}$	濁沸石(ローモンタイト) $\text{CaAl}_2\text{Si}_4\text{O}_{12} \cdot 4\text{H}_2\text{O}$	斜プチロル沸石 $(\text{Na}, \text{K}, \text{Ca})_{2-3} \text{Al}_3(\text{Al}, \text{Si})_2\text{Si}_{13}\text{O}_{36} \cdot 12\text{H}_2\text{O}$	束沸石 $(\text{Ca}, \text{Na}_2, \text{K}_2)\text{Al}_2\text{Si}_7\text{O}_{18} \cdot 7\text{H}_2\text{O}$	菱沸石 $\text{CaAl}_2\text{Si}_4\text{O}_{12} \cdot 6\text{H}_2\text{O}$	モルデン沸石 $(\text{Na}_2, \text{K}_2, \text{Ca})\text{Al}_2\text{Si}_{10}\text{O}_{24} \cdot 7\text{H}_2\text{O}$	輝沸石 $(\text{Ca}, \text{Na}_2)\text{Al}_2\text{Si}_7\text{O}_{18} \cdot 6\text{H}_2\text{O}$	ワイラケ沸石 $\text{CaAl}_2\text{Si}_4\text{O}_{12} \cdot 2\text{H}_2\text{O}$
井沢(1996) ⁽³⁹⁾	—	140°C-210°C	140°C以下	140°C以下	—	80°C-140°C	—	210°C以上
歌田(1997) ⁽⁴⁰⁾	84°C-123°C	100°C-150°C	44°C-84°C	—	—	—	—	—
吉村(2001) ⁽⁴¹⁾	120°C-220°C	200°C-260°C	—	70°C以下	70°C以下	120°C以下	100°C-200°C	250°C以上
吉村(2003) ⁽⁴²⁾	70°C以下	100°C-170°C	100°C以下	—	—	—	100°C以下	—
星ほか(1992) ⁽⁴³⁾	80°C-110°C	138°C-150°C	—	—	—	—	—	—
IJIMA(1978) ⁽⁴⁴⁾	84°C-124°C	120°C以上	124°C以下	—	—	124°C以下	84°C-124°C	—

・濁沸石の生成温度については文献によってばらつきがあるが、最低でも100°C程度であることから、小断層を含む周辺の網目状に分布する白色鉱物は、100°C以上の熱水変質作用等により生成されたと考えられる。

1. 央道断層の評価 (2) 地質調査(央道断層の東側) 断層露頭⑥-2(熱水変質部(中央))(小断層の活動性評価)

山陰地域における応力場の変遷(新第三紀中新世~第四紀)

松江地域の地質総括表

地質時代	層序		主要岩相	火成活動	堆積環境	構造運動	放射年代及び化石等・群集
	鳥根半島	央道低地帯 中国山地北縁					
完新世	三角州、扇状地、泥濘原、砂州及び海岸砂丘堆積物及び中海原(<50m)		砂、泥及び礫(泥炭を挟む)		内湾-潟湖と海岸平野		汽水-海生動物化石
第四紀	低位段丘堆積物		礫、砂及び泥		内湾-潟湖と海岸平野		
	差海層(<50m)	中位II段丘堆積物 古扇状地堆積物	泥、砂及び礫(泥炭及び火山灰を挟む)	後期更新世以降に火成活動は認められない。	内湾-潟湖と海岸平野		
		中位I段丘堆積物	泥、礫及び砂		湖と海岸平野		
		大根島玄武岩	アルカリ玄武岩溶岩及びスコリア		湖と海岸平野		
第三紀		高位III段丘堆積物	礫、砂及び泥		湖と海岸平野		
		高位II段丘堆積物	礫、砂及び泥		湖と海岸平野		
		高位I段丘堆積物	礫、砂及び泥		湖と海岸平野		
		野呂玄武岩	アルカリ玄武岩溶岩		内陸	1Ma(K-Ar)	
新第三紀		和久羅山安山岩	角閃石含有安山岩溶岩		海岸平野		5-6Ma(K-Ar)
	松江層(<1100m)		砂岩、シルト岩、アルカリ玄武岩-粗面安山岩溶岩・火砕岩など		内湾-潟湖		海-汽水動物化石 植物化石 11-12Ma(K-Ar) N10-11*
第三紀	古江層(450-900m)	布志名層(500m)	泥岩及びシルト岩		内湾-潟湖		N9*
	牛切層(<300m)	大森層(<500m)	流紋岩凝灰岩凝灰質泥岩泥質岩互層		浅海		N8-9* 15Ma(FT,K-Ar)
	成相寺層(>1200m)	久利層(200-800m)	泥質岩、流紋岩溶岩、流紋岩火砕岩など		浅海		20Ma(FT) 23-26Ma(FT) 台島型植物群 淡水-汽水生体化石
	古浦層(>800m)(伏在)	川合層(0-400m)	泥質岩、流紋岩溶岩、流紋岩火砕岩など		浅海		
古第三紀		波多層(<800m)	砂岩、礫岩、泥質岩、安山岩溶岩・火砕岩及び流紋岩火砕岩		浅海		
		下野花崗岩	細粒黒雲母花崗岩		島根半島 潟湖		36Ma(K-Ar) 36-53Ma(K-Ar)**
		布部花崗岩 糖花崗岩	粗-中粒黒雲母花崗岩		中国山地北縁		54Ma(K-Ar) 43-60Ma(K-Ar)**
白堊紀後期		大東花崗閃緑岩	中-粗粒黒雲母角閃石花崗閃緑岩	火成活動	中国山地北縁 沿岸		44-63Ma(K-Ar)**
		八雲火山岩類(>800m)	流紋岩-デイサイト火砕岩(主として溶結)及び流紋岩溶岩		内陸		
未詳		上意東変成岩 鳥屋郷変成岩	スカルン及び角閃石ホルンフェルス(砂岩、泥岩及び礫岩起源)		浅海		

【露頭観察結果, 室内試験結果, 文献調査結果】

- 露頭観察の結果, 網目状の白色脈で特徴付けられる熱水変質が全体的に認められ, その中にゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層が確認される。
- 小断層付近のCT画像解析の結果, 明瞭なせん断面及び複合面構造は認められない。
- 実体顕微鏡観察及びX線回折分析の結果, 露頭で確認された小断層に対応する平滑な断層面が認められる。
平滑な断層面には条線は認められず, また断層面沿いに濁沸石が晶出しており, せん断による変位・変形も認められない。
- 文献調査の結果, 敷地周辺では後期更新世以降に火成活動は認められない。

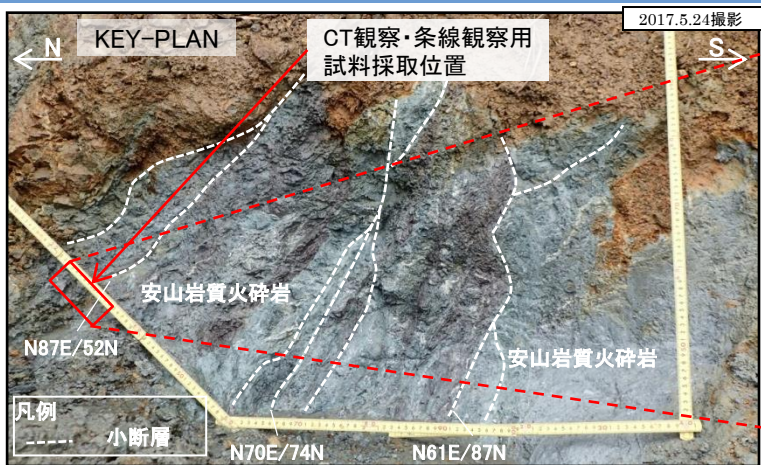


【まとめ】

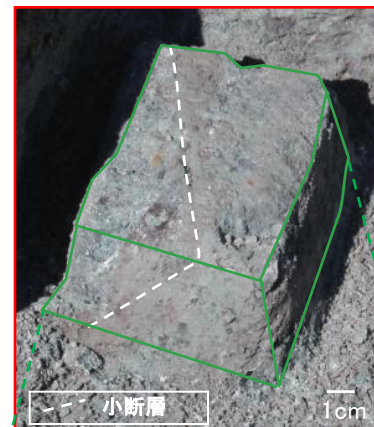
- 平滑な断層面には条線は認められず, また断層面沿いに, 後期更新世より古い時代に晶出したものと考えられる濁沸石が晶出しており, せん断による変位・変形も認められない。
- 以上のことから, 熱水変質部に認められる小断層に, 後期更新世以降の活動性はないと考えられる。

*: Blow(1969)の浮遊性有孔虫化石帯 K-Ar: K-Ar年代 FT: フィッシュトラック年代 **: 対比可能な周辺地域の貫入岩体の年代を含む。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) 断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(試料採取位置)



ブロック試料 解釈線なし



ブロック試料 解釈線あり



ブロック試料 観察面(小断層下盤)



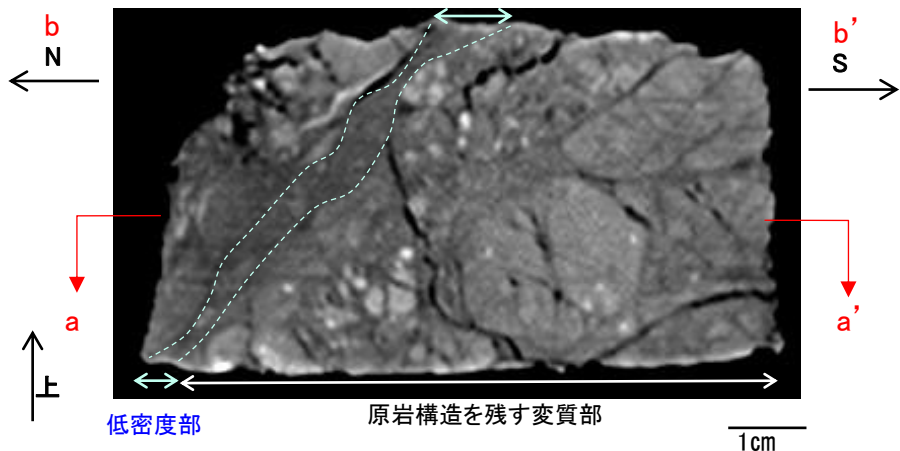
ブロック試料 上面

・露頭で確認されたゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層から試料を採取し、CT画像解析及び実体顕微鏡による条線観察を実施した。

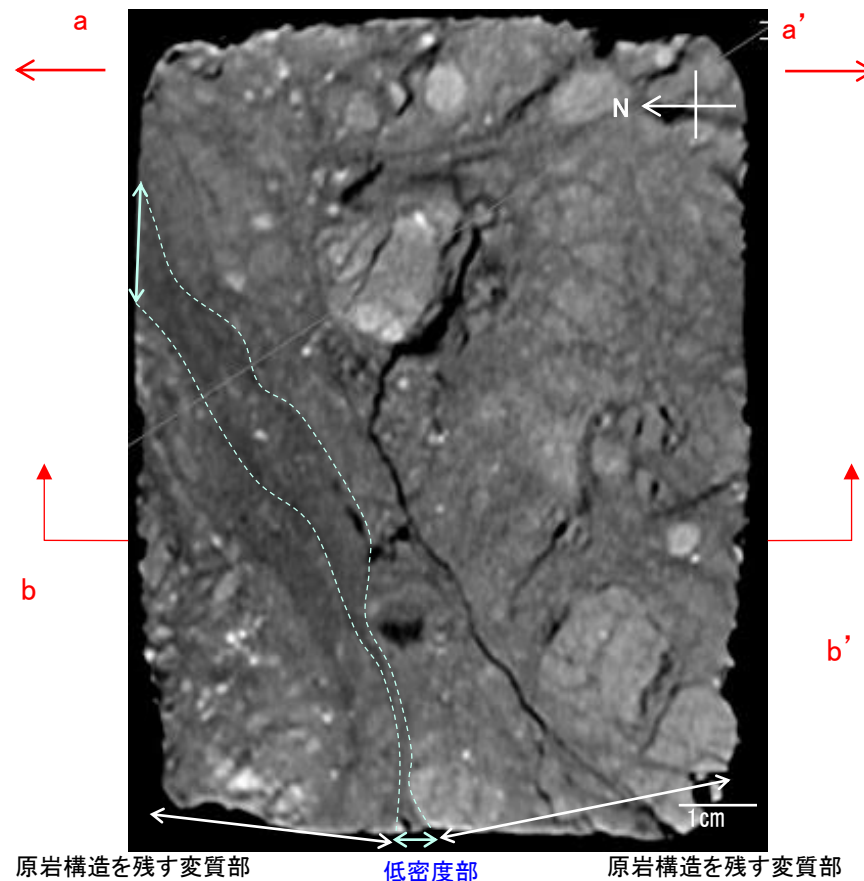
1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(CT画像解析)



ブロック試料 上面



CT画像(b-b', ブロック中央部の鉛直面を撮影)

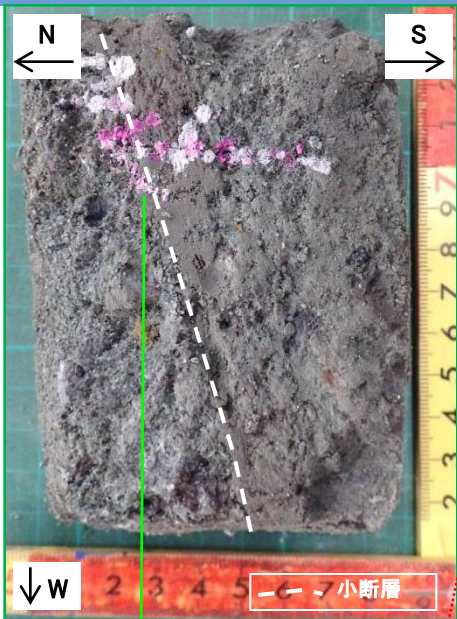


CT画像(a-a', ブロック中央部の水平面を撮影)

・CT画像解析の結果、幅2cm程度の膨縮する低密度部が認められ、その外側に原岩部が認められる。
・ただし、この低密度部には、CT画像解析の結果、明瞭なせん断面及び複合面構造は認められないことから、熱水に伴う粘土脈と考えられる。

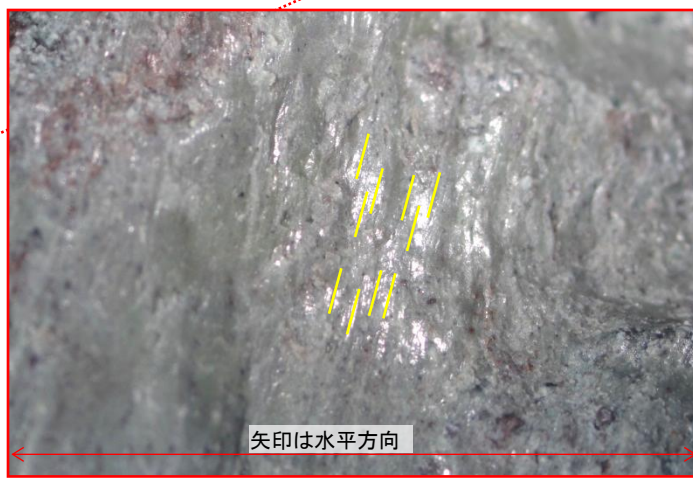
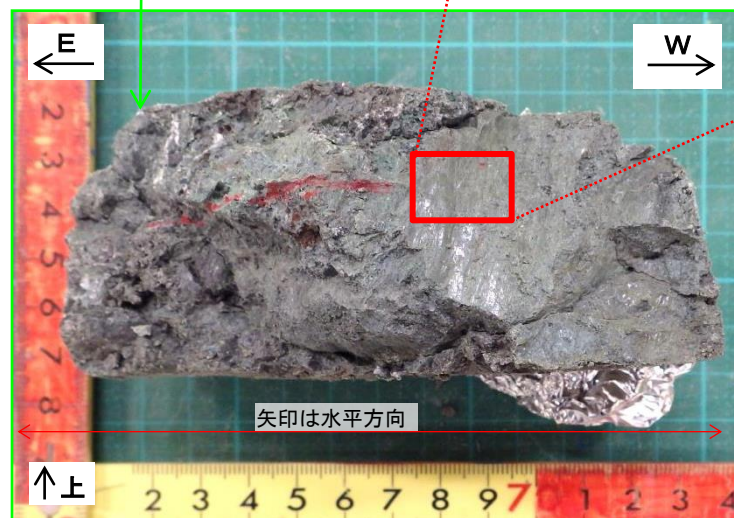
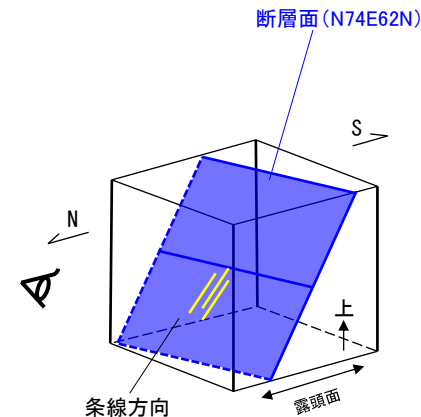
・熱水変質部(北側)について、明瞭なせん断面及び複合面構造は認められず、熱水変質部(中央)と同様の結果が得られた。

1. 中央断層の評価 (2)地質調査(中央断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(実体顕微鏡観察)



断層面下盤(解釈線なし)

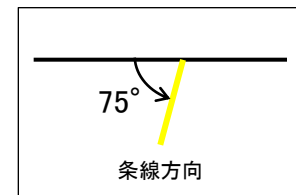
5mm



断層面下盤(解釈線あり)

5mm

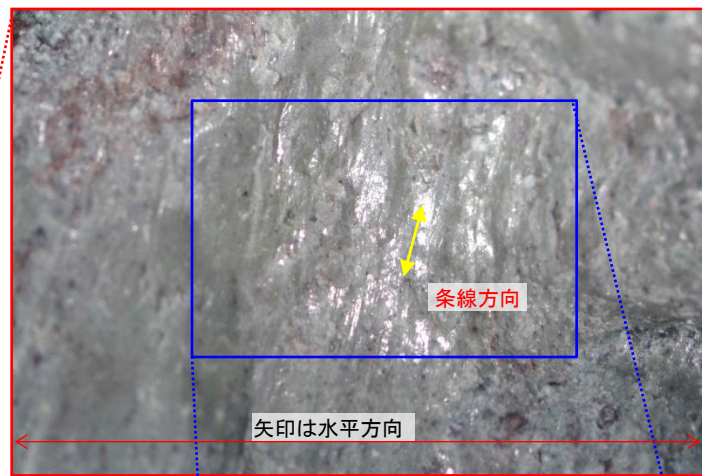
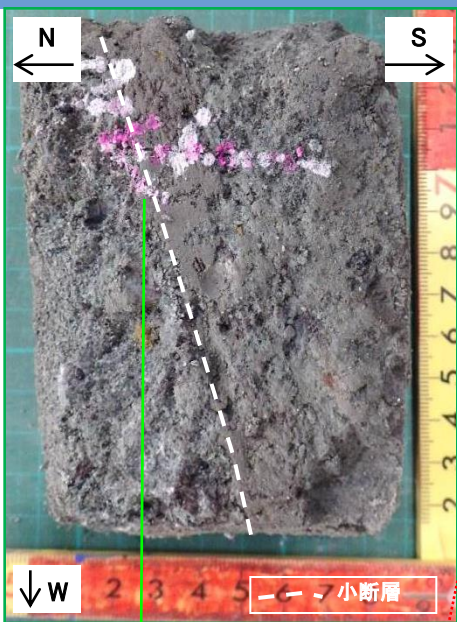
断層面の走向



ブロック試料 観察面(断層面下盤)

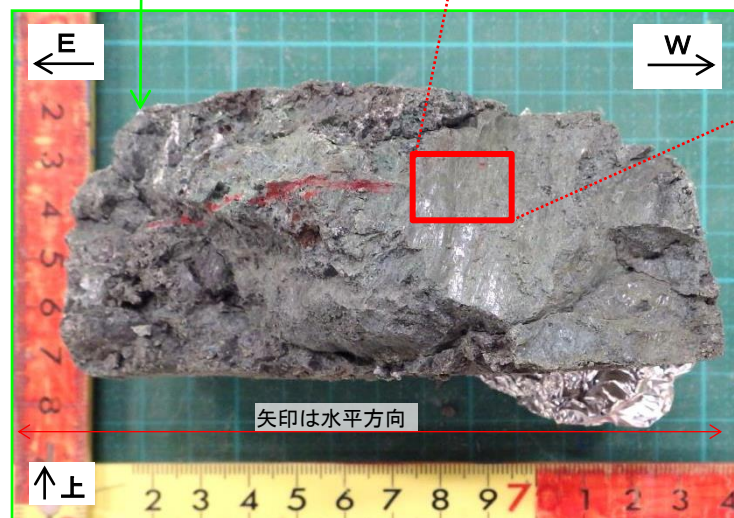
・実体顕微鏡観察の結果, 縦ずれ優勢(走向方向から75° 左回転, T:N14E P:59)の条線が認められる。

1. 中央断層の評価 (2) 地質調査(中央断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(実体顕微鏡観察)

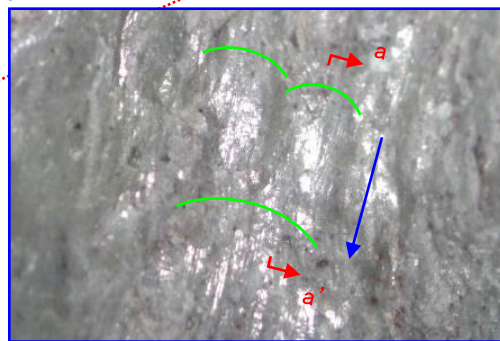


断層面下盤(解釈線あり)

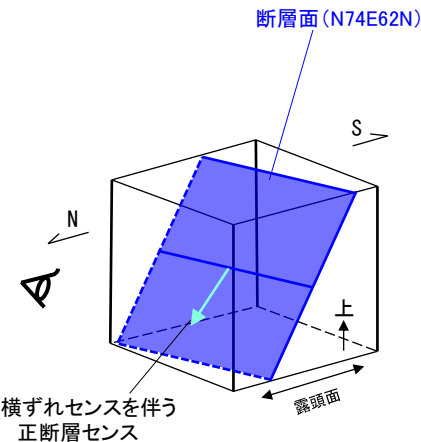
5mm



矢印は水平方向



5mm



右横ずれセンスを伴う
正断層センス

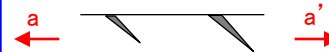


擦痕模式平面図

断層面の走向

75°

条線方向



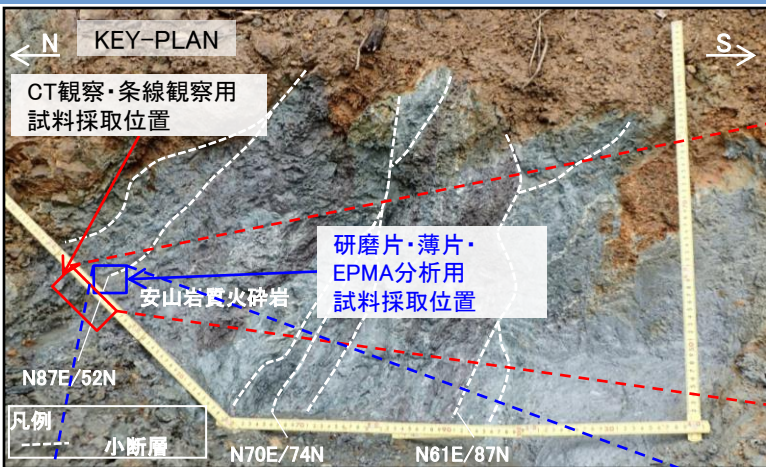
擦痕模式断面図

擦痕区分: Crescentic markings ; Tension gashes (Doblas, 1998)

ブロック試料 観察面(断層面下盤)

・擦痕より、熱水変質部に認められる断層面のせん断センスは右横ずれセンスを伴う正断層センスである。

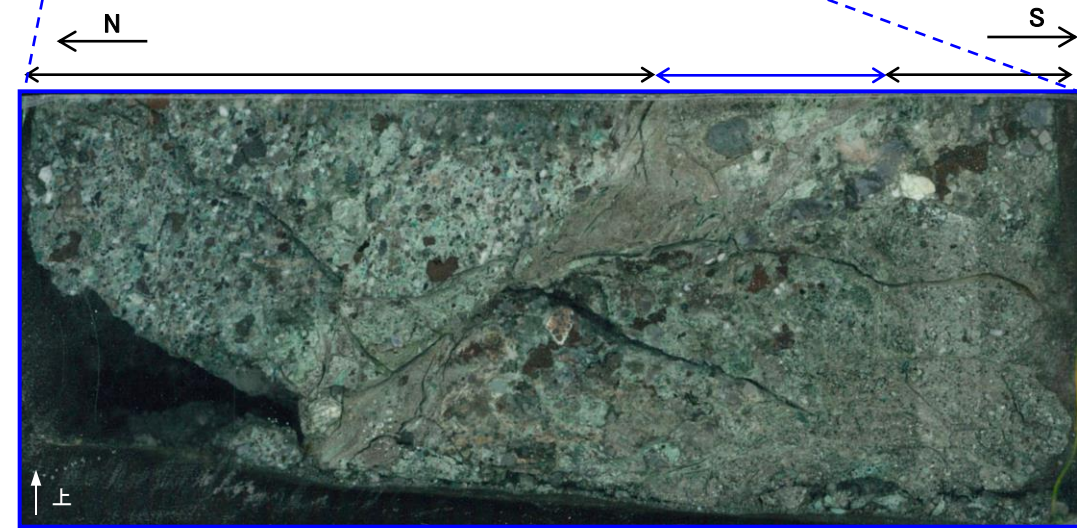
1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(研磨片観察結果)



2017.5.24撮影



ブロック試料(CT画像撮影)
解釈線あり



原岩構造を
残す変質部

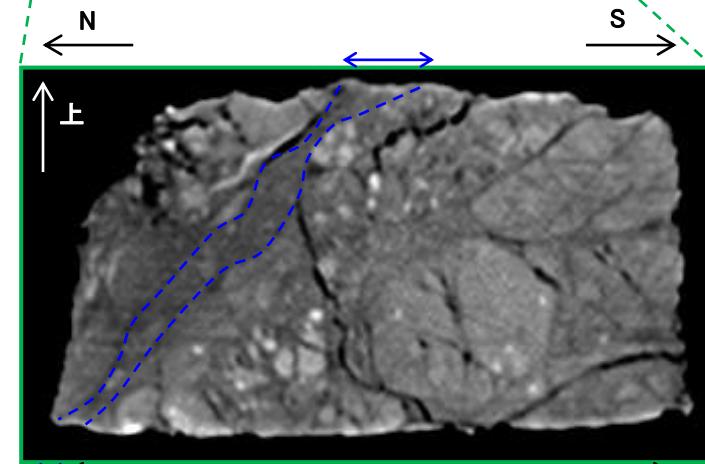
CT画像で確認
された低密度部

原岩構造を残す変質部

1cm

2017.8.18撮影

研磨片写真 熱水変質部(北側) 傾斜方向



低密度部

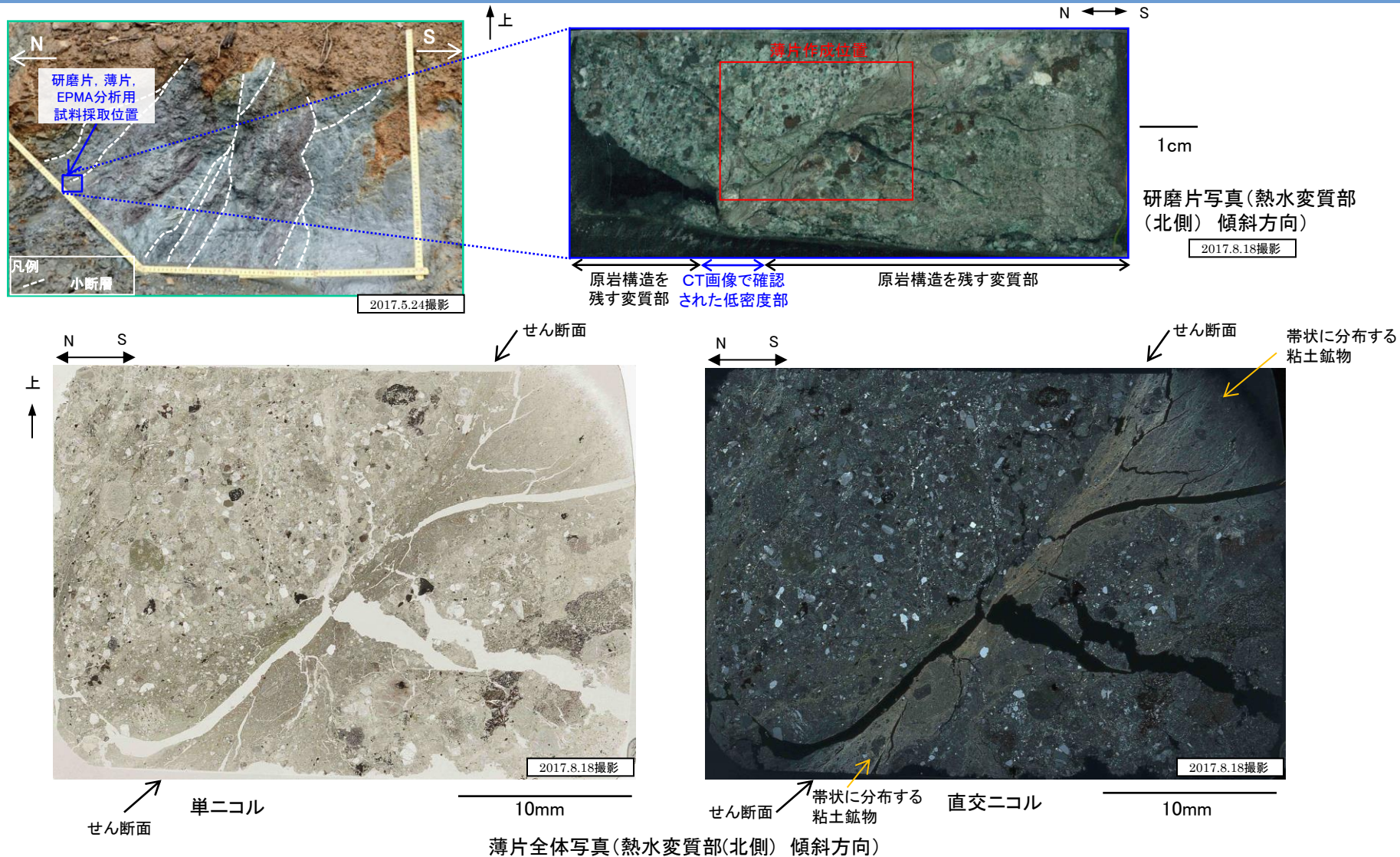
原岩構造を残す変質部

1cm

CT画像(解釈線あり)

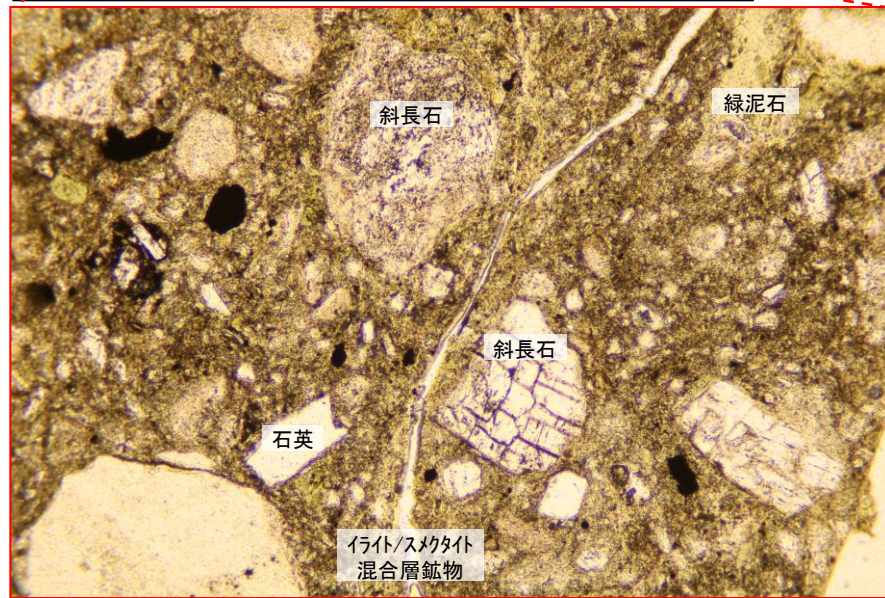
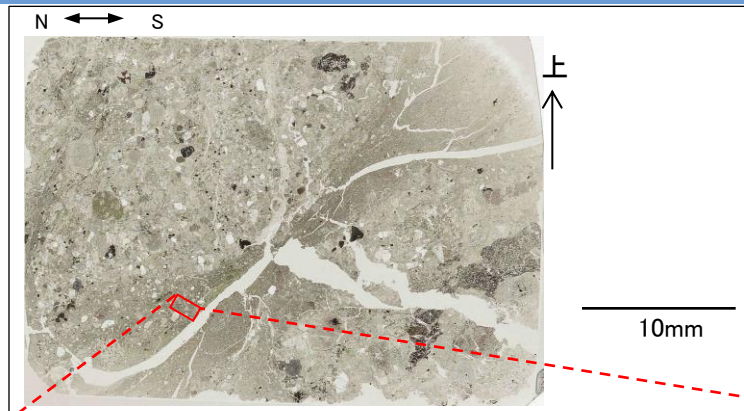
・研磨片観察の結果, CT画像で確認された低密度部に対応する箇所が認められる。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(薄片観察結果)



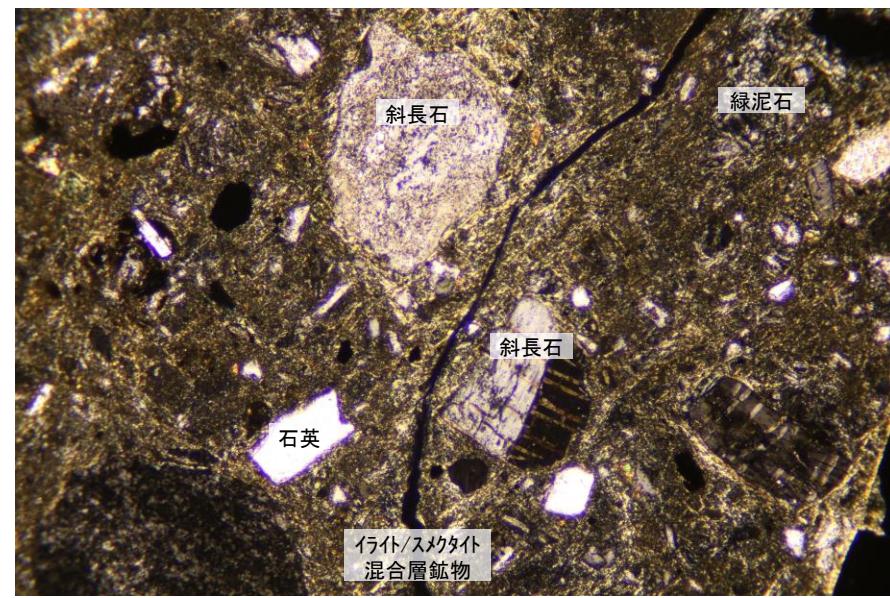
・薄片観察の結果、直交ニコルで黄褐色～褐色の干渉色を示す粘土鉱物が分布する。粘土鉱物は、薄片中央部のせん断面に沿って幅2mm～10mmの間で膨縮しながら帯状に分布する。粘土鉱物の分布によって、せん断面は不明瞭となり、変位センス等の指標は認められない。周辺の原因部には変形構造が認められず、わずかに割れ目扱いに粘土鉱物が確認されるのみである。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(薄片観察結果(詳細))



単ニコル 2017.8.18撮影

0.5mm

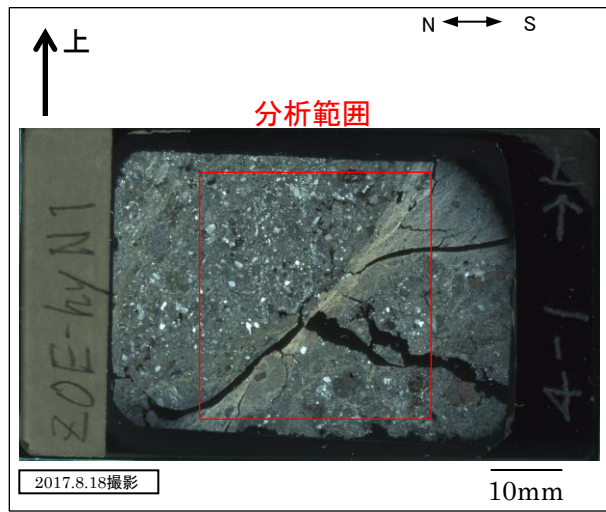


直交ニコル 2017.8.18撮影

0.5mm

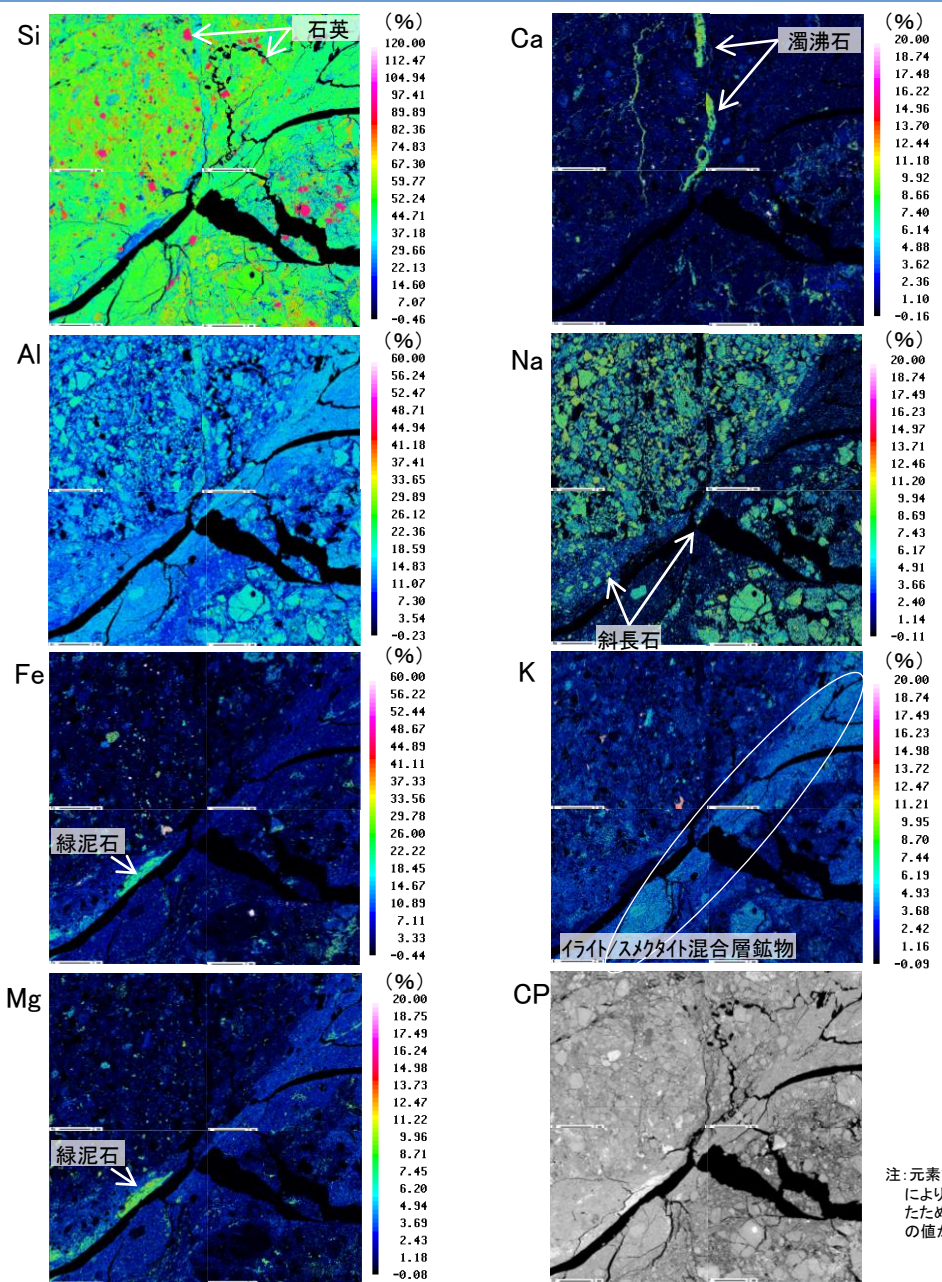
- ・単ニコルで無色，直交ニコルで双晶を示す斜長石が複数認められる。斜長石はざらついた様態(ごく微細な変質鉱物に置き換わっている状態)を示すことから，熱水変質作用を受けていると考えられる。
- ・なお，普通輝石は認められない。
- ・その他に直交ニコルで黄褐色～褐色を示す伊ライト/スメクタイト混合層鉱物，緑色～黄色を示す緑泥石や石英が認められる。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(EPMA分析結果 元素マッピング)



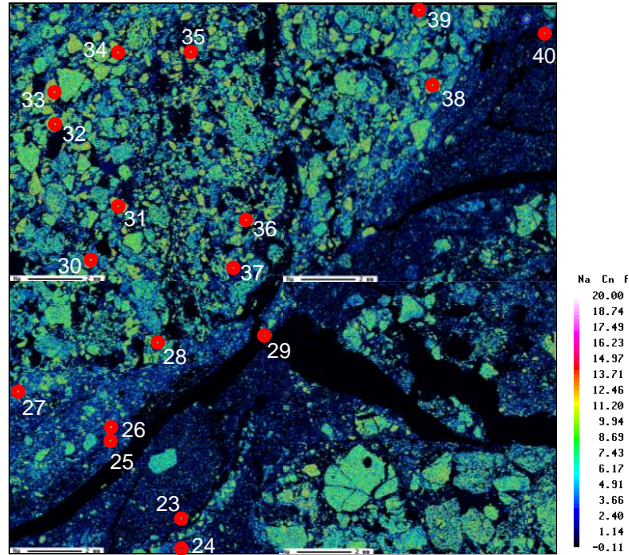
- ※斜長石(曹長石) : $\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$
- イライト : $\text{K}_{1-1.5}\text{Al}(\text{Si}_{7-6.5}\text{Al}_{1-1.5}\text{O}_{20})(\text{OH})_4$
- スメクタイト : $\text{Na}_{0.7}(\text{Al}_{3.3}\text{Mg}_{0.7})\text{Si}_8\text{O}_{20}(\text{OH})_4 \cdot n\text{H}_2\text{O}$
- 緑泥石 : $(\text{Mg,Fe,Al})_6(\text{Al,Si})_4\text{O}_{10}(\text{OH})_8$
- 濁沸石 : $\text{CaAl}_2\text{Si}_4\text{O}_{12} \cdot 4\text{H}_2\text{O}$
- 石英 : SiO_2

- ・Naにおいて黄色～黄緑色で示される範囲には、斜長石が分布すると考えられる。
- ・Kにおいて水色～黄緑色で示される範囲には、イライト/スメクタイト混合層鉱物が分布すると考えられる。
- ・Mgにおいて黄緑色で示される範囲には、緑泥石が分布すると考えられる。
- ・Caにおいて黄緑色で示される範囲には、濁沸石が分布すると考えられる。
- ・Siにおいて赤色で示される範囲には、石英が分布すると考えられる。



注: 元素マッピングは色合い調整により含有比の高低を明瞭にしたため、目盛に100%以上や負の値が表示されることがある。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(北側))(EPMA分析結果 定量分析)



EPMA分析 元素マッピング結果(Na) 2017.8.18撮影

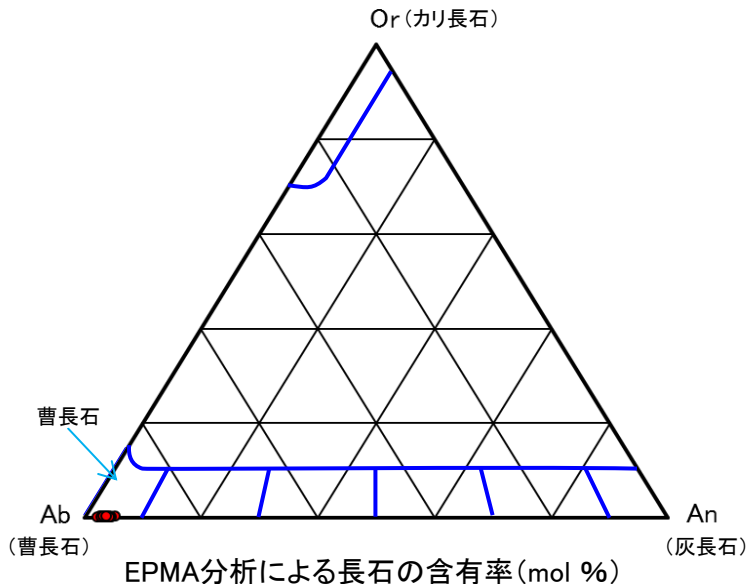
注: 元素マッピングは色合い調整により含有比の高低を明瞭にしたため、目盛に負の値が表示される。

EPMA分析による長石の含有率(mol %)

測定点	An	Ab	Or	測定点	An	Ab	Or
23	2.62	96.99	0.40	32	3.58	96.16	0.26
24	5.10	94.57	0.33	33	2.22	97.51	0.26
25	3.75	95.98	0.27	34	4.25	95.53	0.21
26	2.63	97.08	0.29	35	2.97	96.82	0.21
27	3.64	96.09	0.27	36	3.13	96.59	0.27
28	2.98	96.81	0.21	37	4.35	95.22	0.43
29	4.06	95.71	0.23	38	4.07	95.60	0.33
30	4.58	95.16	0.27	39	4.23	95.61	0.16
31	3.19	96.49	0.32	40	3.72	95.96	0.32

※ Ab: 曹長石 ($\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$), Or: カリ長石 (KAlSi_3O_8), An: 灰長石 ($\text{CaAl}_2\text{Si}_2\text{O}_8$)

※ 3成分の合計は四捨五入の関係により100%とならない場合がある。

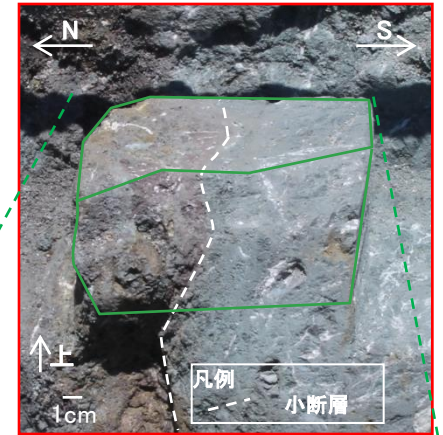


- ・薄片観察結果及びEPMA分析結果を踏まえ、斜長石の化学組成に基づく三角ダイヤグラムを作成した。
- ・Ab成分に富むことから、斜長石は曹長石化していると考えられる。

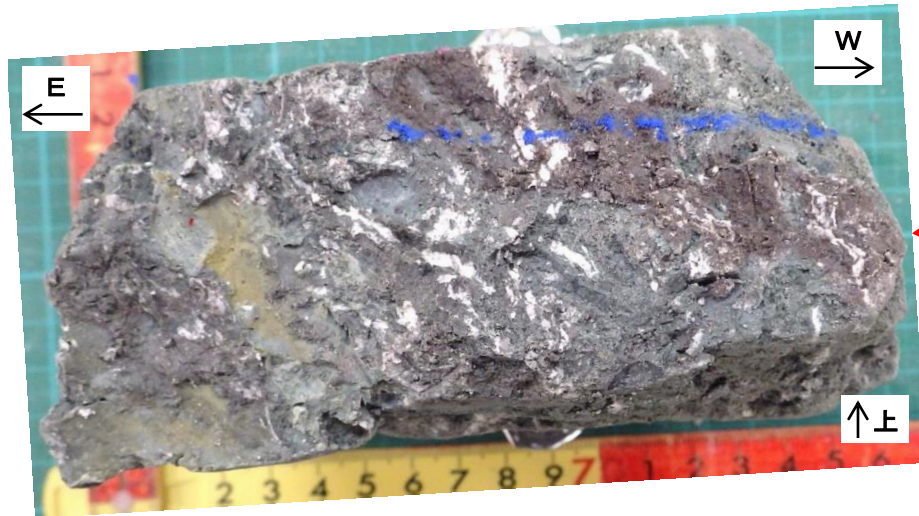
1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(試料採取位置)



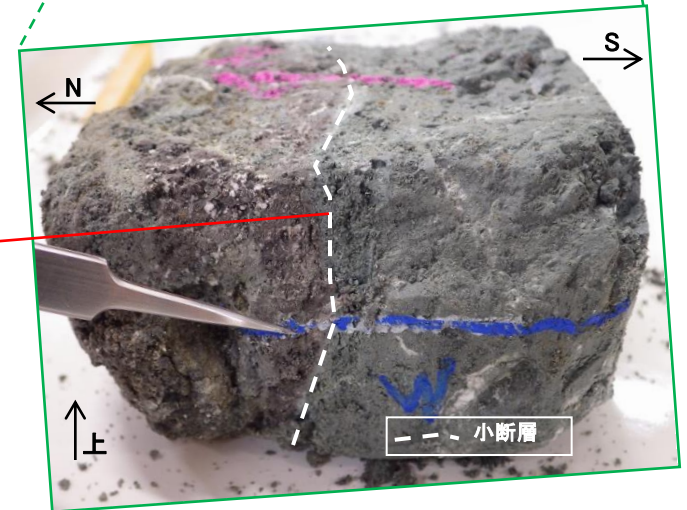
ブロック試料 解釈線なし



ブロック試料 解釈線あり



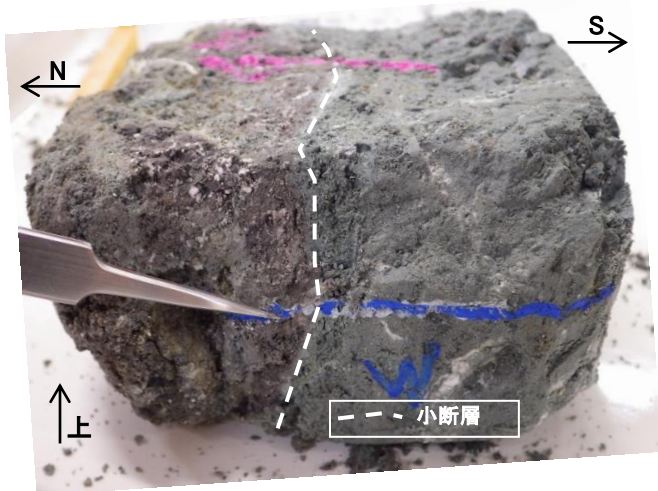
ブロック試料 観察面(断層面下盤)



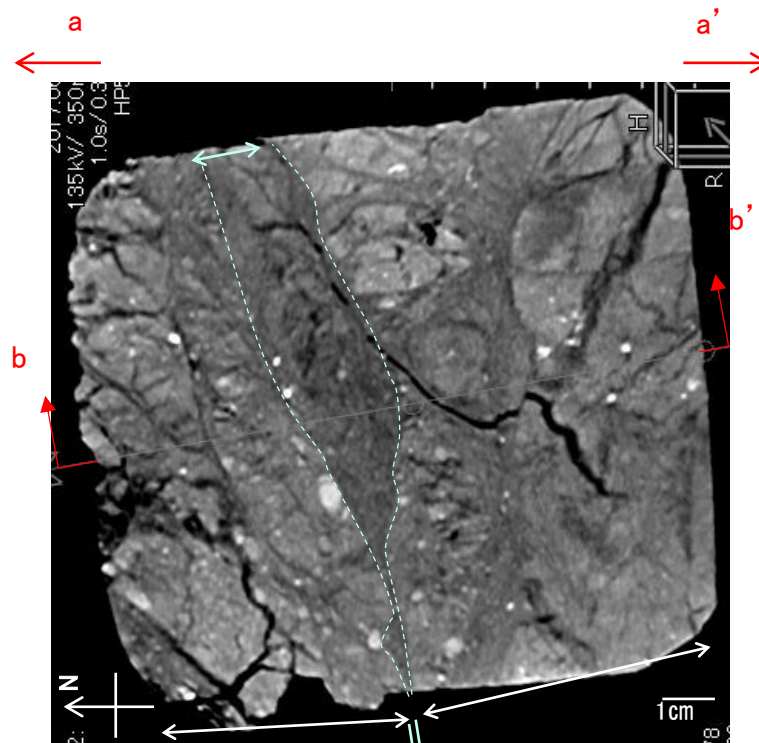
ブロック試料 西側側面(露頭面)

- ・ブロック試料では、暗紫灰色の岩石と緑灰色の岩石が斑状に認められる。これら岩石は同じ組織を有し、周囲に青灰色粘土や白色脈を伴うことから、熱水変質の影響を受けていると考えられる。
- ・露頭で確認されたゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層から試料を採取し、CT画像解析及び実体顕微鏡による条線観察を実施した。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(CT画像解析)

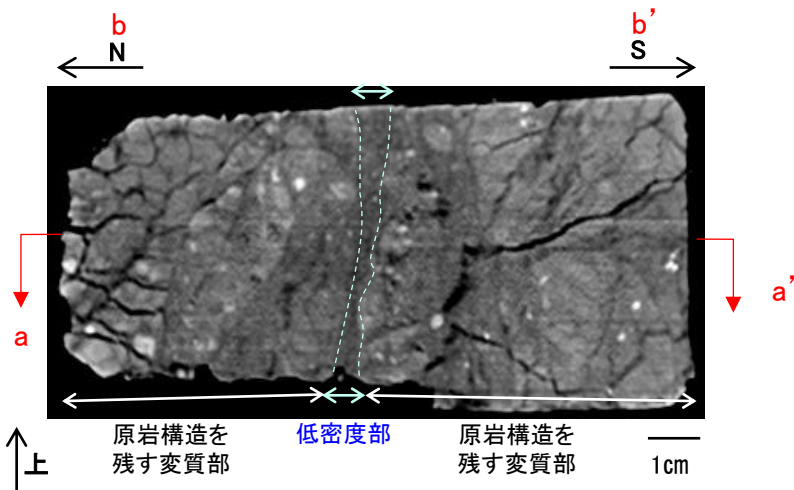


ブロック試料 西側側面(露頭面)



原岩構造を残す変質部 低密度部 原岩構造を残す変質部

CT画像(ブロック中央部の水平面を撮影)

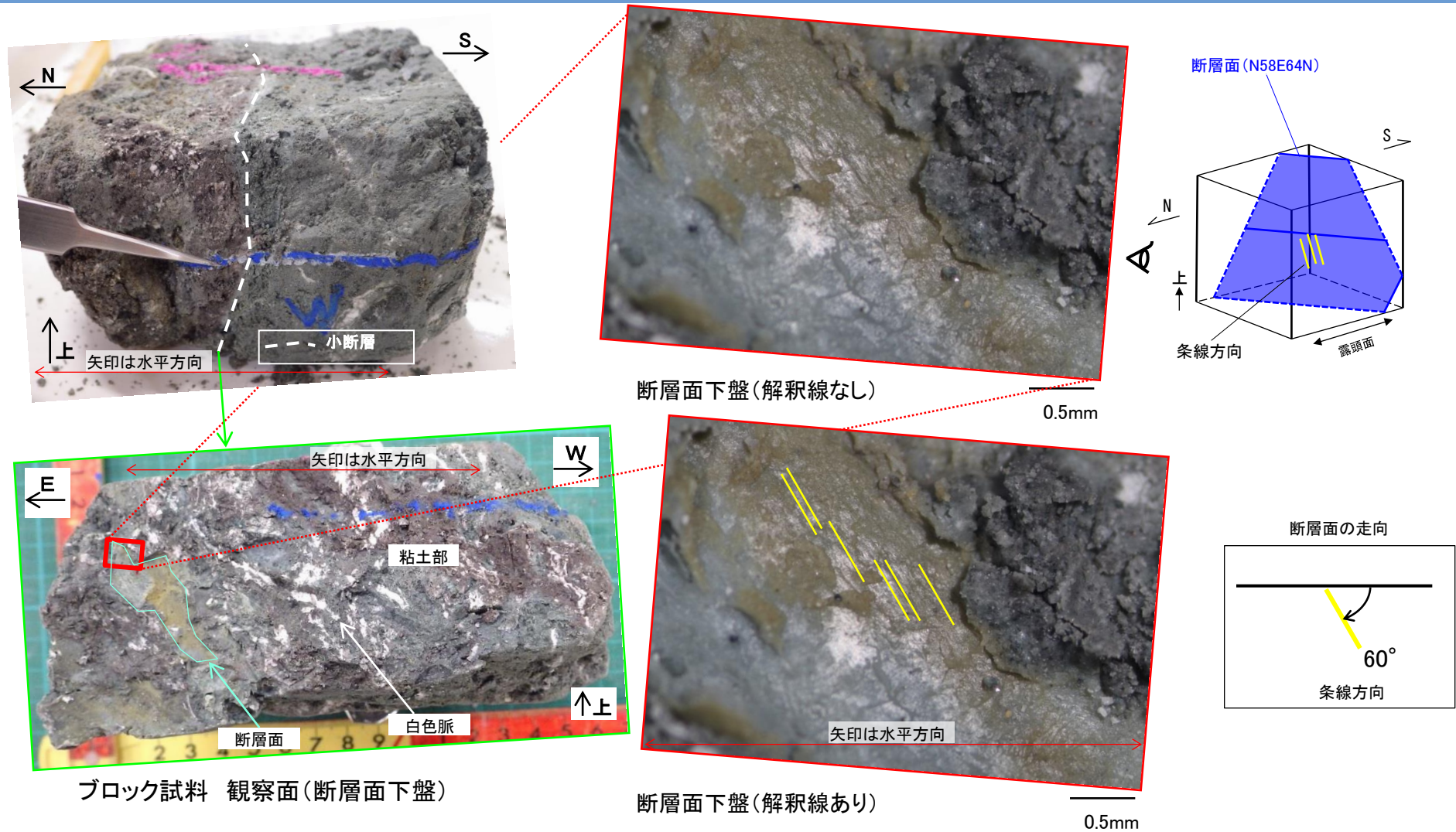


CT画像(ブロック中央部の鉛直面を撮影)

・CT画像解析の結果、幅2cm程度の膨縮する低密度部が認められ、その外側に原岩部が認められる。
・ただし、この低密度部には、CT画像解析の結果、明瞭なせん断面及び複合面構造は認められないことから、熱水に伴う粘土脈と考えられる。

・熱水変質部(南側)について、明瞭なせん断面及び複合面構造は認められず、熱水変質部(中央)と同様の結果が得られた。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(実体顕微鏡観察)



断層面下盤(解釈線なし)

0.5mm

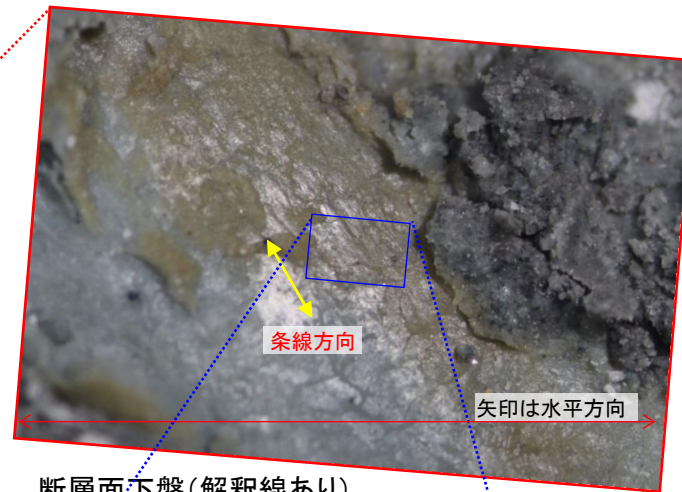
断層面下盤(解釈線あり)

0.5mm

ブロック試料 観察面(断層面下盤)

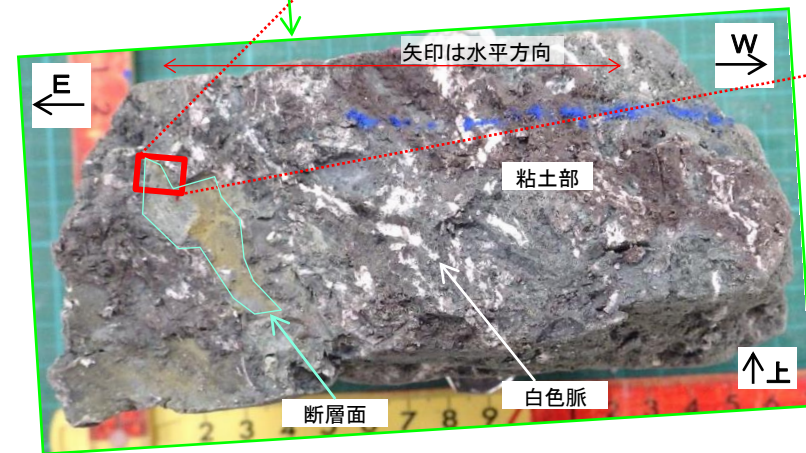
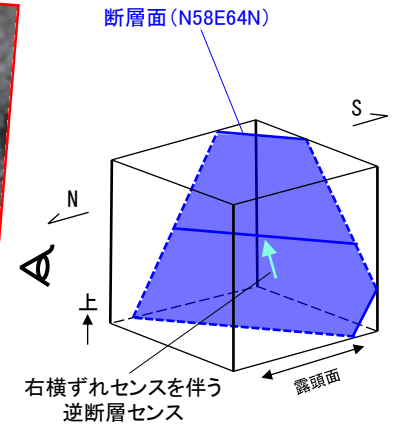
- ・実体顕微鏡観察の結果, 縦ずれ優勢(走向方向から60° 右回転, T:N85W P:51)の条線が認められる。
- ・粘土部には, 熱水変質により生成されたと考えられる白色脈が複数認められる。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(実体顕微鏡観察)

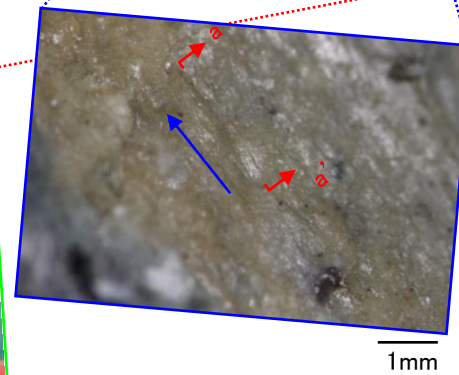


断層面下盤(解釈線あり)

0.5mm



ブロック試料 観察面(断層面下盤)



擦痕模式平面図



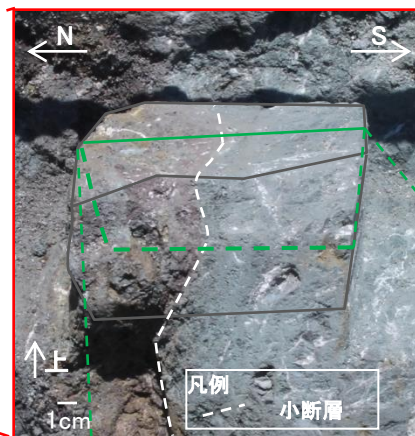
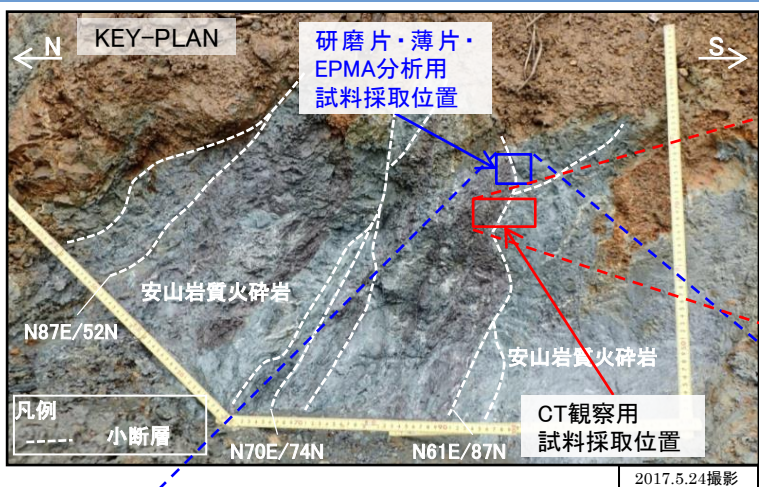
擦痕模式断面図

擦痕区分: Crescentic markings ; Gouging / plucking markings (Doblas, 1998)

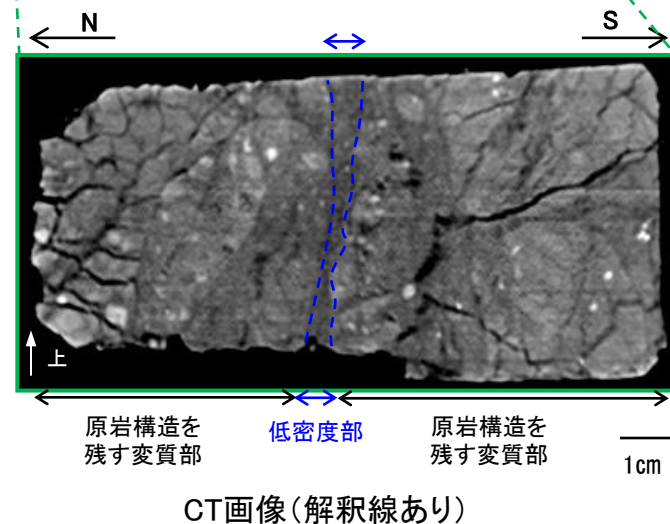
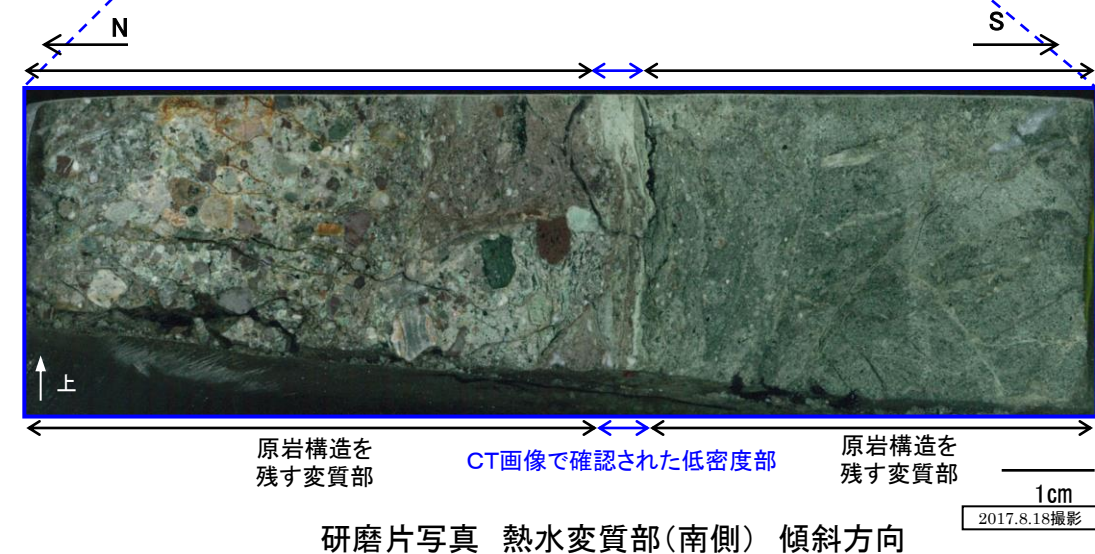
・擦痕より, 熱水変質部に認められる断層面のせん断センスは右横ずれセンスを伴う逆断層センスである。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)

断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(研磨片観察結果)



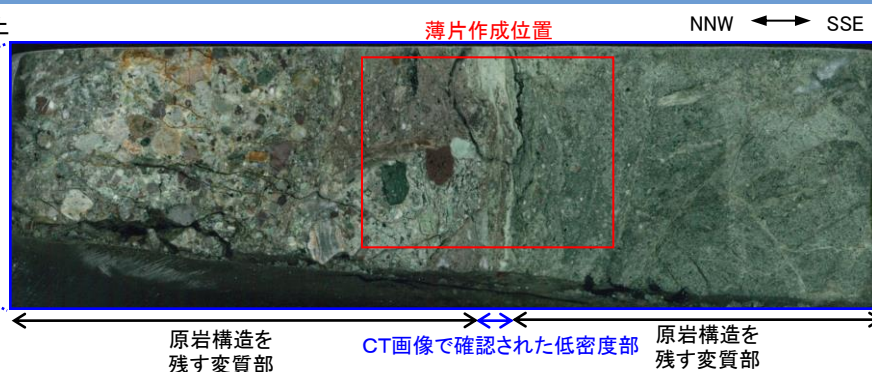
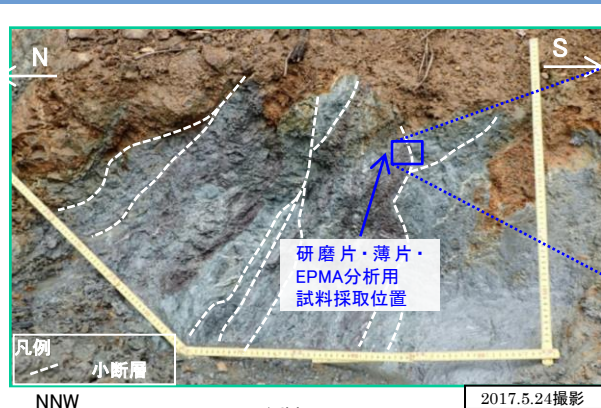
ブロック試料 解釈線あり



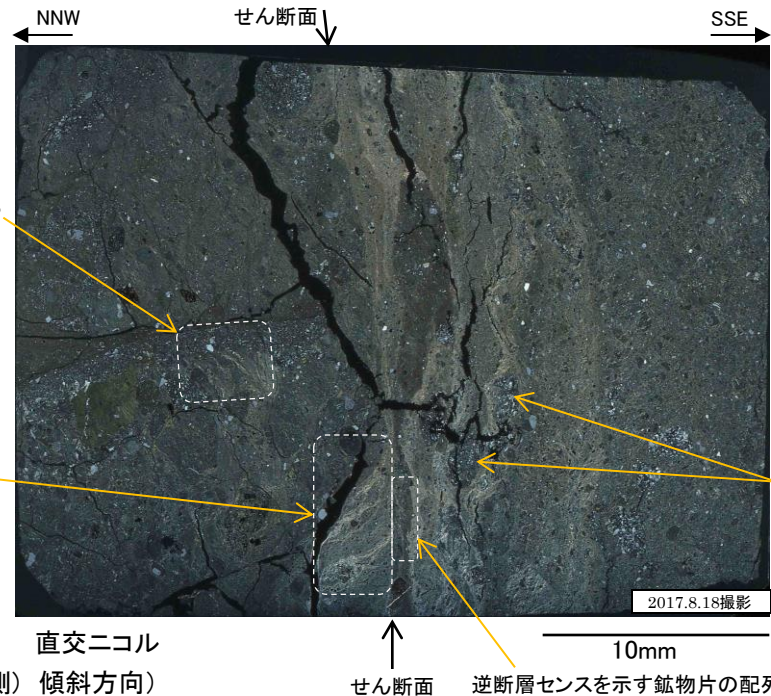
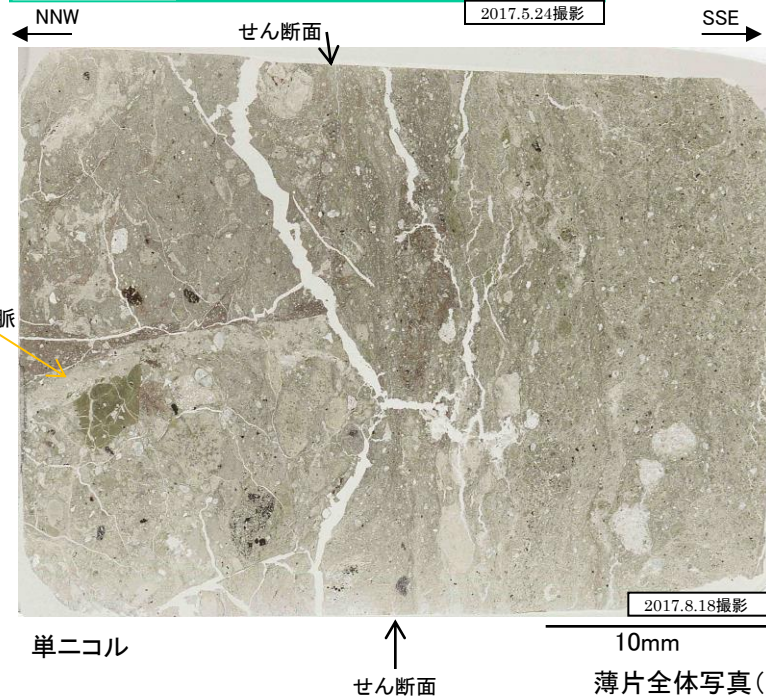
・研磨片観察の結果, CT画像で確認された低密度部に対応する箇所が認められる。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)

断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(薄片観察結果)



研磨片写真(熱水変質部(南側) 傾斜方向)
2017.8.18撮影

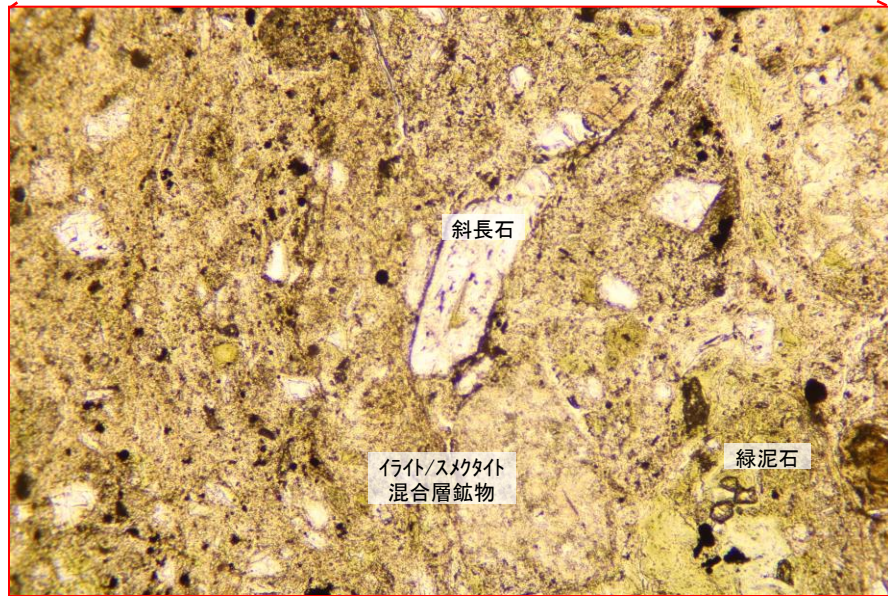
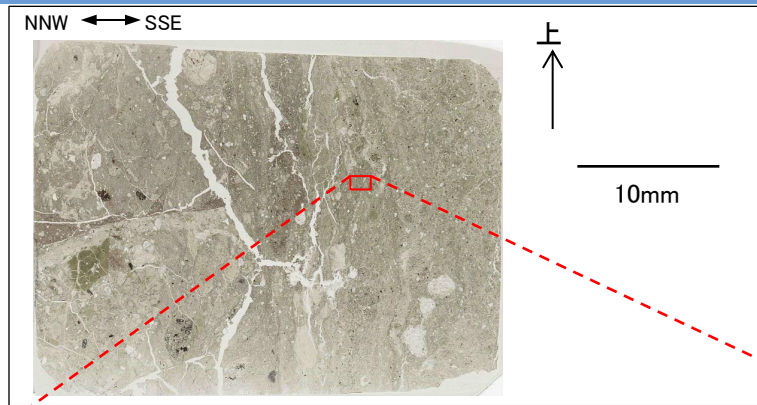


- ・薄片観察の結果、直交ニコルで黄褐色～褐色の干渉色を示す粘土鉱物が分布する。
- ・薄片中央にせん断面が認められ、薄片下部では正断層センスを示す引きずり構造と逆断層センスを示す鉱物片の配列が認められる。写真左中央の不明瞭な引きずり構造は、写真左から中央付近に伸びる濁沸石脈※に切られる。
- ・粘土鉱物の分布が引きずり構造を呈し、濁沸石のフラグメントが認められる一方で、濁沸石脈に切られる引きずり構造が認められることから、これらの変形構造や濁沸石脈はほぼ同時期に形成したものと考えられる。

※:EPMA分析及びX線回折分析の結果も踏まえ濁沸石と判断した。

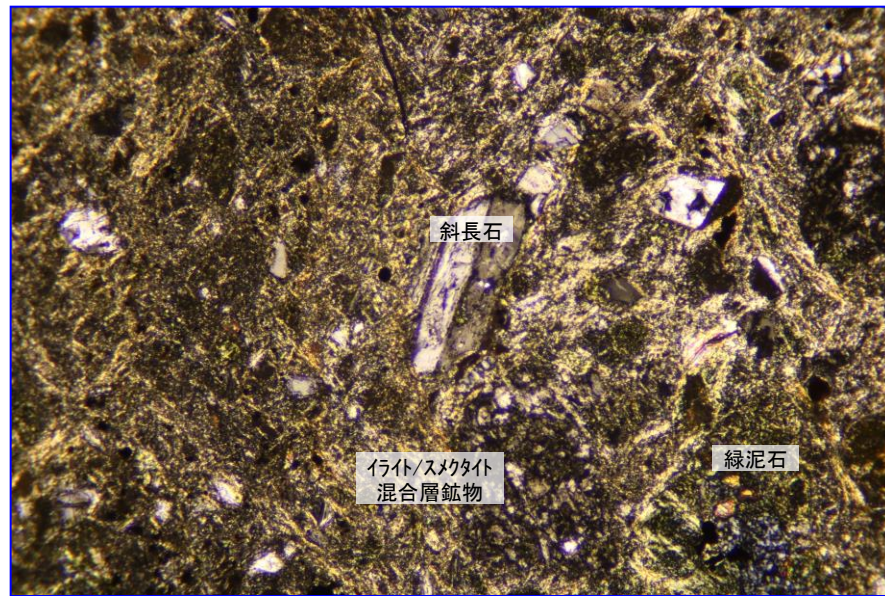
1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)

断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(薄片観察結果(詳細))



単ニコル 2017.8.18撮影

0.5mm

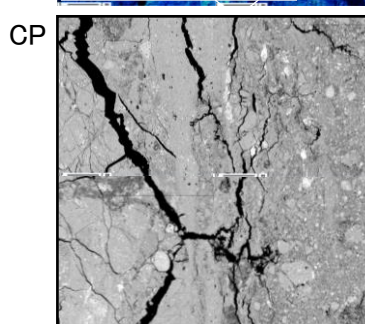
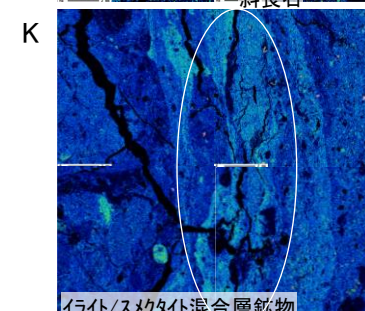
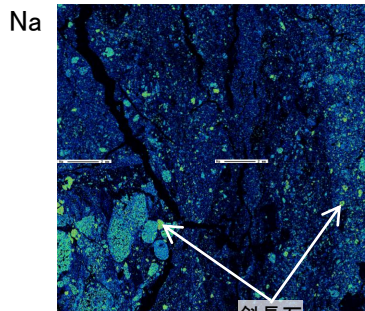
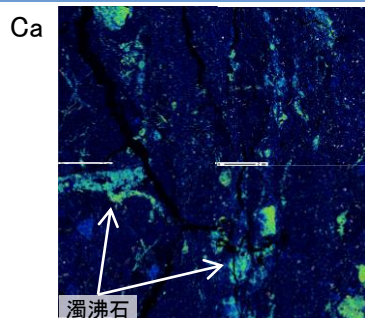
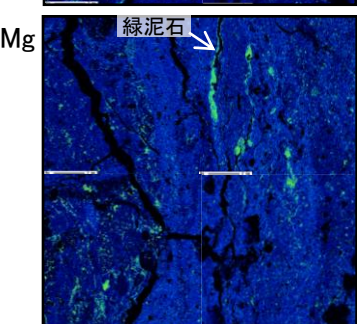
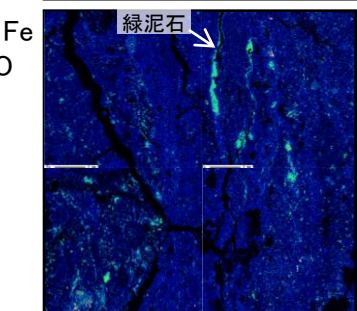
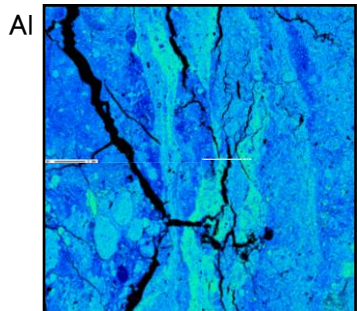
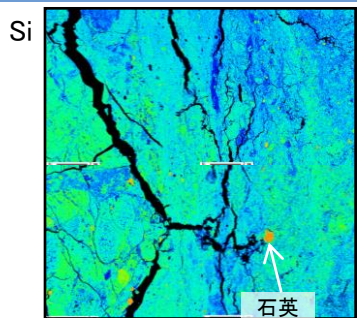
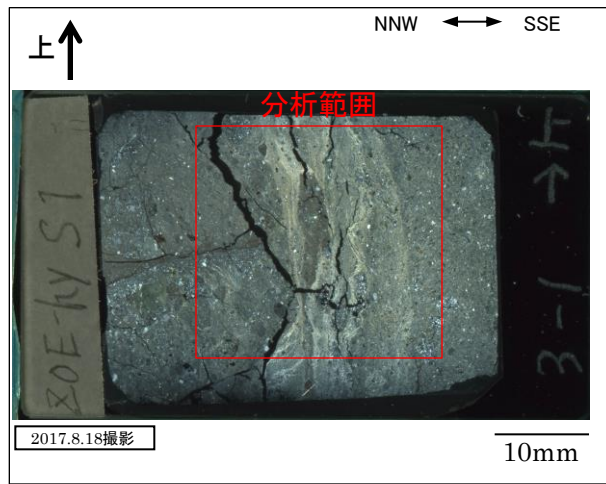


直交ニコル 2017.8.18撮影

0.5mm

- ・短冊状の形態を持ち、単ニコルで無色、直交ニコルで双晶を示す斜長石が複数認められる。斜長石の一部はざらついた様態(斜長石の一部が微細な緑泥石などに置き換わっている状態)を示すことから、熱水変質作用を受けていると考えられる。
- ・なお、普通輝石は認められない。
- ・その他に直交ニコルで黄褐色～褐色を示すイライト/スメクタイト混合層鉱物、緑色～黄色を示す緑泥石が認められる。

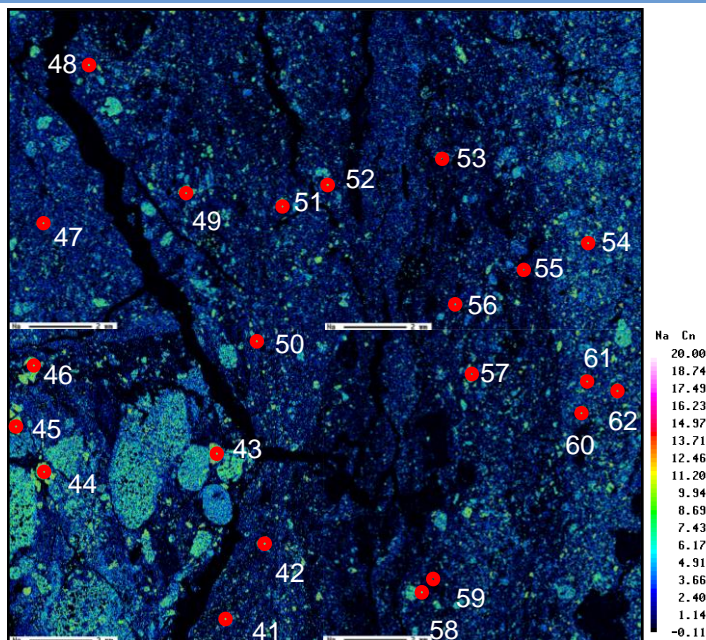
1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)
断層露頭⑥-2(熱水変質部(南側))(EPMA分析結果 元素マッピング)



- 斜長石(曹長石) : $\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$
- イライト : $\text{K}_{1-1.5}\text{Al}_4(\text{Si}_{7-6.5}\text{Al}_{1-1.5}\text{O}_{20})(\text{OH})_4$
- スメクタイト : $\text{Na}_{0.7}(\text{Al}_{3.3}\text{Mg}_{0.7})\text{Si}_8\text{O}_{20}(\text{OH})_4 \cdot n\text{H}_2\text{O}$
- 緑泥石 : $(\text{Mg,Fe,Al})_6(\text{Al,Si})_4\text{O}_{10}(\text{OH})_8$
- 濁沸石 : $\text{CaAl}_2\text{Si}_4\text{O}_{12} \cdot 4\text{H}_2\text{O}$
- 石英 : SiO_2

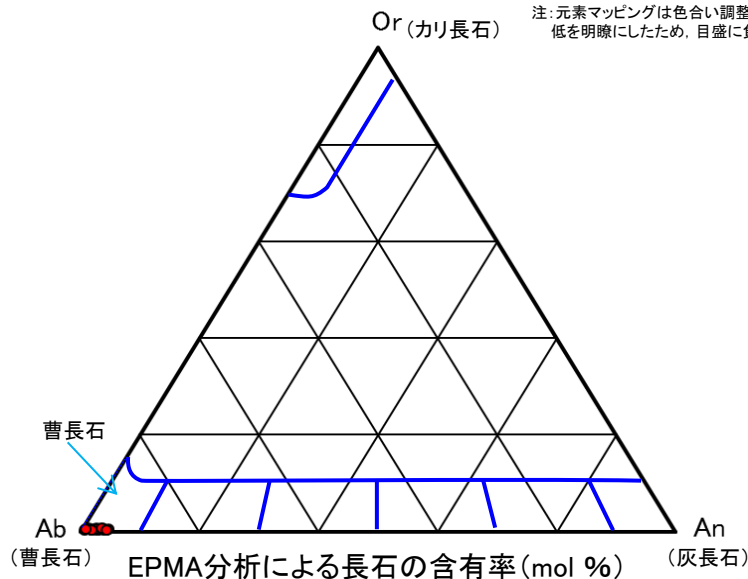
- ・Naにおいて黄色～黄緑色で示される範囲には、斜長石が分布すると考えられる。
- ・Kにおいて水色～黄緑色で示される範囲には、イライト/スメクタイト混合層鉱物が分布すると考えられる。
- ・Mgにおいて黄色で示される範囲には、緑泥石が分布すると考えられる。
- ・Caにおいて黄緑色で示される範囲には、濁沸石が分布すると考えられる。
- ・Siにおいて赤色で示される範囲には、石英が分布すると考えられる。

注: 元素マッピングは色合い調整により含有比の高低を明瞭にしたため、目盛に100%以上や負の値が表示されることがある。



EPMA分析 元素マッピング結果(Na) 2017.8.18撮影

注: 元素マッピングは色合い調整により含有比の高低を明瞭にしたため、目盛に負の値が表示される。



EPMA分析による長石の含有率(mol %)

測定点	An	Ab	Or	測定点	An	Ab	Or
41	2.27	97.36	0.37	52	3.62	95.80	0.58
42	2.30	97.33	0.37	53	1.91	97.85	0.24
43	3.07	96.78	0.15	54	2.77	97.00	0.23
44	0.88	98.78	0.34	55	2.49	97.00	0.51
45	4.70	94.98	0.32	56	2.48	97.08	0.44
46	4.33	95.40	0.27	57	1.65	98.00	0.35
47	4.06	95.66	0.28	58	3.43	96.01	0.57
48	1.25	98.22	0.53	59	0.68	99.07	0.25
49	4.10	95.67	0.23	60	4.41	95.38	0.21
50	3.87	95.77	0.36	61	1.91	97.87	0.22
51	2.87	96.75	0.38	62	0.83	98.69	0.49

※ Ab: 曹長石 ($\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$), Or: カリ長石 (KAlSi_3O_8), An: 灰長石 ($\text{CaAl}_2\text{Si}_2\text{O}_8$)
 ※ 3成分の合計は四捨五入の関係により100%とならない場合がある。

・薄片観察結果及びEPMA分析結果を踏まえ、斜長石の化学組成に基づく三角ダイヤグラムを作成した。
 ・Ab成分に富むことから、斜長石は曹長石化していると考えられる。

断層露頭⑥-2(熱水変質部)まとめ

熱水変質部(中央), 熱水変質部(北側)及び熱水変質部(南側)を対象に, 研磨片観察, 薄片観察及びEPMA分析(元素マッピング及び定量分析)を実施した。

1. 研磨片観察

- ・CT画像で確認された低密度部等に対応する箇所が認められる。

2. 薄片観察

- ・斜長石はざらついた様態(斜長石の一部が微細な緑泥石などに置き換わっている状態)を示すことから, 熱水変質作用を受けていると考えられる。
- ・鏡下では, 普通輝石は認められない。

3. EPMA分析(元素マッピング及び定量分析)

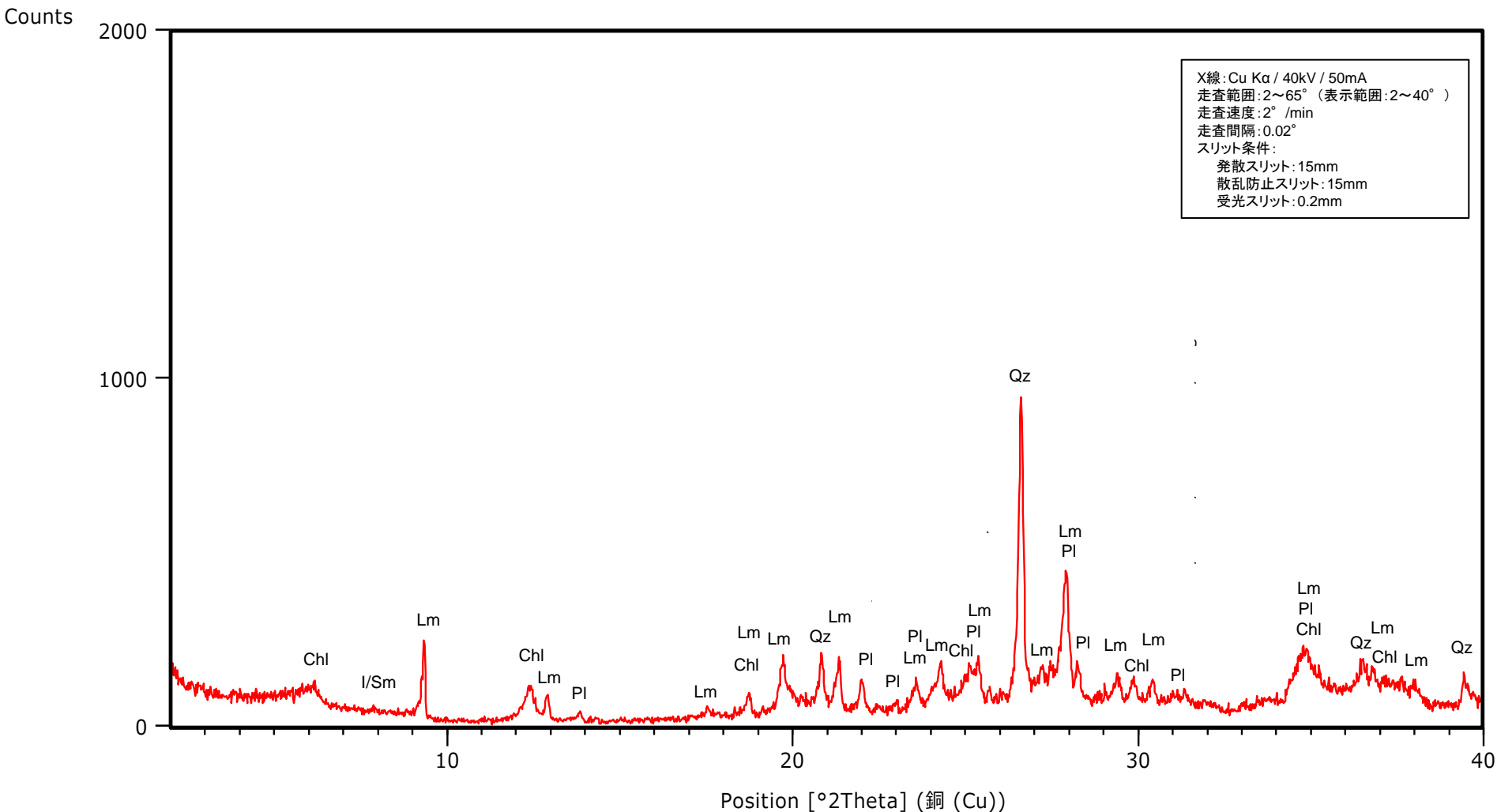
- ・Naにおいて黄色～黄緑色で示される範囲には, 斜長石が分布すると考えられる。また, 斜長石の鋳物組成に基づく三角ダイヤグラムの検討の結果, Ab成分に富むことから, 斜長石は曹長石化していると考えられる。
- ・Kにおいて水色～黄緑色で示される範囲には, イライト/スメクタイト混合層鋳物が分布すると考えられる。
- ・Mgにおいて黄色, Siが緑色で示される範囲には, 緑泥石が分布すると考えられる。
- ・Caにおいて黄緑色で示される範囲には, 濁沸石が分布すると考えられる。
- ・Siにおいて赤色で示される範囲には, 石英が分布すると考えられる。

以上のことから, 熱水変質部に認められる鋳物は, 薄片観察, EPMA分析等の追加分析の結果から, 熱水変質作用を被っていると考えられる。

次頁以降に, 追加分析結果を反映したX線回折分析結果及びX線チャートを示す。

(参考) X線チャート

断層露頭⑥-2の熱水変質部(中央) 平滑な断層面 粘土 不定方位



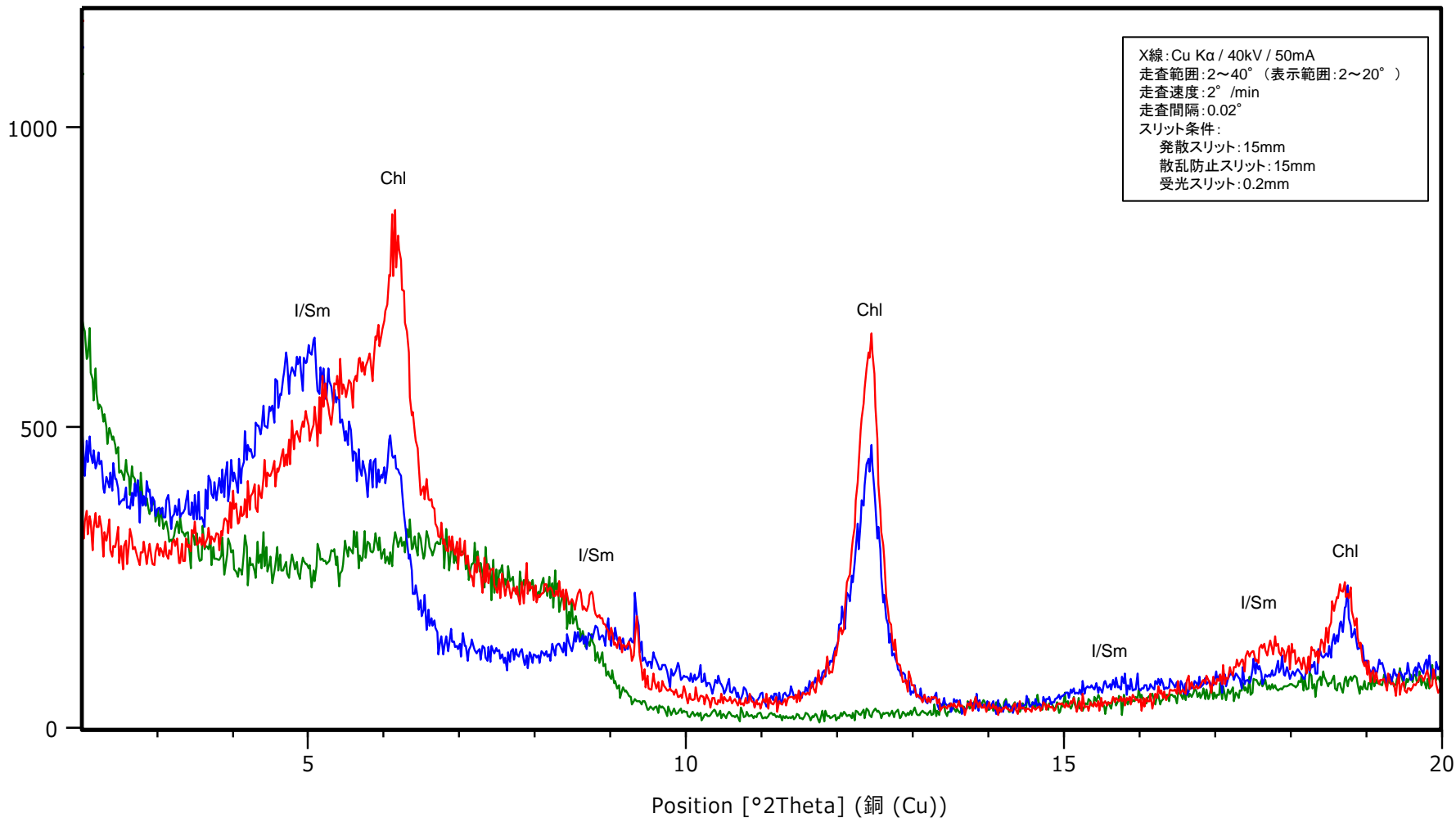
凡例

I/Sm: イライト/スマクタイト混合層鉱物, Lm: 濁沸石, Chl: 緑泥石, Qz: 石英, Pl: 斜長石(曹長石)

(参考) X線チャート

断層露頭⑥-2の熱水変質部(中央) 平滑な断層面 粘土 定方位

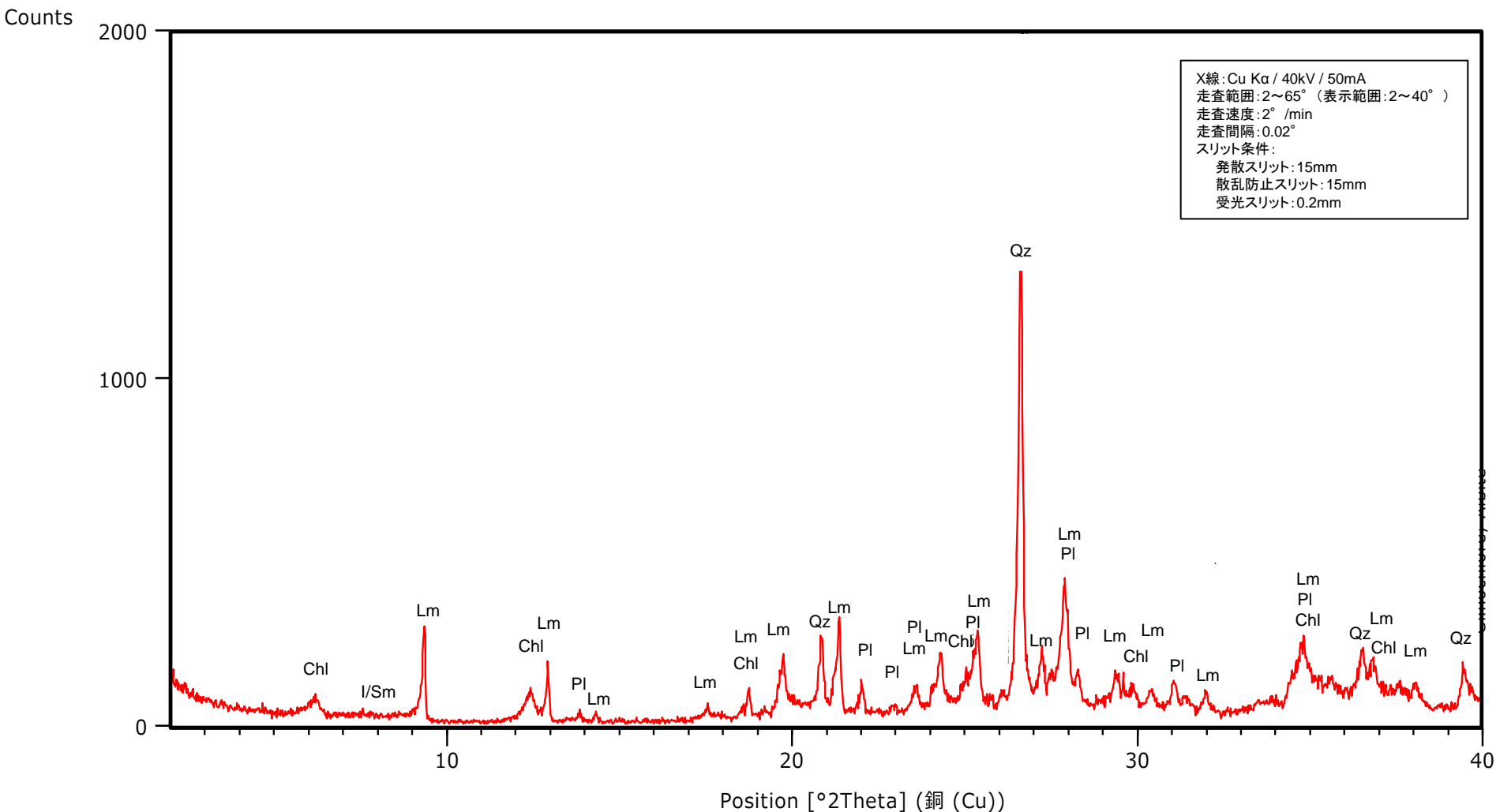
Counts



凡例
 —: 定方位(水ひ), —: 定方位(塩酸処理), —: 定方位(エチレングリコール処理)
 I/Sm: イリト/スメクタイト混合層鉱物, Chl: 緑泥石

(参考) X線チャート

断層露頭⑥-2の熱水変質部(中央) 平滑な断層面 角礫部 不定方位



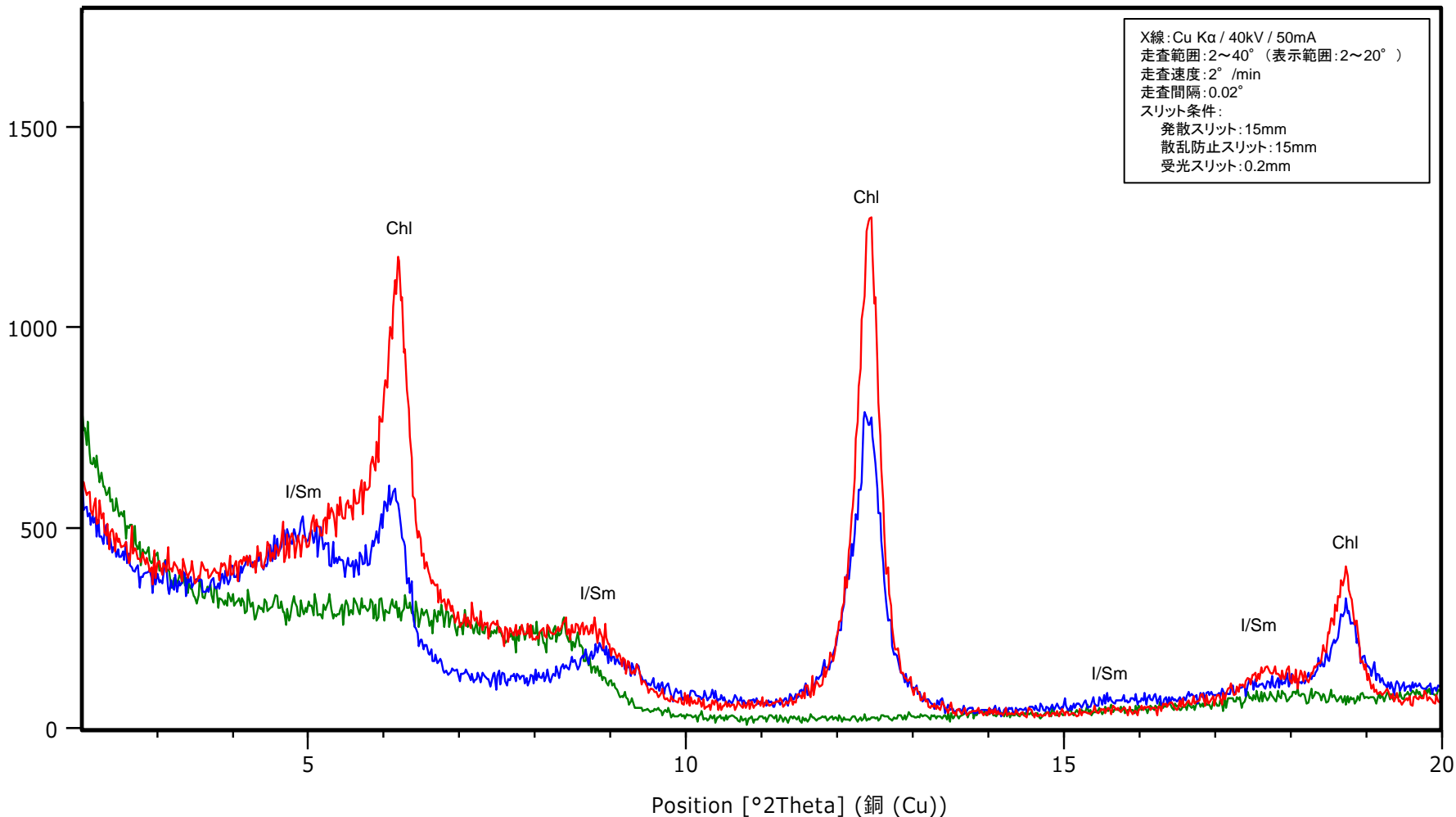
凡例

Lm: 濁沸石, Chl: 緑泥石, Qz: 石英, Pl: 斜長石(曹長石)

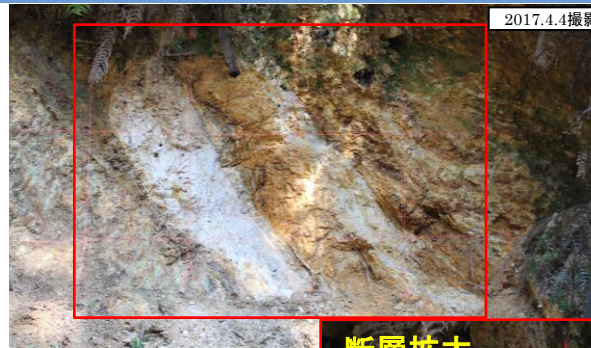
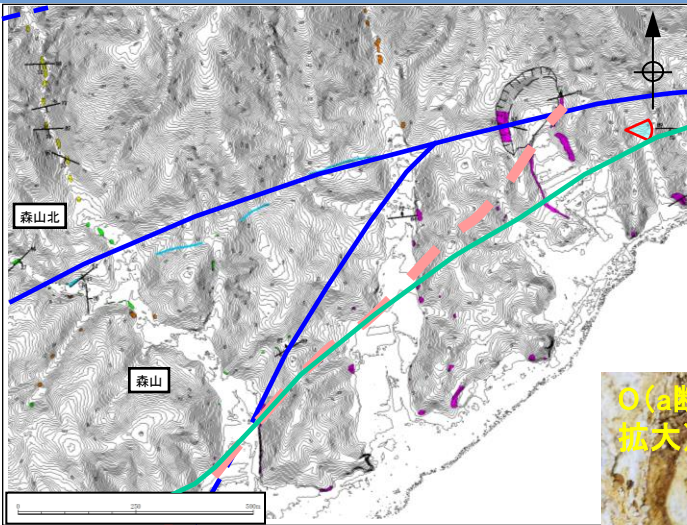
(参考) X線チャート

断層露頭⑥-2の熱水変質部(中央) 平滑な断層面 角礫部 定方位

Counts



1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側) 断層露頭⑦(地表地質踏査)



断層箇所近景

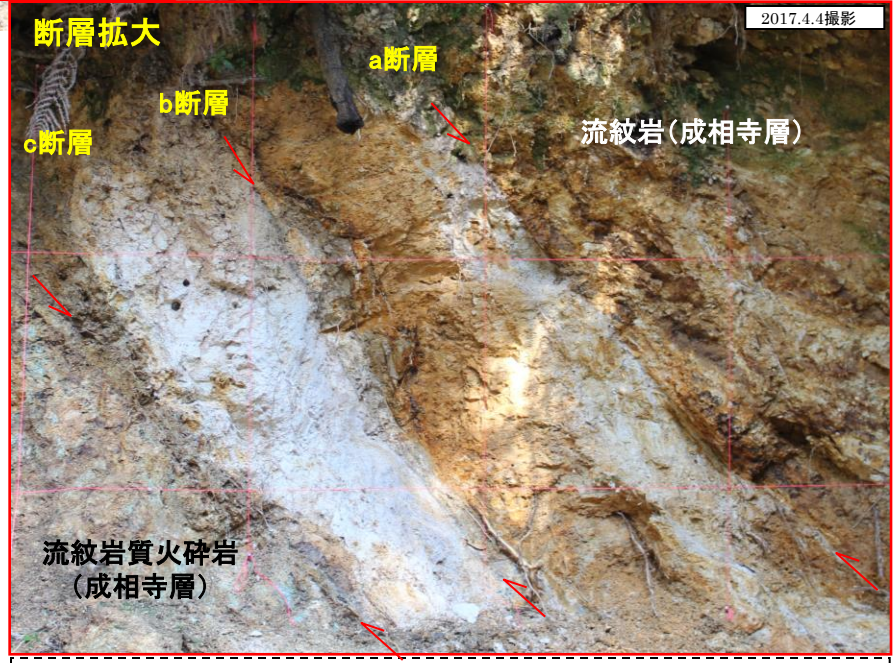
- 変位地形・リニアメント(Dランク)
- 原子力安全委員会のワーキンググループ第3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

露頭岩種

- 泥岩
- 砂岩
- 礫岩
- 安山岩質火砕岩
- デイサイト質火砕岩
- 流紋岩・流紋岩質火砕岩

今村・向吉(2017) :
・流紋岩(成相寺層)中に南落ちの低角な正断層を確認。
・室内観察の結果, 正断層, 逆断層センスの断層が伏在していることが確認できる。



※上盤側を下から見上げて撮影

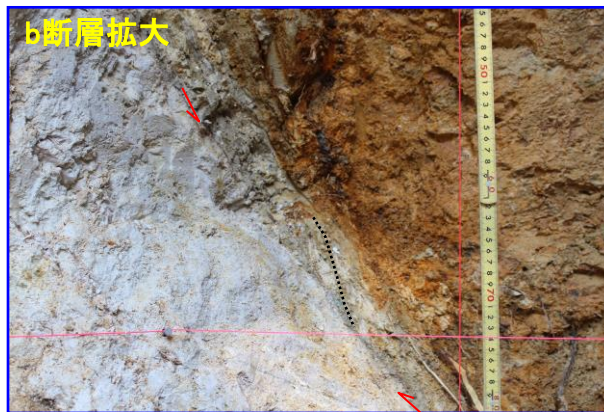
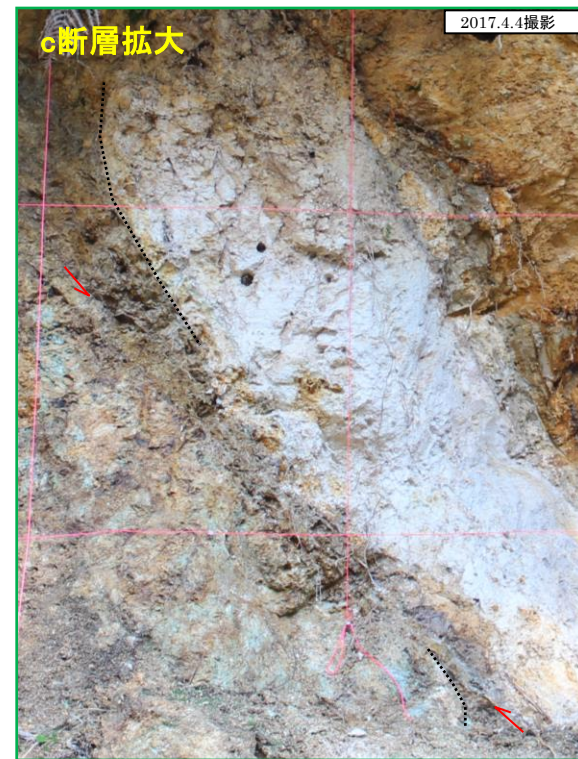
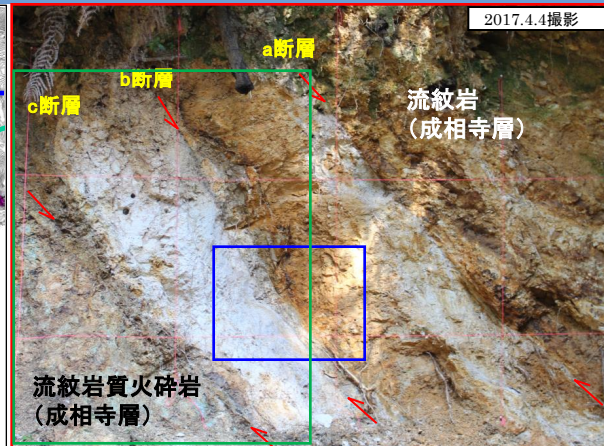
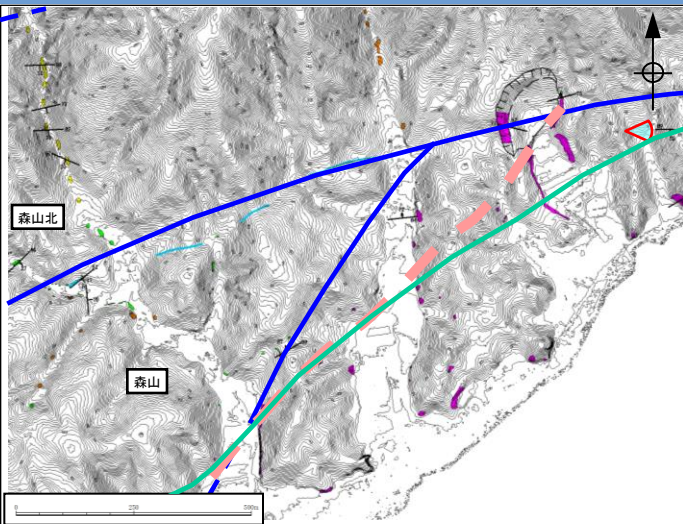
断層aで認められる条線は最急勾配方向(折尺に平行な方向, T:S1W P:59)を示す。

- ・流紋岩中の断層(a・b断層)及び成相寺層の流紋岩と流紋岩質火砕岩を境する断層(c断層)が認められる。
- ・a断層はN89W/59S, b断層はN60E/64S, c断層はN44E/68Sを示す。
- ・主に断層沿いで熱水変質とみられる粘土化が進み, 軟質となる。

- ・森山付近において, 地表地質踏査等を追加実施(データ拡充)した結果, 鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に成相寺層の流紋岩中及び流紋岩と流紋岩質火砕岩を境する断層が認められる。この露頭は今村・向吉(2017)の「B」森山南東断層露頭」に対応する。
- ・主に断層沿いで熱水変質とみられる粘土化が進み, 軟質となる。また, 断層aの上盤側に正断層変位を示唆する引きずり構造が認められる。
- ・条線観察の結果, 上盤側に, 縦ずれ(走向方向から90°回転)の条線が認められる。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

断層露頭⑦(地表地質踏査)



・b断層では逆断層変位を示唆する粒子の配列(解釈線:黒点線)が認められる。

・c断層では逆断層変位を示唆する引きずり構造(解釈線:黒点線)が認められる。

変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

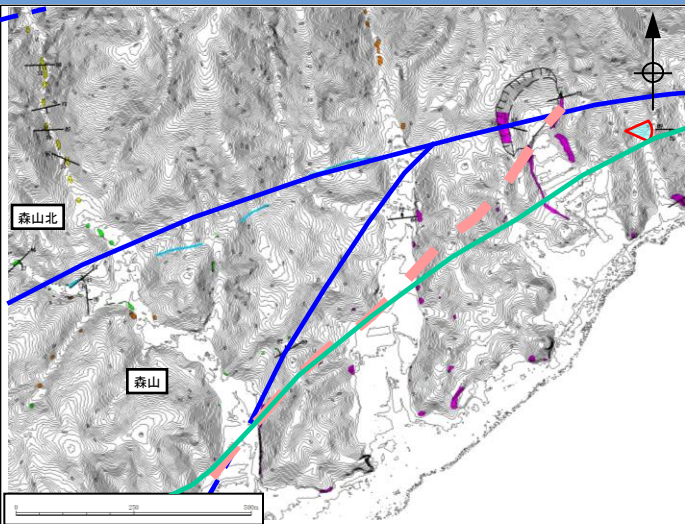
- 露頭岩種
- 泥岩
 - 砂岩
 - 礫岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイサイト質火砕岩
 - 流紋岩・流紋岩質火砕岩

- ・ b断層及びc断層では、いずれも逆断層変位を示唆する構造が認められる。
- ・ 本地点で確認された断層は熱水変質とみられる粘土化が進み、軟質となるものの、いずれも縦ずれ変位を示す(条線観察は次頁参照)。

- ・ 山陰地域における応力場の変遷(新第三紀中新世～第四紀)を踏まえると、断層露頭⑦の最新活動面は、逆断層変位を示すb断層, c断層と考えられる。

1. 央道断層の評価 (2)地質調査(央道断層の東側)

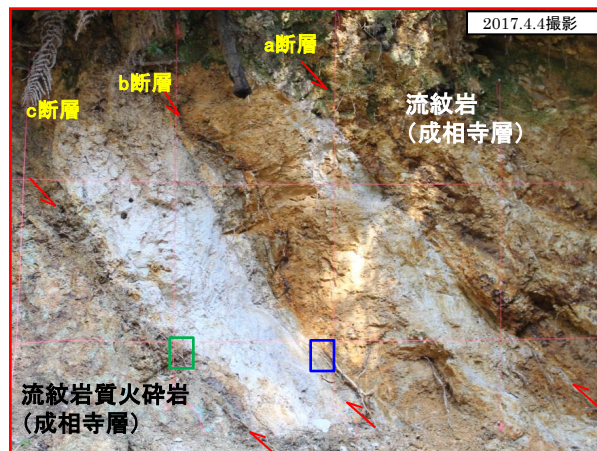
断層露頭⑦(地表地質踏査)



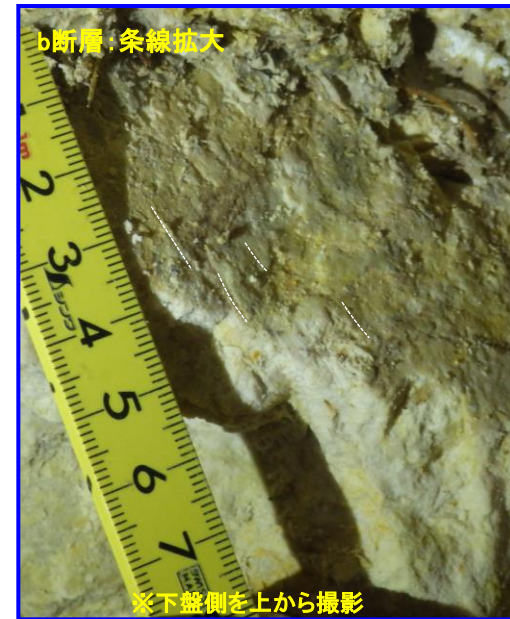
変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による央道(鹿島)断層

- 露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜
- 露頭岩種
- 泥岩
 - 砂岩
 - 礫岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイサイト質火砕岩
 - 流紋岩・流紋岩質火砕岩



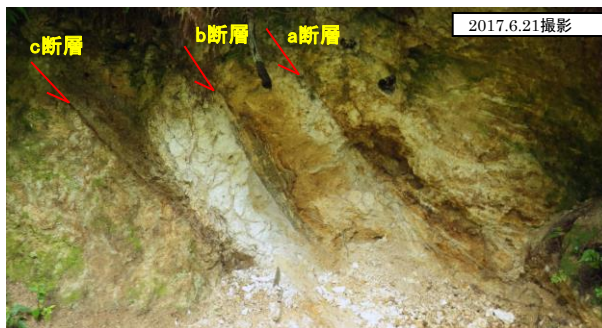
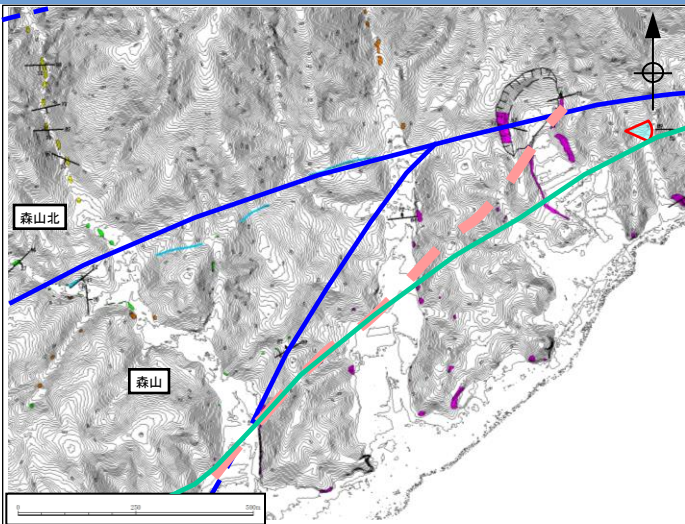
・条線是最急勾配方向であり, T: S46E
P: 68を示す。



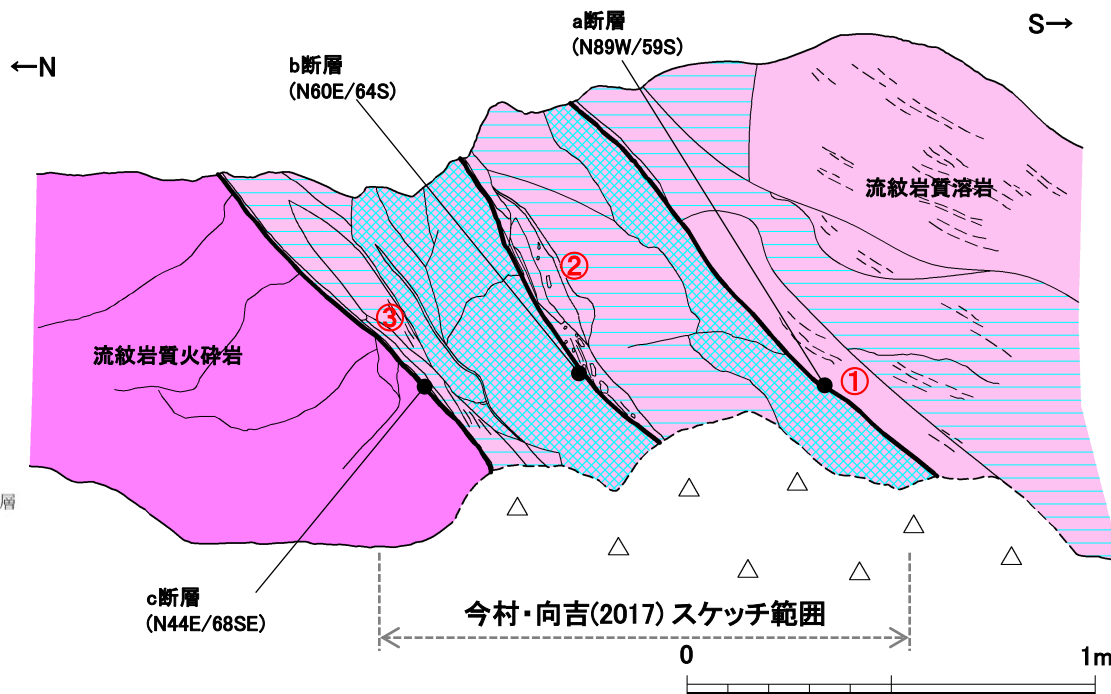
・条線是最急勾配方向に斜交し, T: S8E
P: 62を示す。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)

断層露頭⑦(スケッチ図)



断層箇所近景



- 変位地形・リニアメント(Dランク)
- - - 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による突道(鹿島)断層

- 凡例
- 崖錐堆積物
 - 流紋岩質火砕岩
 - 流紋岩質溶岩
 - 白色変質部
 - 褐色変質部
 - 地質境界
 - 断層
 - 割れ目
 - 流理
- 露頭岩種
- 泥岩
 - 砂岩
 - 礫岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイザイト質火砕岩
 - 流紋岩・流紋岩質火砕岩
- 露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

今村・向吉(2017) :

- ・南落ちの正断層(a)①中には, 周囲のガウジに比べ, より細粒なガウジを伴う構造が確認でき, せん断面はシャープなものである。
- ・室内における研磨片観察では複合面構造より正断層(b)②が確認できる。
- ・室内における研磨片観察では複合面構造より逆断層(c)③が確認できる。

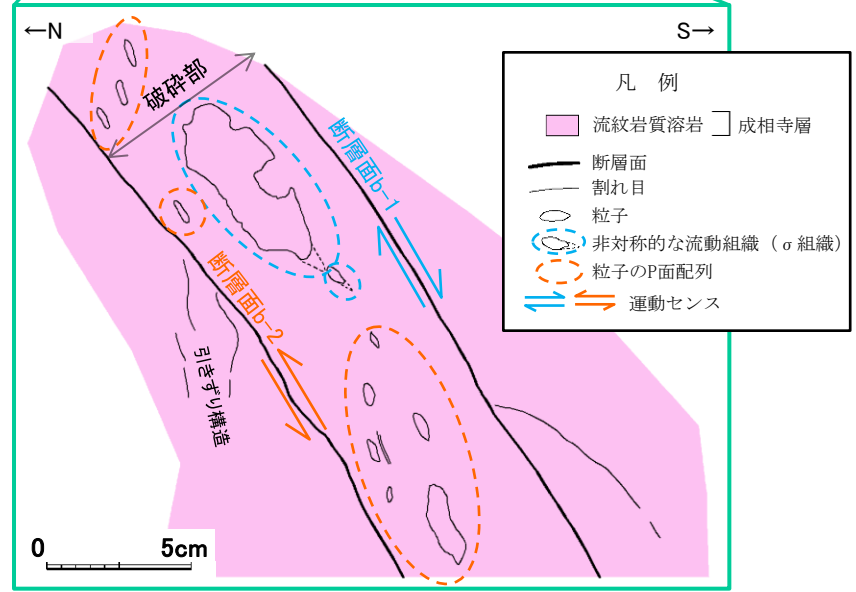
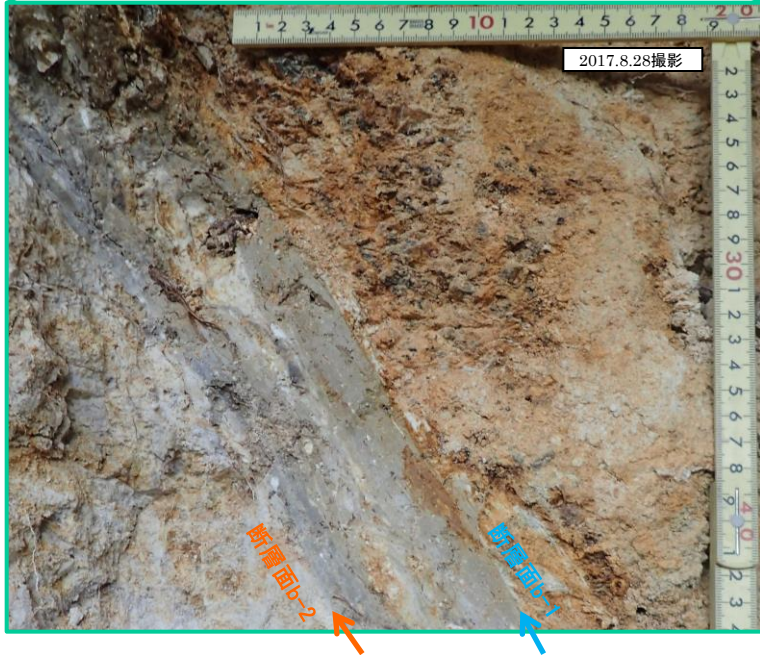
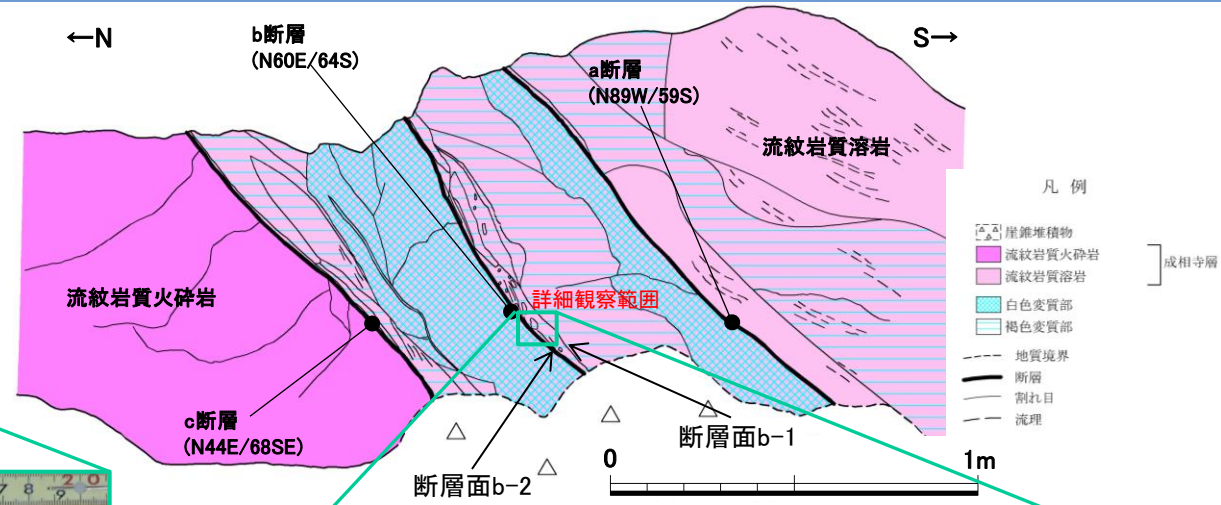
第474回審査会合以降, ブロック試料採取によって掘り込まれた露頭のスケッチを実施した。

○当社の調査結果

- ・①の断層に対して当社は, 正断層(a断層)と評価。
- ・②の断層に対して当社は, 逆断層(b断層)と評価。
- ・③の断層に対して当社は, 逆断層(c断層)と評価。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)

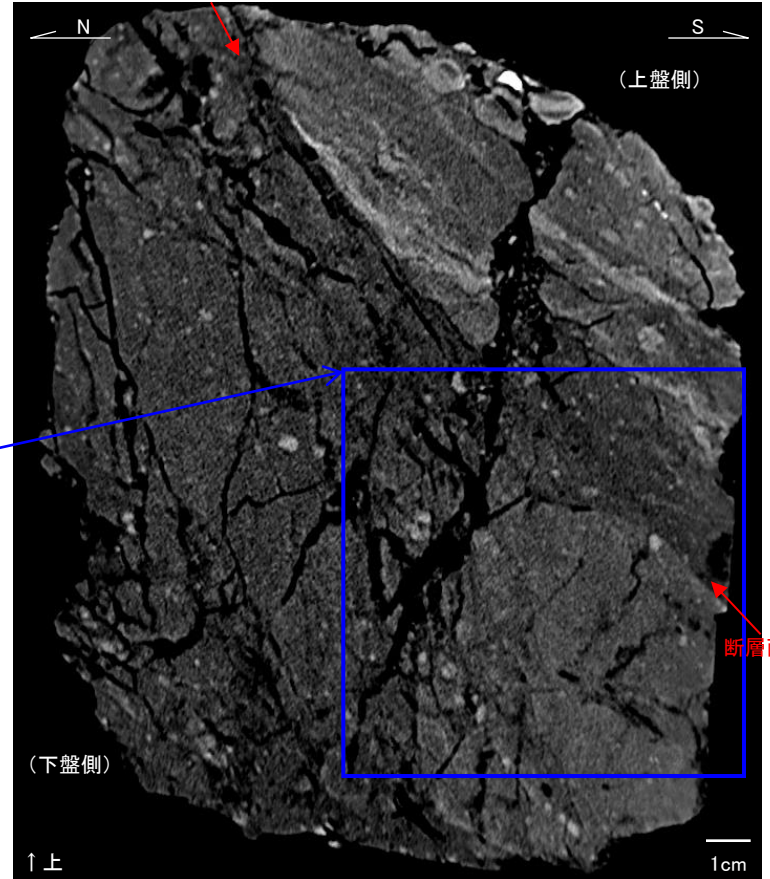
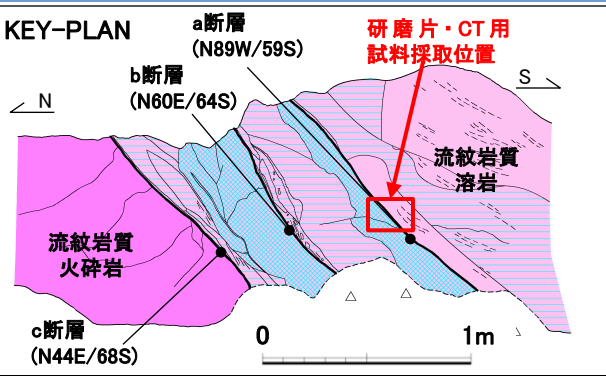
断層露頭⑦ b断層(詳細観察)



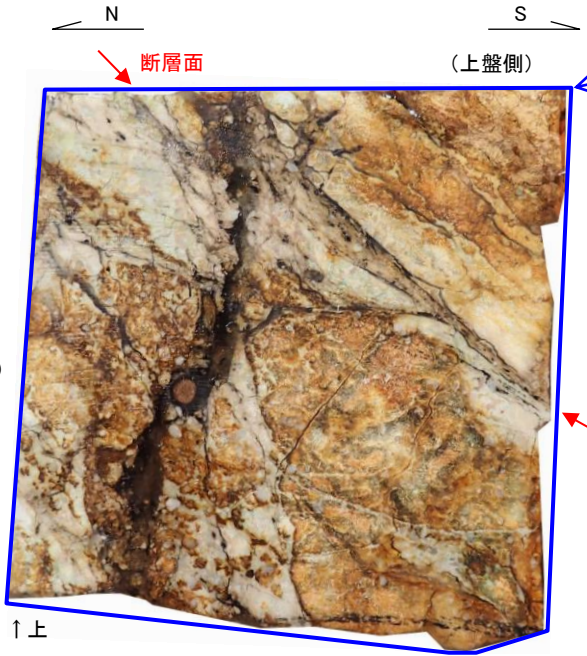
- ・b断層は厚さ5~10cm程度の破碎部を伴い、破碎部の上盤側に平滑性が悪い断層面b-1、下盤側に平滑性の良い断層面b-2が認められる。
- ・断層面b-1に近い箇所では、下盤側の粒子に非対称な流動組織(σ組織)といった正断層変位を示唆する構造が認められる。断層面b-2に近い箇所では、上盤側に粒子のP面配列と下盤側に引きずり構造といった逆断層変位を示唆する構造が認められる。
- ・断層面b-2が平滑な面をなすことから、これをb断層の最新活動面と判断し、b断層として評価する。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)

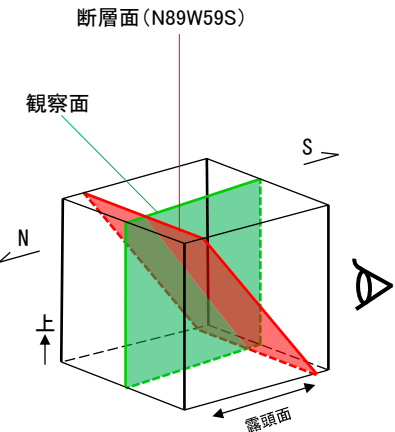
断層露頭⑦(研磨片観察及びCT画像解析(a断層の傾斜方向))



CT画像(断層の傾斜方向)



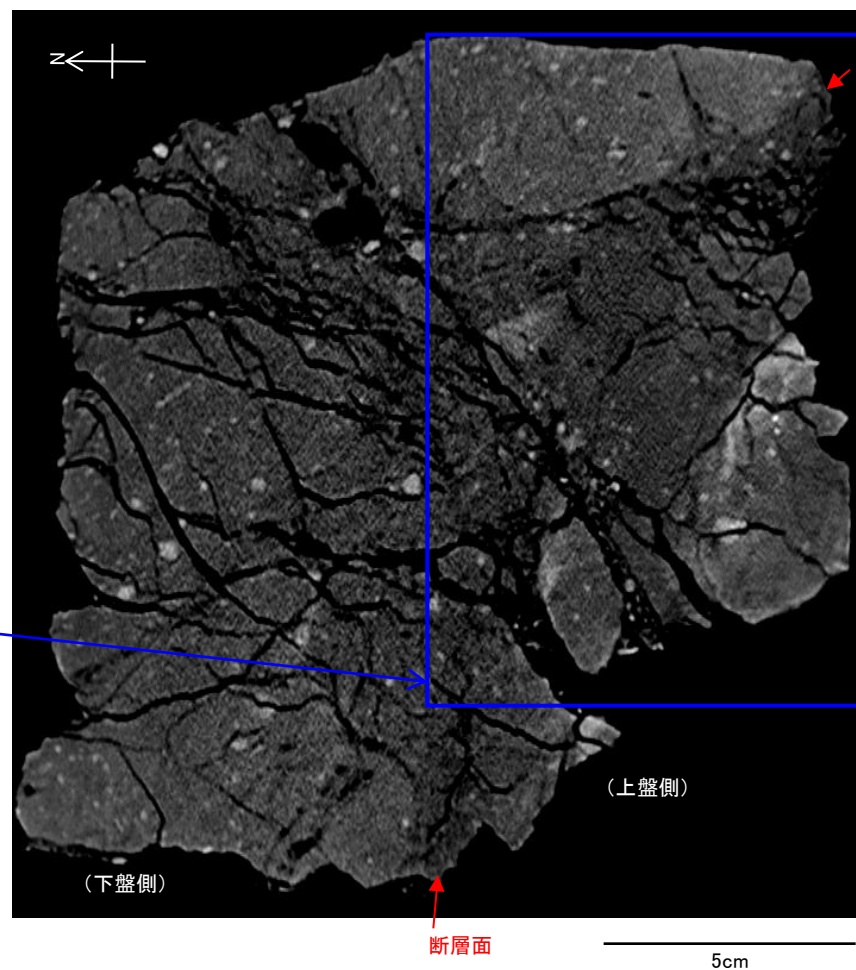
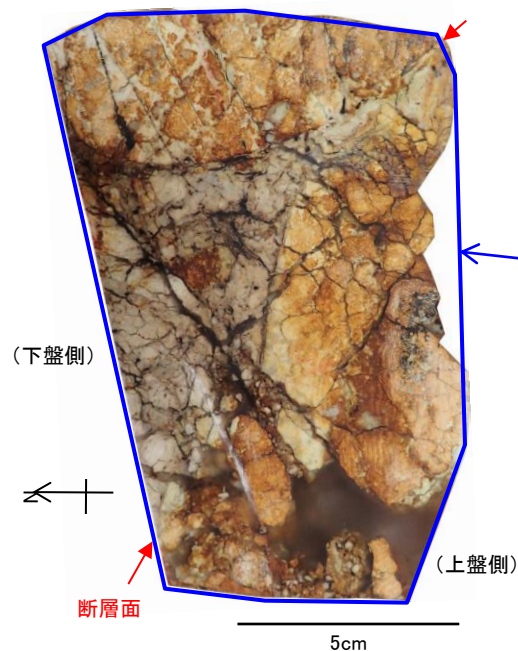
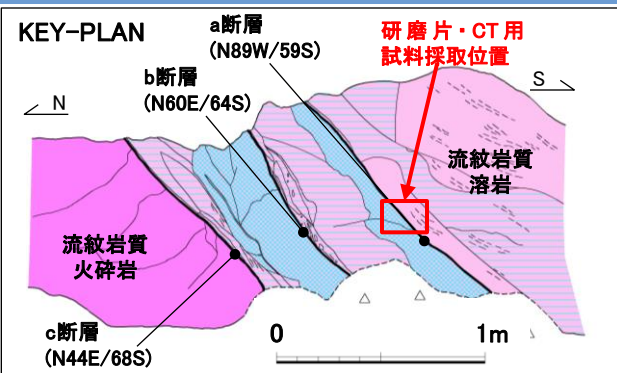
研磨片写真(断層の傾斜方向)



- ・a断層の傾斜方向の研磨片観察の結果、断層面は部分的に凹凸があり、複合面構造は認められない。
- ・a断層の傾斜方向のCT画像解析の結果、わずかに密度低下が見られるものの断層面は不明瞭である。また、一部の引きずり構造を除き、明瞭な複合面構造は認められない。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)

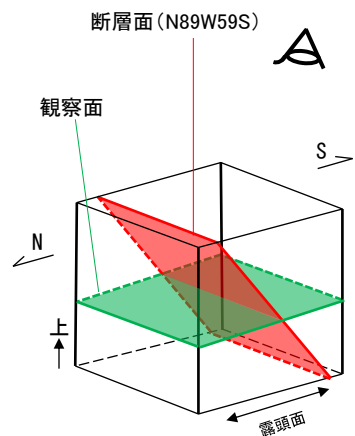
断層露頭⑦(研磨片観察及びCT画像解析(a断層の走向方向))



CT画像(断層の走向方向)

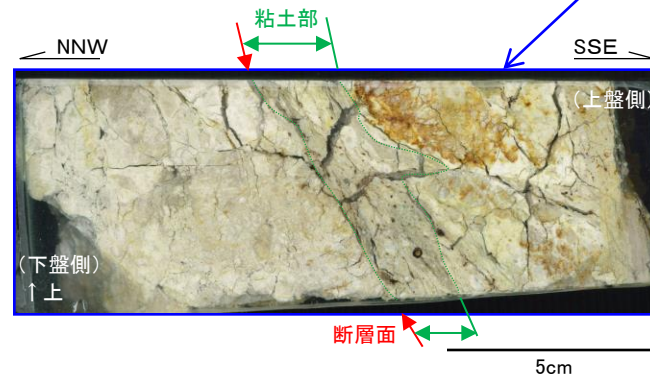
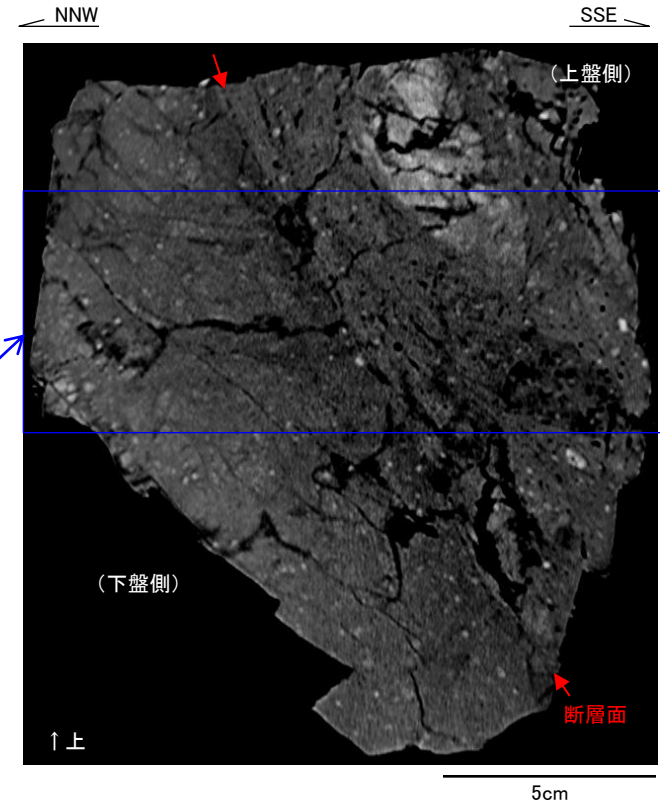
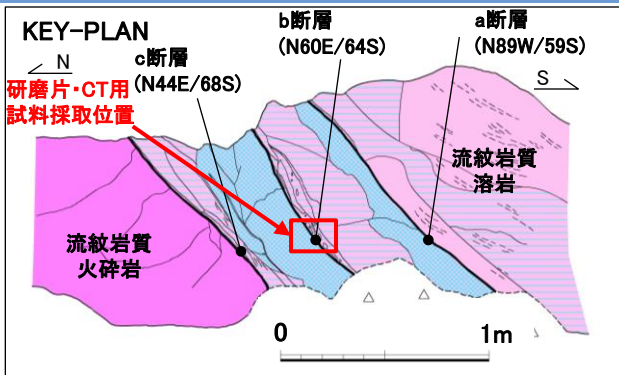
研磨片写真(断層の走向方向)

- ・a断層の走向方向の研磨片観察の結果、断層面は湾曲しており、複合面構造は認められない。
- ・a断層の走向方向のCT画像解析の結果、わずかに密度低下が見られるものの断層面は不明瞭である。また、複合面構造は認められない。



1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)

断層露頭⑦(研磨片観察及びCT画像解析(b断層の傾斜方向))



研磨片写真(断層の傾斜方向)

CT画像(断層の傾斜方向)

断層面(N60E64S)

観察面

S

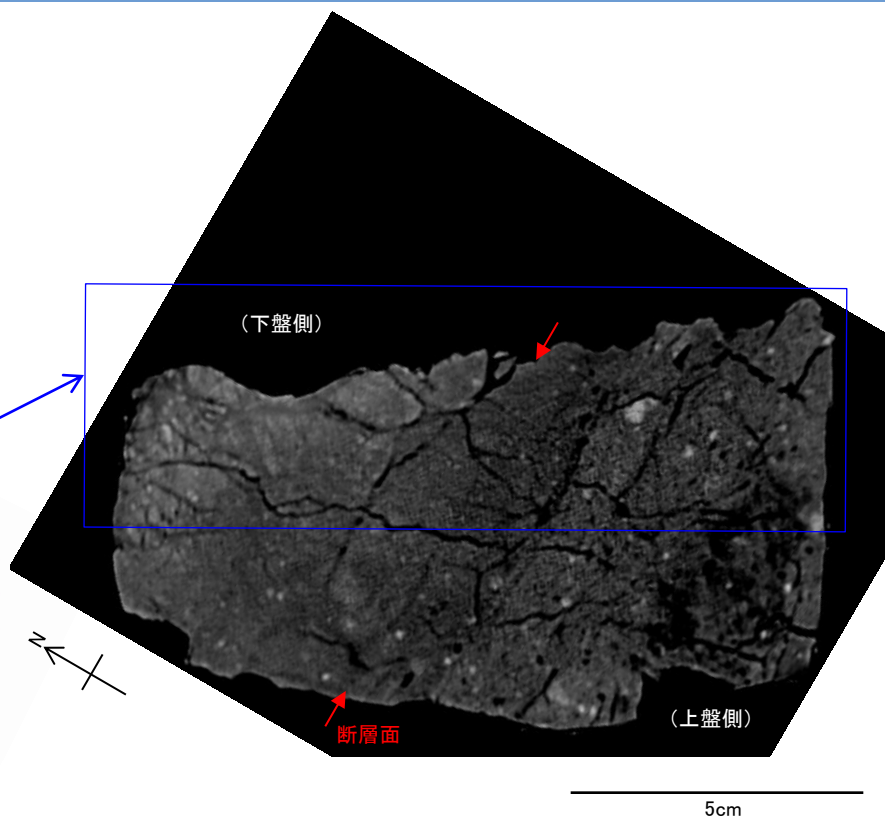
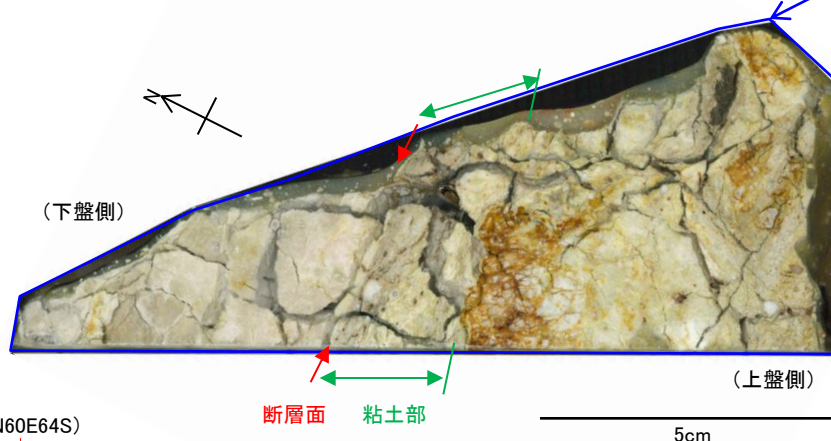
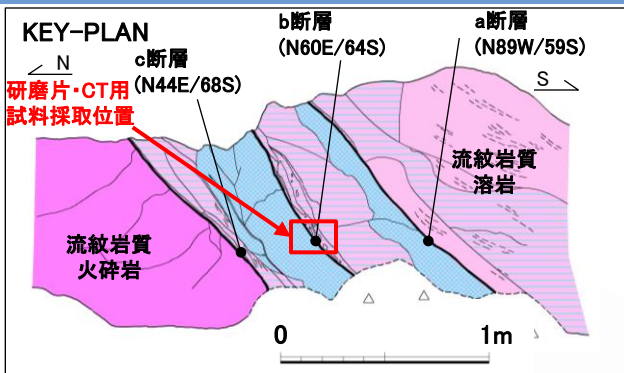
A

露頭面

- ・b断層の傾斜方向の研磨片観察の結果、1~2cm程度の粘土部が認められ、下盤と粘土部の境界に断層面が認められる。断層面は直線性に乏しく、複合面構造は認められない。
- ・b断層の傾斜方向のCT観察の結果、全体的に熱水変質による粘土化が著しく、断層面付近のみわずかに密度低下が認められる。また、複合面構造は認められない。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)

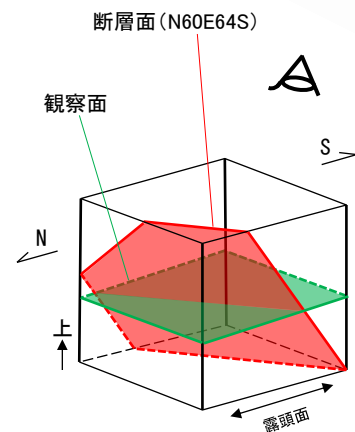
断層露頭⑦(研磨片観察及びCT画像解析(b断層の走向方向))



研磨片写真(断層の走向方向)

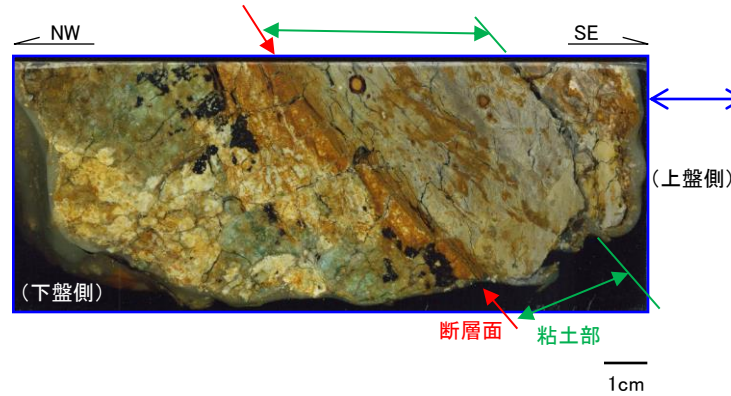
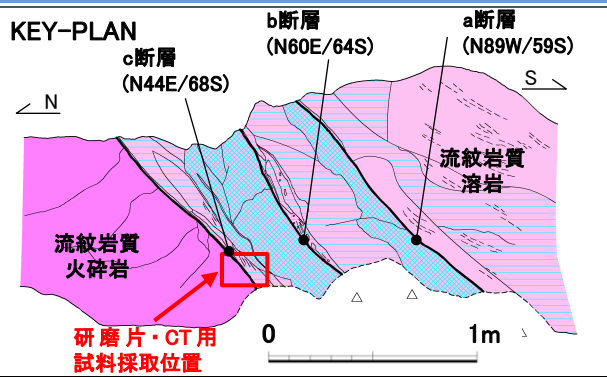
CT画像(断層の走向方向)

- ・b断層の走向方向の研磨片観察の結果、2cm程度の粘土部が認められ、下盤と粘土部の境界に断層面が認められる。断層面は直線性に乏しく、複合面構造は認められない。
- ・b断層の走向方向のCT観察の結果、全体的に熱水変質による粘土化が著しく、断層面付近にわずかに密度低下が認められる。また、複合面構造は認められない。

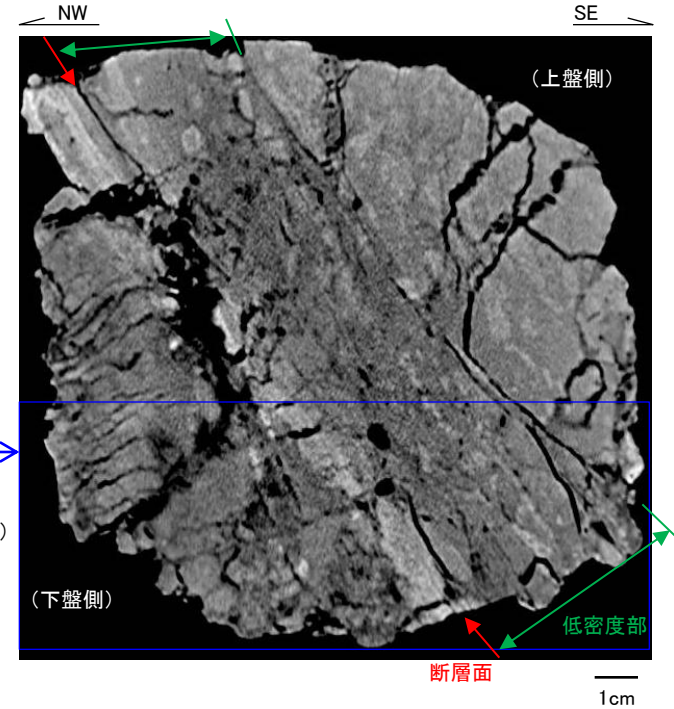


1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)

断層露頭⑦(研磨片観察及びCT画像解析(c断層の傾斜方向))



研磨片写真(断層の傾斜方向)



CT画像(断層の傾斜方向)

断層面(N44E68S)

観察面

S

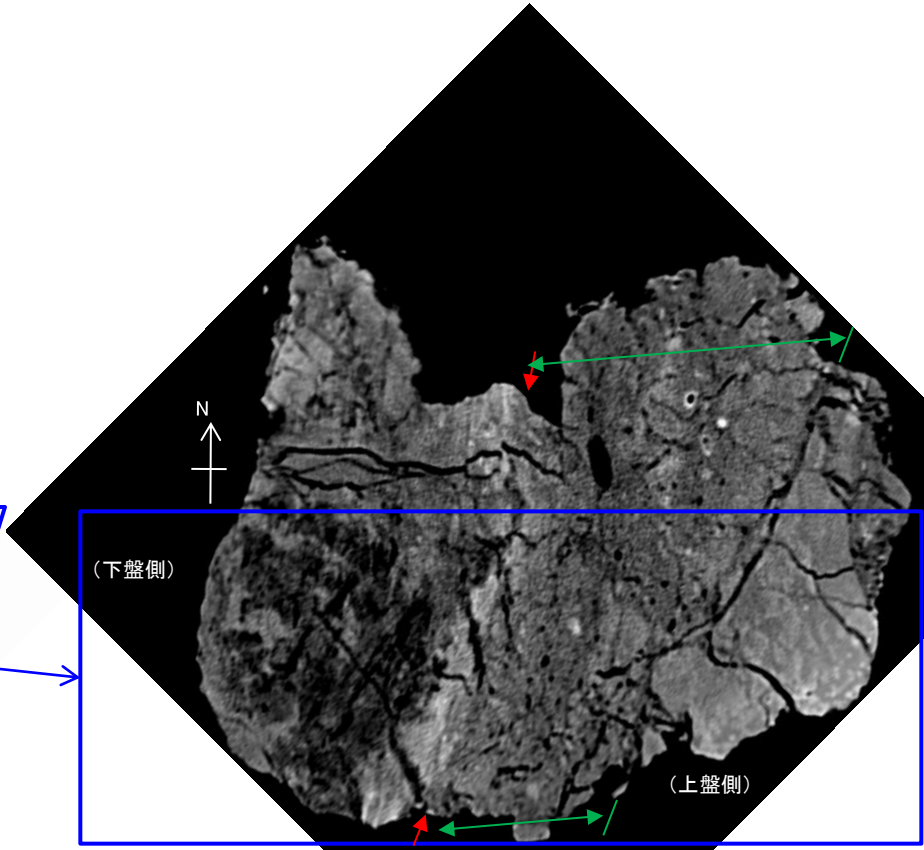
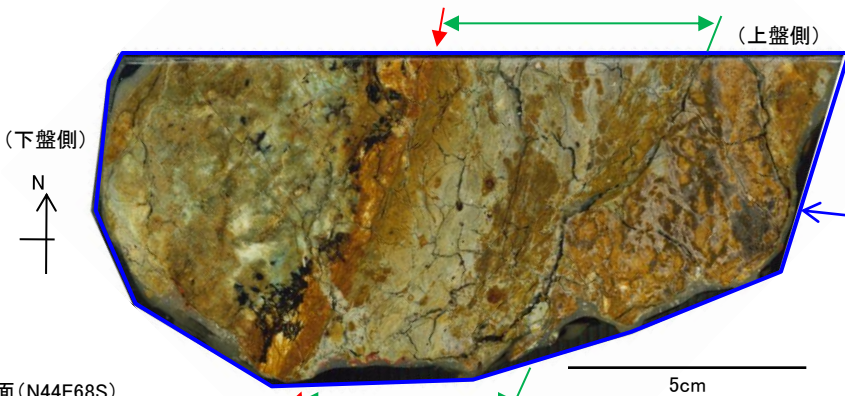
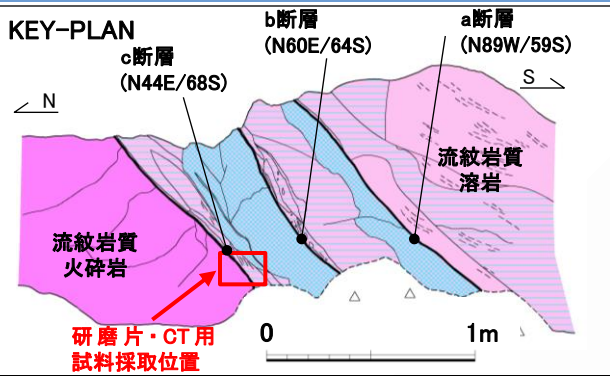
A

露頭面

- ・c断層の傾斜方向の研磨片観察の結果、5cm程度の粘土部が認められ、下盤と粘土部の境界が断層面と考えられるが、直線性に乏しく、不明瞭である。また、複合面構造は認められない。
- ・c断層の傾斜方向のCT観察の結果、研磨片観察で認められた粘土部に対応する低密度部が認められるが、断層面は不明瞭である。また、一部の引きずり構造を除き、明瞭な複合面構造は認められない。

1. 突道断層の評価 (2)地質調査(突道断層の東側)

断層露頭⑦(研磨片観察及びCT画像解析(c断層の走向方向))

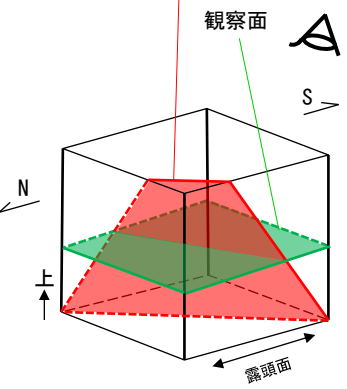


研磨片写真(断層の走向方向)

CT画像(断層の走向方向)

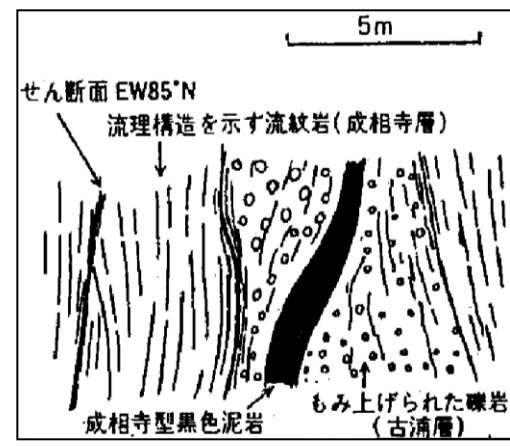
- ・c断層の走向方向の研磨片観察の結果、5cm程度の粘土部が認められ、下盤と粘土部の境界が断層面と考えられるが、直線性に乏しく、不明瞭である。また、複合面構造は認められない。
- ・c断層の走向方向のCT観察の結果、研磨片観察で認められた粘土部に対応する低密度部が認められるが、断層面は不明瞭である。複合面構造は認められない。

・a~c断層は、いずれの断層面も直線性が乏しく、複合面構造は認められない。



1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

森山付近で確認された断層露頭の連続性・活動性評価



鹿野・吉田(1985)より引用

上図:断層露頭⑤に対応
下図:断層露頭④に対応

本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。



変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ第3第17回会合 参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 推定断層, 伏在断層

「断層露頭④, 断層露頭⑤及び断層露頭⑥」と、「森山ボーリング調査, 森山トレンチ調査及び断層露頭調査により確認された断層」について, 鹿野・吉田(1985)に示されている断層に対応する破碎幅が数m~数10m程度, 破碎部に泥岩が取り込まれている, 地質境界付近に位置する等の共通的な特徴が認められることから, 鹿野・吉田(1985)による断層に対応する断層と考えられる。森山トレンチ調査等の結果, 後期更新世以降の断層活動は認められない。「森山北(ピット調査)」では, 鹿野・吉田(1985)の宍道断層の通過位置に対応するが, 後期更新世以降の断層活動は認められない。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

森山付近(まとめ)

1. 地表地質踏査

- ・造成地付近の地表地質踏査の結果、複数の断層露頭(断層露頭④～⑦)を確認している。
- ・森山(造成地付近)における今村・向吉(2017)(断層露頭④, 断層露頭⑥-2及び断層露頭⑦)を踏まえ、データ拡充を実施した。
- ・データ拡充結果を踏まえた各断層露頭の性状は、以下のとおりである(第474回審査会合以降のデータ拡充部は下線部)。

(1)断層露頭④(造成地の南西側の露頭)

- ・今村・向吉(2017)によると、「流紋岩、泥岩基質の礫層中に断層を確認。露頭における複合面構造、条線姿勢より高角の右横ずれを伴う南落ち正断層であることが示唆される。」とされている。
- ・鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に断層が確認される。断層は破碎幅50cm程度で風化が進み、直線性に乏しい。
- ・研磨片観察及びCT画像解析の結果、断層面は湾曲しており、複合面構造は認められない。

(2)断層露頭⑤(造成地の西側法面の露頭)

鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に断層が確認される。

・断層露頭⑤-1

断層は、幅0.2m～1m程度の破碎部を伴うが、断層面には連続する粘土は認められない。また、断層の上部は破碎を受けておらず、断層面は密着している。

・断層露頭⑤-2

断層は、破碎幅は最大で70cm程度で一部風化が進んでいるが、固結・密着している。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

森山付近(まとめ)

(3)断層露頭⑥(造成地の東側法面の露頭)

鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に断層が確認される。

・断層露頭⑥-1

断層は、固結・密着している。

・断層露頭⑥-2

・今村・向吉(2017)

「古浦層と成相寺層を隔てる断層で破碎帯(約15m)が確認でき、断層コア部(幅約1m)中では細粒のガウジとともにせん断面を確認。姿勢は東西走向のものが多く、条線の姿勢は水平に限らず垂直に近いものも確認できる。」とされている。

・c断層

古浦層の安山岩質火砕岩と、成相寺層の流紋岩質火砕岩を境する断層(c断層)が認められる。最新活動面と判断される断層面①には、縦ずれ優勢の条線が認められる。なお、断層面②では、横ずれ優勢の条線が認められる。また、c断層付近を境に北側と南側で色調が異なるのは、間隙率の違いによる風化程度の違いと考えられる。

・d断層

古浦層の安山岩質火砕岩中に、小断層(d断層)が認められる。断層面には、縦ずれ優勢の条線(逆断層センス)が認められる。断層面付近では、全体的に熱水変質作用を被っており、網目状の白色脈が認められる。

・e断層

古浦層の安山岩質火砕岩中に、大きく屈曲する小断層(e断層)が認められる。

・熱水変質部

・熱水変質部(中央)

古浦層の安山岩質火砕岩中に、網目状の白色脈で特徴付けられる熱水変質が全体的に認められる。その中で、ゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層が見られる箇所です。試料採取を行い、各種分析を実施した結果、断層面には、濁沸石が晶出しており、それに変位・変形が認められないことから、後期更新世以降の活動性はないと考えられる。

・熱水変質部(北側、南側)

CT画像解析の結果、明瞭なせん断面及び複合面構造は認められないことから、熱水に伴う粘土脈と考えられる。
また、実体顕微鏡観察の結果、縦ずれ優勢の条線(正断層センスあるいは逆断層センス)である。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

森山付近(まとめ)

(4)断層露頭⑦(造成地の南東側の露頭)

- ・今村・向吉(2017)によると、「流紋岩(成相寺層)中に南落ちの低角な正断層を確認。室内観察の結果、正断層、逆断層センスの断層が伏在していることが確認できる。」とされている。
- ・鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に、3条の断層が確認され、南より正断層変位を示すa断層、逆断層変位を示すb断層、逆断層変位を示すc断層である。本地点で確認された断層は熱水変質とみられる粘土化が進み、軟質となるものの、いずれも縦ずれ変位を示す。
山陰地域における応力場の変遷を踏まえると、最新活動面は、逆断層変位を示すb断層、c断層と考えられる。
- ・a~c断層の研磨片観察及びCT画像解析の結果、いずれの断層面も直線性に乏しく、複合面構造は認められない。

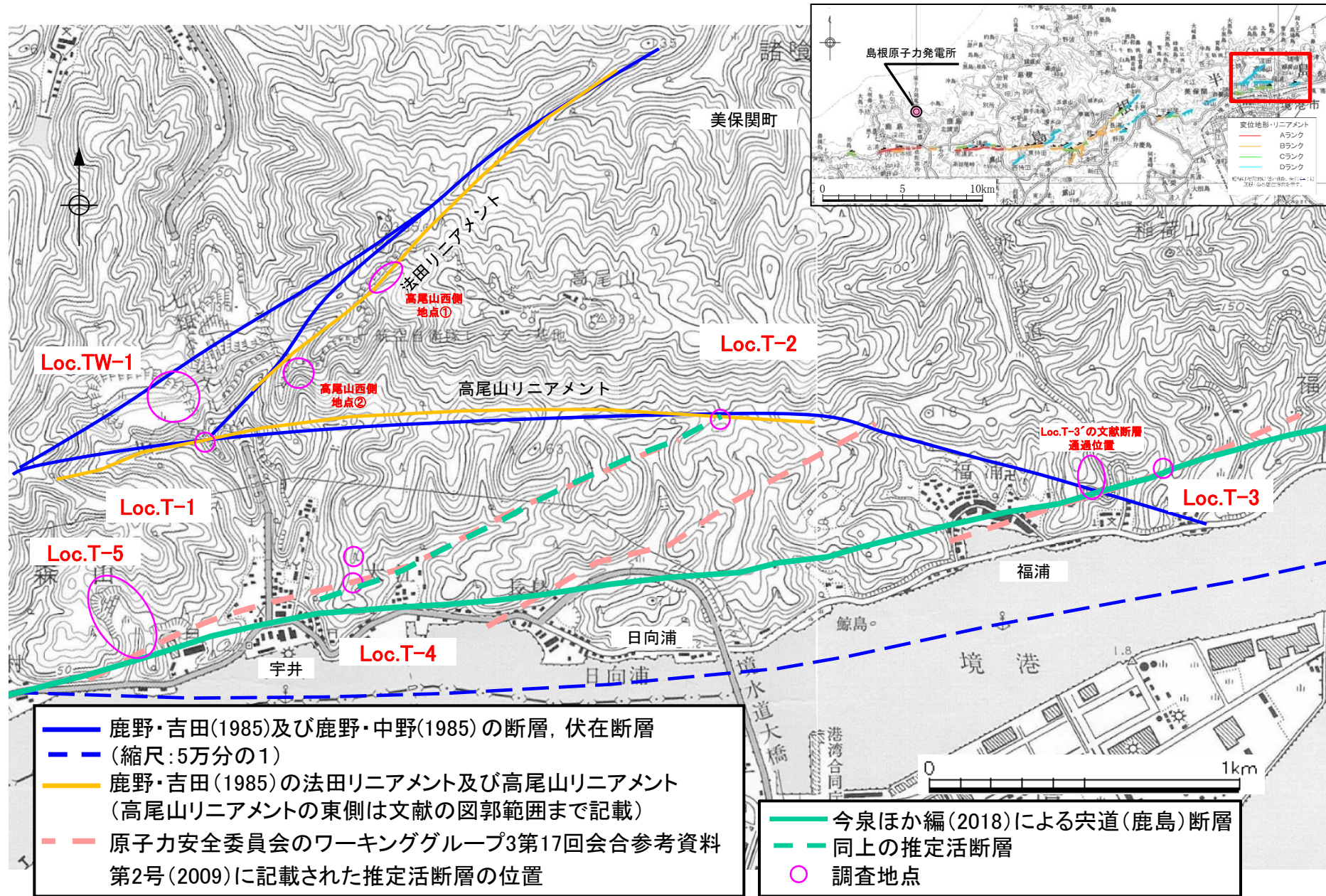
2. 断層露頭の連続性・活動性評価

- ・森山の造成地付近で確認された断層露頭の連続性確認の結果、「断層露頭④、断層露頭⑤及び断層露頭⑥」と、「森山ボーリング調査、森山トレンチ調査及び断層露頭調査により確認された断層」については、破碎幅が数m~数10m程度、破碎部に泥岩が取り込まれている、地質境界付近に位置する等の共通的な特徴が認められることから、鹿野・吉田(1985)に示されている断層に対応する断層と考えられる。
- ・上記断層について、森山トレンチ調査等の結果、後期更新世以降の断層活動は認められない。

3. まとめ

地表地質踏査(造成地付近)で確認された断層露頭について、上載地層(後期更新世の地層)が存在しないため、上載地層による評価ができないが、個別地点の露頭観察及び室内試験の結果及び断層露頭の連続性・活動性評価の結果を踏まえると、後期更新世以降の活動は認められないと考えられる。

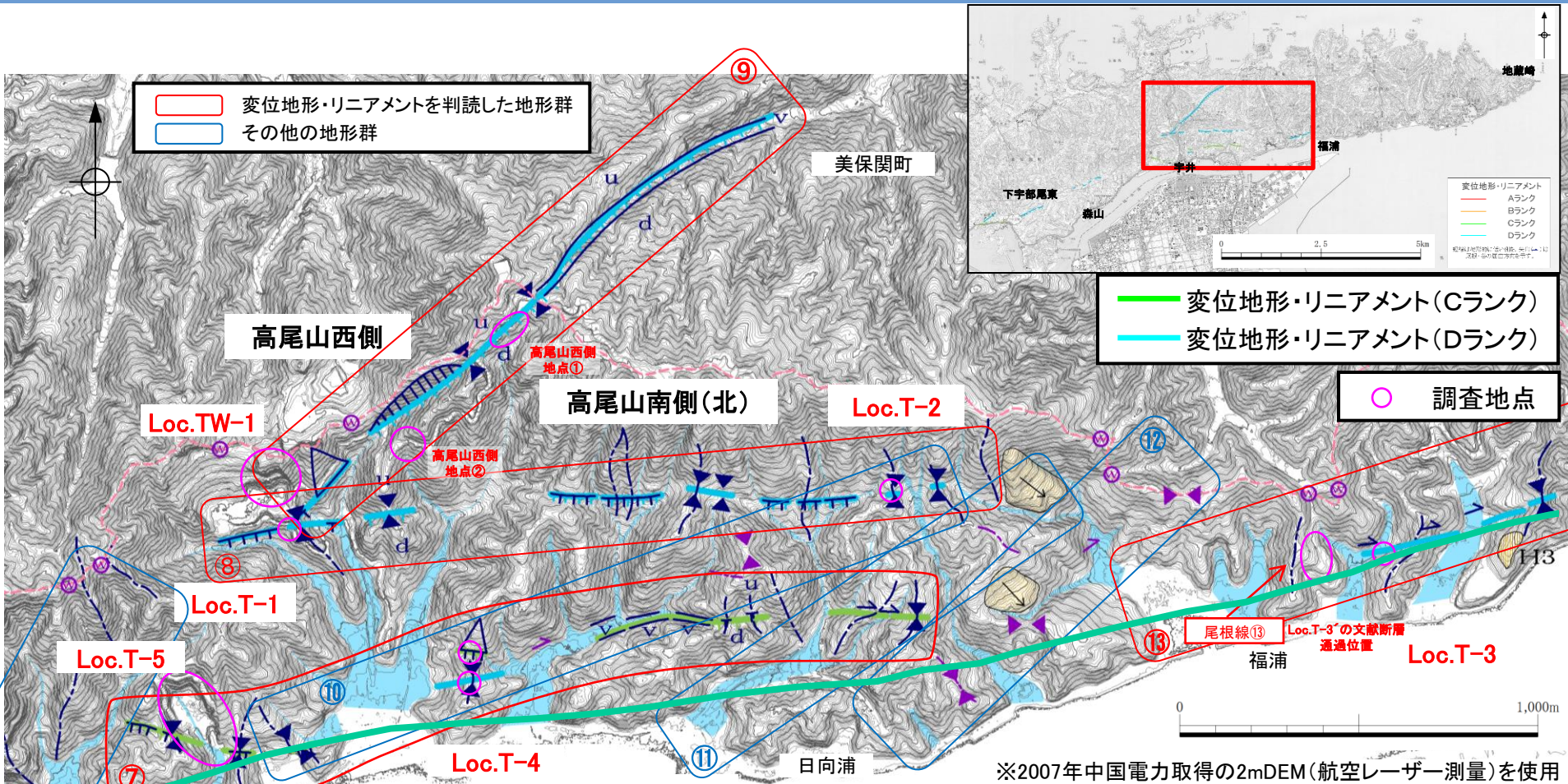
宇井～福浦(文献調査)



- 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層
- (縮尺:5万分の1)
- 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント (高尾山リニアメントの東側は文献の図郭範囲まで記載)
- - 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置

- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層
- - 同上の推定活断層
- 調査地点

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) 宇井～福浦(変動地形学的調査)



・美保関町宇井から福浦の間では、変位地形は不明瞭であるが、北側には鞍部列を境に南側の山地高度が低く、崖地形が断続的に認められる。また、南側には、尾根・谷の屈曲、鞍部、直線谷が断続的に認められる。

・高尾山西側には、直線谷と鞍部が認められ、山地高度は北西側がやや高い。

※2007年中国電力取得の2mDEM(航空レーザー測量)を使用

地形要素 (変位地形・リニアメントを判読したもの)		地形要素 (その他の地形群)		地形面	
	崖		崖		H33面
	急斜面		谷線(▲は屈曲の方向を示す)		高位面群
	三角末端面		尾根線(▲は屈曲の方向を示す)		地すべり
	高度不連続		鞍部		風隙
	谷線(▲は屈曲の方向を示す)		風隙		
	尾根線(▲は屈曲の方向を示す)				
	鞍部				
	直線状の谷				
					分水界(風隙・截頭谷の谷頭含む)

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

判読内容(変位地形・リニアメント, その他の地形群)

変位地形・リニアメント及びその他の地形群一覧表(宇井～福浦)

番号	変位地形・リニアメント及びその他の地形群の判読内容			活断層研究会編(1991), 中田ほか(2008), 原安委WG3(2009)及び今泉ほか編(2018)との対比
	変位地形・リニアメントのランク	地形要素	理由	
⑥ (再掲)	—	2箇所 ^⑥ の崖, 7本の尾根, 2箇所 ^⑥ の風隙からなり, 山地高度は北西が高い。しかし, 地形群は連続性, 鮮明さに欠ける。また, 尾根・谷に明瞭な屈曲は認められない。	系統的な屈曲地形は認められず, 地形群が同一方向に横ずれしたと解釈できない。また, 高度差も系統的ではない。地形群は連続性に乏しく, 鮮明さに欠け, 長さは短いことから変動地形の可能性はない。	—
⑦	C, D(高尾山南側(南))	5箇所 ^⑦ の鞍部, 7箇所 ^⑦ の崖, 各1箇所 ^⑦ の三角末端面, 直線状谷による北上がりの高度不連続。2本の谷の右屈曲, 1本の尾根の右屈曲。しかし, その他の尾根・谷に明瞭な屈曲は認められない。	谷と尾根の屈曲があり, 地形群にある程度の連続性を持つが, 系統性が顕著でないことからC, Dランクとした。Cランクの部分は鞍部地形が鮮明な箇所である。	・今泉ほか編(2018)の活断層に対応
⑧	D(高尾山南側(北))	北上がりの山地高度不連続, 斜面基部に6箇所 ^⑧ の鞍部, 6箇所 ^⑧ の崖。谷の屈曲はなく縦ずれの可能性有。しかし, 新期地形面に新しい変位を示唆する低断層崖等は無い。	山地高度不連続をなし, 山麓に鞍部が多数あり, 地形群にある程度の長さがあるが, 新期の活動を示唆する地形がないことからDランクとした。	・活断層研究会編(1991)の高尾山(確実度Ⅲ)に対応
⑨	D(法田)	北上がりの山地高度不連続, 直線状谷, 急斜面, 崖, 三角末端面, 2箇所 ^⑨ の鞍部。しかし, 新期地形面に新しい変位を示唆する低断層崖等は無い。	山地高度不連続の山麓に鞍部等があり, 地形群にある程度の長さがあるが, 新期の活動を示唆する地形がないことからDランクとした。	・活断層研究会編(1991)の法田(確実度Ⅲ)に対応
⑩	—	5箇所 ^⑩ の鞍部, 1本の谷の右屈曲, 各1箇所 ^⑩ の三角末端面, 直線状谷による北上がりの高度不連続。しかし, その他の尾根・谷に明瞭な屈曲は認められない。	番号⑦と重複し, 東半分で位置が北にずれる。東半分には屈曲地形が認められないことから, 番号⑦のトレースが妥当と判断する。	・原安委WG(2009)及び今泉ほか編(2018)の推定活断層に対応
⑪	—	1箇所 ^⑪ の鞍部, 1本の尾根の右屈曲, 1本の谷の右屈曲。しかし, その他の尾根・谷に明瞭な屈曲は認められず, 連続性が悪く, 明瞭な地形要素が認められない。山地高度に顕著な差がない。	番号⑦と斜交し, 北東へ延びる。連続性は悪く, 明瞭な地形要素はなく, 系統的な屈曲地形及び高度差も認められないことから, 番号⑦のトレースが妥当と判断する。	・原安委WG(2009)の推定活断層に対応

(注)原安委WG3(2009):原子力安全委員会ワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)

下線部:縦ずれ変位に起因する地形に関する記載箇所

新期地形面:扇状地堆積物, 崖錐堆積物等からなる地形面

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

判読内容(変位地形・リニアメント, その他の地形群)

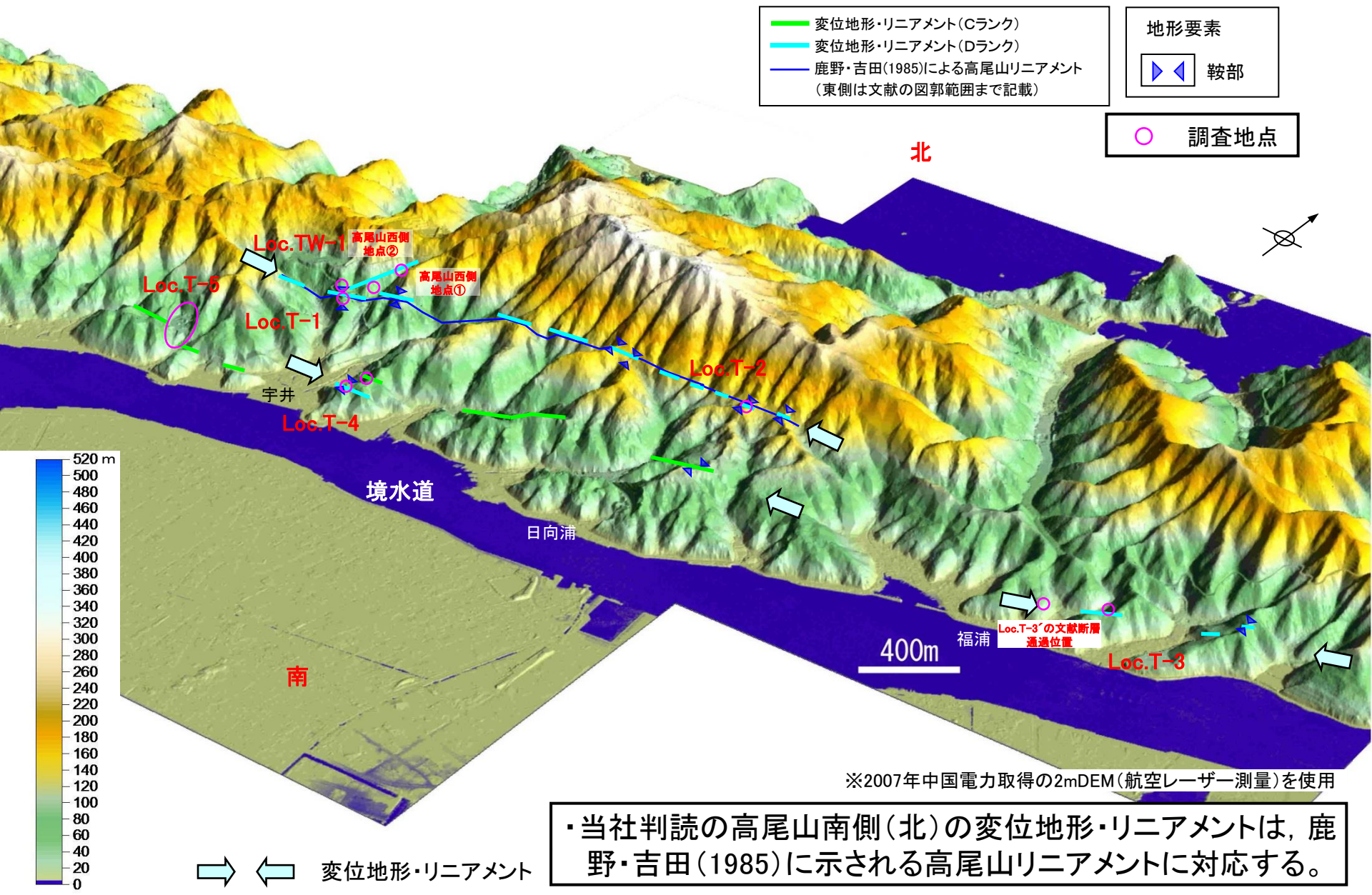
変位地形・リニアメント及びその他の地形群一覧表(宇井～福浦)

番号	変位地形・リニアメント及びその他の地形群の判読内容			活断層研究会編(1991), 中田ほか(2008), 原安委WG3(2009)及び今泉ほか編(2018)との対比
	変位地形・リニアメントのランク	地形要素	理由	
⑫	—	3箇所の鞍部, 1本の谷の右屈曲, 1箇所の風隙。しかし, その他の尾根・谷に明瞭な屈曲は認められない。尾根高度はわずかに北上がりであるが, 鞍部の連続性は悪く, 明瞭な地形要素は認められない。	連続性は悪く, 明瞭な地形要素はなく, 系統的な屈曲地形及び高度差も認められないことから変動地形の可能性はない。	—
⑬	D(高尾山南側(南))	隣り合う2本の谷, 1本の尾根が右屈曲。東延長に1箇所の鞍部。尾根高度はわずかに北が高い。なお, 西延長の尾根線⑬に右屈曲は認められない。	系統的な右屈曲が局地的に認められるが, 地形群の長さは非常に短いことからDランクとした。	・原安委WG(2009)の推定活断層及び今泉ほか編(2018)の活断層に対応

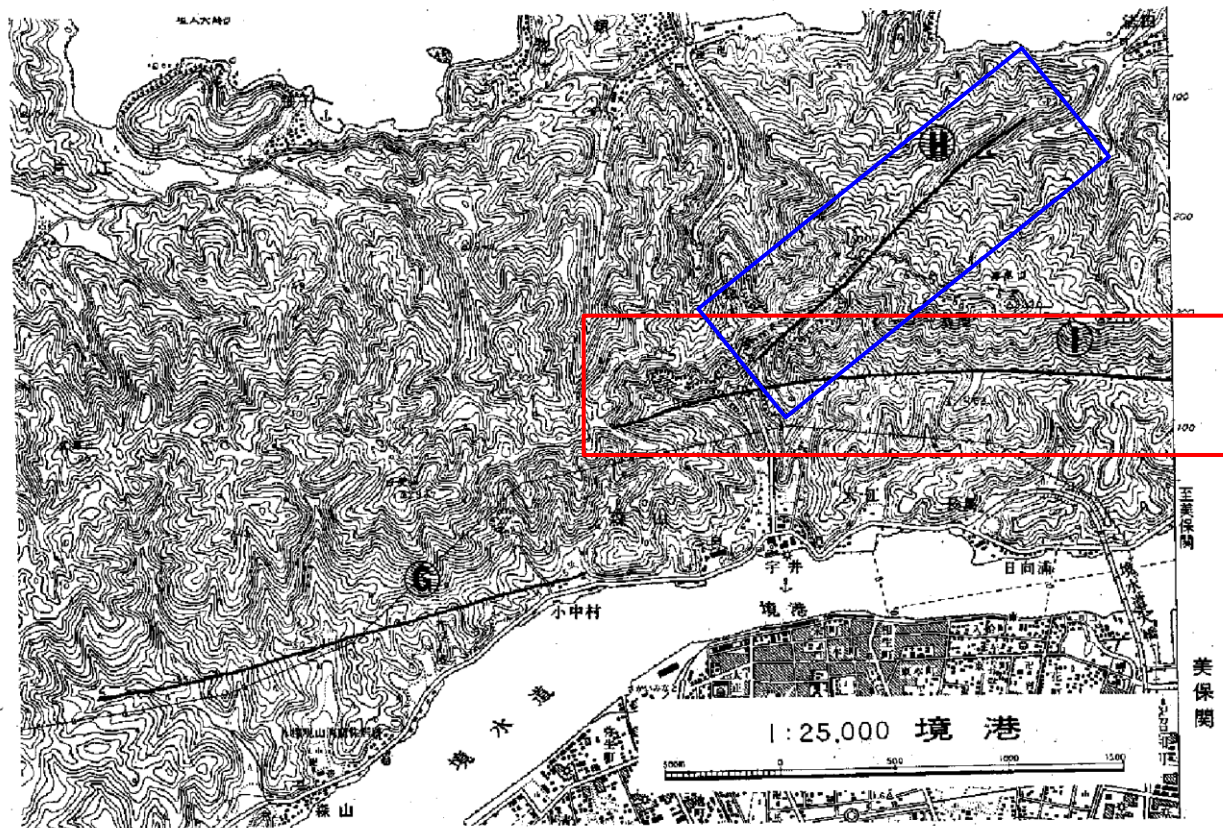
(注)原安委WG3(2009):原子力安全委員会ワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)

下線部:縦ずれ変位に起因する地形に関する記載箇所

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) 宇井～福浦(変動地形学的調査)



宇井～福浦(変位地形・リニアメントの成因)



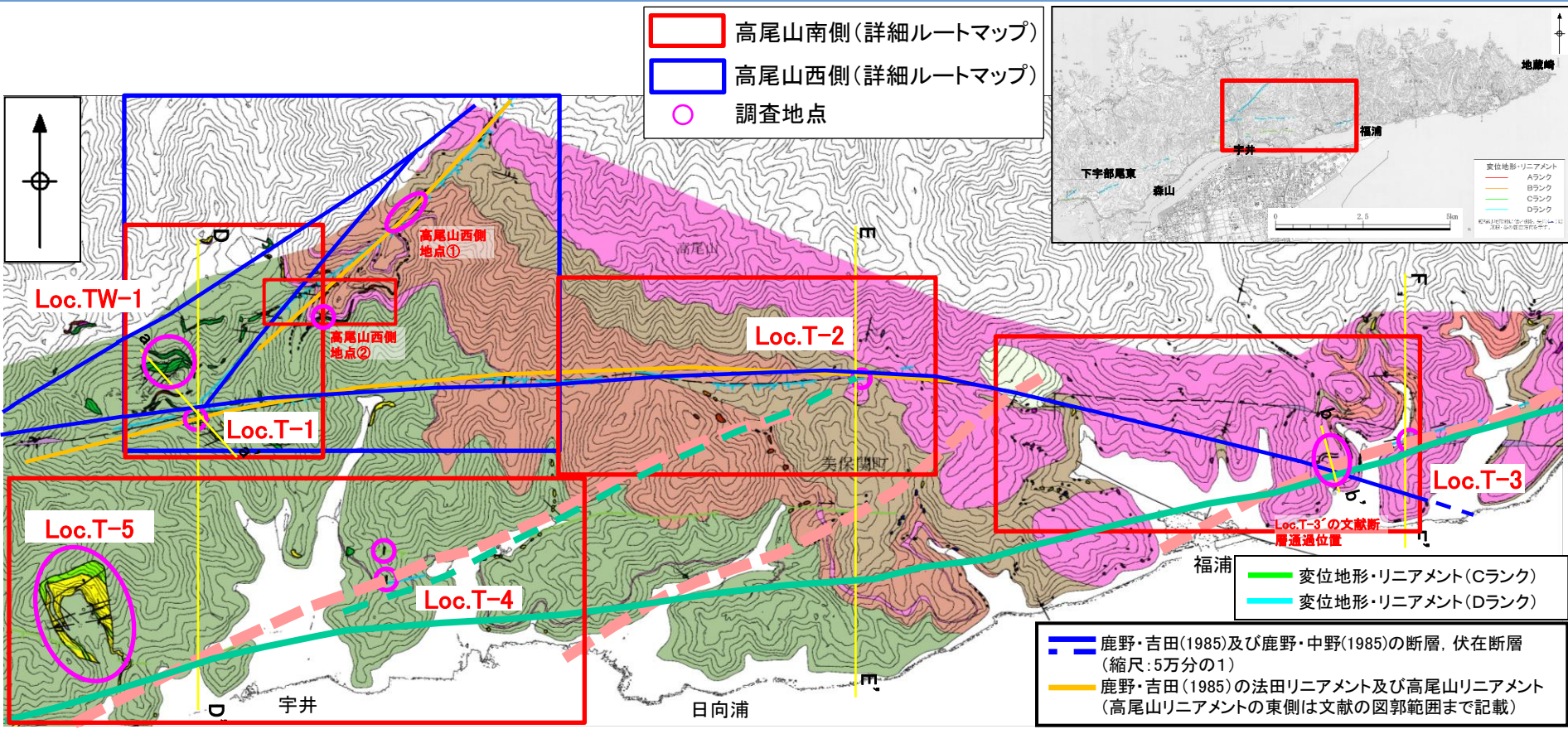
第29図 境水道北側のリニアメント (国土地理院発行2万5千分の1「境港」の一部を使用)

⑥：森山リニアメント ⑦：法田リニアメント ⑧：高尾山リニアメント 鹿野・吉田(1985)より引用・加筆

- ・鹿野・吉田(1985)によると、高尾山リニアメントの成因について、「地質断層とリニアメントが一致するものの、リニアメントに沿って確実に断層変位地形と認められるものがないこと及び断層両側の地層の浸食に対するコントラストが大きいことなどから、リニアメントは組織地形であると判断される。」とされている。
- ・法田リニアメントについては、「北東-南西方向のリニアメント。このリニアメントは地質の上では古浦層を切る断層に一致し、断層の走向はほぼNE-SW、傾斜は50-70° NWであり、正断層である。地質断層と一致し、明瞭なリニアメントとして認められるものの断層変位地形は伴っていない。」とされている。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)

宇井～福浦(地表地質踏査(地質図))



— 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層
 - - 同上の推定活断層
 - - 原子力安全委員会のワーキンググループ3
 第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された
 推定活断層の位置

・高尾山南側及び高尾山西側における詳細ルートマップを作成した。
 ・D-D'断面図付近では、文献調査及び変動地形学的調査の結果、Loc.T-1において断層が認められる。

- 沖積層
 - 地すべり堆積物
 - デイサイト・玄武岩・安山岩(貫入岩)
 - デイサイト(溶岩・火砕岩)
 - 砂岩・泥岩
 - 砂岩
 - 流紋岩質火砕岩
 - 礫岩・火山円礫岩
- 古浦層

- 地質境界線
- 断層
- - 断層(推定)
- ✱ 向斜軸

- 露頭位置
- 層理面の走向・傾斜
 - 断層面の走向・傾斜
- 露頭岩種
- 貫入岩
 - 泥岩
 - 砂岩
 - 砂岩・泥岩互層
 - 礫岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイサイト(溶岩・火砕岩)
 - 流紋岩質火砕岩

— 変位地形・リニアメント(Cランク)
 — 変位地形・リニアメント(Dランク)

— 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層
 (縮尺:5万分の1)
 — 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント
 (高尾山リニアメントの東側は文献の図郭範囲まで記載)

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) (参考) 地表地質踏査(ルート図)

露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

露頭岩種

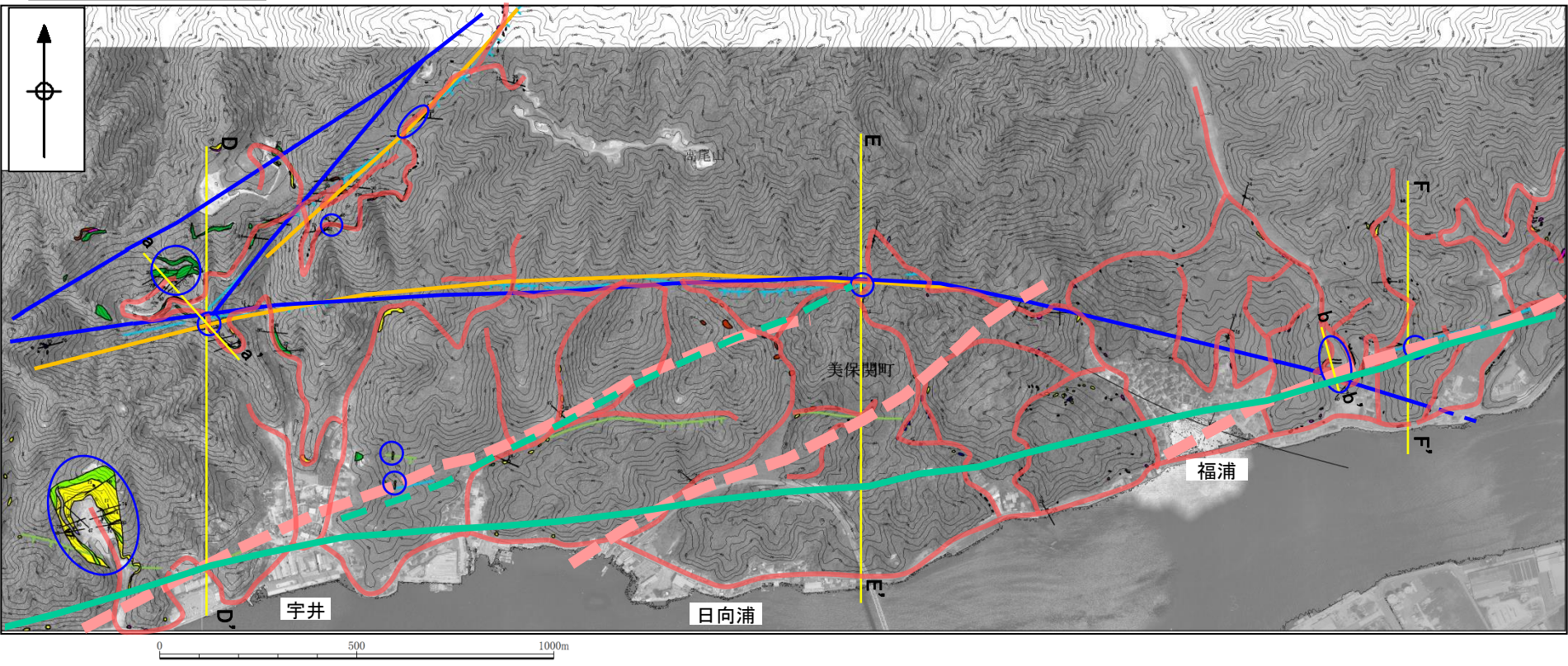
- 貫入岩
- 泥岩
- 砂岩
- 砂岩・泥岩互層
- 礫岩
- 安山岩質火砕岩
- デイサイト(溶岩・火砕岩)
- 流紋岩質火砕岩

○ 調査地点

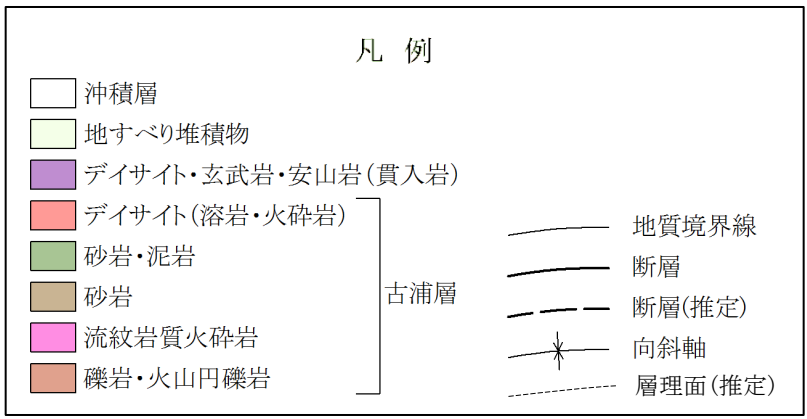
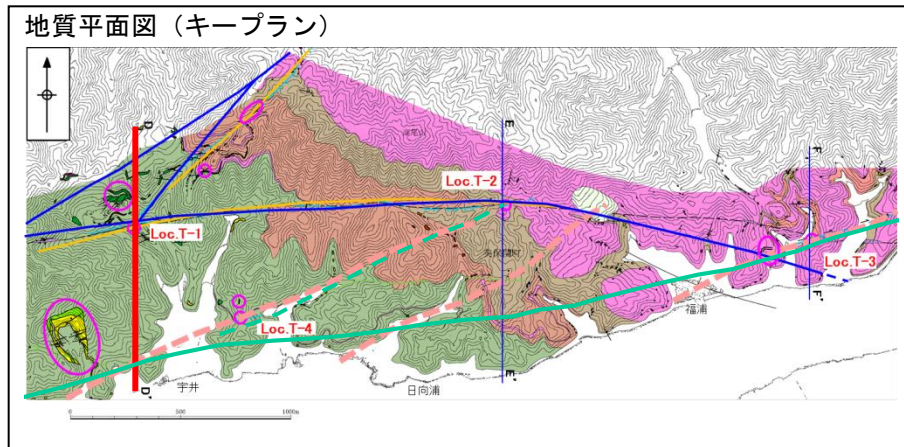
┌───┐
└───┘ 主な踏査ルート

┌───┐ 変位地形・リニアメント(Cランク)
└───┘ 変位地形・リニアメント(Dランク)

┌───┐ 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層
└───┘ 同上の推定活断層
┌───┐ 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回
会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
┌───┐ 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層
└───┘ (縮尺:5万分の1)
┌───┐ 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント
(高尾山リニアメントの東側は文献の図郭範囲まで記載)



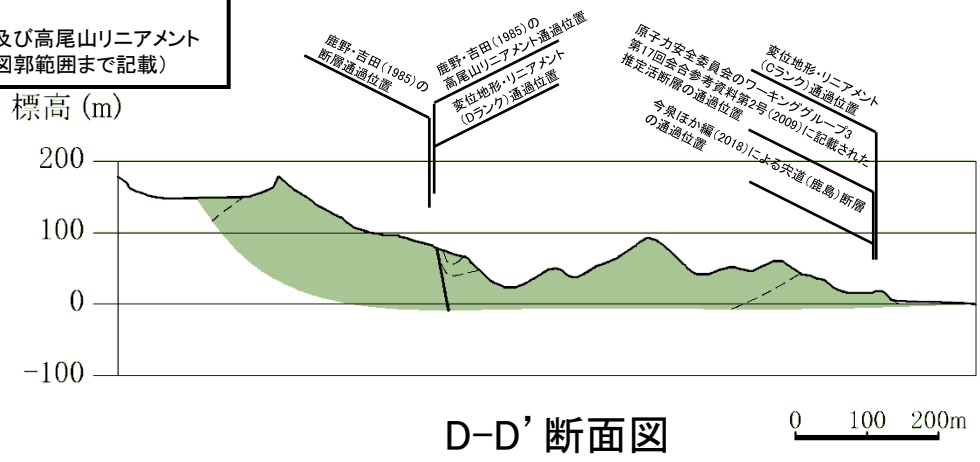
宇井付近(地表地質踏査(地質断面図))



- 今泉ほか編(2018)による突道(鹿島)断層
- 同上の推定活断層
- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回
会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層
(縮尺: 5万分の1)
- 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント
(高尾山リニアメントの東側は文献の図郭範囲まで記載)

調査地点

- 変位地形・リニアメント(Cランク)
- 変位地形・リニアメント(Dランク)



D-D' 断面図

・ D-D' 断面図では、北側の変位地形リニアメント及び文献断層の通過位置付近において、古浦層の砂岩・泥岩が分布し、断層が認められる。

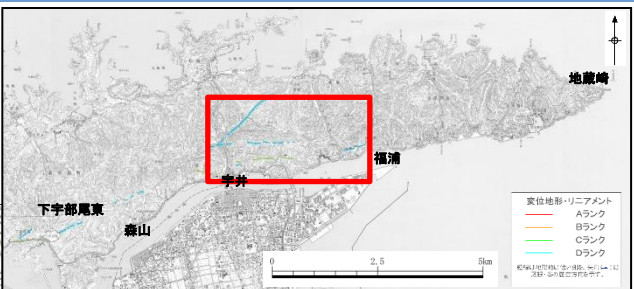
1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側) 宇井～福浦(地表地質踏査(地質図))

宇井～福浦(高尾山西側)

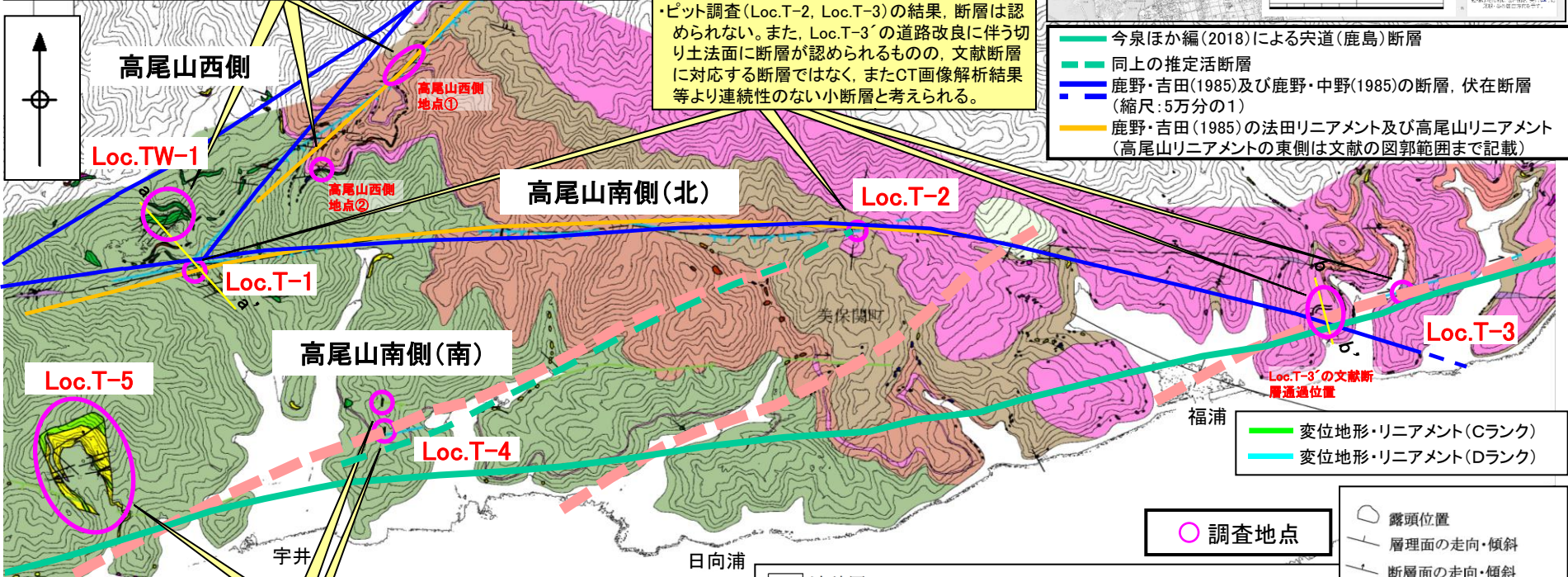
- ・地表地質踏査の結果、変位地形・リニアメント等の通過位置付近では礫岩等が連続分布しており断層は認められない。
- ・鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層とほぼ同走向の断層が、道路沿い及びLoc.TW-1において認められる。
- ・道路沿いの断層は正断層変位を示す。上載地層が存在しないため、最新活動時期の確定には至っていないもの、断層面は密着しており、破碎は認められない。
- ・Loc.TW-1における2条の正断層(a断層, b断層)は、いずれも固結・密着しており、変位量が大きいa断層は、上部の泥岩に変位や変形は認められないことから、これらの断層は後期更新世以降の断層活動は認められないと考えられる。

宇井～福浦(高尾山南側(北))

- ・鹿野・吉田(1985)によると、当該付近のリニアメントは組織地形であると判断されている。
- ・地表地質踏査(Loc.T-1)の結果、正断層センスを有する断層が認められる。上載地層が存在しないため、最新活動時期の確定には至っていないもの、断層面は凹凸が著しい。また、縦ずれ優勢の条線が認められるが、現在の応力場を東西圧縮応力場として推定されるすべり角の計算結果とは対応しない。
- ・ピット調査(Loc.T-2, Loc.T-3)の結果、断層は認められない。また、Loc.T-3の道路改良に伴う切り土法面に断層が認められるものの、文献断層に対応する断層ではなく、またCT画像解析結果等より連続性のない小断層と考えられる。

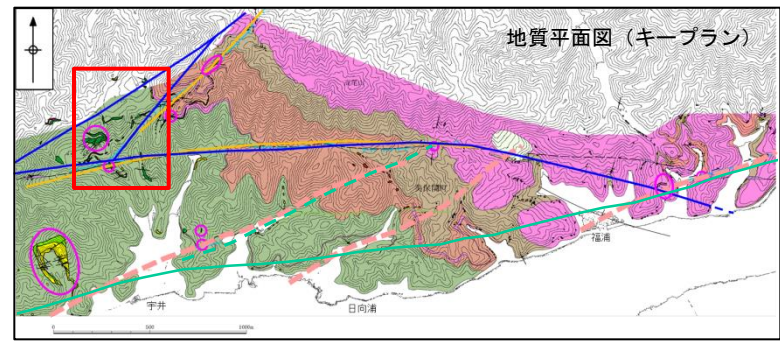
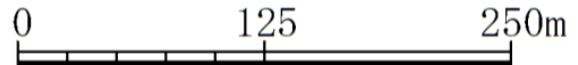
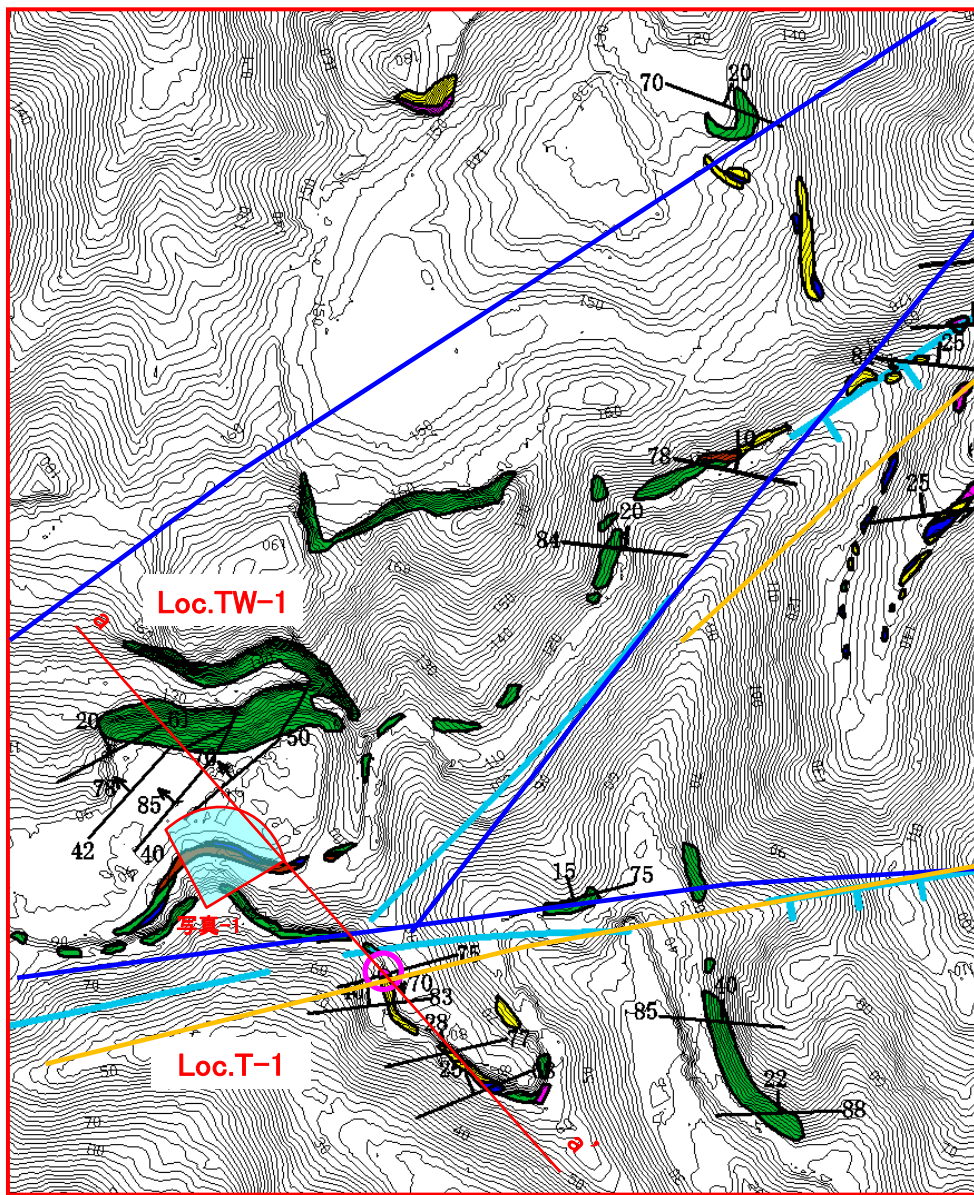
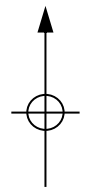


今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層
 同上の推定活断層
 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層、伏在断層(縮尺:5万分の1)
 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント(高尾山リニアメントの東側は文献の図郭範囲まで記載)



宇井～福浦(高尾山南側(南))

- ・ピット調査(Loc.T-4)の結果、断層は認められない。
- ・地表地質踏査の結果、Loc.T-5に2条の正断層(a断層, b断層)が認められる。上載地層が存在しないため、最新活動時期の確定には至っていないもの、これらの断層に対応する変位地形・リニアメントは認められず、また破碎幅の大きいa断層は固結・密着している。



- 今泉ほか編(2018)による突道(鹿島)断層
- - - 同上の推定活断層
- 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層 (縮尺:5万分の1)
- 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント

— 変位地形・リニアメント(Dランク)

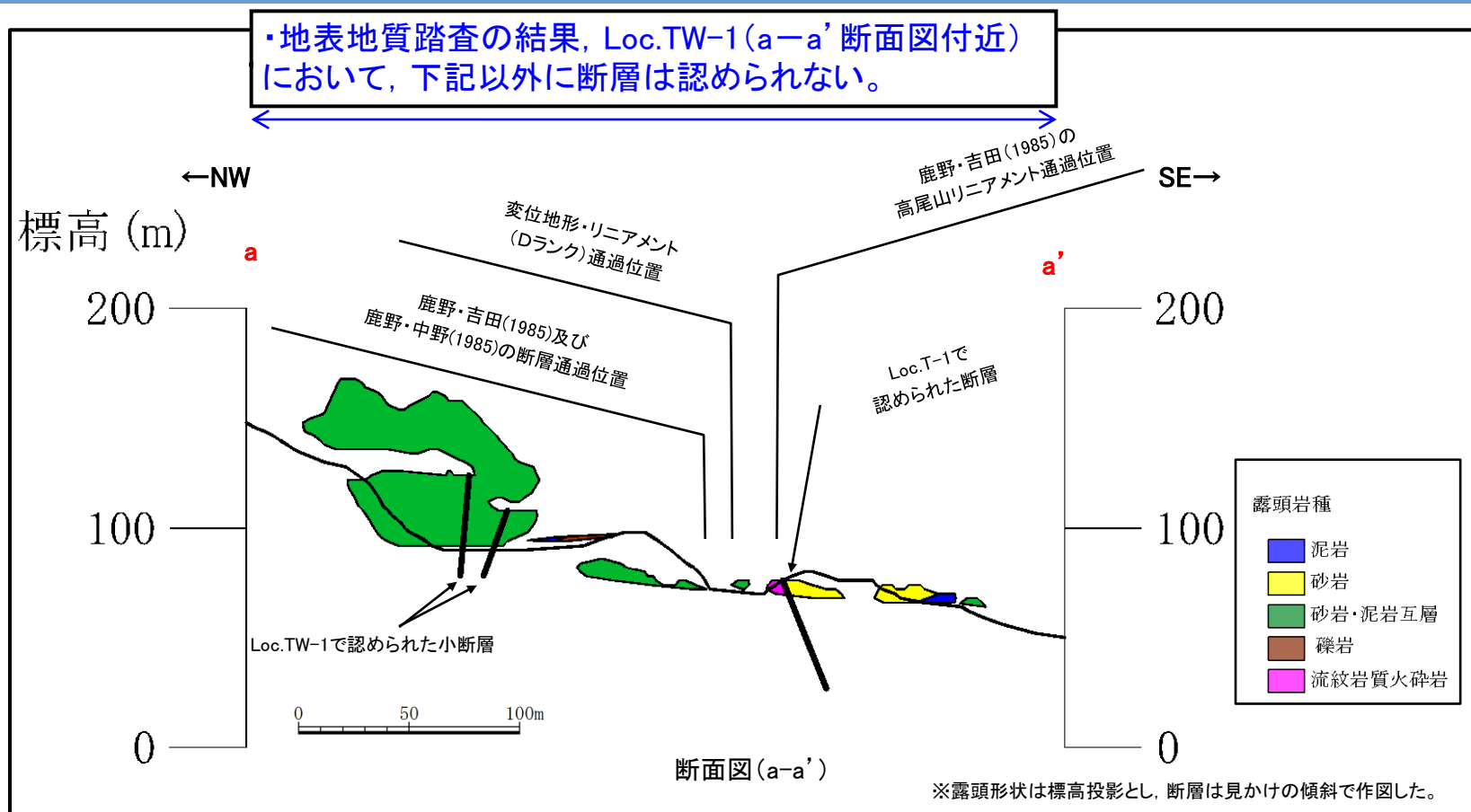
○ 調査地点

- 露頭位置
- 層理面の走向・傾斜
- 断層面の走向・傾斜

- 露頭岩種
- 泥岩
 - 砂岩
 - 砂岩・泥岩互層
 - 礫岩
 - 流紋岩質火砕岩

地表地質踏査の結果, a-a' 断面図に示す断層以外に, 断層は認められない。

地表地質踏査(地質断面図(Loc. TW-1))



・a-a' 断面図付近では, 文献断層及び変位地形・リニアメントの通過位置付近を含む幅広い地表地質踏査の結果, Loc.T-1で確認した断層及びTW-1で確認した断層以外に, 断層は認められない。

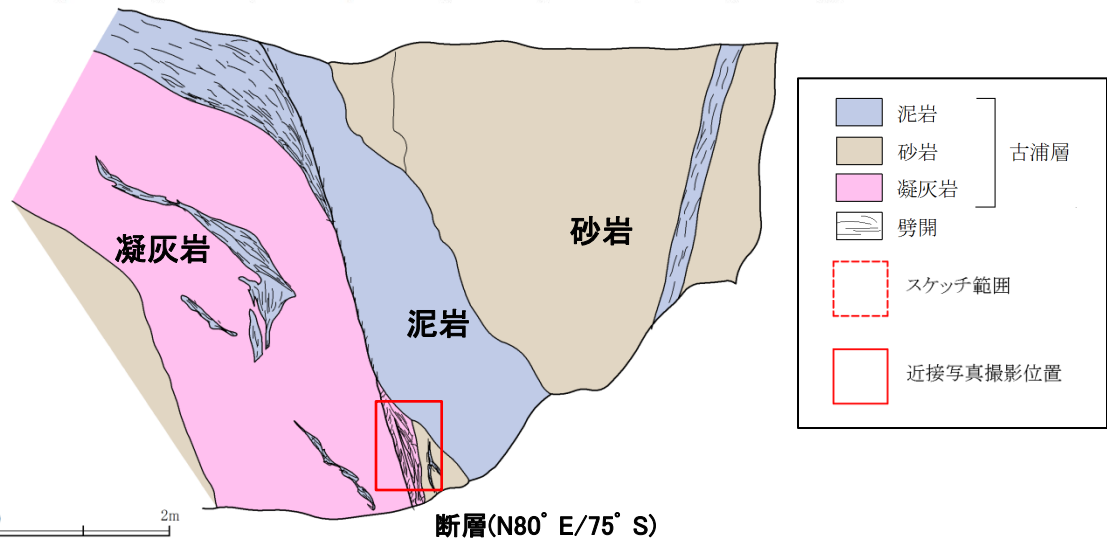
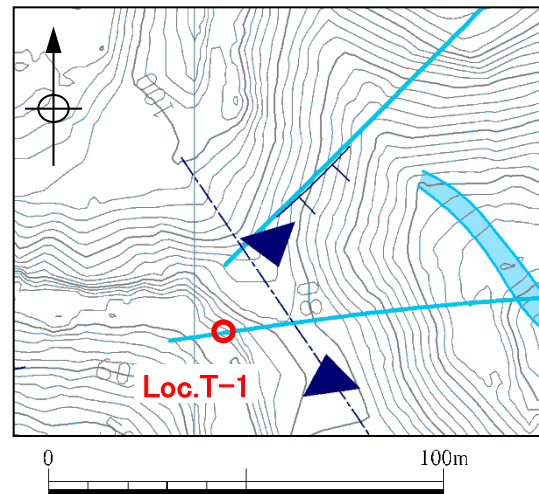
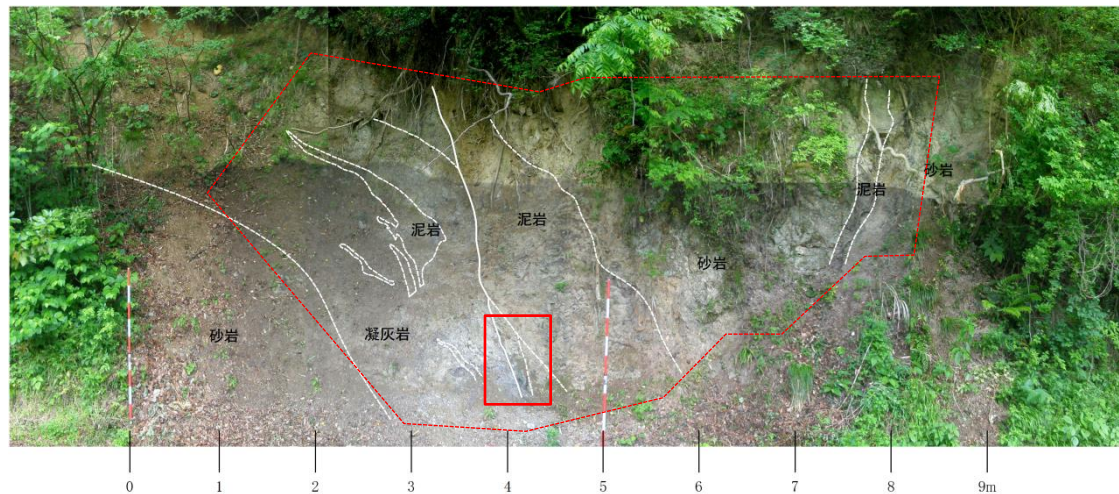
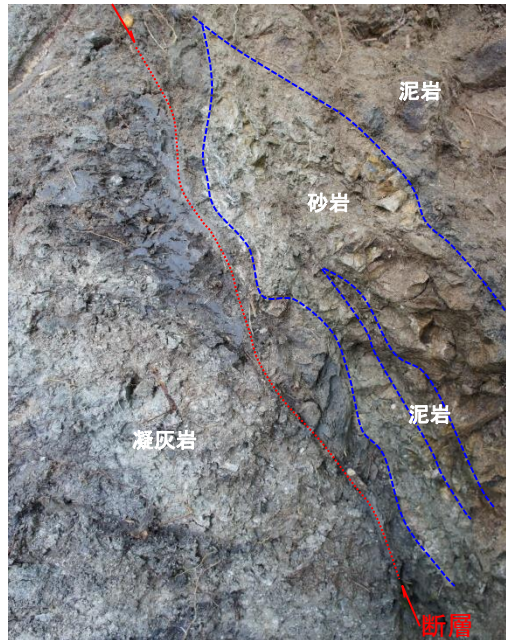
・変位地形・リニアメント及び高尾山南側に示された文献断層に対応する断層として, Loc.T-1において断層(N80° E/75° S)が認められたことから, 後期更新世以降の断層活動の有無を評価するため, はぎ取り調査(Loc.T-1)及び研磨片観察等を行った。

・Loc.TW-1における断層については, 主として2条の正断層変位を伴う小断層(N40° E/85° NW, N50° E/70° NW)であり, 上部の古浦層の泥岩または砂岩・泥岩互層に変位や変形は認められず, また, いずれの断層沿いにも, ガウジや角礫部は認められず固結・密着していることから, 後期更新世以降の断層活動は認められない(次頁参照)。また, これらの断層は, 後述する高尾山西側に示された文献断層とほぼ同走向であることから, 文献断層に対応する断層と考えられる。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) 宇井～福浦(はぎ取り調査(Loc.T-1))

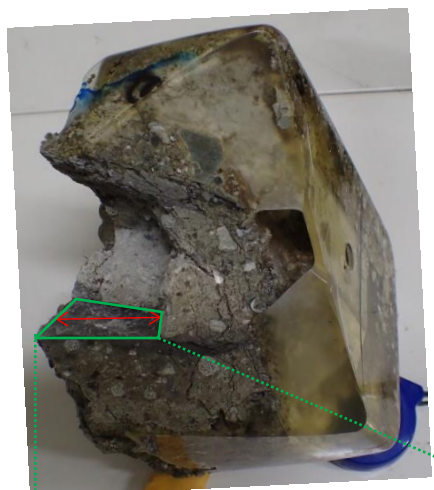
近接写真

(試料採取のためスケッチ時よりも掘り込んでいる)



- ・はぎ取り調査の結果、古浦層中に断層が認められ、その周辺には正断層センスの引きずり込み構造が認められる。
- ・幅6mm程度の灰色を呈する断層ガウジは見られるが、断層面は凹凸が著しい。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)
宇井～福浦(断層面の実体顕微鏡観察(Loc.T-1))

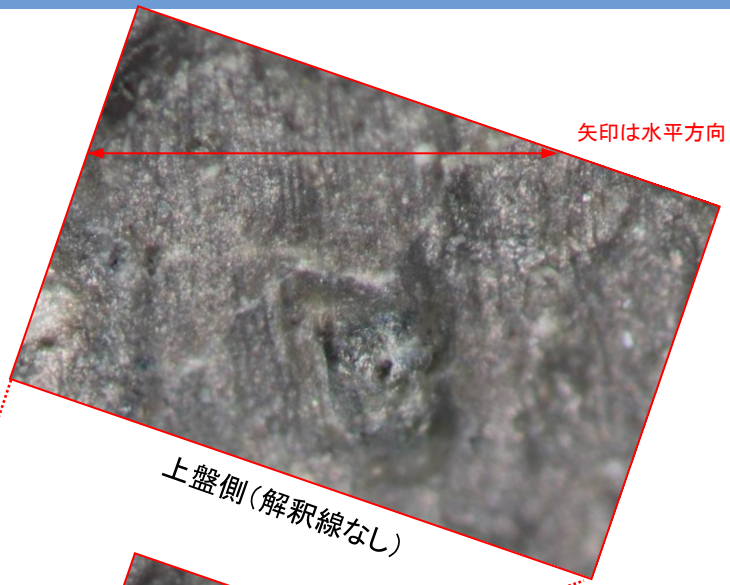


矢印は水平方向



断層面を下から撮影
矢印は水平方向

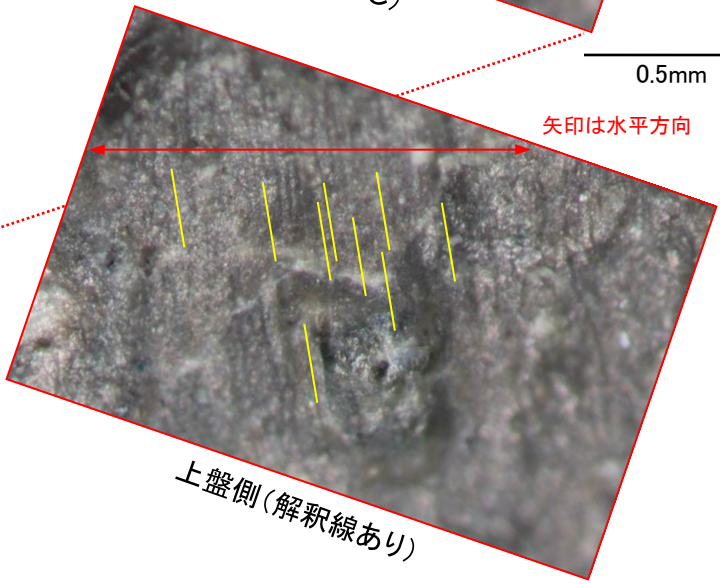
10mm



矢印は水平方向

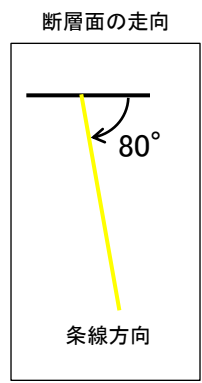
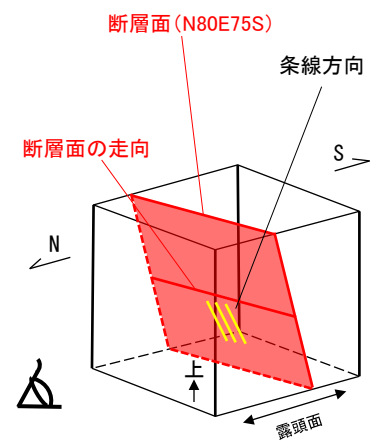
上盤側(解釈線なし)

0.5mm



矢印は水平方向

上盤側(解釈線あり)



(注)上盤側を下から撮影したため、回転方向は見掛け右回転であるが、左回転となる。

・実体顕微鏡による条線観察の結果、上盤側に、縦ずれ(走向方向から80°左回転, T:S24W P:72)の条線が認められる。また、はぎ取り調査の結果では、正断層センスである。

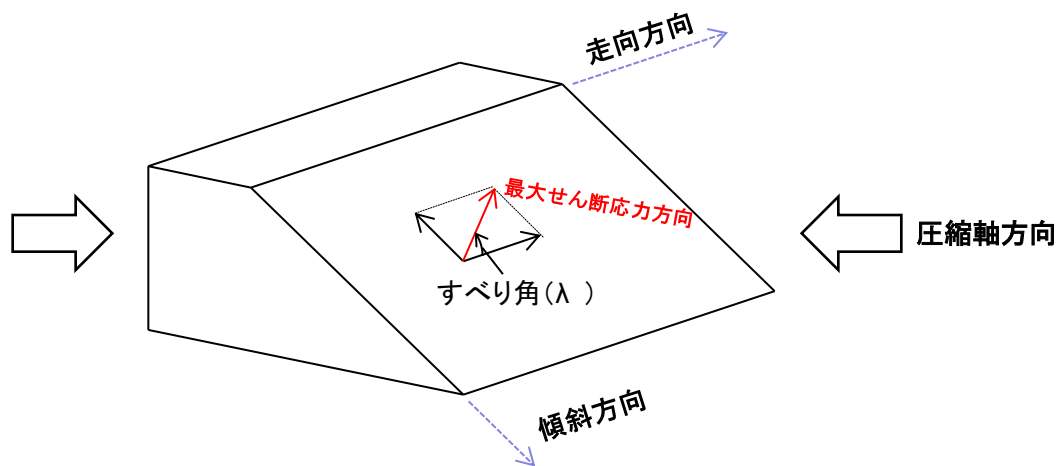
・条線観察結果は、現在の応力場を東西圧縮応力場として推定されるすべり角の計算結果と対応しない(次頁参照)。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)

Loc. T-1 (破碎部の条線方向と東西圧縮応力場で推定されるすべり角の比較検討)

【検討方法】

すべり角は断層面上の最大せん断応力方向と一致するという仮定に基づき、現在の応力場を東西圧縮応力場として推定されるLoc.T-1のすべり角を推定し、条線方向と比較検討した。



地点名	観察結果			計算値	検討結果
	走向	傾斜	条線方向	東西圧縮応力場で推定されるすべり角(λ 1)	
Loc.T-1	N80E (概ね東西系)	75S	80° 左回転 (λ =80°) (正断層センス)	3° 右回転 (λ =357°) (右横ずれ断層センス)	条線方向: 東西圧縮応力場で推定されるすべり角と対応しない。

1. 宧道断層の評価 (2) 地質調査(宧道断層の東側)

(参考) すべり角の推定に用いた計算方法

断層面を座標変換後の面として表し、現在の応力場に働く力が、変換後の面(断層面)において、どの方向に作用するのかを算出した。

ある面の、X軸まわりの回転角を ω 、Y軸まわりの回転角を ϕ 、Z軸まわりの回転角を κ としたとき、座標変換マトリクスは以下のように与えられる。

$$R = \begin{bmatrix} Lx & Mx & Nx \\ Ly & My & Ny \\ Lz & Mz & Nz \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \cos\phi \cdot \cos\kappa & -\cos\phi \cdot \sin\kappa & \sin\phi \\ \cos\omega \cdot \sin\kappa + \sin\omega \cdot \sin\phi \cdot \cos\kappa & \cos\omega \cdot \cos\kappa - \sin\omega \cdot \sin\phi \cdot \sin\kappa & -\sin\omega \cdot \cos\phi \\ \sin\omega \cdot \sin\kappa - \cos\omega \cdot \sin\phi \cdot \cos\kappa & \sin\omega \cdot \cos\kappa + \cos\omega \cdot \sin\phi \cdot \sin\kappa & \cos\omega \cdot \cos\phi \end{bmatrix}$$

阿部ほか編(1991)によると、変換後の面に作用する応力成分 $\sigma z'$ 、 $\tau yz'$ 、 $\tau xz'$ は、上記の座標変換マトリクスと変換前の座標に作用する応力成分を用いて、以下の式から計算される。

$$\begin{Bmatrix} \sigma z' \\ \tau yz' \\ \tau xz' \end{Bmatrix} = \begin{bmatrix} Lx^2 & Mx^2 & Nx^2 & 2 \cdot Lx \cdot Mx & 2 \cdot Mx \cdot Nx & 2 \cdot Lx \cdot Nx \\ Lx \cdot Ly & Mx \cdot My & Nx \cdot Ny & Mx \cdot Ly + Lx \cdot My & Nx \cdot My + Mx \cdot Ny & Nx \cdot Ly + Lx \cdot Ny \\ Lx \cdot Lz & Mx \cdot Mz & Nx \cdot Nz & Mx \cdot Lz + Lx \cdot Mz & Nx \cdot Mz + Mx \cdot Nz & Nx \cdot Lz + Lx \cdot Nz \end{bmatrix} \begin{Bmatrix} \sigma X \\ \sigma Y \\ \sigma Z \\ \tau XY \\ \tau YZ \\ \tau ZX \end{Bmatrix}$$

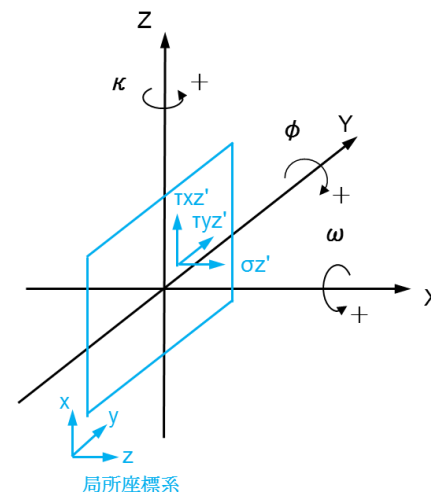
現在の応力場の方向を、「東西圧縮」と仮定し、面内に作用する応力を、 $\sigma X=-1$ 、 $\sigma Y=\sigma Z=\tau XY=\tau YZ=\tau ZX=0$ 、とすると、上式は以下の式となる。

$$\tau yz' = -Lx \cdot Ly = -(\cos\phi \cdot \cos\kappa) \cdot (\cos\omega \cdot \sin\kappa + \sin\omega \cdot \sin\phi \cdot \cos\kappa)$$

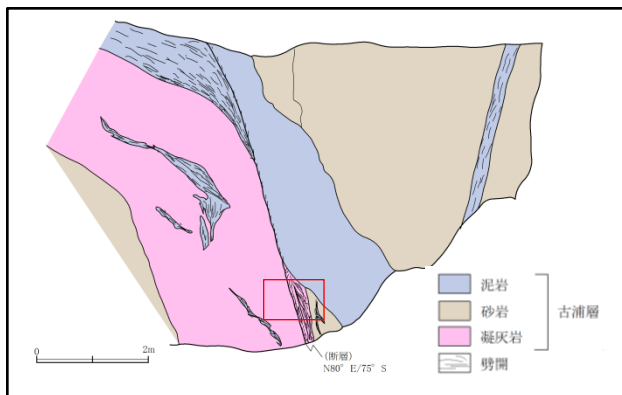
$$\tau xz' = -Lx \cdot Lz = -(\cos\phi \cdot \cos\kappa) \cdot (\sin\omega \cdot \sin\kappa - \cos\omega \cdot \sin\phi \cdot \cos\kappa)$$

したがって、すべり角 λ は下式となる。

$$\lambda = \tan^{-1} \frac{\tau xz'}{\tau yz'}$$

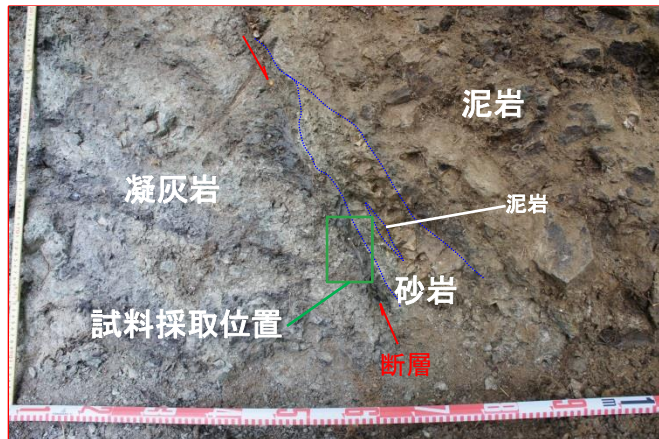


1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
宇井～福浦(研磨片観察及びCT画像解析(Loc.T-1: 断層の走向方向))

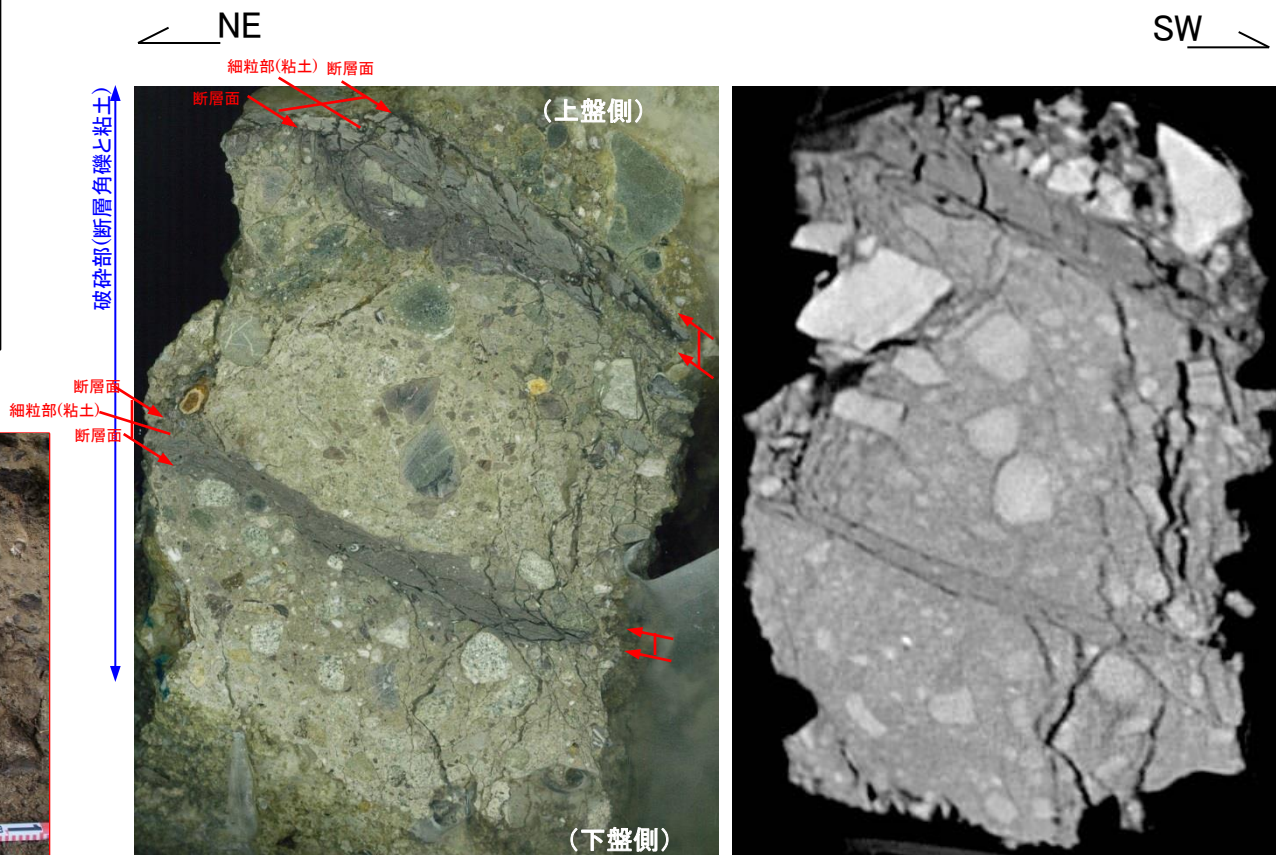


近接写真

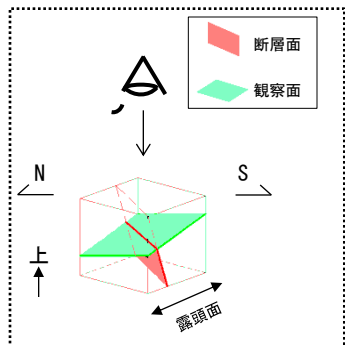
(試料採取のためスケッチ時よりも掘り込んでいる)



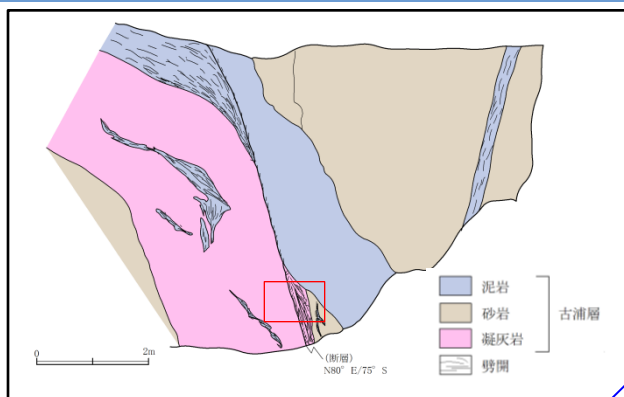
Loc.T-1 走向方向の研磨片観察及びCT画像解析(上方からみた画像)



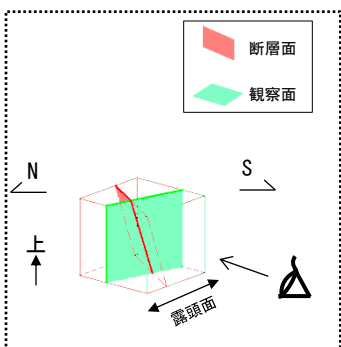
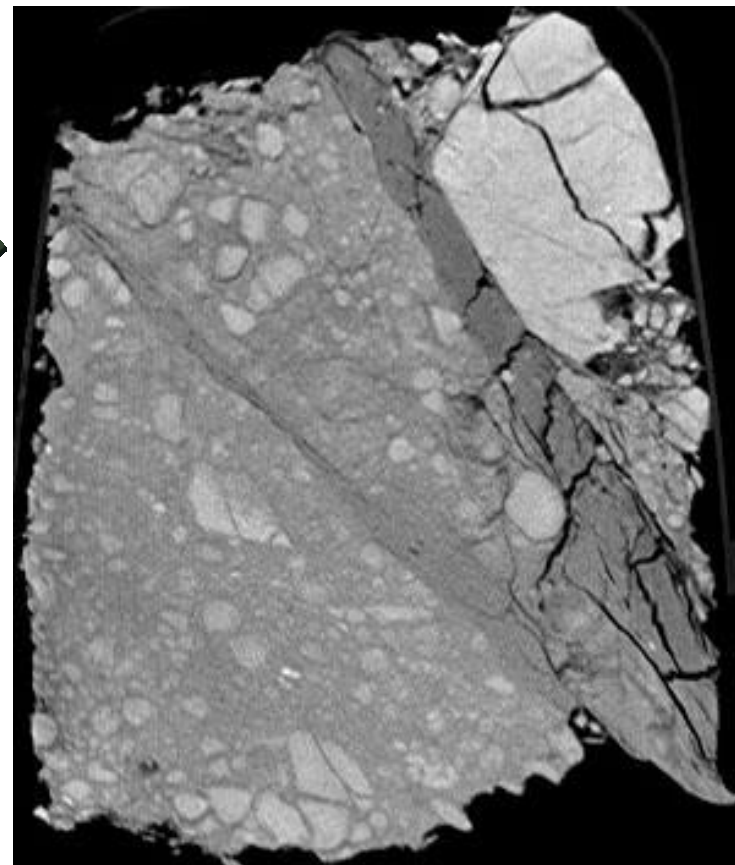
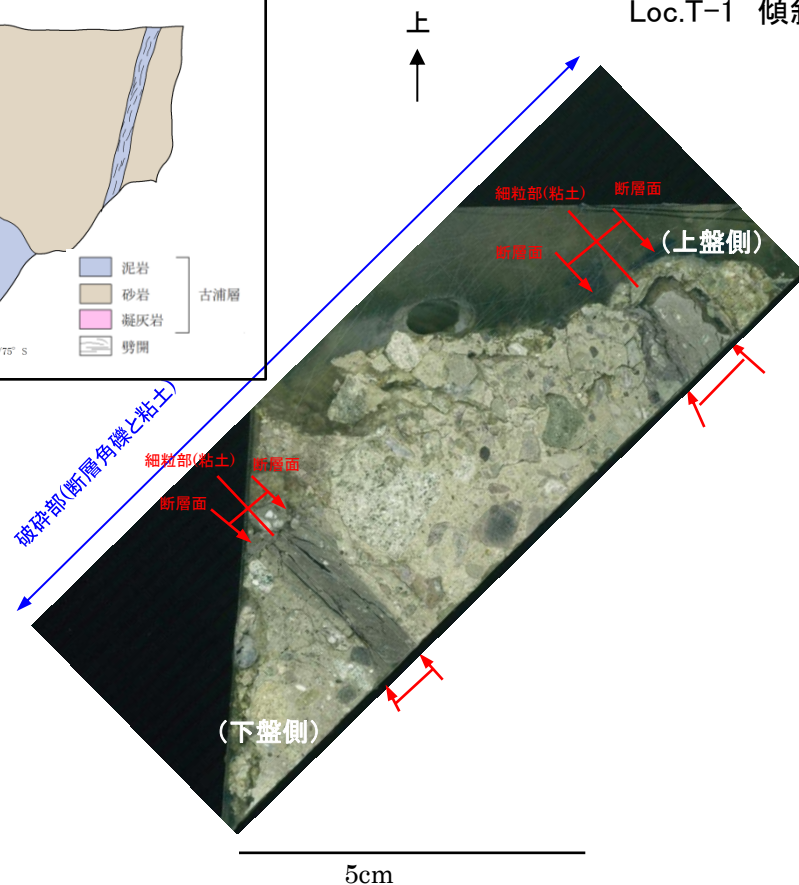
- ・研磨片観察及びCT画像解析の結果、直線性が比較的高い断層面(写真中央)について詳細観察を行った。
- ・CT画像解析の結果、細粒部で低密度部が認められる。
- ・研磨片観察の結果、幅6mm程度の灰色を呈する細粒部が見られるが、積層構造及び複合面構造は認められない。



1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)
宇井～福浦(研磨片観察及びCT画像解析(Loc.T-1:断層の傾斜方向))



Loc.T-1 傾斜方向の研磨片観察及びCT画像解析



- ・断層の走向方向と同様に、直線性が比較的高い断层面(写真中央)について詳細観察を行った。
- ・CT画像解析の結果、細粒部で低密度部が認められる。
- ・研磨片観察の結果、幅6mm程度の灰色を呈する細粒部が見られるが、積層構造及び複合面構造は認められない。

・研磨片観察等の結果、南講武の活断層に見られる複合面構造等の特徴は確認されない。

Loc.TW-1 (露頭スケッチ)

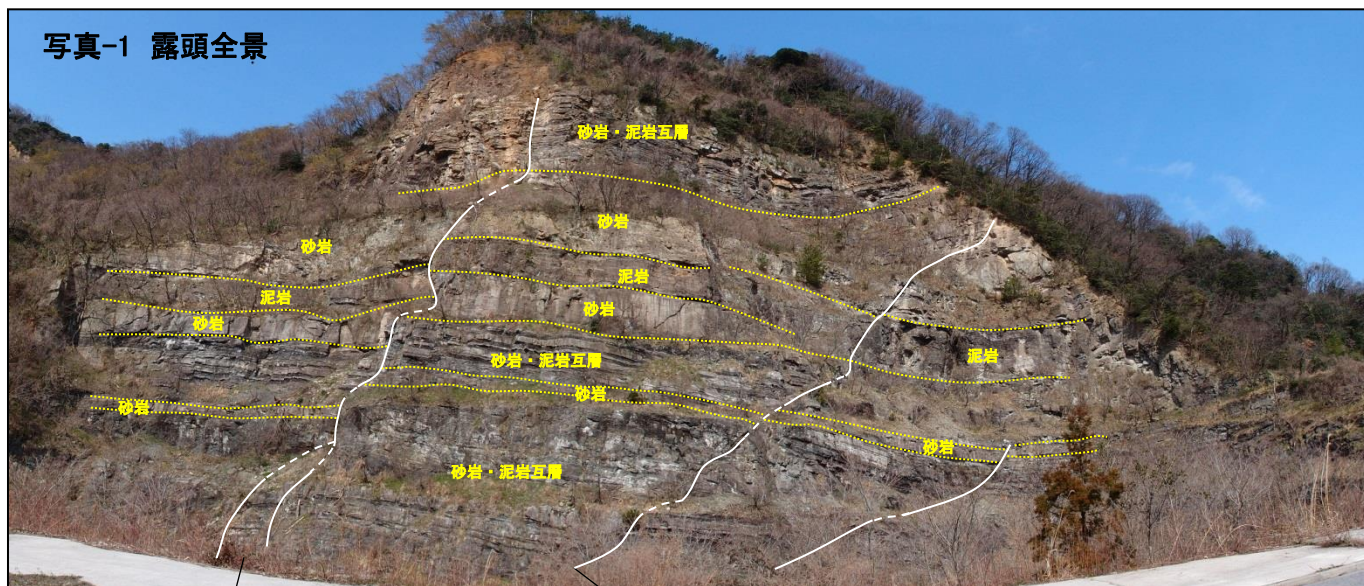
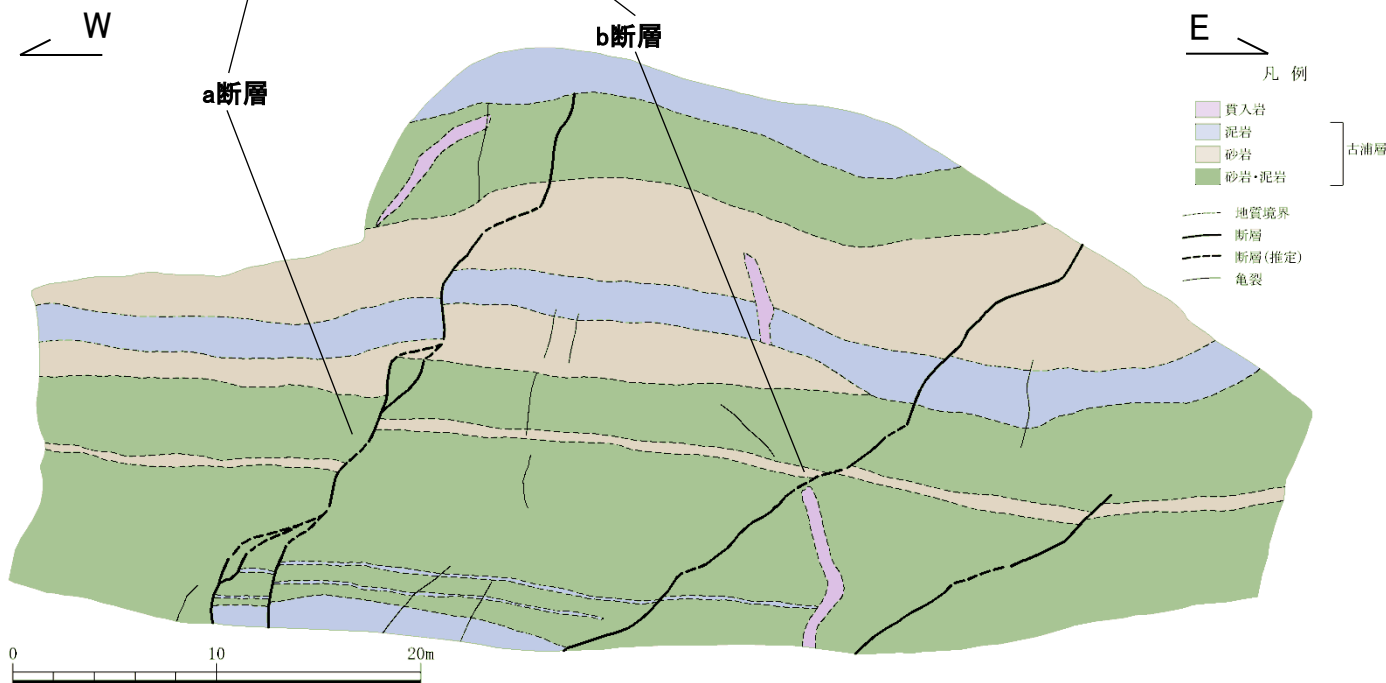
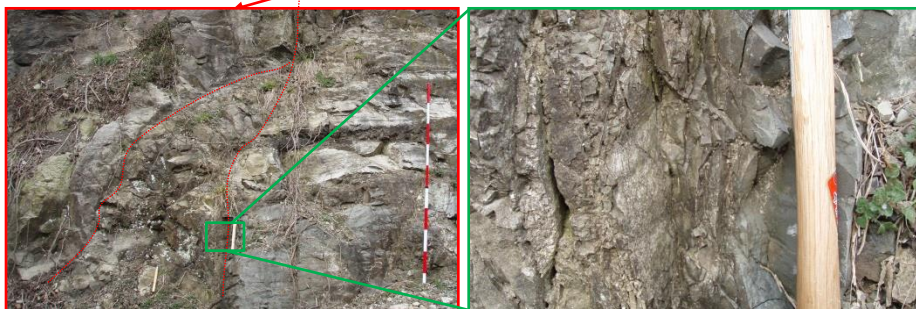


写真-1 露頭全景



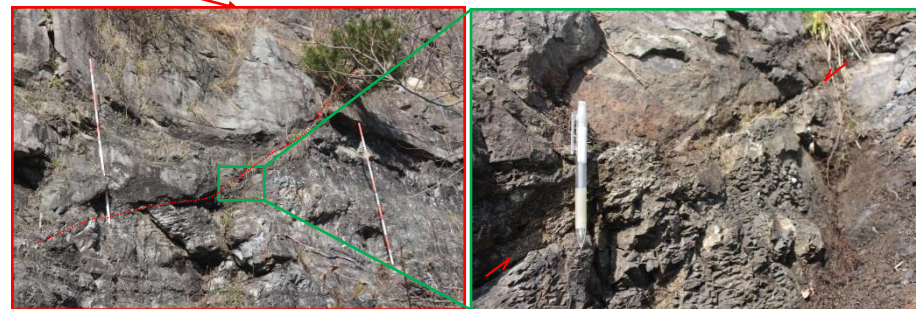
- ・Loc.TW-1は、古浦層の砂岩・泥岩及び貫入岩から成り、数条の小断層が認められる。これらの小断層のうち比較的連続性の良い断層は、a断層及びb断層の2条である。
- ・a断層は、N40E/85NWの走向傾斜を示し、古浦層砂岩・泥岩に正断層変位を与えているが、上部の古浦層泥岩に変位や変形は認められず不明瞭となる。
- ・b断層は、N50E/70NWの走向傾斜を示し、下部の古浦層砂岩に僅かな正断層変位を与えている。

Loc.TW-1(露頭写真)



【a断層】

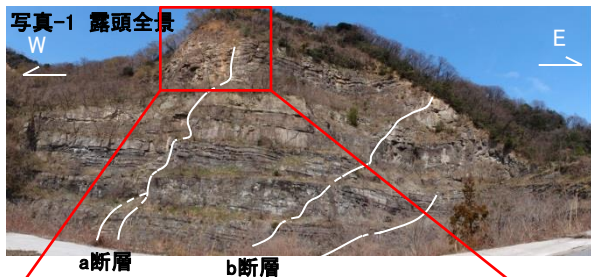
- ・ N40E/85NWの走向傾斜を示す。
- ・断層沿いには、ガウジや角礫部は認められず、固結・密着している。



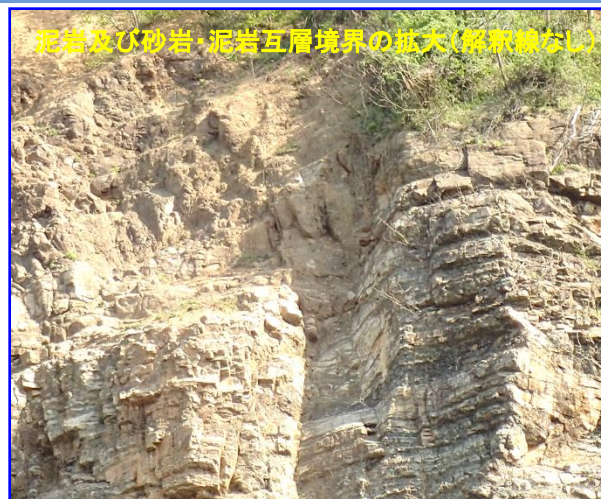
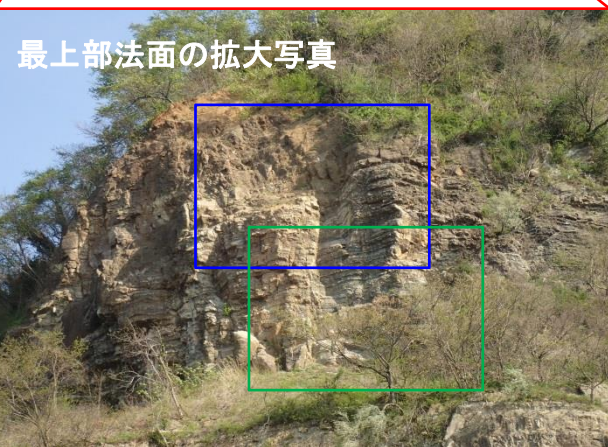
【b断層】

- ・ N50E/70NWの走向傾斜を示す。
- ・断層沿いには、ガウジや角礫部は認められず、固結・密着している。

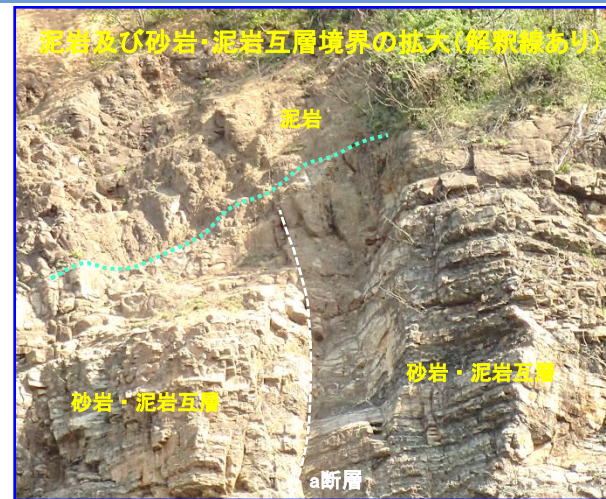
- ・ Loc.TW-1において、比較的連続性の良い小断層としてa断層及びb断層が認められる。
- ・ a断層は、N40E/85NWの走向傾斜を示し、古浦層砂岩・泥岩に正断層変位を与えているが、上部の古浦層泥岩に変位や変形は認められず不明瞭となる。
- ・ b断層は、N50E/70NWの走向傾斜を示し、下部の古浦層砂岩に僅かな正断層変位を与えている。
- ・ いずれの断層沿いにも、ガウジや角礫部は認められず、固結・密着している。



最上部法面の拡大写真



- ・a断層は、上部の古浦層泥岩中では不明瞭となる。
- ・泥岩に変位や変形は認められない。



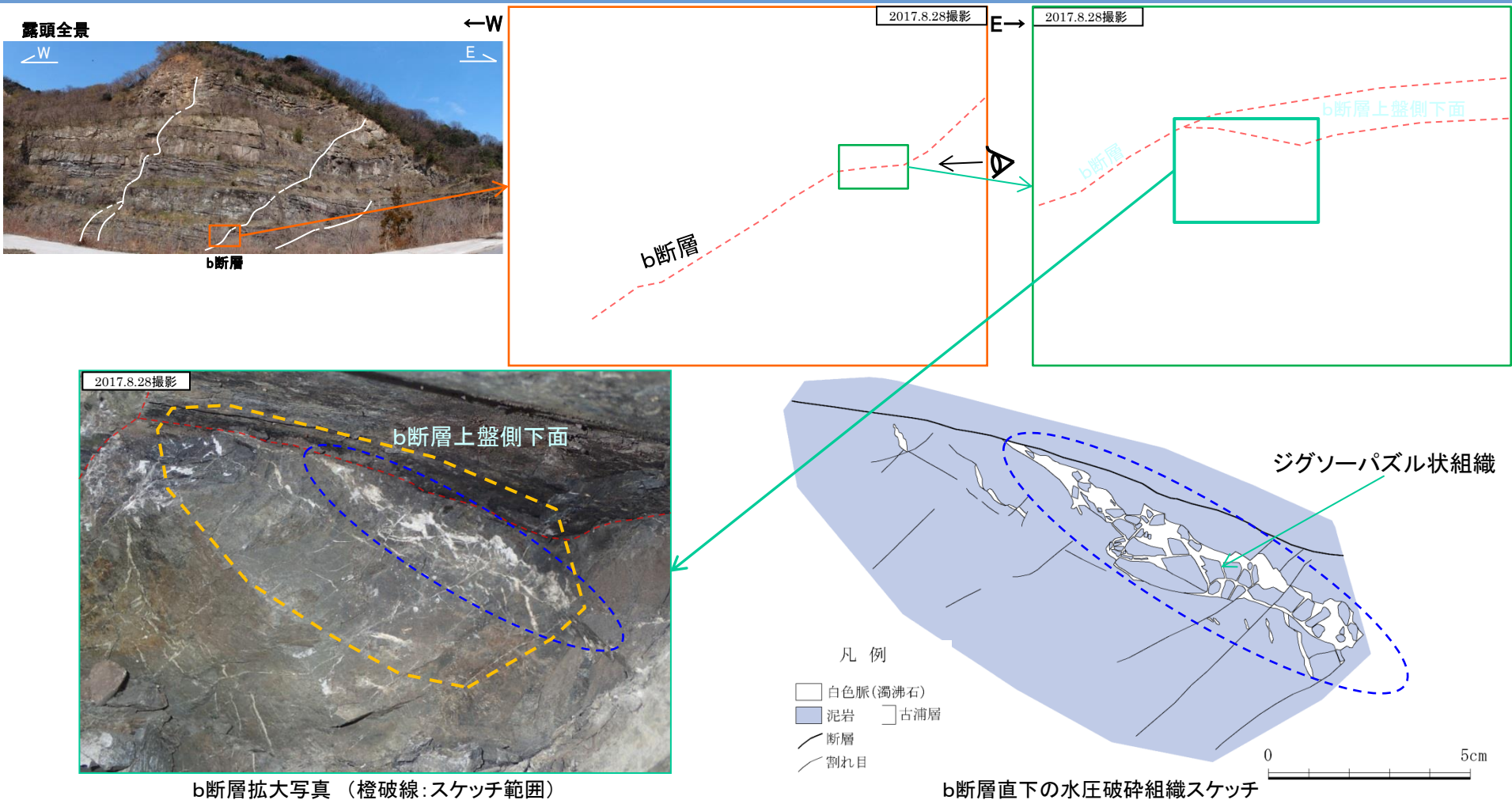
- ・a断層を境に、砂岩及び砂岩・泥岩互層との境界に変位は認められない。

・a断層及びb断層の走向傾斜及び性状は類似し、ほぼ同時期に活動したと考えられることから、変位量が大きいa断層を代表として法面上部の詳細観察を行った。

・a断層は、法面上部で地層に変位・変形を与えず、最上部の古浦層泥岩中で不明瞭となり、消滅している。

・以上のことから、これらの断層は性状等も踏まえると後期更新世以降の断層活動は認められないと考えられる。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側) Loc.TW-1 (b断層直下の鉱物脈)



b断層拡大写真 (橙破線:スケッチ範囲)

b断層直下の水圧破碎組織スケッチ

・b断層は固結・密着している。b断層直下には、角張って不規則な形態を有する岩片の周囲を充填するように白色脈が認められる。この白色脈はb断層に接し、変位・変形を受けず固結・密着している。

・角張った岩片と白色脈がなす組織は、ジグソーパズル状組織(次頁参照)を示すことから水圧破碎によって形成されたと考えられる。白色脈は、水圧破碎時に破断面に沿って注入された流体から晶出したと考えられる。

・白色脈はX線回折分析の結果、濁沸石であることが確認された。

以上のことから、b断層は固結・密着し、またb断層に接する水圧破碎組織は変位・変形を受けず固結・密着しているため、濁沸石形成後活動していないと考えられる。

(参考) 水圧破碎の指標となる組織

水圧破碎に伴い破断面に沿って流体が注入されて形成される組織について、狩野・村田(1998)⁽⁴⁶⁾は以下のとおりとしている。

- ・水圧破碎とは、間隙水圧がその岩石内の最小主応力と引張強度の和よりも大きな場合に岩石内に亀裂が発生する現象であり、地層内では異常間隙水圧状態にある未固結の地層が、水圧破碎によって破壊された周囲のより脆性的な地層中に注入されていく。
- ・水圧破碎は引張破碎組織の一種であり、脆性的な破壊と延性的な流動組織が混在している。水圧破碎による破断面の特徴は、三次元的に方向性が不明瞭で、枝分かれし角張った不規則な形態を有していることである。(中略)破壊のされはじめは不規則角礫状の破碎によって、三次元的なジグソーパズル状組織が形成される。



図X.3-11 水圧破碎による不規則な角礫状破碎組織

いずれも明色部が砂岩、暗色部が泥質基質。

A: ジグソーパズル状組織、北西アラスカの白亜系コデアック層。

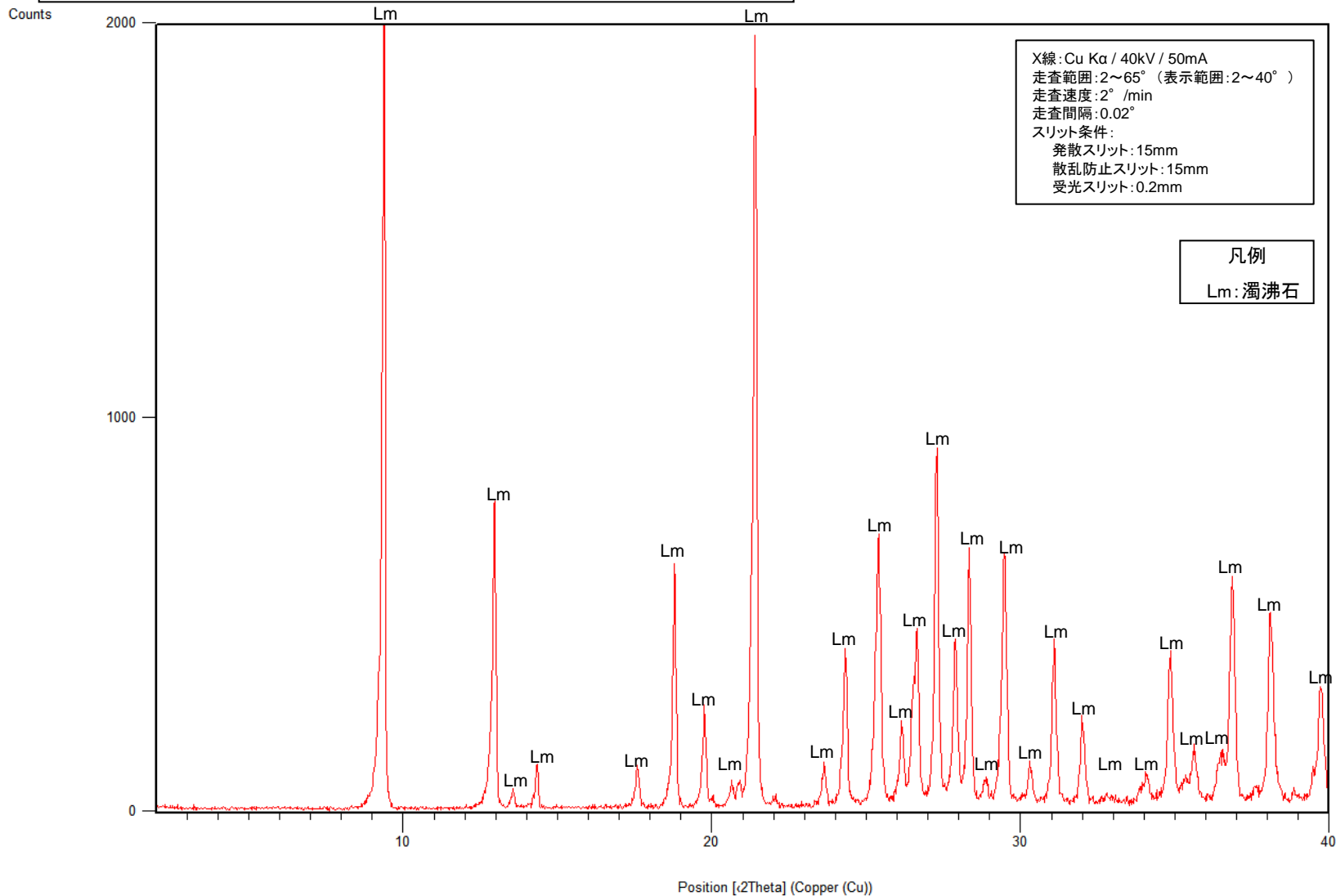
B: 泥質基質中の不規則角礫状砂岩塊、ニュージーランド北島の中生代 Waipapa Melange。

水圧破碎による不規則な角礫状破碎組織

狩野・村田(1998)より引用・加筆

(参考) X線チャート

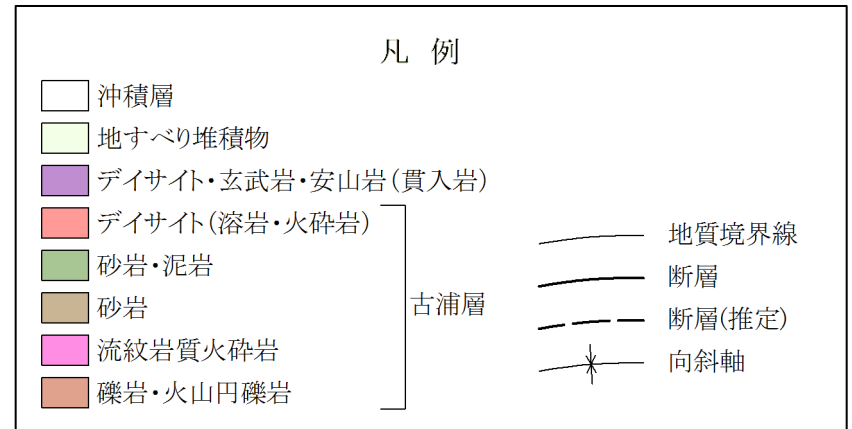
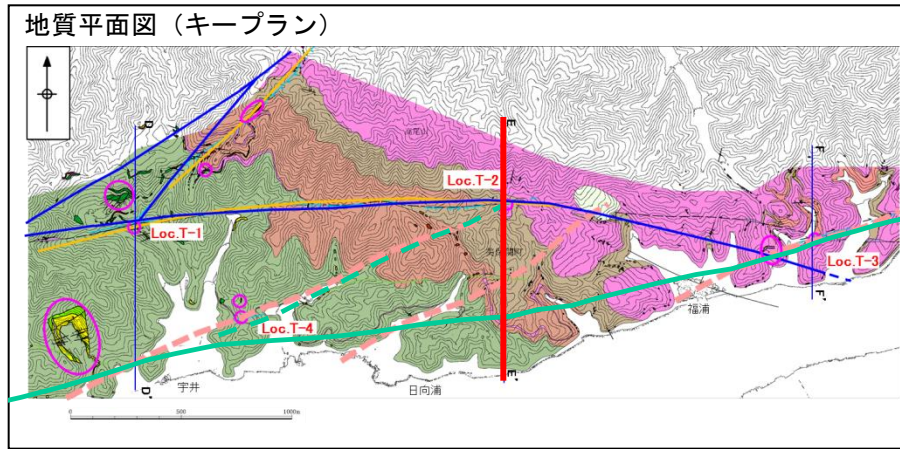
Loc.TW-1 (b断層直下の白色脈) 不定方位



・b断層下盤に認められる白色脈は分析の結果、濁沸石であった。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)

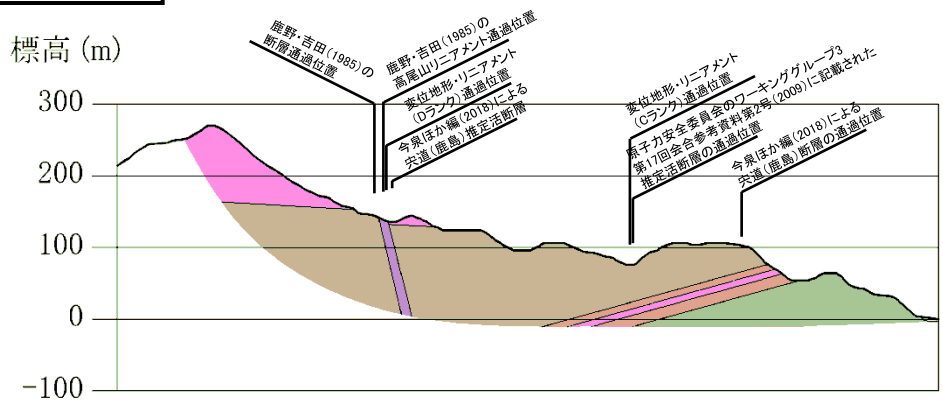
日向浦付近(地表地質踏査(地質断面図))



- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層 (縮尺: 5万分の1)
- 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント (高尾山リニアメントの東側は文献の図郭範囲まで記載)
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層, 推定活断層

○ 調査地点

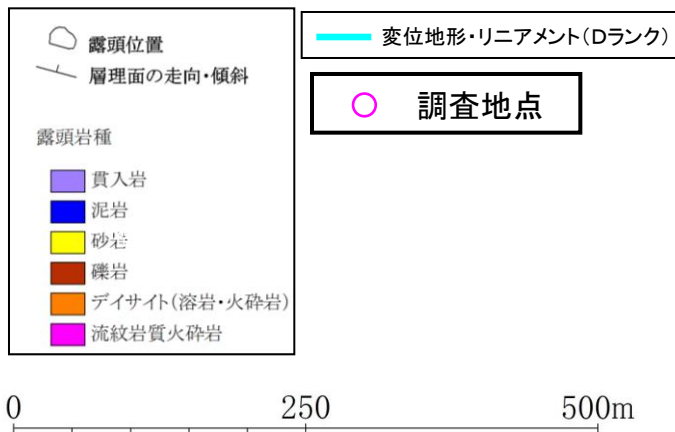
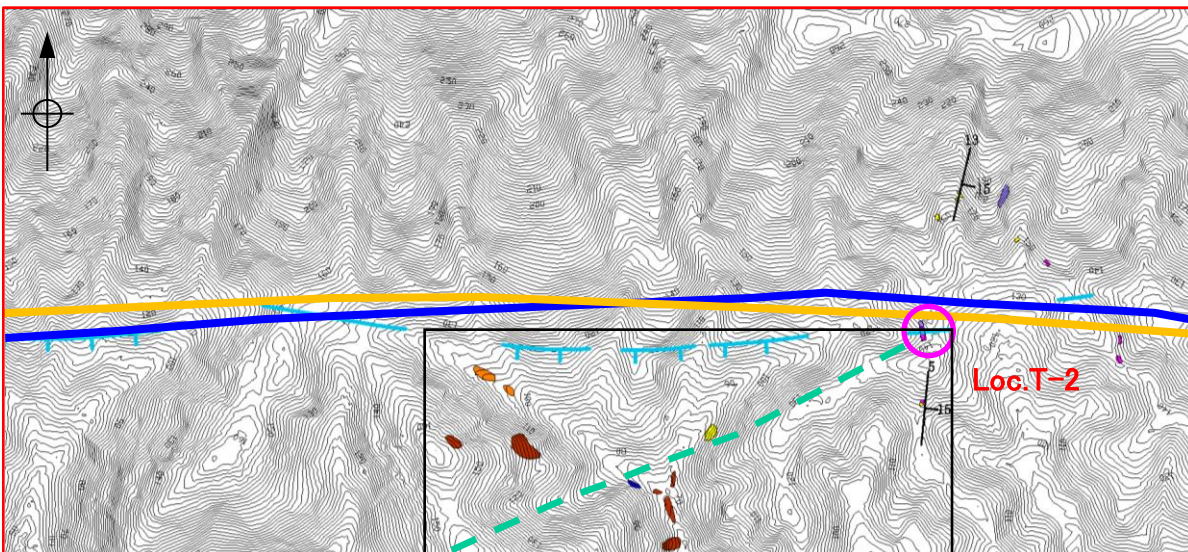
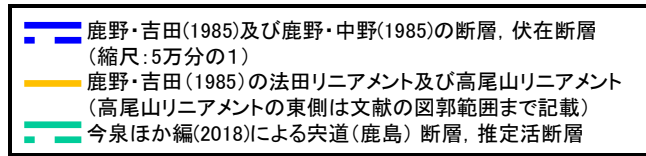
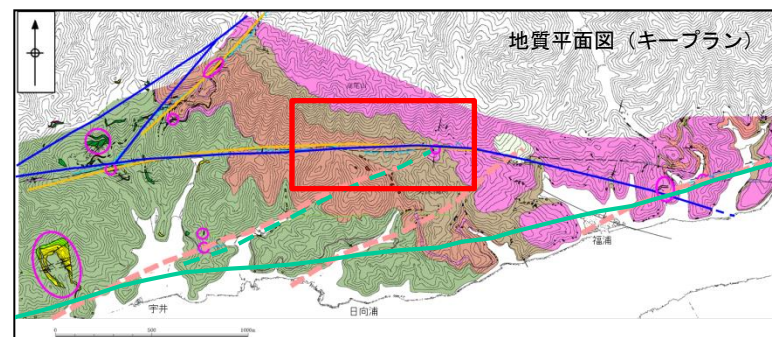
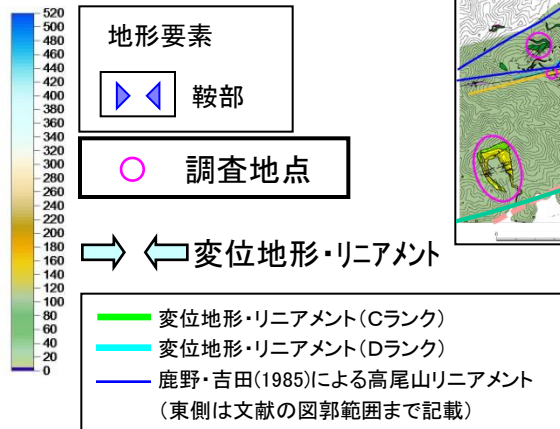
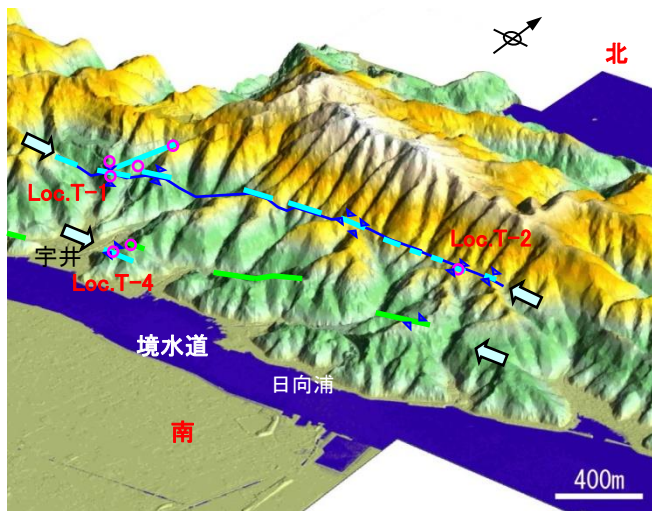
- 変位地形・リニアメント(Cランク)
- 変位地形・リニアメント(Dランク)



E-E' 断面図

・E-E' 断面図では, 北側の変位地形リニアメント及び文献断層の通過位置付近において, 古浦層の砂岩等が分布し貫入岩が認められるが, 断層は認められない。

地表地質踏査(詳細ルートマップ(Loc. T-2付近))



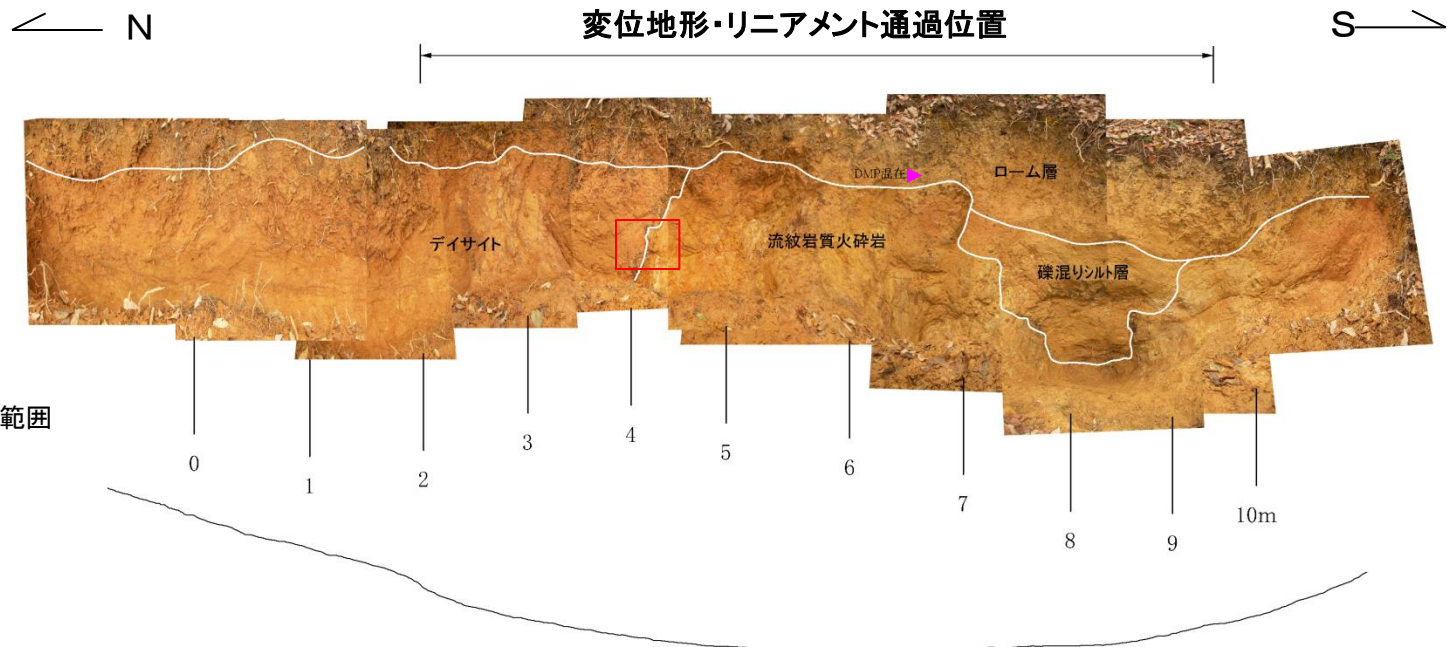
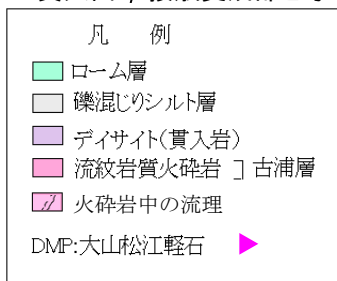
・Loc.T-2付近では、変位地形・リニアメントと文献断層の通過位置がほぼ一致し、Loc.T-1と同様な地形要素が認められることを踏まえ、地形的に断層が延長する可能性が高い鞍部において、ピット調査(Loc.T-2)を実施した。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側) 宇井～福浦(ピット調査(Loc.T-2))

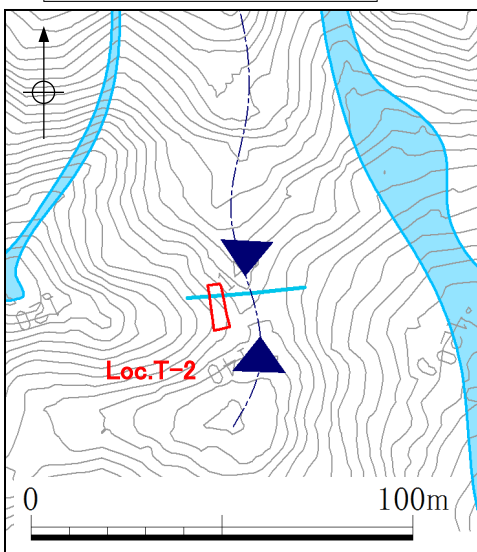
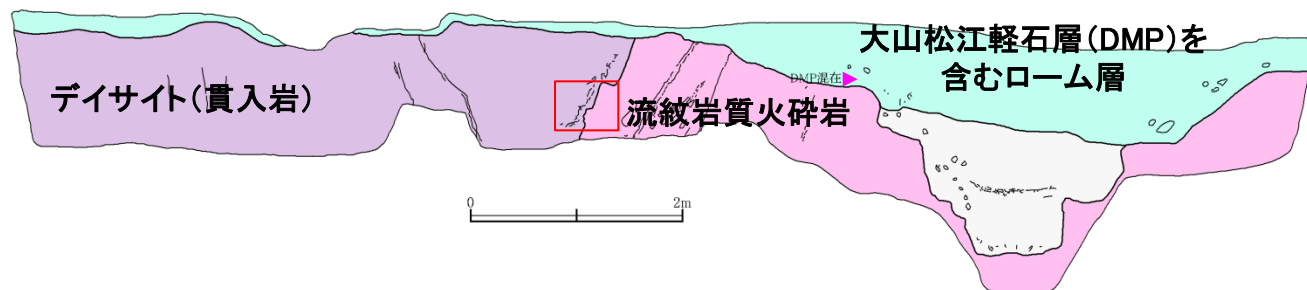
近接写真



貫入面 / 接触変成部と考えられる範囲



鞍 部



- ・変位地形・リニアメントを含む幅広いピット調査の結果、急傾斜する古浦層の流紋岩質火砕岩と貫入岩*との境界を確認したが、断層は認められず、その上位には大山松江軽石層(DMP)を含むローム層がほぼ水平に分布している。
- ・貫入境界は密着しており、古浦層の流紋岩質火砕岩は境界から幅数cmにわたり接触変成を受けて細粒化する。
- ・なお、本地点が文献断層の通過位置とほぼ一致することを踏まえると、断層が貫入岩によって置き換えられたとも考えられる。

*本地点のデイサイト(貫入岩)の貫入時期の詳細は不明であるが、下宇部尾東の安山岩(貫入岩)はK-Arの測定結果から14.6±0.3Maが得られている。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) 宇井～福浦(Loc.T-2(火山灰分析))

【Loc.T-2における火山灰分析結果(重鉱物等)】

試料採取深度 (GL- m)	重鉱物の含有量 (/3000粒子)			β 石英 (/3000粒子)	特記鉱物	
	Opx	GHo				
		5	10			15
0.2	1	9			+ (1/20000)	
0.3		8			+ (1/20000)	
0.4		5				Cum含む (1/3000)。
0.5		5				Cum含む (2/3000)。
0.6		0.5				



採取位置図

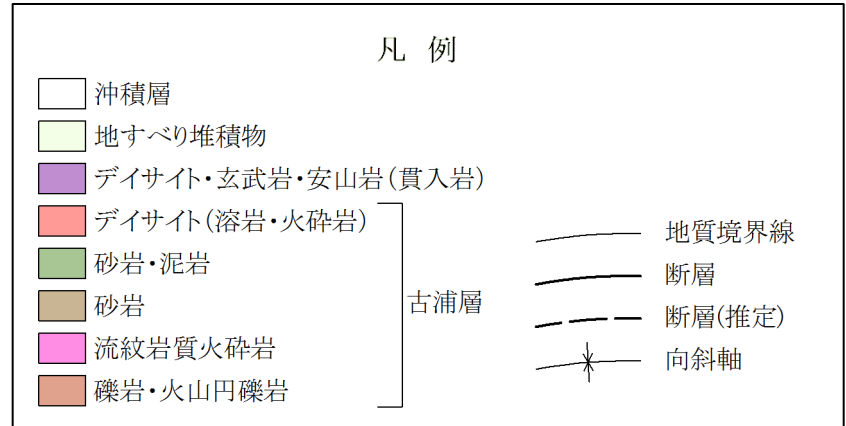
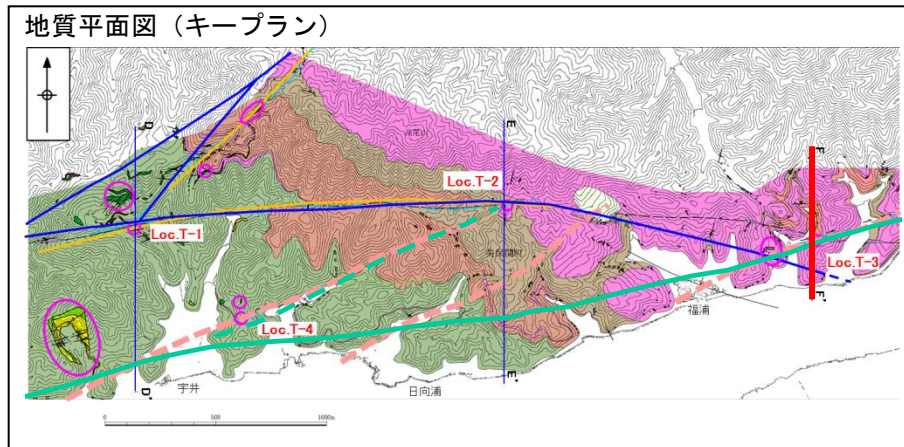
※ Opx: 斜方輝石, GHo: 普通角閃石, Cum: カシグトン閃石
含有量の値は、特に記載のない場合は3000粒子あたりの個数である。

【中国地方に分布が知られる広域テフラのうちGHOとCumを含むもの】 (町田・新井(2011)から引用)

テフラ名	年代(ka)	主な鉱物* ()は少量含まれるもの	屈折率 Opx	屈折率 GHo	屈折率 Cum
大山松江 (DMP)	<130	GHo, Cum, (bi, Opx)	—	1.670~1.676	1.656~1.664
大山奥津 (DOP)	190±60	GHo, Opx, (bi, Cum)	1.702~1.706	1.670~1.675	1.660~1.664
大山h1 (hpm1)	230±70, MIS7-6	GHo, (Cum, bi, Opx)	—	1.670~1.677	1.660~1.664

- ・町田・新井(2011)によると、中国地方に分布が知られる広域テフラのうち、GHoとCumを含むものは、大山h1 (hpm1)、大山奥津(DOP)、大山松江(DMP)が示されている。
- ・DMPについてはCumが主な鉱物とされるのに対して、hpm1とDOPについてはCumが少量含まれるとされる。
- ・Loc.T-2では、深度0.5mにGHoとCumが混在することから、DMPが含まれると想定した。

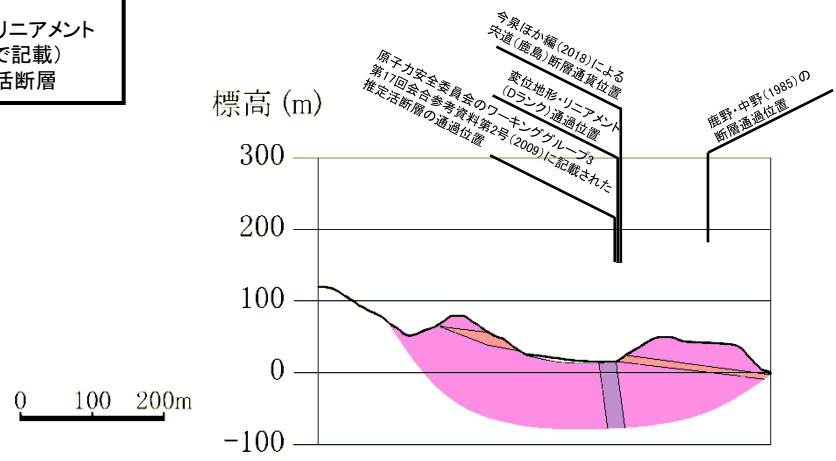
1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) 福浦付近(地表地質踏査(地質断面図))



— 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層
(縮尺: 5万分の1)
— 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び高尾山リニアメント
(高尾山リニアメントの東側は文献の図郭範囲まで記載)
— 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層, 推定活断層

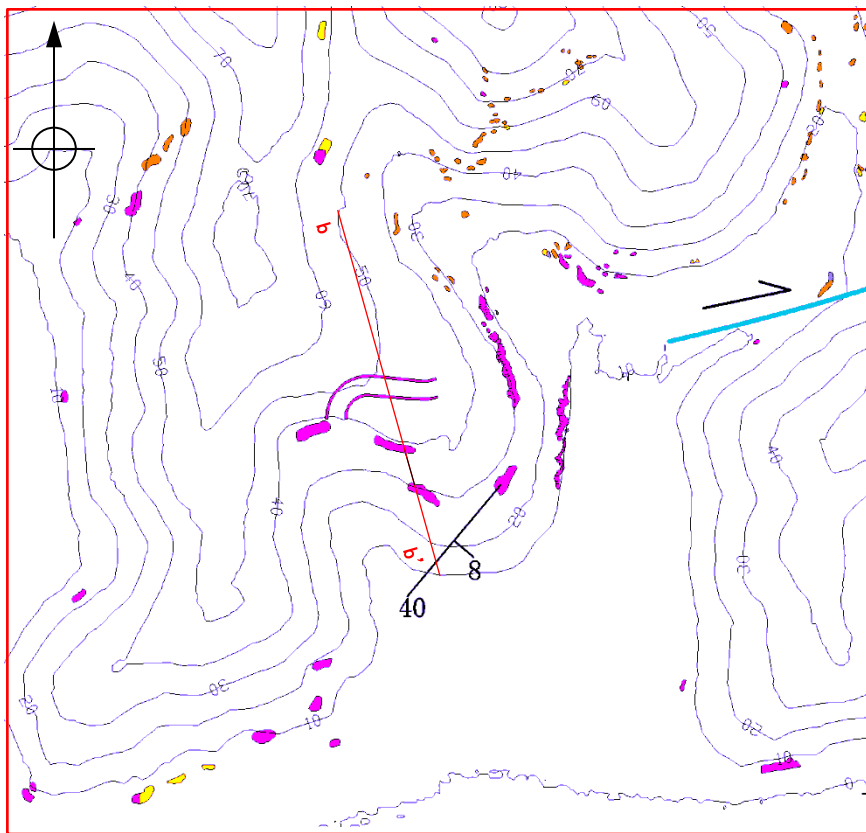
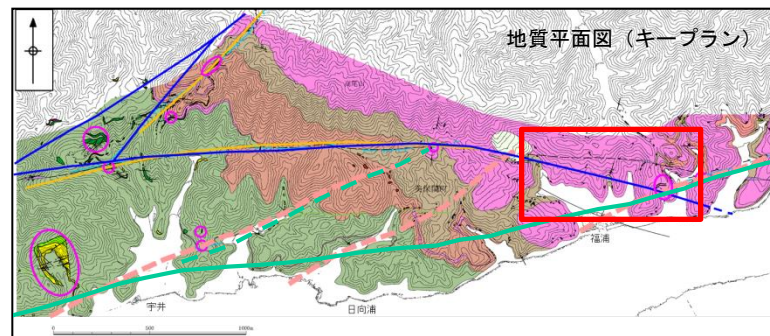
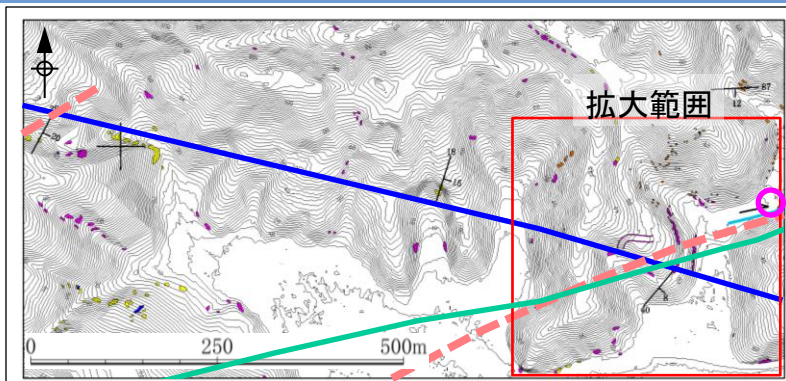
○ 調査地点

— 変位地形・リニアメント(Cランク)
— 変位地形・リニアメント(Dランク)



F-F' 断面図

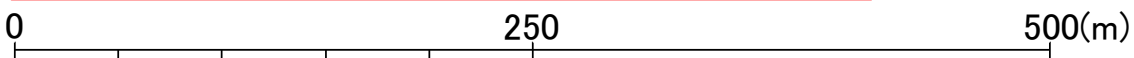
・ F-F' 断面図では, 北側の変位地形リニアメント及び文献断層の通過位置付近において, 古浦層の流紋岩質火砕岩等が分布し貫入岩が認められるが, 断層は認められない。また, 南側の文献断層の通過位置付近に断層は認められない(次頁参照)。



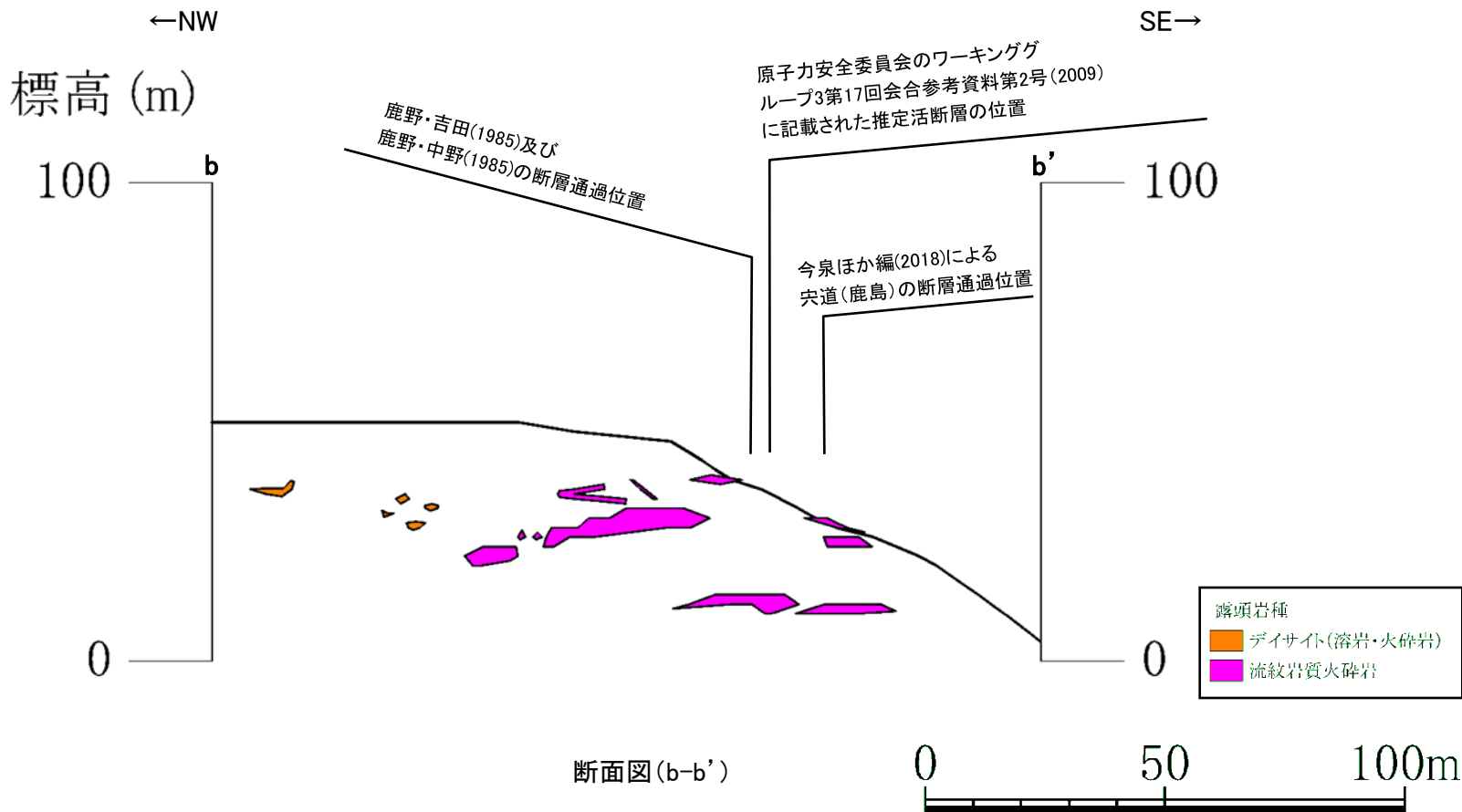
地表地質踏査の結果、
b-b' 断面図付近では断層は認められない。

- 調査地点
- 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 伏在断層 (縮尺:5万分の1)
- 今泉ほか編(2018)による突道(鹿島)断層, 推定活断層
- 原子力安全委員会のワーキンググループ第3第17回 会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 変位地形・リニアメント(Dランク)

- 露頭位置
 - 層理面の走向・傾斜
- 露頭岩種
- 貫入岩
 - 泥岩
 - 砂岩
 - デイサイト(溶岩・火砕岩)
 - 流紋岩質火砕岩



・地表地質踏査の結果, Loc.T-3付近(b-b' 断面図付近)において, 断層は認められない。

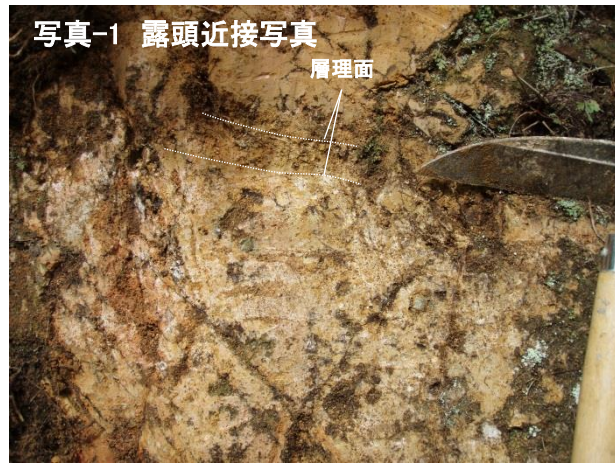
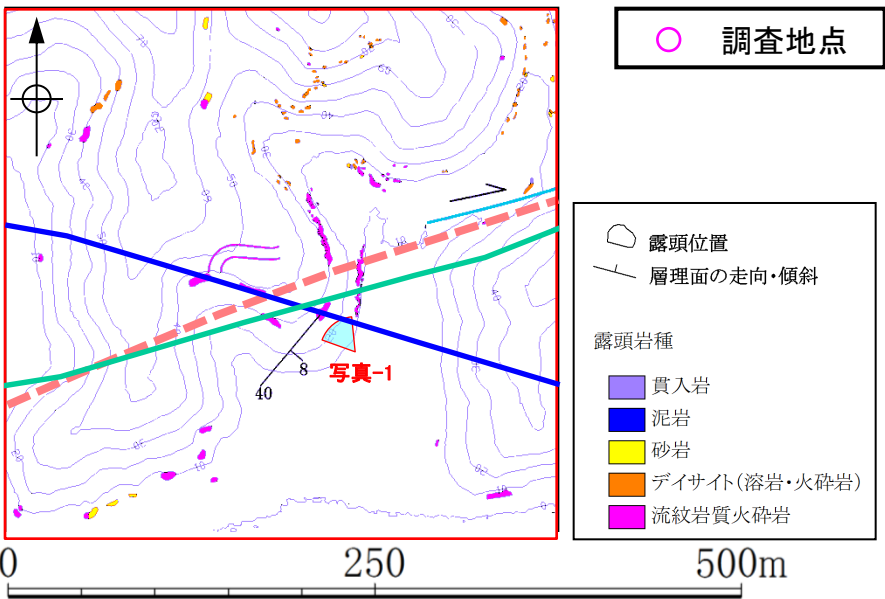
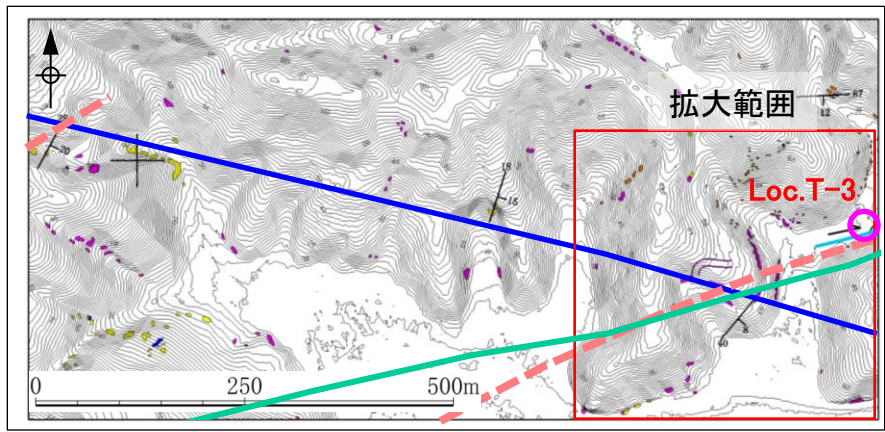


・b-b' 断面図付近では, 文献断層の通過位置付近を含む幅広い地表地質踏査の結果, 断層は認められない(次頁参照)。

・断層の延長が推定される変位地形・リニアメントの通過位置付近において, ピット調査(Loc.T-3)を実施した。

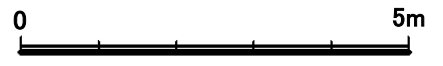
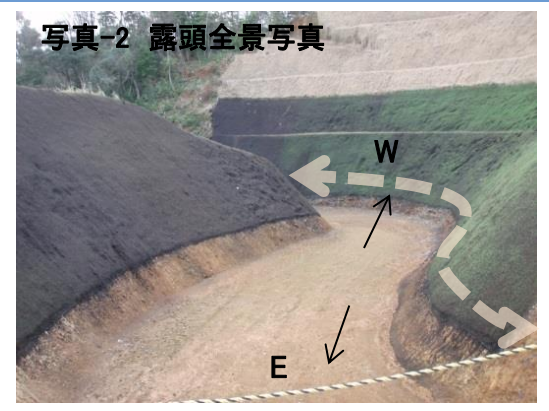
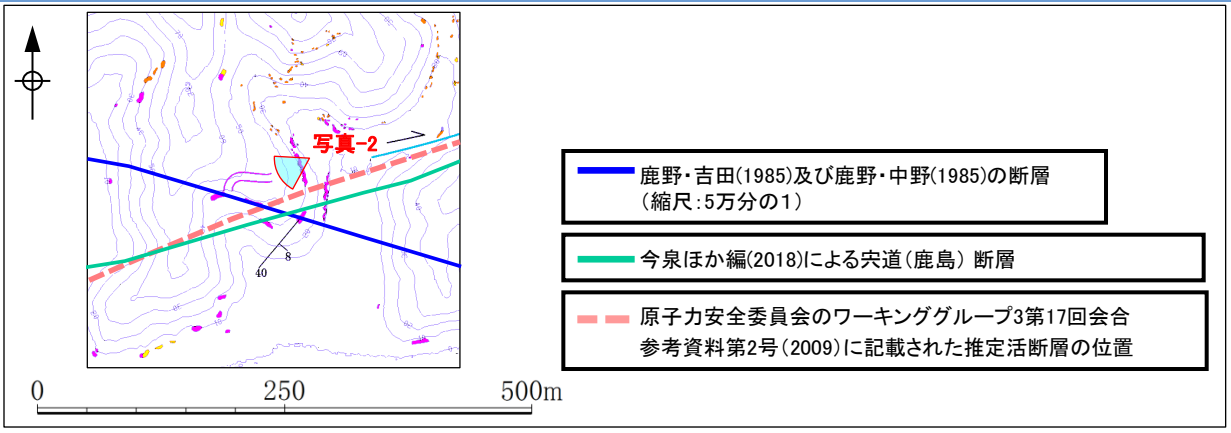
1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側) Loc. T-3付近の道路沿い(露頭写真)

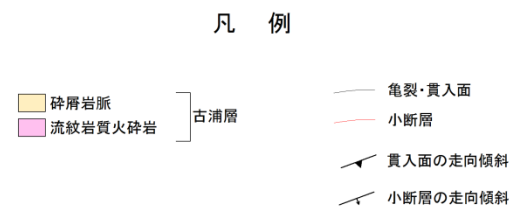
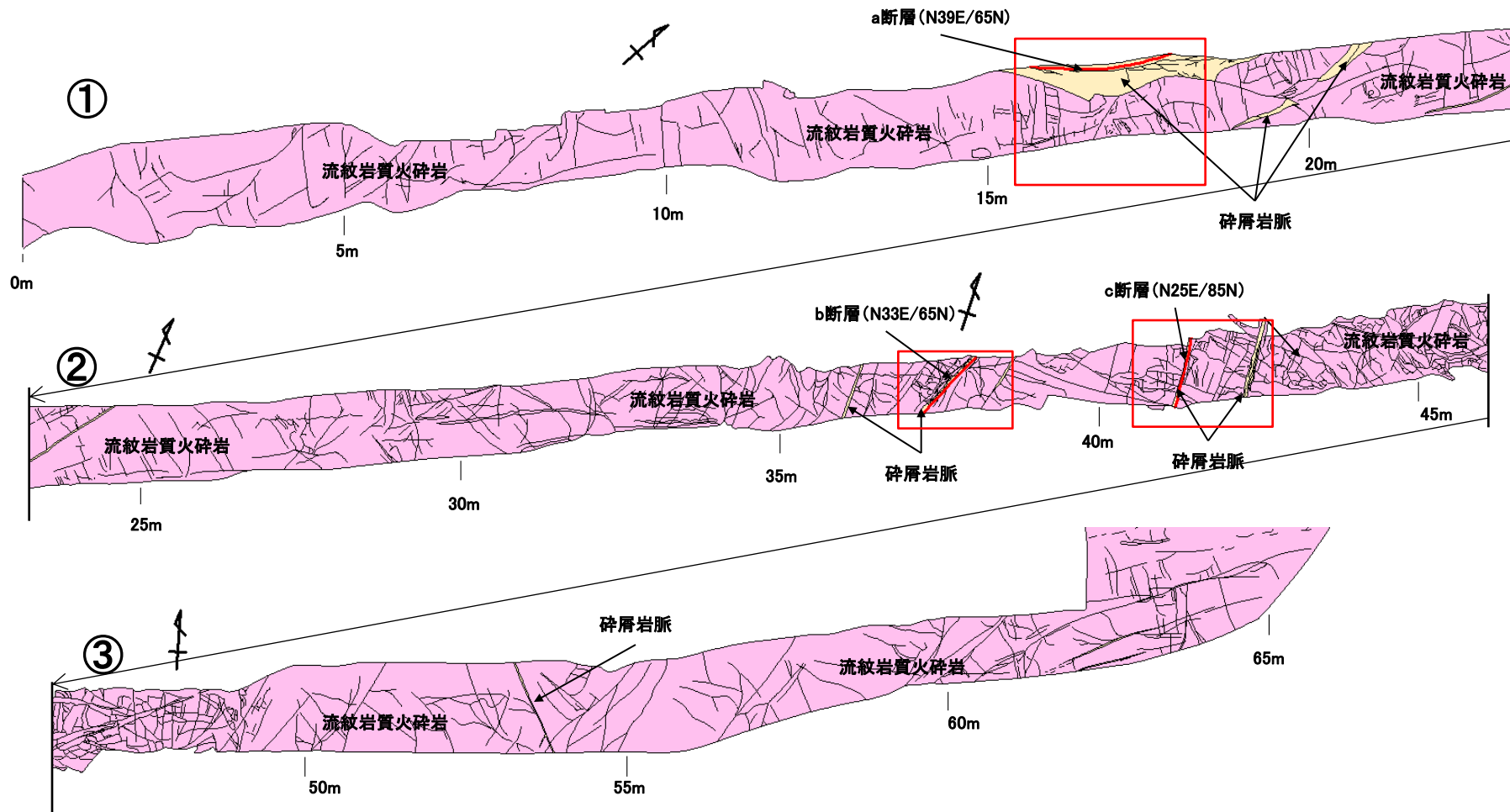
— 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層 (縮尺: 5万分の1)
— 今泉ほか編(2018)による突道(鹿島)断層
— 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置



・道路沿いの古浦層の流紋岩質火砕岩の露頭は連続して分布しており、断層は認められない。
 また、層理面の走向傾斜はN40E/8SEを示す。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)
Loc. T-3' の道路改良に伴う切土部(道路北側法面露頭写真)

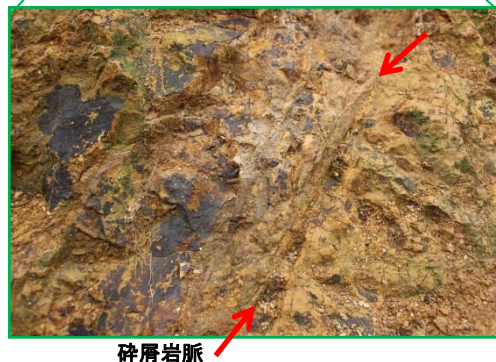
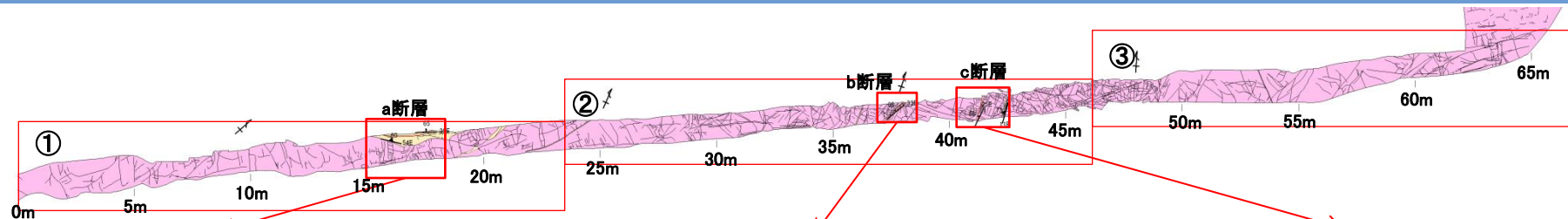




・道路改良に伴う切土部の北側法面には、古浦層の流紋岩質火砕岩が連続して分布し、薄い碎屑岩脈が認められる。
 ・まれに碎屑岩脈の貫入面が弱く破碎し、小断層(a断層, b断層, c断層)が認められる。
 ・これらの小断層は、N25~39Eの走向を示し、文献断層の走向とは異なる。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)

Loc. T-3' の道路改良に伴う切土部(道路北側法面スケッチ)

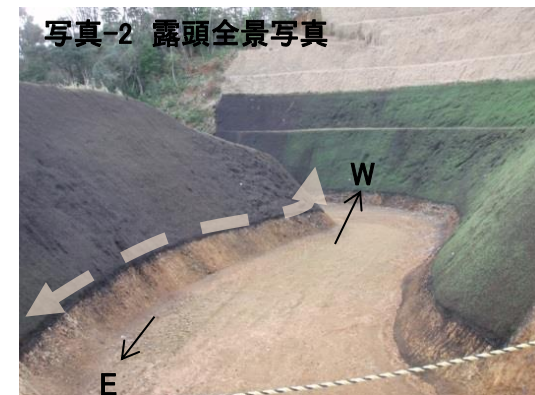
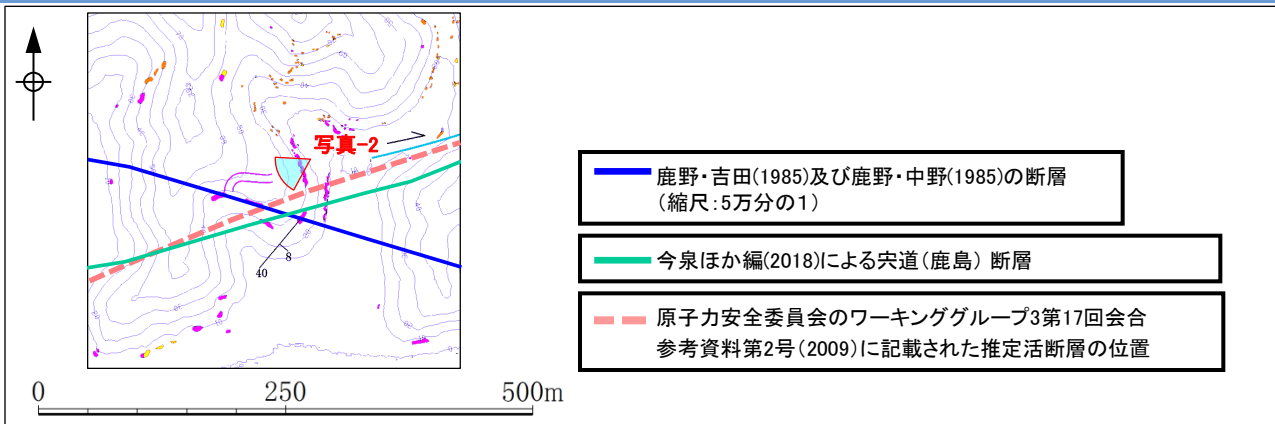


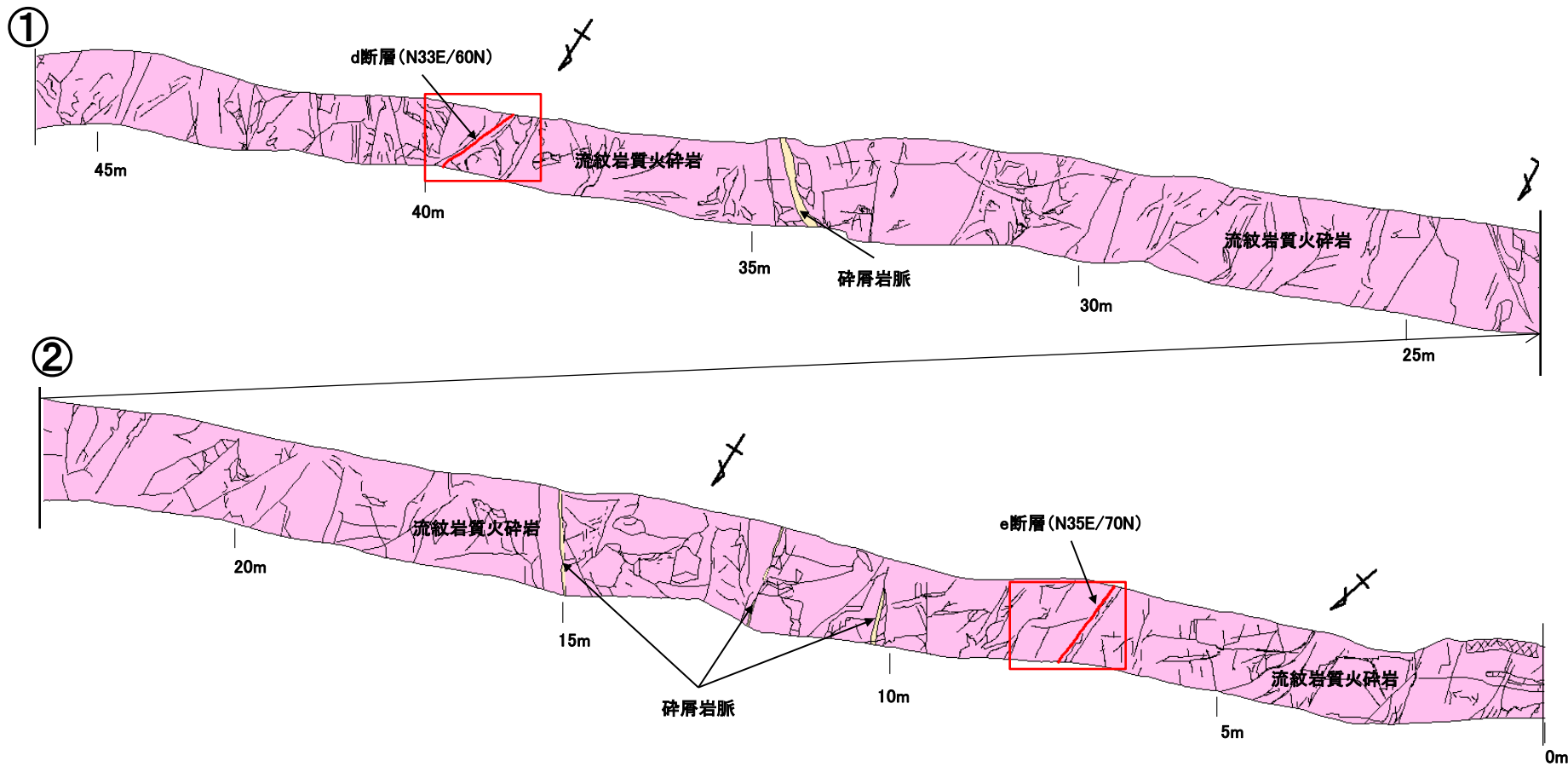
a断層の走向傾斜はN39E65Nであり、碎屑岩脈の上盤側境界面に沿って分布し、部分的に風化変質により軟質化した箇所が認められる。

b断層の走向傾斜はN33E65Nであり、碎屑岩脈の下盤側境界面に沿って分布し、部分的に風化変質により軟質化した箇所が認められる。

c断層の走向傾斜はN25E85Nであり、碎屑岩脈の下盤側境界面に沿って分布し、部分的に風化変質により軟質化した箇所が認められる。

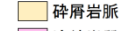

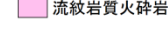

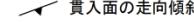
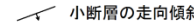
1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) Loc. T-3'の道路改良に伴う切土部(道路南側法面露頭写真)

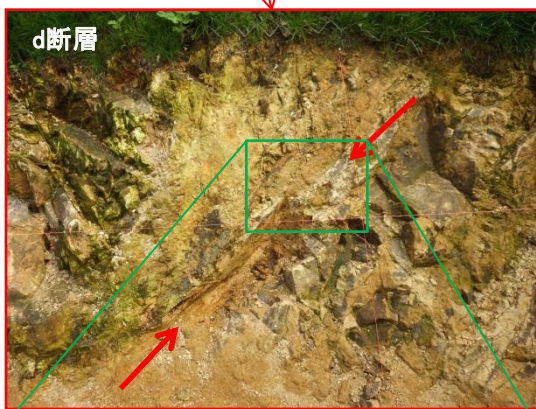
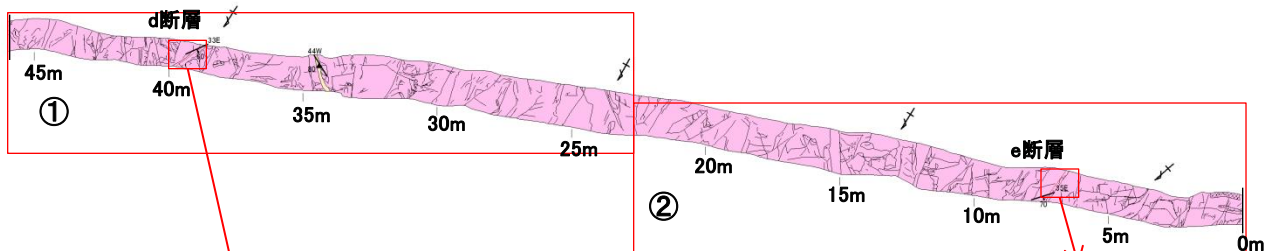




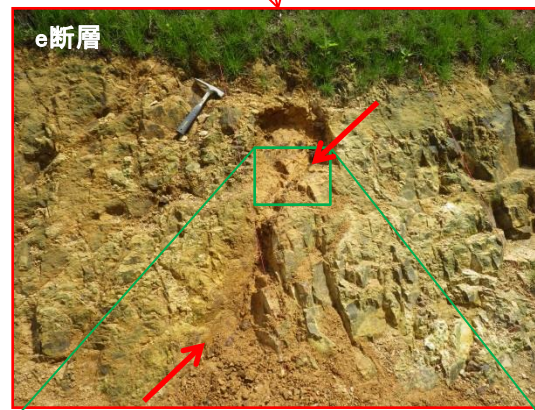
・道路改良に伴う切土部の南側法面には、古浦層の流紋岩質火砕岩が連続して分布し、薄い碎屑岩脈が認められる。
 ・流紋岩質火砕岩中には、小断層(d断層, e断層)が認められる。
 ・これらの小断層は、N35E程度の走向を示し、文献断層の走向とは異なる。

凡例

- | | | |
|---|-------|--|
|  碎屑岩脈 | } 古浦層 |  亀裂・貫入面 |
|  流紋岩質火砕岩 | |  小断層 |
| | |  貫入面の走向傾斜 |
| | |  小断層の走向傾斜 |

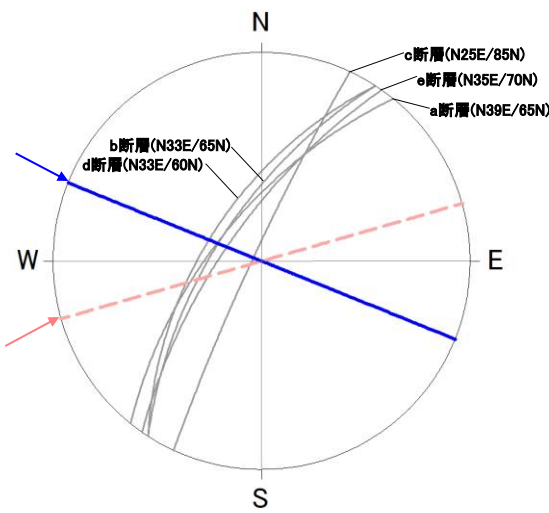
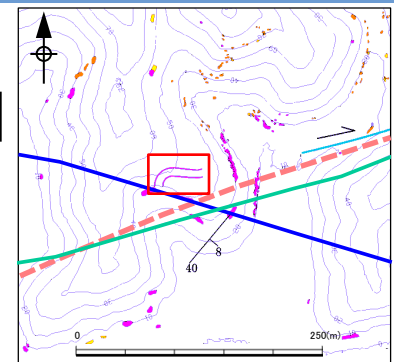
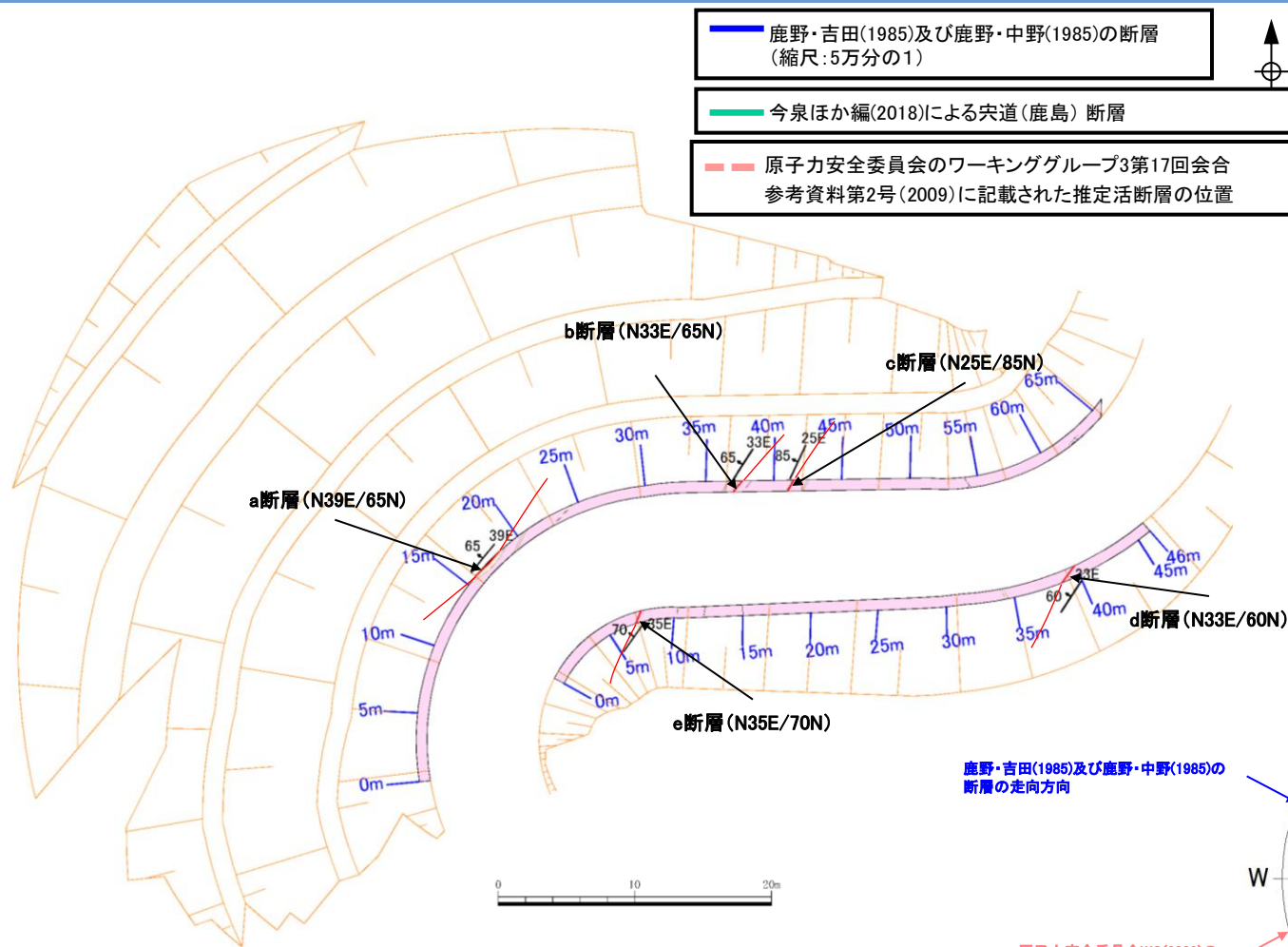


d断層の走向傾斜はN33E60Nであり、部分的に風化変質により軟質化した箇所が認められる。



e断層の走向傾斜はN35E70Nであり、部分的に風化変質により軟質化した箇所が認められる。

Loc. T-3' の道路改良に伴う切土部(平面図)



鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層の走向方向

原子力安全委員会WG(2009)の推定活断層の走向方向

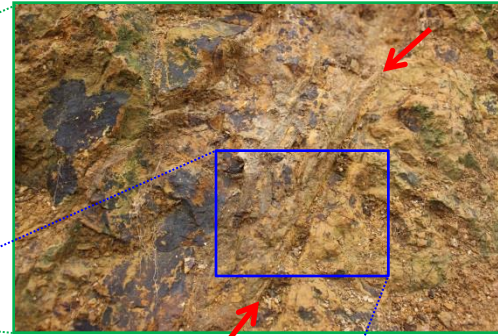
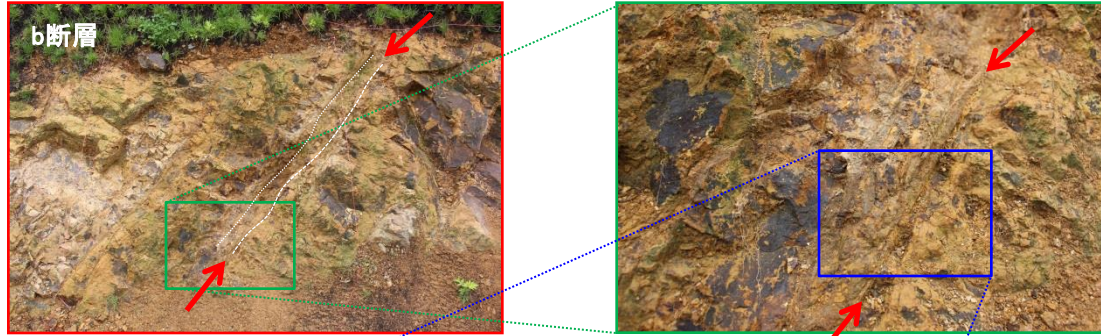
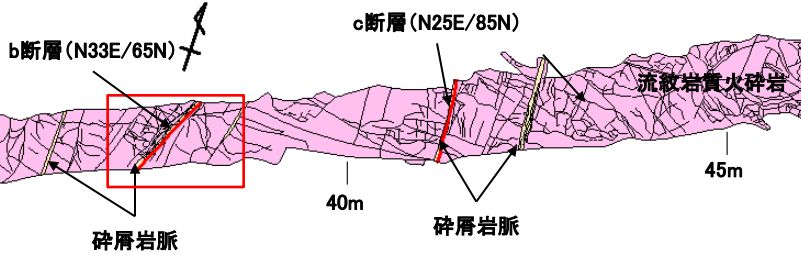
・道路改良に伴う切土部法面に認められる小断層は、N25~39E/60~85Nを示し同系統の断層であるが、文献断層の走向とは異なる。

ステレオ投影図(下半球投影)

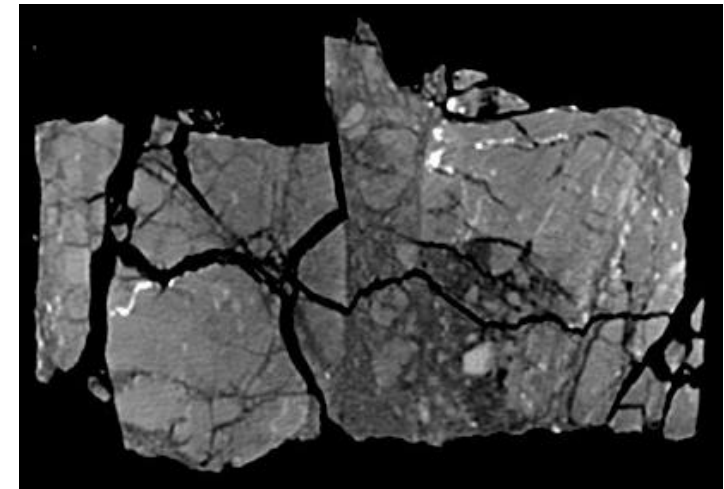
断層の走向傾斜を大円で表示

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側) Loc. T-3'の道路改良に伴う切土部(b断層(CT画像解析))

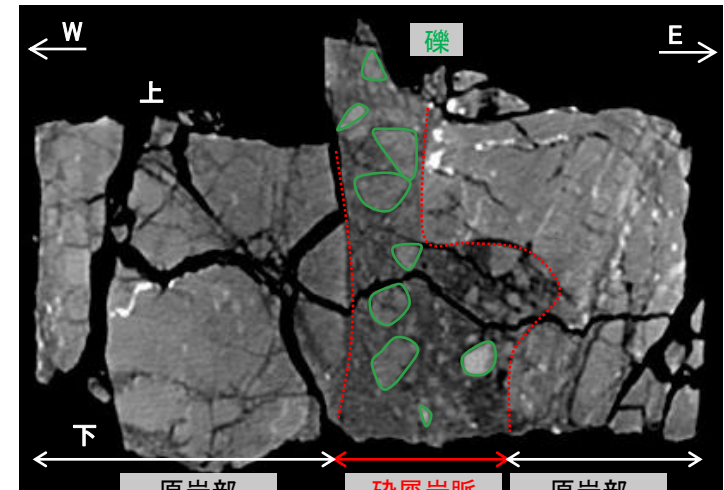
KEY-PLAN



ブロック試料 (CT画像撮影) 10cm



CT画像 (解釈線なし)



CT画像 (解釈線あり)

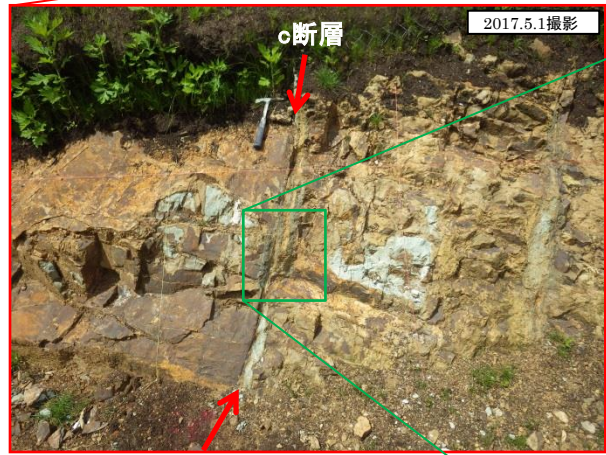
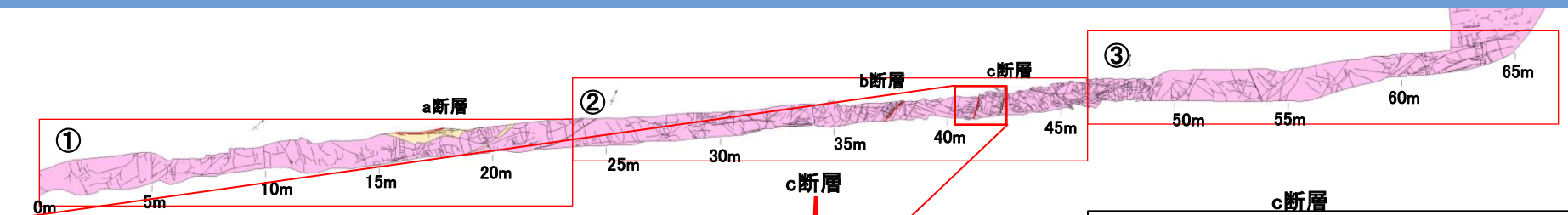
1cm

- ・b断層を対象としたCT画像解析の結果、西から、原岩部、碎屑岩脈、原岩部に分帯される。
- ・碎屑岩脈には、径約1cmの角礫が含まれる。角礫は定向配列を示さない。
- ・碎屑岩脈と原岩の境界に、せん断による破碎はほとんど認められない。

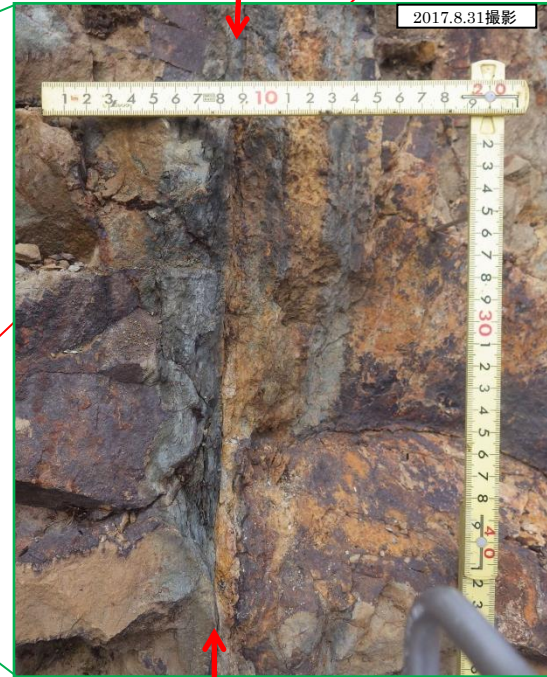
- ・以上のことから、b断層は連続性のない小断層であると考えられる。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側)

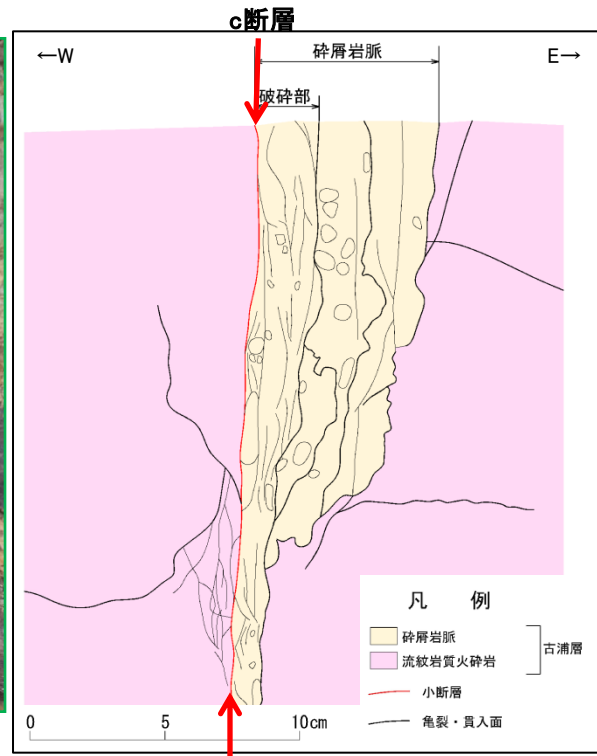
Loc. T-3' の道路改良に伴う切土部(c断層詳細観察)



c断層全体写真



c断層拡大写真



c断層拡大スケッチ

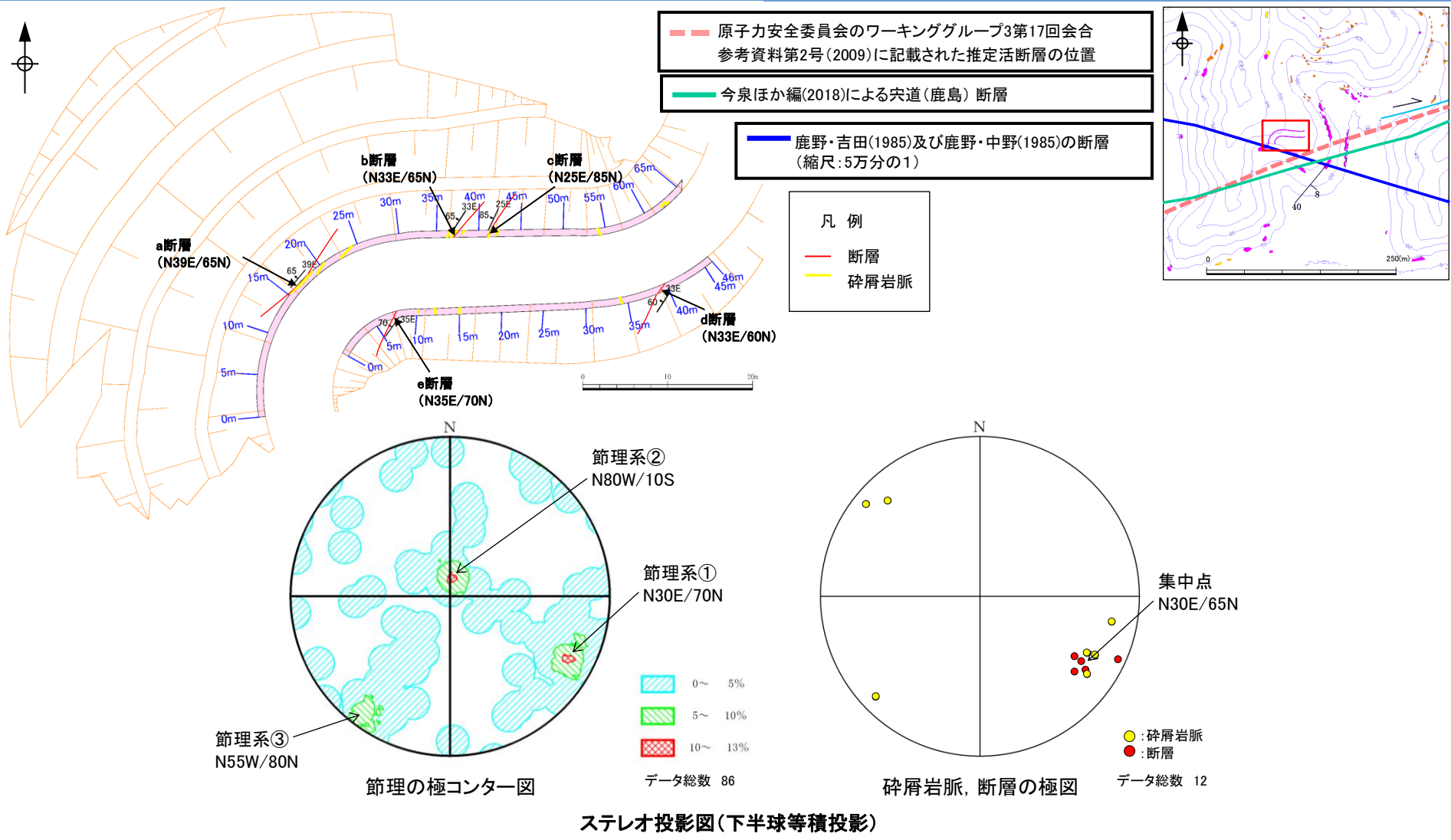
坂(1993)⁽⁴⁷⁾は、碎屑岩脈について以下のとおりとしている。

- ・碎屑岩脈には、①堆積直後で未固結状態の堆積物が浮力あるいは液状化によって上の上の地層中に注入したものと、②固結した基盤岩の上の未固結堆積物が基盤岩中に生じた開口裂隙に落ち込んでこれを充填したものがある。
- ・後者の岩脈では、まわりの岩石(岩脈となっている岩石の堆積時の基盤)と、種類・固結度が大きく異なっているのが普通である。前者の岩脈は、まわりの岩石とほぼ同じ時代の堆積物であり、したがって、岩質・固結度もよく似かよっている。なお前者には砂岩からなるものが多いが、礫岩、泥岩の岩脈も知られている。

- ・c断層沿いの幅約2~8cmの範囲には、φ 1cm以下の亜円~円礫主体の流紋岩質礫が認められ、基質支持である。
- ・岩質・固結度が周囲の流紋岩質火砕岩と同質であり、顕著な破碎構造は全体に認められず固結・密着していることから、碎屑岩脈と判断した。
- ・碎屑岩脈のうち、西側境界沿いの幅約2~3cmには、微細な割れ目が発達しており、円~亜円礫の他にφ 5mm以下の角礫が一部認められ、直線的な境界を有することから、c断層に伴う破碎部と考えられる。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)

(参考) Loc. T-3' の道路改良に伴う切土部(ステレオ投影による検討)



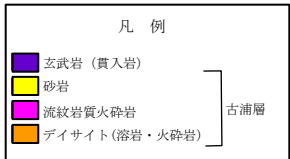
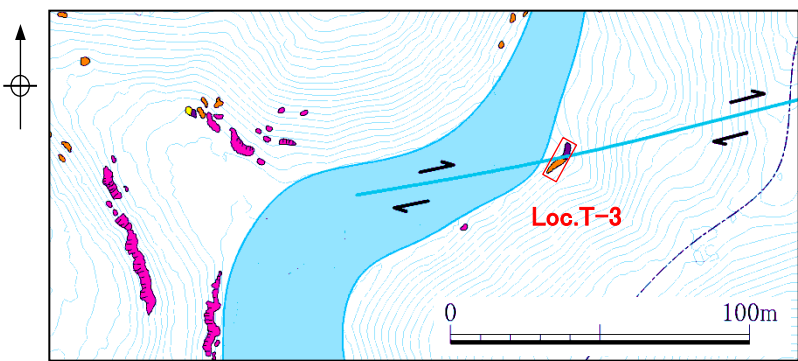
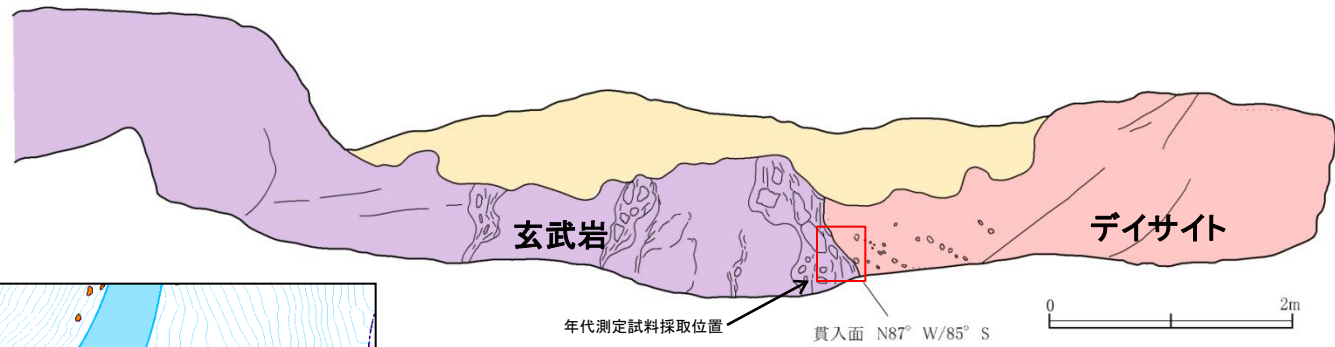
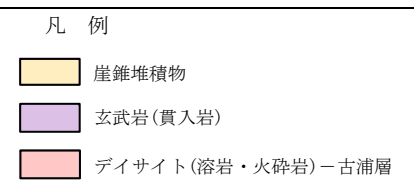
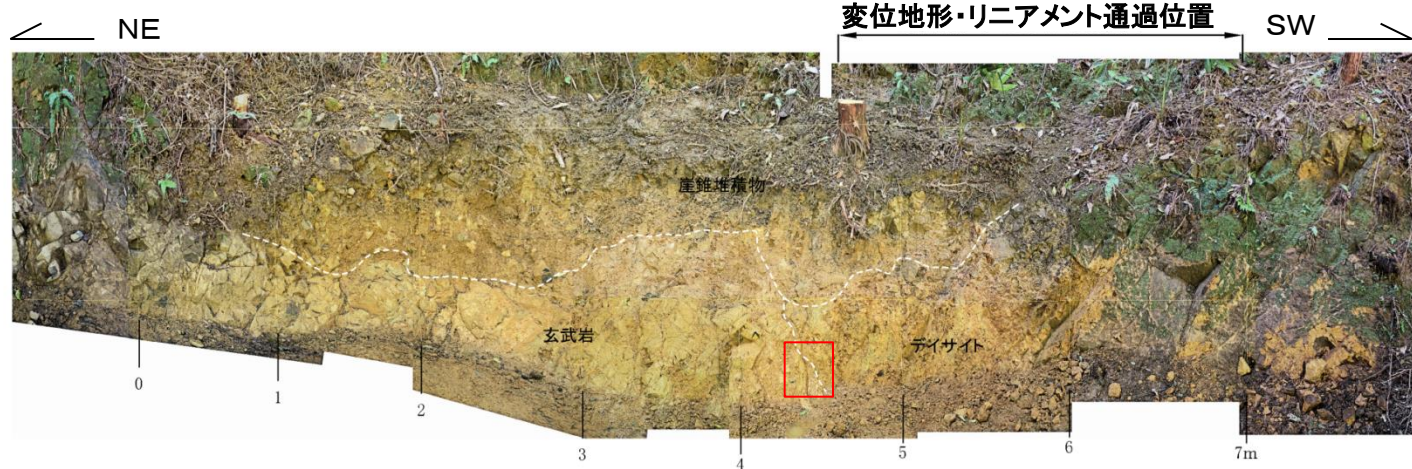
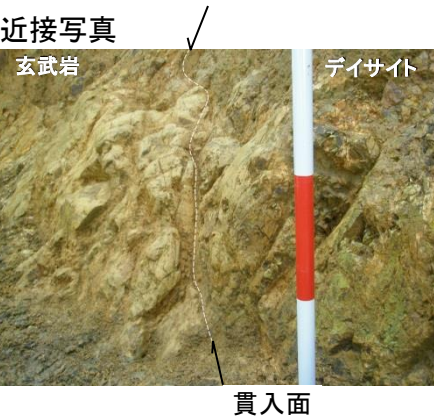
ステレオ投影図(下半球等積投影)

道路改良に伴う切土部法面に認められる碎屑岩脈、断層及び節理の走向傾斜について、ステレオ投影図を用いて検討した。

- ・節理は、①N30E/70N付近、②N80W/10S付近、③N55W/80N付近の3系統が卓越する。
- ・碎屑岩脈及び断層の走向傾斜はN30E/65N付近に点が集中し、節理系①と同方向である。

以上のことから、碎屑岩脈及び断層は、節理とほぼ同時期に形成された可能性も考えられる。

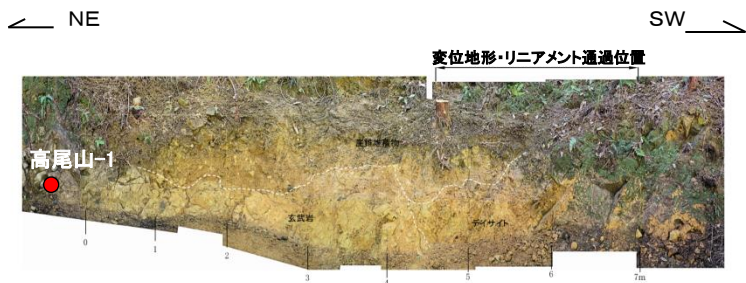
1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)
宇井～福浦(ピット調査(Loc.T-3))



- ・変位地形・リニアメントを含む幅広いピット調査の結果、古浦層のデイサイトとそれに貫入する玄武岩(次頁参照、K-Ar年代測定値 $15.1 \pm 0.5\text{Ma}$) が分布しており、断層は認められない。
- ・ピット調査地点の西方では、変位地形・リニアメントの延長位置付近に古浦層の流紋岩質火砕岩の露頭が連続して分布している。
- ・なお、Loc.T-3'の地表地質踏査(b-b'断面図)の結果、文献断層の通過位置付近に断層が認められないこと及び本地点においてLoc.T-2と同様に、貫入岩が認められることから、断層が貫入岩によって置き換えられたとも考えられる。

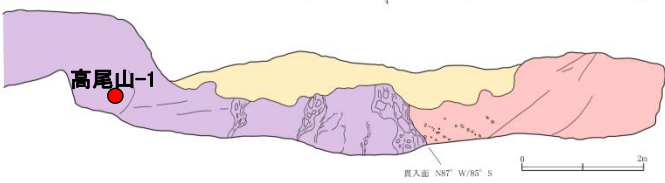
・高尾山南側(北)の変位地形・リニアメント通過位置付近における各地点(Loc.T-1, Loc.T-2, Loc.T-3)の調査の結果、Loc.T-1では断層が認められ、縦ずれ優勢の条線が確認されるが、現在の応力場を東西圧縮応力場として推定されるすべり角の計算結果とは対応しない。なお、鹿野ほか(1994)等によるとEW方向の正断層運動は前期中新世から中期中新世前期とされている。更に、Loc.T-1と同様な地形要素が認められ、断層の延長が推定される地点(Loc.T-2, Loc.T-3)において、断層は認められない。

1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側) (参考) Loc. T-3 (ピット調査: 薄片観察)



凡例
Pl 斜長石
Cpx 単斜輝石
Opq 不透明鉱物

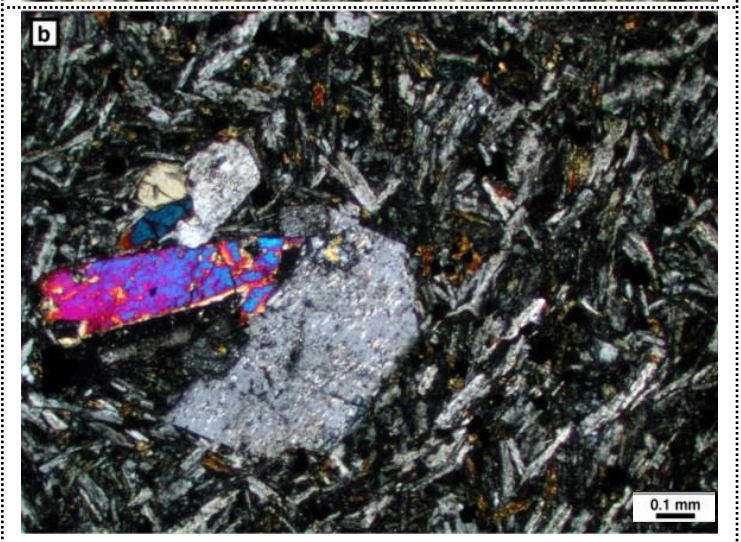
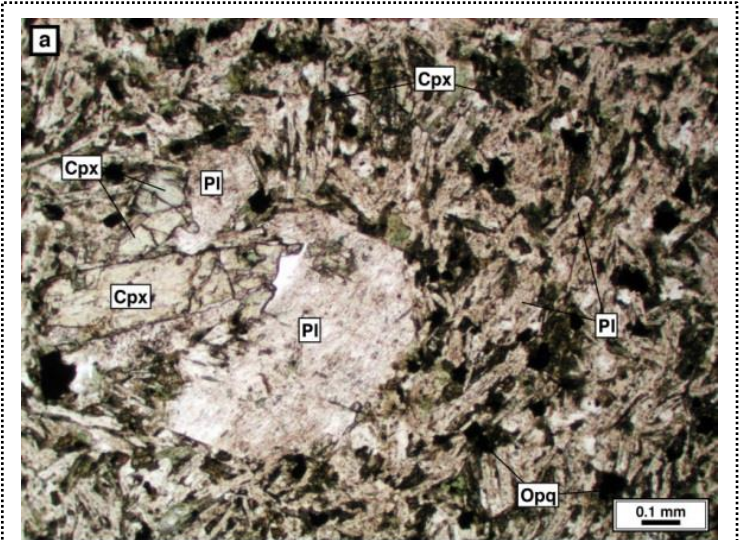
写真上: 単ニコル
写真下: 直交ニコル



凡例

- 崖錐堆積物
- 玄武岩(貫入岩)
- デイサイト(溶岩・火砕岩)ー古浦層
- 薄片試料採取位置と試料番号

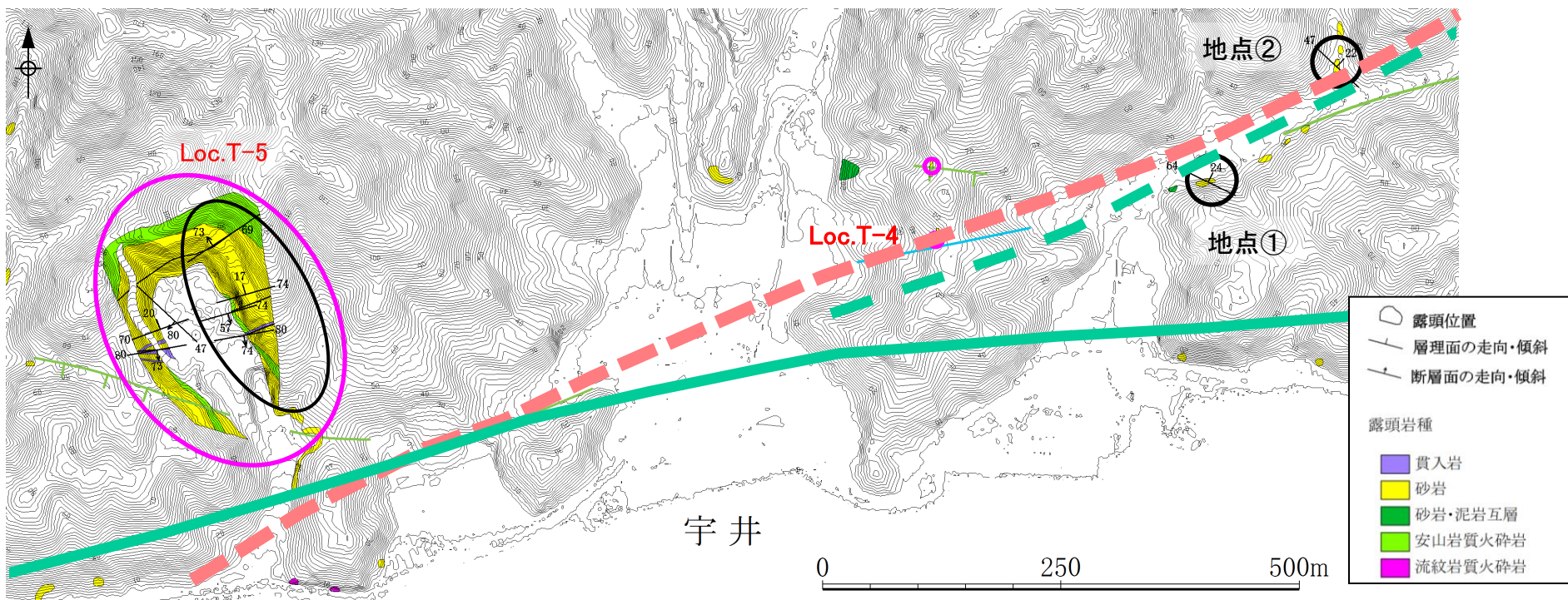
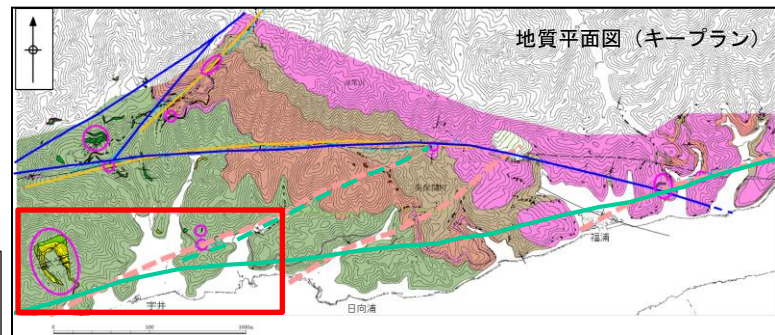
・構成物質が完晶質で斜長石・単斜輝石から成ること及び気泡跡が認められないことから、玄武岩(貫入岩)であると判断される。



- ・石基は完晶質で、斜長石・単斜輝石の斑晶を含む。
- ・鉱物の伸長方向に定向性は認められない。

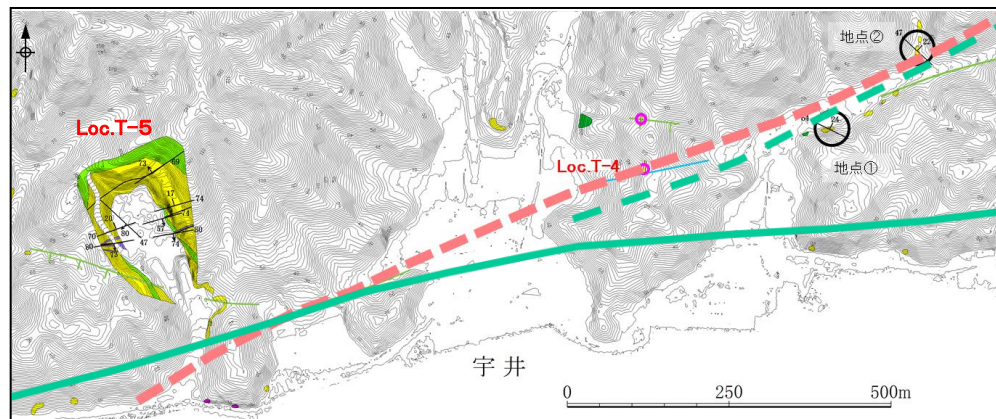
- 調査地点
- 変位地形・リニアメント(Cランク)
- 変位地形・リニアメント(Dランク)
- 今泉ほか編(2018)による突道(鹿島)断層, 推定活断層
- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置

○ : 写真撮影地点



・地表地質踏査の結果, 文献断層通過位置付近の南北に位置する古浦層の砂岩は北緩傾斜を示すことから, 文献断層に対応する断層は推定されない(次頁参照)。

・変位地形・リニアメント及び原安委WG3(2009)に記載された推定活断層の通過位置において, ピット調査(Loc.T-4(北), Loc.T-4(南))を実施した。



	露頭位置
	層理面の走向・傾斜
	断層面の走向・傾斜
露頭岩種	
	貫入岩
	砂岩
	砂岩・泥岩互層
	安山岩質火砕岩
	流紋岩質火砕岩

○ : 写真撮影地点

今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層, 推定活断層

原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置



地点① 古浦層の砂岩は, N64W/24NEを示す(河床部の露頭を撮影)。



地点② 古浦層の砂岩は, N47W/22NEを示す(露頭壁面を撮影)。

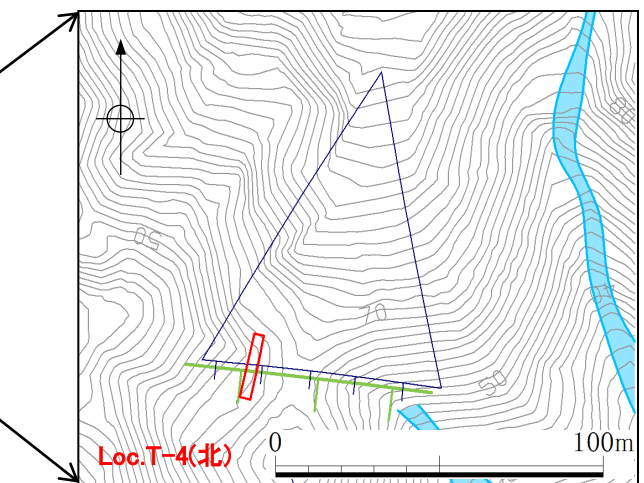
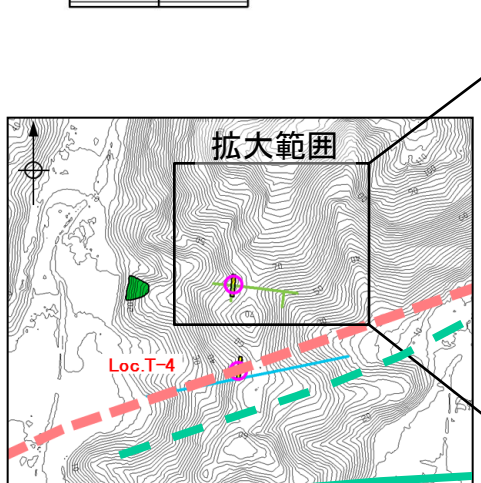
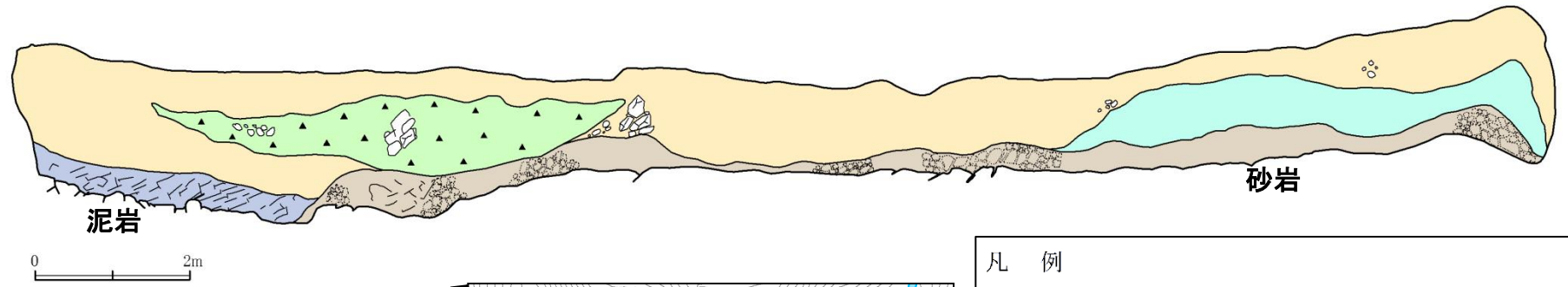
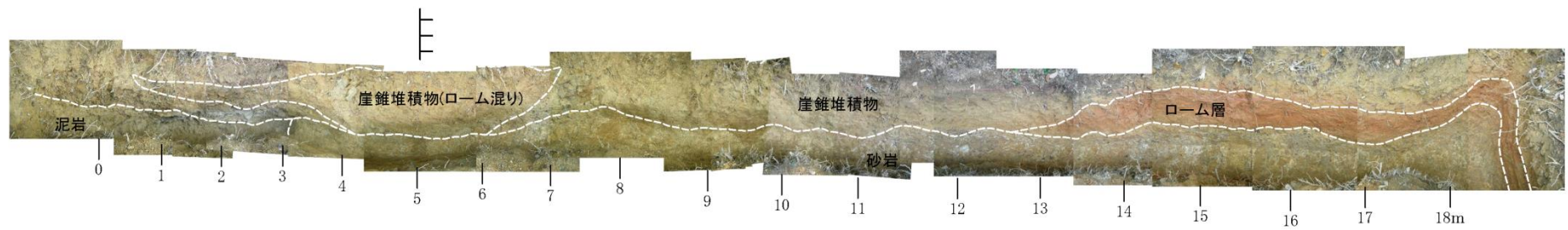
1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)
 宇井～福浦(ピット調査(Loc.T-4(北)))

← N

(北)

S →

変位地形・リニアメント通過位置



凡 例

	崖錐堆積物		砂岩
	崖錐堆積物(ローム混り)		泥岩
	ローム層		

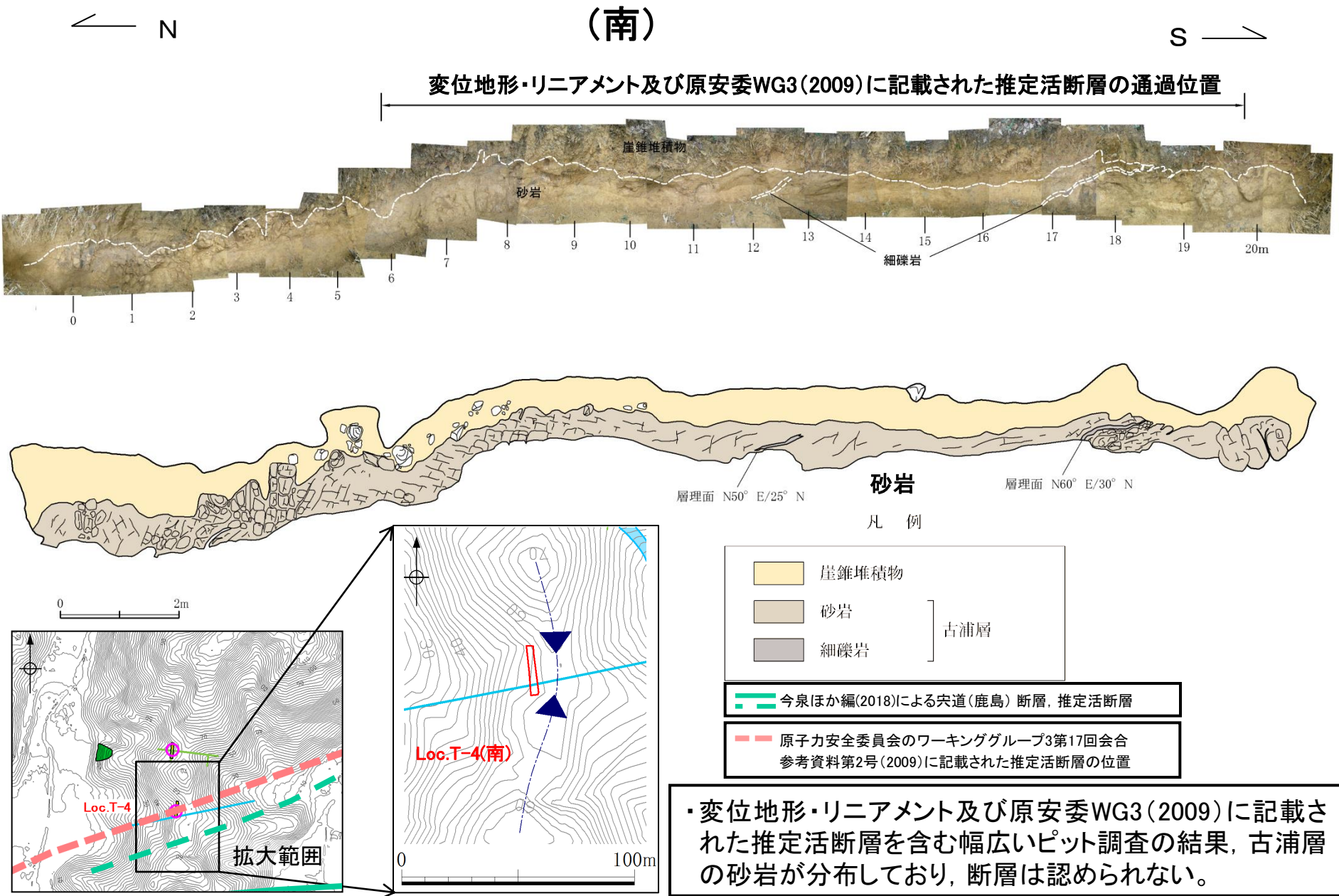
} 古浦層

今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層, 推定活断層

原子力安全委員会のワーキンググループ第3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置

・変位地形・リニアメントを含む幅広いピット調査の結果, 古浦層の砂岩・泥岩が分布しており, 断層は認められない。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側)
 宇井～福浦(ピット調査(Loc.T-4(南)))

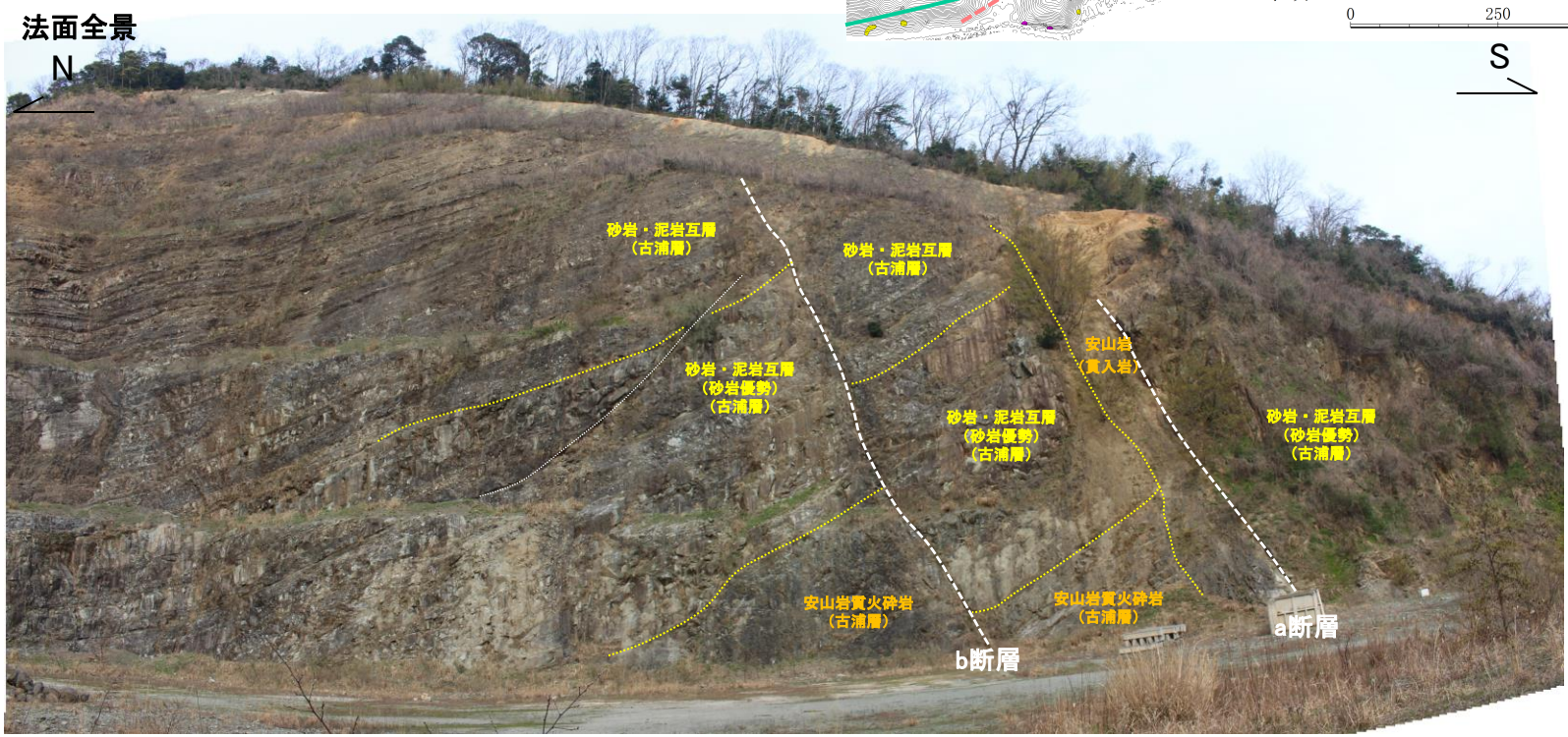
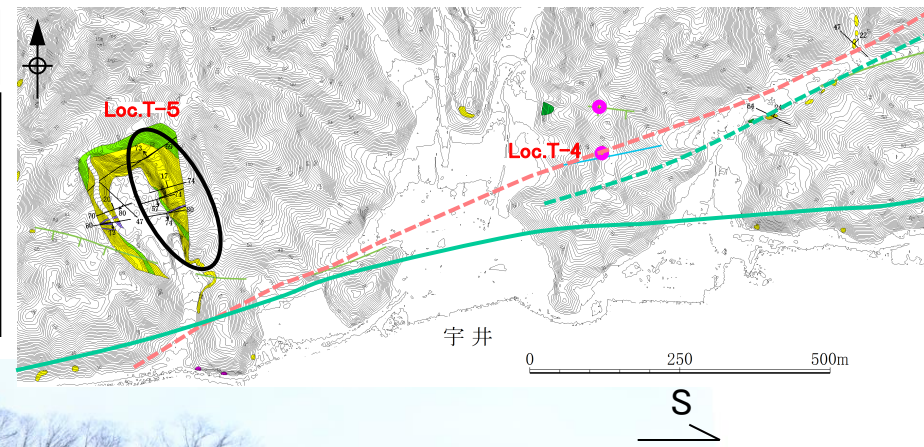


1. 突道断層の評価 (2) 地質調査(突道断層の東側) 高尾山南側 Loc.T-5 (露頭写真)

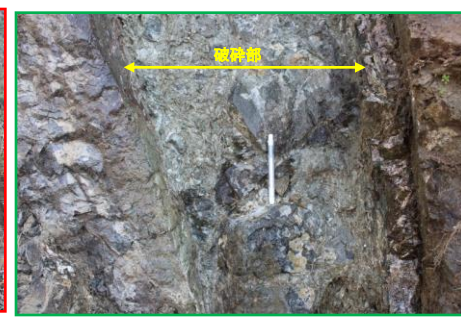
○ : 写真撮影地点

今泉ほか編(2018)による突道(鹿島)断層, 推定活断層
原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合
参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置

露頭位置	○
層理面の走向・傾斜	F
断層面の走向・傾斜	D
露頭岩種	
貫入岩	紫
砂岩	黄
砂岩・泥岩互層	緑
安山岩質火砕岩	青
流紋岩質火砕岩	紫



- ・Loc.T-5には、古浦層の砂岩・泥岩互層及び安山岩質火砕岩、安山岩(貫入岩)が分布し、主として2条の小断層が認められる。
- ・a断層は、N72E/72Sの走向傾斜を示し、安山岩の貫入面に沿って断層面が連続し、正断層変位を与えている。
- ・b断層は、N74E/57Sの走向傾斜を示し、古浦層の砂岩・泥岩互層に正断層変位を与えている。
- ・なお、Loc.T-5南部の変位地形・リニアメント通過位置付近に断層は認められない。



【b断層】
・破砕幅は最大で10cm程度で、風化により軟質化している。

【a断層】
・破砕幅は最大で60cm程度で一部風化が進んでいるが、固結・密着している。また、中石を含む範囲は比較的硬い。
・断層面には、最大4mm程度の薄い粘土が一部で認められるが、連続性に乏しい。

・Loc.T-5で確認される2条の小断層は、概ね同一の走向傾斜を示し、いずれも正断層変位を与えていることから、ほぼ同時期に形成された断層であると考えられる。なお、鹿野ほか(1994)等によるとEW方向の正断層運動は前期中新世から中期中新世前期とされている。
・a断層の破砕幅は、最大で60cm程度で一部風化は進んでいるが、固結・密着している。また、b断層の破砕幅は、最大で10cm程度で一部風化は進んでいる。
・これらの断層に対応する変位地形・リニアメントは認められず、破砕幅の大きいa断層は固結・密着している。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

まとめ(高尾山南側)

1. 文献調査

- ・美保関町宇井から福浦の間では、①鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層、伏在断層、②鹿野・吉田(1985)の高尾山リニアメント、③原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層、④今泉ほか編(2018)に記載された活断層、伏在活断層が示されている。

2. 変動地形学的調査

- ・美保関町宇井から福浦間の北側では、変位地形は不明瞭であるが、北側には鞍部列を境に南側の山地高度が低く、崖地形が断続的に認められる。
- ・鹿野・吉田(1985)に示される高尾山リニアメントに対応する高尾山南側(北)の変位地形・リニアメントの成因について、鹿野・吉田(1985)は、「地質断層とリニアメントが一致するものの、リニアメントに沿って確実に断層変位地形と認められるものがないこと及び断層両側の地層の浸食に対するコントラストが大きいことなどから、リニアメントは組織地形であると判断される。」としている。
- ・美保関町宇井から福浦間の南側には、尾根・谷の屈曲、鞍部、直線谷が断続的に認められる。
- ・今回、その他の地形要素を再確認した結果、いずれも系統的でないことを確認している。

3. 地表地質踏査、はぎ取り調査及びピット調査

(1)Loc.T-1付近

- ・地表地質踏査の結果、Loc.T-1において変位地形・リニアメント及び文献断層に対応する断層が認められる。
- ・Loc.T-1におけるはぎ取り調査の結果、古浦層中に断層が認められ、その周辺には正断層センスの引きずり込み構造が認められ、断層ガウジが見られるが、断層面は凹凸が著しい。また、縦ずれ優勢の条線が認められるが、現在の応力場を東西圧縮応力場として推定されるすべり角の計算結果とは対応しない。なお、鹿野ほか(1994)等によるとEW方向の正断層運動は前期中新世から中期中新世前期とされている。
また、研磨片観察の結果、幅6mm程度の細粒部が認められるが、複合面構造等は見られず、南講武の活断層に見られる特徴は確認されない。
- ・Loc.TW-1において主として2条の正断層変位を伴う小断層が確認されるが、上部の古浦層泥岩に変位や変形は認められず、また、断層沿いにもガウジや角礫部は認められず固結・密着している。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

まとめ(高尾山南側)

(2) Loc.T-2付近

- ・ Loc.T-2付近では、変位地形・リニアメントと文献断層の通過位置がほぼ一致し、Loc.T-1と同様な地形要素が認められることを踏まえ、地形的に断層が延長する可能性が高い鞍部において、ピット調査(Loc.T-2)を実施した。
- ・ Loc.T-2では、変位地形・リニアメントを含む幅広いピット調査の結果、急傾斜する流紋岩質火砕岩(古浦層)と貫入岩との境界を確認したが、断層は認められず、その上位には大山松江軽石層(DMP)を含むローム層がほぼ水平に分布している。なお、貫入境界は密着しており、古浦層の流紋岩質火砕岩は境界から幅数cmにわたり接触変成を受けて細粒化する。
- ・ なお、本地点が文献断層の通過位置とほぼ一致することを踏まえると、断層が貫入岩によって置き換えられたとも考えられる。

(3) Loc.T-3付近

- ・ 地表地質踏査の結果、Loc.T-2より東方における文献断層通過位置付近では、古浦層の流紋岩質火砕岩が連続して分布しており、文献断層に対応する断層は認められない。
- ・ 断層の延長が推定されるLoc.T-3では、変位地形・リニアメントを含む幅広いピット調査の結果、古浦層のデイサイトとそれに貫入する玄武岩が分布しており、断層は認められない。なお、Loc.T-3においてLoc.T-2と同様に、貫入岩が認められることから、断層が貫入岩によって置き換えられたとも考えられる。
- ・ Loc.T-3'の文献断層通過位置における道路改良に伴う切土部法面には、小断層が確認されるが、文献断層に対応する断層は認められない。

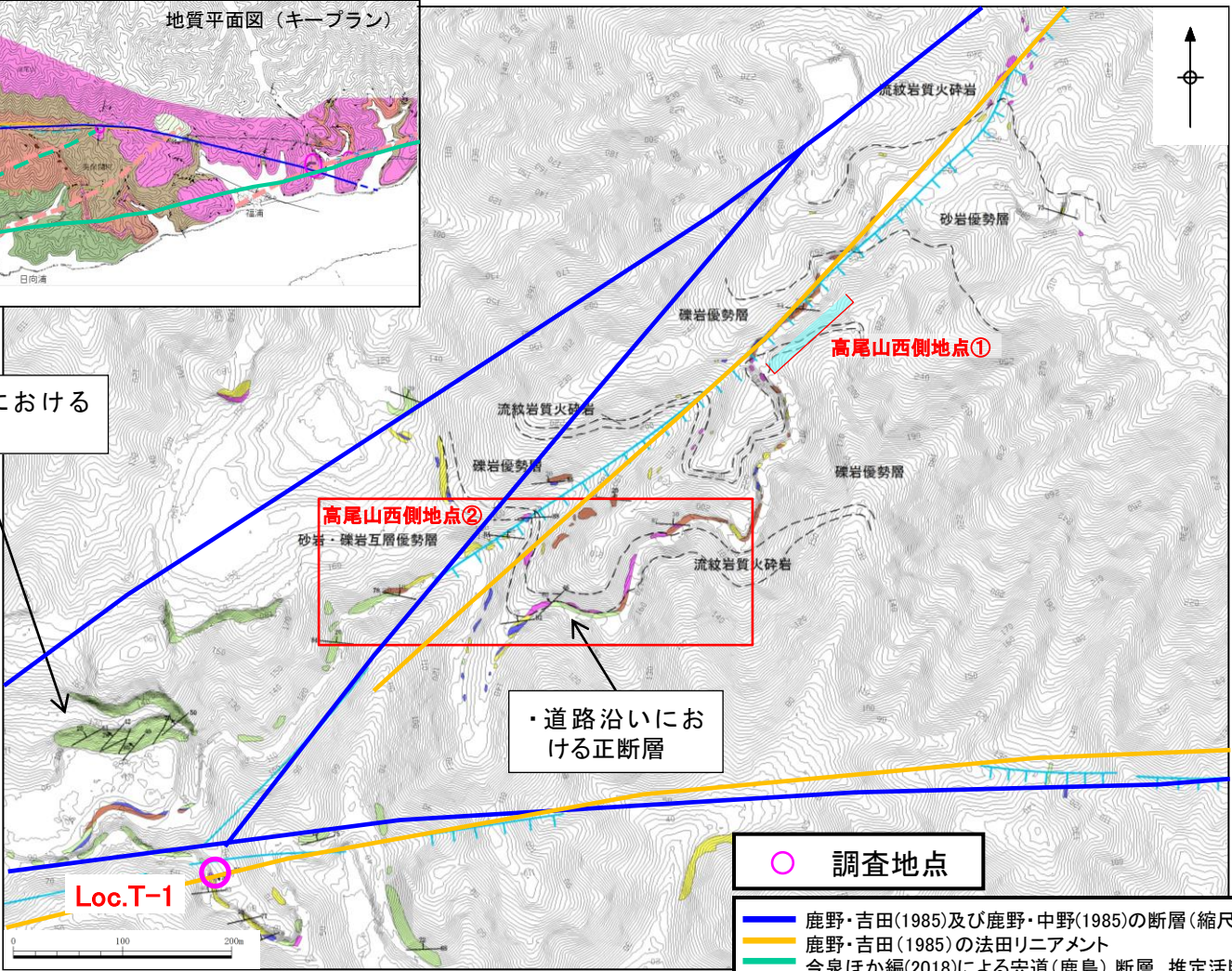
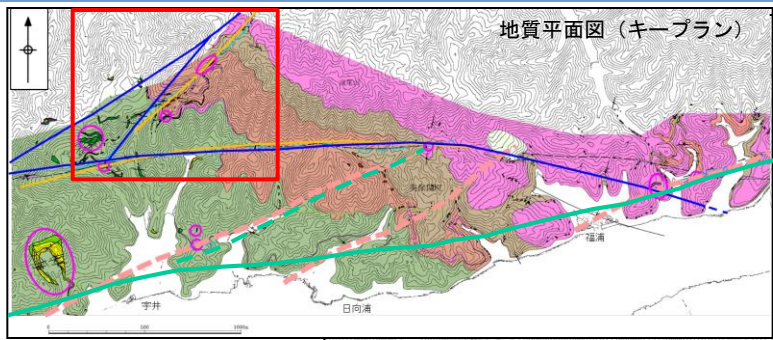
(4) Loc.T-4付近

- ・ 地表地質踏査の結果、文献断層通過位置付近の砂岩は北緩傾斜を示すことから、文献断層に対応する断層は推定されない。
- ・ 変位地形・リニアメントを含む幅広いピット調査の結果、Loc. T-4(北)では、古浦層の砂岩・泥岩が分布しており、断層は認められない。また、Loc. T-4(南)では、古浦層の砂岩が分布しており、断層は認められない。

(5) Loc.T-5

- ・ Loc.T-5には、主として2条の正断層変位を伴う小断層が確認されるが、これらの断層に対応する変位地形・リニアメントは認められず、破碎幅の大きいa断層は固結・密着している。

地表地質踏査(詳細ルートマップ(高尾山西側))



・Loc.TW-1における
正断層

・道路沿いにお
ける正断層

露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

露頭岩種

- 泥岩
- 砂岩
- 砂岩・泥岩互層
- 礫岩
- 流紋岩質火砕岩

TTT → Dランク

短線は地形的に低い側を、矢印(→)は尾根・谷の屈曲方向を示す。

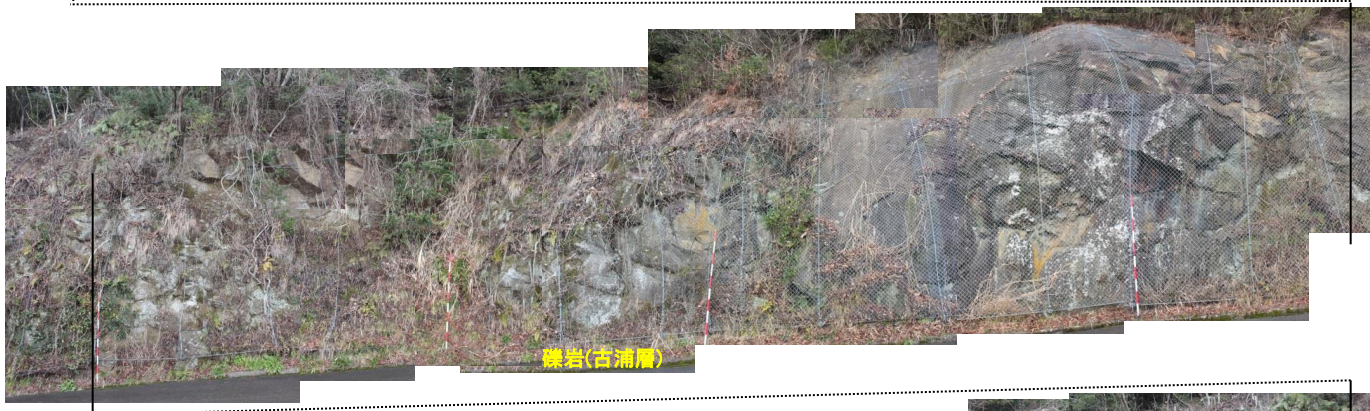
○ 調査地点

- 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層(縮尺:5万分の1)
- 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層, 推定活断層

- ・文献調査及び変動地形学的調査の結果, 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層, 鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び変位地形・リニアメントが示されている。
- ・鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び変位地形・リニアメントの通過位置付近を含む幅広い地表地質踏査の結果, 古浦層の礫岩等が連続分布しており断層は認められない(露頭写真(地点①)を参照)。
- ・鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層とほぼ同走向の断層がTW-1及び道路沿いにおいて認められ, これらは文献断層に対応する断層と考えられるが, いずれの地点も変位量の小さい正断層である。また, TW-1では, 上部の古浦層の泥岩または砂岩・泥岩互層に変位や変形は認められないことから, 後期更新世以降の断層活動は認められない(詳細は, 次頁以降を参照)。

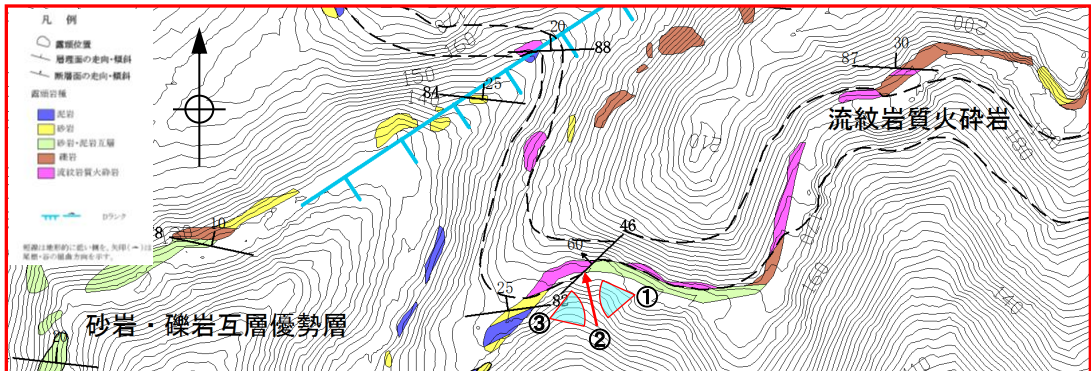
高尾山西側 地表地質踏査(地点①)(露頭写真)

写真-1 露頭全景写真

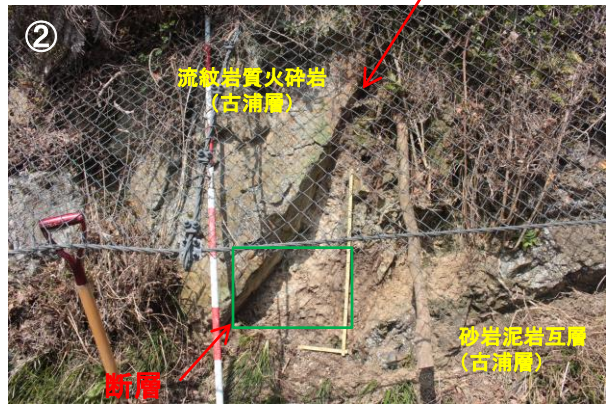


- ・変位地形・リニアメント及び文献断層(鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント)の通過位置付近では、古浦層の礫岩が分布し、砂岩及び泥岩の薄層を挟む。
- ・一様に緩い北傾斜を示し、断層は認められない。

高尾山西側 地表地質踏査(地点②)(露頭写真)



・断層面沿いに風化は進むが、面は密着しており、破碎は認められない。また、古浦層中の砂岩泥岩互層中の層理面の走向傾斜の乱れもほとんど認められない。



・古浦層の流紋岩質火砕岩と砂岩泥岩互層を境する断層 (N46E/60N) である。
 ・断層の両側には、古浦層の流紋岩質火砕岩と砂岩泥岩互層が整合的に接する地層境界が認められる。地層境界の標高差から、断層は変位量5m程度の正断層変位を示す。
 ・断層面沿いに風化は進むが、面は密着しており、破碎は認められない。また、古浦層の砂岩泥岩互層中の層理面の走向傾斜の乱れもほとんど認められない。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)

まとめ(高尾山西側)

1. 文献調査

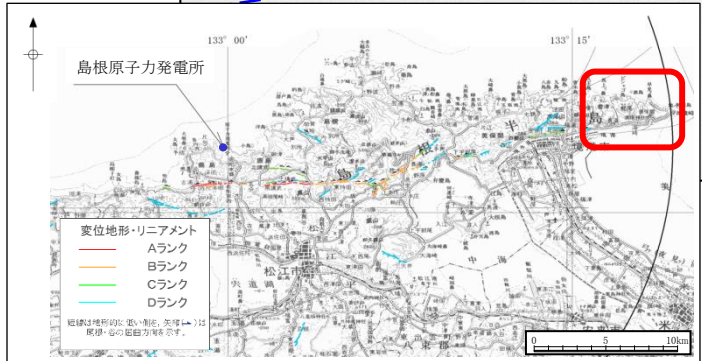
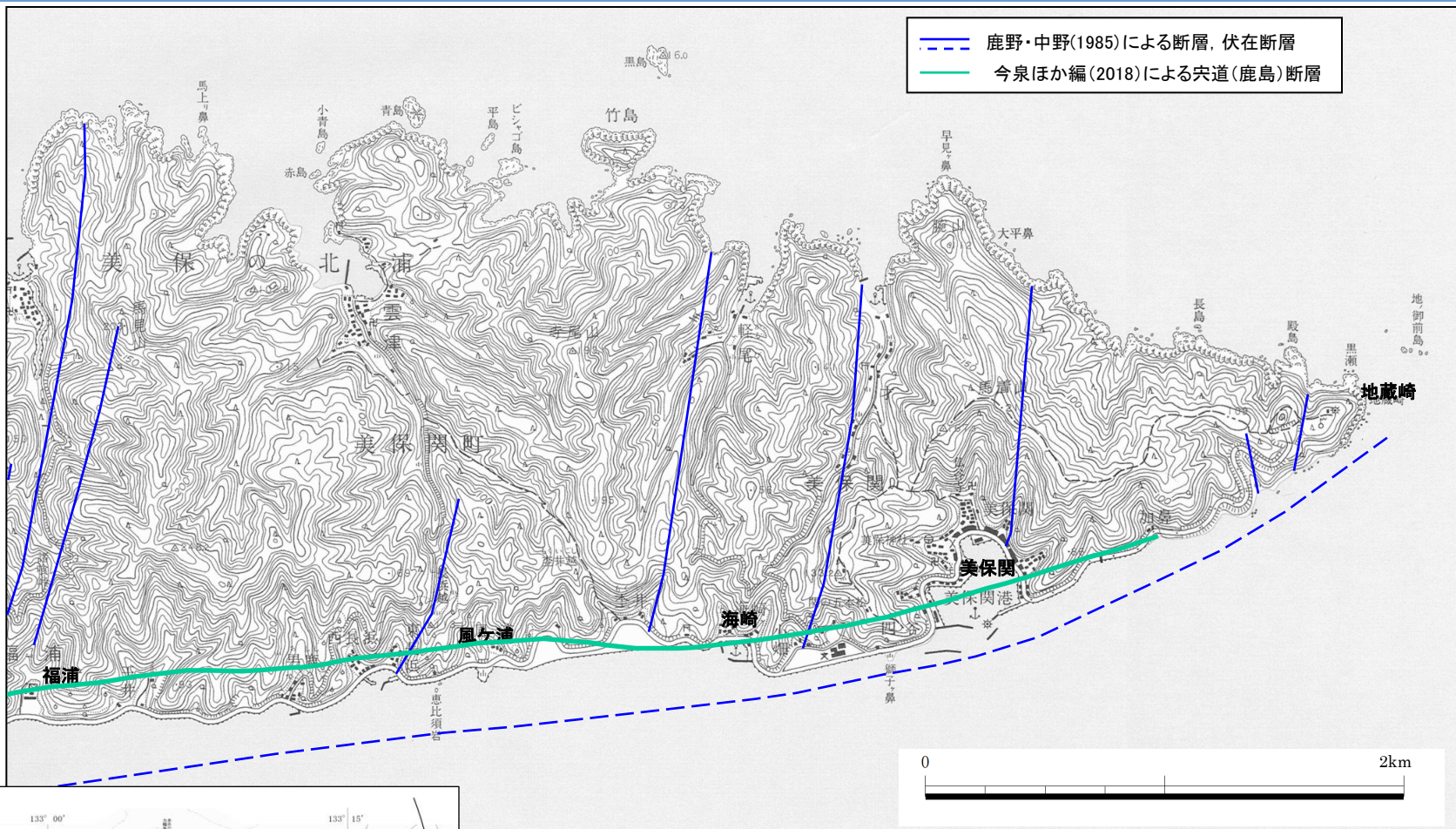
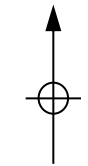
- ・高尾山の西側から美保関町法田の間では、①鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層、②鹿野・吉田(1985)の法田リニアメントが示されている。

2. 変動地形学的調査

- ・高尾山の西側から美保関町法田の間では、直線谷と鞍部が認められ、山地高度は北西側がやや高い。
- ・高尾山西側リニアメントに対応する、鹿野・吉田(1985)による法田リニアメントについて、「北東-南西方向のリニアメント。このリニアメントは地質の上では古浦層を切る断層に一致し、断層の走向はほぼNE-SW、傾斜は50-70° NWであり、正断層である。地質断層と一致し、明瞭なリニアメントとして認められるものの断層変位地形は伴っていない。」とされている。
- ・今回、その他の地形要素を再確認した結果、いずれも系統的でないことを確認している。

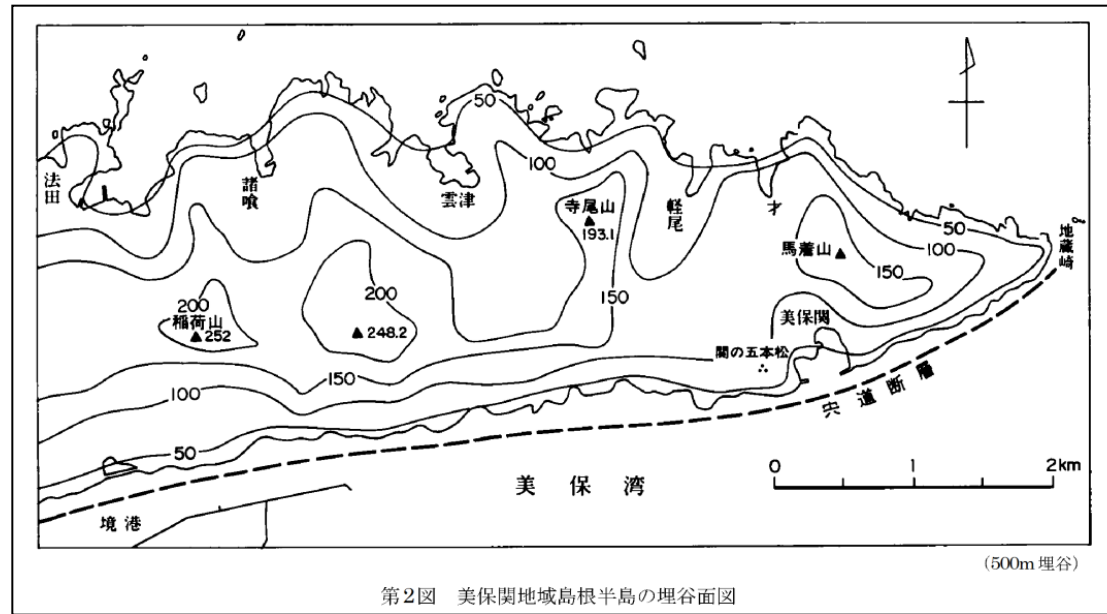
3. 地表地質踏査

- ・文献調査及び変動地形学的調査の結果、鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層、鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び変位地形・リニアメントが示されている。
- ・鹿野・吉田(1985)の法田リニアメント及び変位地形・リニアメントの通過位置付近を含む幅広な地表地質踏査の結果、古浦層の礫岩等が連続分布しており断層は認められない。
- ・鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)の断層とほぼ同走向の断層がTW-1及び道路沿いにおいて認められ、これらは文献断層に対応する断層と考えられるが、いずれの地点も変位量の小さい正断層である。また、TW-1では、上部の古浦層の泥岩に変位や変形は認められないことから、後期更新世以降の断層活動は認められない。



- ・鹿野・中野(1985)によると、沿岸付近海域に、伏在断層(地質断層としての宍道断層)が記載されている。また、陸域部に、断層(南北走向の胴切り断層)が記載されている。
- ・今泉ほか編(2018)によると、地質断層である宍道断層と区別した東西方向に延びる右横ずれ断層帯(宍道(鹿島)断層)が陸域沿岸部に記載されている。

福浦～地蔵崎(文献調査)



第2図 美保関地域島根半島の埋谷面図

美保関地域島根半島の埋谷面図

鹿野・中野(1985)より引用

- ・鹿野・中野(1985)によると、美保関地域の地形・地質構造について以下のとおりとされている。
- ・地形について、「島根半島の東端部は最高点250m程度の東西に延びた山地である。山稜線は南側に片寄っており、その南側は直線的な急斜面、そして北側は地層の傾斜とほぼ一致する10-30°の緩斜面となっている。」とされている。
- ・地質構造について、「美保関地域の新第三系は境水道—美保湾に面する島根半島の南岸沿いに東西に延びた背斜をなす。(中略)地形上、島根半島の南斜面は断層崖の特徴を備え、かつ半島南岸の海岸線が境港地域及びその西方で確認された宍道断層(多井, 1952)⁽⁴⁸⁾の延長線にほぼ一致することから、背斜の南翼は宍道断層によって断たれていると推定できる。鹿野・吉田(1985)によれば、宍道断層は北上りの逆断層である。また、背斜は中—後期中新世にかけて形成され、その末期に宍道断層が生じたという。」とされている。

- ・分水界が南側へ偏っている等の要因について、鹿野・中野(1985)によると、中—後期中新世における地質断層としての宍道断層(北上りの逆断層)の形成が関与していると推定されるとしている。

1. 央道断層の評価 (2)地質調査(央道断層の東側)

福浦～地蔵崎(変動地形学的調査)(文献調査(田力ほか(2016)))

島根半島周辺の活断層とそのテクトニックな意義

Active faults around the Shimane Peninsula and their tectonic implications, northern Chugoku region, Japan

*田力 正好¹、中田 高²、堤 浩之³、後藤 秀昭²、松田 時彦¹、水本 匡起¹*Masayoshi Tajikara¹, Takashi Nakata², Hiroyuki Tsutsumi³, Hideaki Goto², Tokihiko Matsuda¹, Tadaki Mizumoto¹

1.公益財団法人 地震予知総合研究振興会、2.広島大学、3.京都大学

1.Association for the Development of Earthquake Prediction, 2.Hiroshima Univ., 3.Kyoto Univ.

島根半島は中国地方北部の日本海沿岸に位置し、雁行配列する西列・中列・東列の三つの山地からなっている。西列山地は出雲市街地北方付近、中列山地は宍道湖北方付近、東列山地は松江市街地北方から境港市街地北方付近にかけて分布する。これらの山地は主として新第三系の堆積岩類・火山岩類からなり、ほぼ東西走向の褶曲・断層が発達する(鹿野・吉田, 1985; 鹿野・中野, 1986; 鹿野ほか, 1998など)。これらの山地の南側にはほぼ東西走向の央道低地帯が発達し、山地と低地帯はそれぞれ新第三系の複背斜と複向斜に対応するとされている(鹿野ほか, 1998)。東列山地の西部南縁には鹿島断層(宍道断層)が発達する(活断層研究会編, 1991; 佐藤・中田, 2002など)が、それ以外の地域においては明確な活断層の存在は知られていなかった。今回、詳細な空中写真判読および国土地理院5m～10mDEM立体視画像の検討の結果、既報の活断層の東西延長部に活断層の可能性のある変動地形が見いだされた。本発表では、これらの変動地形の分布と特徴について報告し、そのテクトニックな意義について若干の考察を行う。

既報で報告された活断層は、鹿島町志雲付近～美保関町下宇部尾間に分布する。河谷・尾根の明瞭かつ系統的な右屈曲に基づいて、確実な右横ずれ活断層とされている(佐藤・中田, 2002など)。東部では地質断層(宍道断層)にほぼ一致する1条のトレースであるが、西部では長さ数kmの右雁行するトレース群からなり、それらの位置は地質断層に一致しない。

東列山地の東半部は、東方に突き出た半島状の地形をなしている。この区域の東列山地は、1)北岸は入り組んだリアス海岸、南岸は直線的な海岸線・山麓線となっている、2)分水界が著しく南側に偏り南側斜面は開析が進んでいない急崖状を呈する、3)分水界には北流する河谷の上流部が断ち切られたような風隙地形が多数発達する、といった特徴を持つ。以上の地形学的特徴から、東列山地の南側の沖積低地下・海底に北上がりの活断層が伏在している可能性が考えられる。山地南側の急崖は外洋側ではなく内湾側であることから、その成因が海食である可能性は低いと考えられる。また、東列山地の南縁付近には北東-南西走向の短い(数km)のリニアメント群が発達し、それを横切る河谷に右屈曲が認められる。これらの屈曲は、東列山地南縁の伏在・海底活断層の右横ずれ変位によって生じた可能性が考えられる。

既報の鹿島断層の西側、中列山地の北縁付近では、長さ数km～5km程度の3条の推定活断層が右雁行しながら分布する。河谷・尾根の右屈曲が多数発達することから、右横ずれ活断層と考えられるが、リニアメントの地形がやや不明瞭で屈曲が系統的ではないことから確実な活断層とは言えない。これらの断層の一部は地質断層の宍道断層とほぼ一致することから、既存の弱線が再活動したものの可能性がある。中列山地北側海岸付近には既報で海底活断層は報告されていないが、中列山地は分水界が北側に偏り、海岸線が直線的な急崖をなすことから、海岸付近の海底に北上がりの活断層が存在する可能性が考えられる。陸上の推定活断層は、この海底活断層から派生した副次的な断層と考えられ、中列山地北岸の海底活断層の右横ずれ変位を示唆する。西列山地の地形は前述した東列山地東部の地形と類似し、北岸は入り組んだリアス海岸、南岸は直線的な海岸線・山麓線をなす、分水界が著しく南側に偏り南側斜面が開析の進んでいない急崖をなす、北流する河谷の上流部が断ち切られたような風隙地形が多数発達する、といった特徴を持っている。さらに、山地北西端部の宇竜付近では、海成段丘が北方へ傾動している。以上のことから、西列山地の南縁沿いの沖積面下・海底に北上がりの伏在活断層が存在し、山地が北方へ傾動していることが推定される。この伏在活断層の位置は地質断層(大社衝上断層)にほぼ一致する。また、西列山地東端付近には東北東-西南西走向の数kmの右横ずれ断層が認められる。この断層は山地南縁の伏在断層の副次的な断層と考えられ、伏在断層の右横ずれ変位を示唆する。

島根半島の東西沖の海底には、ほぼ東西走向の長大な海底活断層群が発達することが知られている(日本海における大規模地震に関する調査検討会, 2015など)。これらの活断層群は島根県～鳥取県の日本海沿岸部に発達し、数100kmにおよぶ長大な変動帯をなしている。直接的な関連は不明であるが、島根半島に発達する活断層群は、これらの海底活断層の延長上に位置し同様な走向を持つことから、これらの海底活断層と一連の構造であり、日本海沿岸の長大な変動帯の一部が陸上に現れたものと解釈できる。

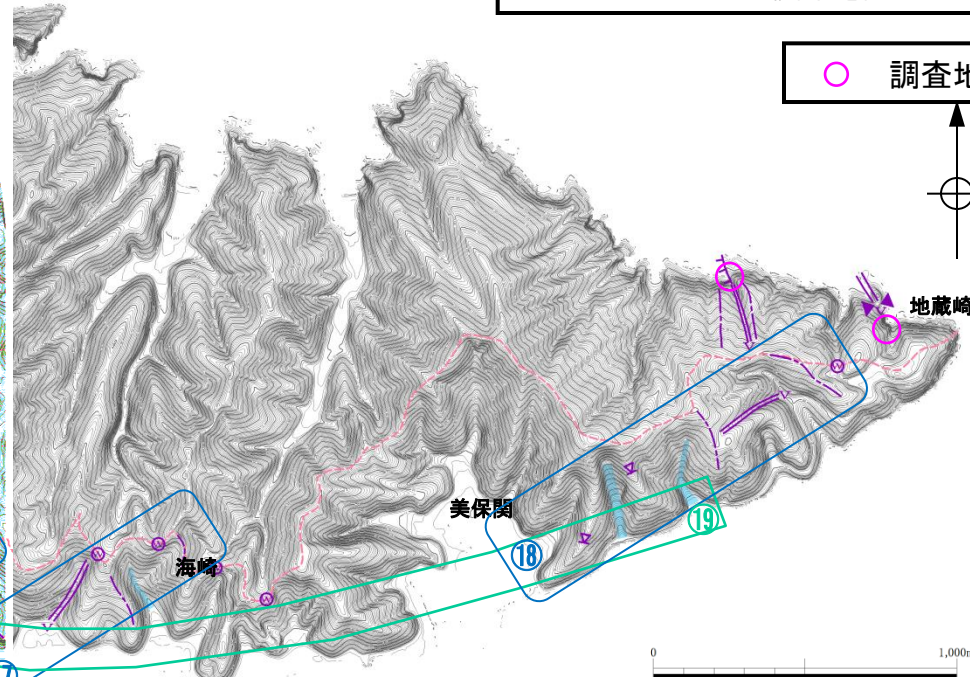
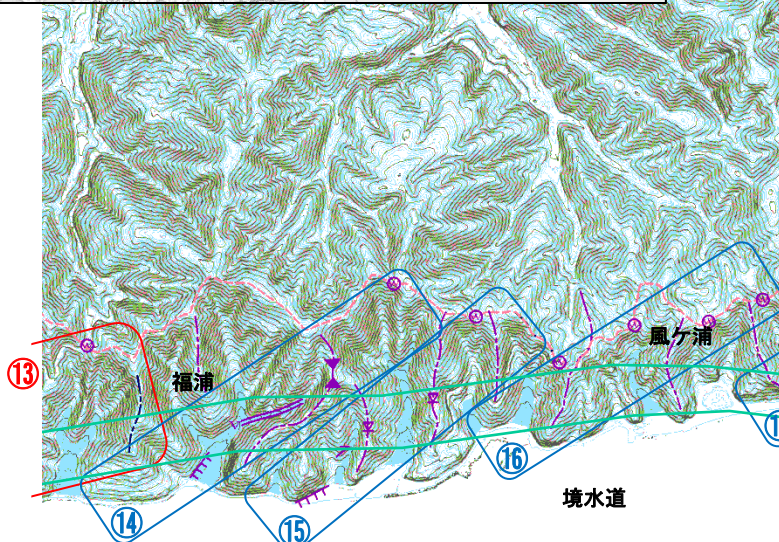
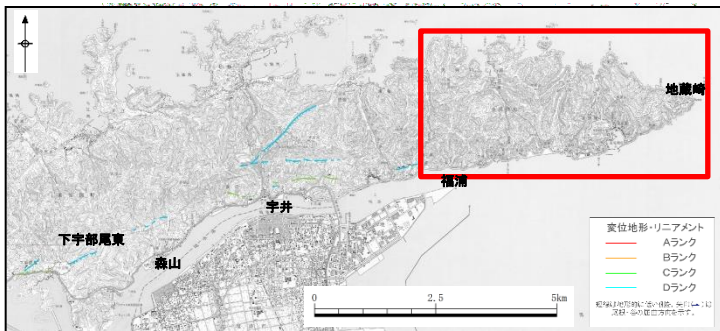
キーワード: 鹿島断層、活断層、中国地方、内陸地震、海底断層、空中写真

Keywords: Kashima fault, active fault, Chugoku, inland earthquake, submarine fault, aerial photograph

・田力ほか(2016)⁽⁴⁹⁾によると、島根半島東部の地形学的特徴としては、「1)北岸は入り組んだリアス海岸、南岸は直線的な海岸線・山麓線となっている、2)分水界が著しく南側に偏り南側斜面は開析が進んでいない急崖状を呈する、3)分水界には北流する河谷の上流部が断ち切られたような風隙地形が多数発達する」とされている。また、これらの地形学的特徴から、「東列山地の南側の沖積低地下・海底に北上がりの活断層が伏在している可能性が考えられる。」としている。

・田力ほか(2016)は、「東列山地の南縁付近には北東-南西走向の短い(数km)のリニアメント群が発達し、それを横切る河谷に右屈曲が認められる。これらの屈曲は、東列山地南縁の伏在・海底活断層の右横ずれ変位によって生じた可能性が考えられる。」としている。

1. 宍道断層の評価 (2) 地質調査(宍道断層の東側) 福浦～地蔵崎(変動地形学的調査)



変位地形・リニアメントを判読した地形群
その他の地形群(田力ほか(2016)のリニアメント記載範囲を含む)

調査地点

福浦～風ヶ浦(左図): 2007年中国電力取得の2mDEM(航空レーザー測量)を使用
海崎～地蔵崎(右図): 国土地理院公開の5mDEM(空中写真測量)を使用
(注)福浦～地蔵崎の間では、分水界より南側の地形要素を判読した。

凡例

- | | | |
|--|---|------------|
| <p>地形要素
(変位地形・リニアメントを判読したもの)</p> <ul style="list-style-type: none"> 谷線(▲は屈曲の方向を示す) 尾根線(▲は屈曲の方向を示す) 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層 | <p>地形要素
(その他の地形群)</p> <ul style="list-style-type: none"> 崖 傾斜変換線(遷緩線) 谷線(▲は屈曲の方向を示す) 尾根線(▲は屈曲の方向を示す) 鞍部 風隙 直線状の谷 | <p>分水界</p> |
|--|---|------------|

- ・福浦～地蔵崎の間では、傾斜変換線、鞍部、風隙等の地形要素が判読される。
- ・福浦～地蔵崎の間では、島根半島南北の水系を境する分水界が南側へ偏る。また、分水界には風隙及び截頭谷が認められるが、分水界は蛇行する。
- ・境水道よりも北側(島根半島東部の南縁)に後期更新世以降の隆起を示す海成段丘面等の地形は分布していない。
- ・地形要素はいずれも系統的ではないことから、変位地形・リニアメントは認められない。

1. 宍道断層の評価 (2)地質調査(宍道断層の東側)
福浦～地蔵崎(変位地形・リニアメント, その他の地形群)

変位地形・リニアメント及びその他の地形群一覧表(福浦～地蔵崎)

番号	変位地形・リニアメント及びその他の地形群の判読内容			活断層研究会編(1991), 中田ほか(2008), 原安委WG3(2009)及び 今泉ほか編(2018)との対比
	変位地形・リニアメント のランク	地形要素	理由	
⑬ (再掲)	D(高尾山南側(南))	隣り合う2本の谷, 1本の尾根が右屈曲。東延長に1箇所 ^⑬ の鞍部。尾根高度は <u>わずかに北が高い</u> 。なお, 西延長の尾根線 ^⑬ に右屈曲は認められない。	系統的な右屈曲が局地的に認められるが, 地形群の長さは非常に短いことからDランクとした。	・原安委WG(2009)の推定活断層に対応
⑭	—	各1箇所の崖, 直線状谷, 鞍部, 風隙からなり尾根高度は北上がりである。明瞭な地形要素は認められない。尾根に屈曲は認められない。南西部の尾根斜面にもリニアメント構成地形はない。	明瞭な地形要素は認められず, 系統的な屈曲地形及び高度差は認められないことから変動地形の可能性はない。	—
⑮	—	2箇所の傾斜変換線, 各1箇所の崖, 谷の右屈曲, 風隙。しかし, 3本の尾根, その他の谷に明瞭な屈曲は認められない。	系統的な屈曲地形及び高度差は認められず, 地形群が同一方向に横ずれあるいは縦ずれしたと解釈できないことから変動地形の可能性はない。	—
⑯	—	4箇所の風隙。しかし, 3本の尾根, その他の谷に明瞭な屈曲は認められない。	系統的な屈曲地形及び高度差は認められず, 地形群が同一方向に横ずれあるいは縦ずれしたと解釈できないことから変動地形の可能性はない。	—
⑰	—	1本の直線状谷, 2箇所の風隙。しかし, 分水界をなす尾根に系統的な高度差はない, また, 2本の尾根, その他の谷に明瞭な屈曲は認められない。	系統的な屈曲地形及び高度差は認められず, 地形群が同一方向に横ずれあるいは縦ずれしたと解釈できないことから変動地形の可能性はない。	—
⑱	—	2箇所の傾斜変換線からなり, 尾根高度は北上がりである。各1箇所の直線状谷, 風隙。明瞭な地形要素は認められない。2本の尾根, その他の谷に明瞭な屈曲は認められない。	明瞭な地形要素は認められず, 系統的な屈曲地形及び高度差は認められないことから変動地形の可能性はない。	—
⑲	—	3箇所の傾斜変換線からなり, 尾根高度は北上がりである。尾根線や谷線に明瞭な屈曲は認められない。	明瞭な地形要素は認められず, 系統的な屈曲地形及び高度差は認められないことから変動地形の可能性はない。	・今泉ほか編(2018)の活断層に対応

(注)原安委WG3(2009):原子力安全委員会ワーキンググループ第3第17回会合参考資料第2号(2009)

下線部:縦ずれ変位に起因する地形に関する記載箇所